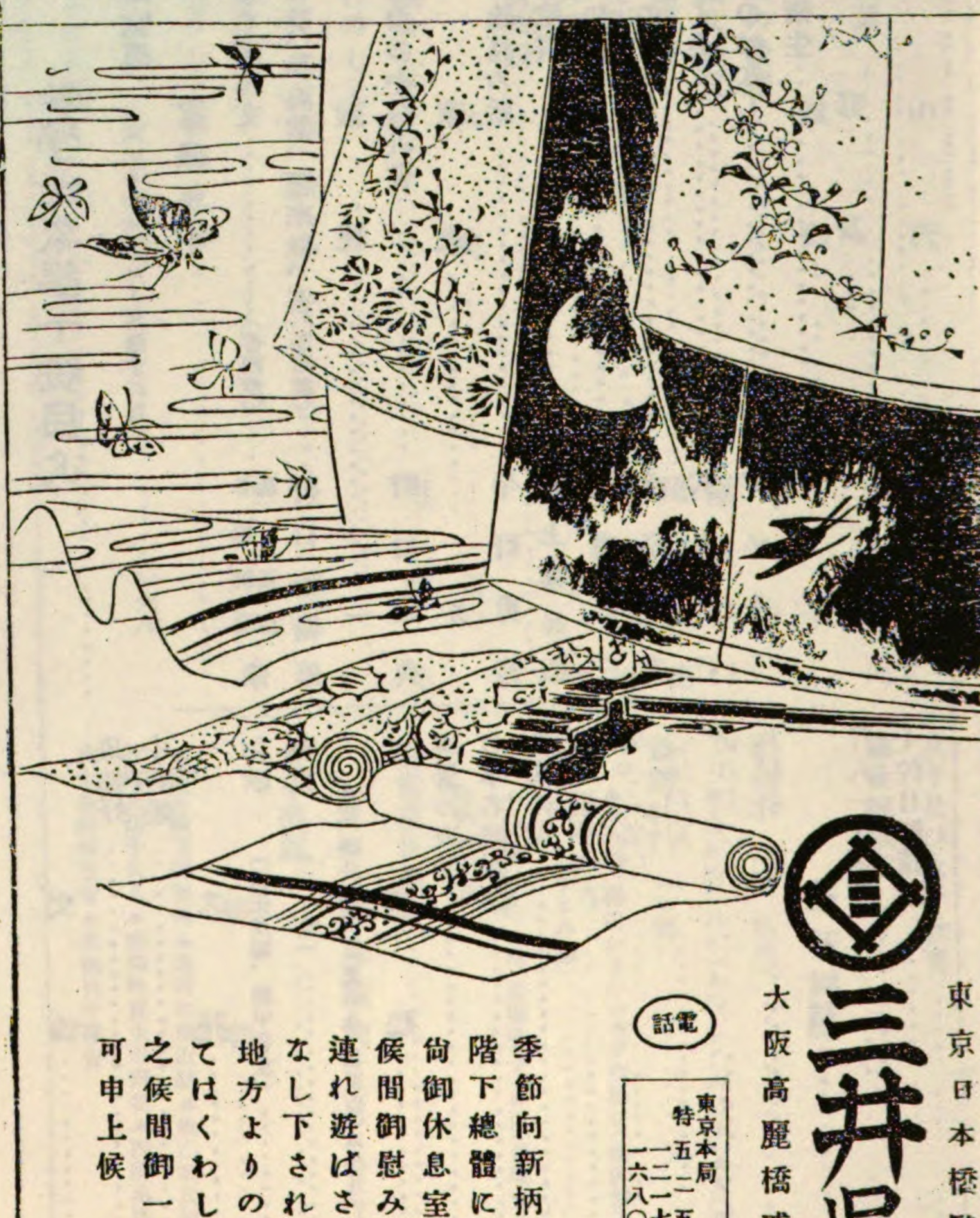
毎月一回五日發行
第三種郵便物認可

女學世界

第一巻第拾號

口繪





女學世界第十號目次



久邇宮妃俔子殿下

和蘭女皇陛下と其皇婿



（在獨京巖谷小波君寄贈）

女皇ウイルヘルミナ皇婿ハインリヒ

西太后御筆（桃）



萬壽山寶庫の什物

善光寺大勸進



蓮池の滿開

帝國百科全書

工學士重見道之君著　（製本出來）

第七拾壹編

應用機械學

方今機械工學上に關する計算及設計上の著其類稀有にして斯學攻究者の失望少からす著者玆に見るありて本書を著はす其範圍を工科大學機械科課目中の應用力學材料及ひ構造强弱學蒸滊機械學等計算的理論及應用に採れり而して初學者の爲に數多の例題を附し之に詳解を與へて便利に供せり卷末に於ける機械の計算に必要なる諸表は又初學者の楷梯なり

全壹册洋裝
上製五拾錢　郵税拾錢
並製卅五錢　郵税八錢

理學士飯塚啓君著　（八月上旬發行）

第七拾貳編

植物學新論

植物學は實驗の學問なり故に本書は强めて各處の例證を擧け讀者をして直に實物と比較對照せしむるの便を得せしめ殊に一般に關する實驗の方法材料を揭け又前人未發の分類表を懇切に指示したるを以て斯學の眞味を了するに於て最も嶄新の知識を得らるべし

全壹册洋裝
上製五拾錢　郵税拾錢
並製卅五錢　郵税八錢

發兌元　博文館

（甲の一）

（甲の二）

杉浦看護婦會々長 杉浦絲子著

産婆看護婦必携

洋装美本 全一冊 定價金四拾錢 郵税金貳錢

本書ハ姙婦攝生診察法、産婦蓐婦、初生兒取扱法ヨリ内科外科諸病看護法、傳染病、急救法、藥物用法地方派出ノ心得其他數件細大綴密ニ説明セシ者ナレバ産婆及看護ノ業ニ從事スル諸君ハ必ズ座右ニ備フベキ良書ナリ

發行元 東京市日本橋區久松町廿九 杉浦看護婦會

大賣捌 東京本郷區龍岡町卅四 吐鳳堂書店

避暑の友――旅中の伴侶――溫泉場必携

本多男爵題字 審美館編輯

第四版 着色寫眞

美人と山水

美人と俳優……百十餘名

名所と舊蹟……六十餘ケ所

全壹冊袖珍美本 正價廿五錢

寫眞百餘枚 郵税四錢

發行所 東京市神田區千代田町二番地 博報堂書店

天然の美と人爲の美とは、此瀟洒なる一冊の中に收められたり、新綠窓に匂ふの朝、杜鵑月に鳴くの夕、此書を繙かば其快果して如何ぞや請ふ一本を購ひ以て座右の友とせられよ

見よ！見！消夏隨一の珍書！見よ！見よ

博文館諸雜誌 廣告大取次 東京々橋區尾張町新地 弘報堂

女學世界廣告原稿締切 毎月廿三日限

四書新釋

文學士（漢文學專攻）久保天隨君著（製本出來）

四書新釋 大學

全壹冊洋裝菊判美本正價拾五錢郵稅四錢

先秦時代の聖經賢傳古今の註疏紛々雜出その多きに堪へざるは何の故ぞ中外學者の短見なるや絶えて當時の社會狀態を詳にせず今を以て古を律し遂に原始の意義を失ふを悟らず私見を逞うし新説を出ださむを力む而かも馬を指して鹿となすの愚に陷りしを知らざるに出るのみ。解義箋釋、必ず之を一に歸するは、學者の重任にして現時の急務たり。天隨氏、文を以て世に稱せらるゝと雖も、その本領は、實に支邦古文學の研究にあり。本書は氏が如上の見を以て、聖門第一の敎科たる四書に就いて、新釋を試みられし者にして、一一據る所あり、引證該博、議論周匝、その要を提げその玄を鉤し、譬へば痲姑を倩うて癢きを搔くに似たる者あり。その藥勸めたりといふべくその勞、固より多とすべし。今や第一卷大學刻成る、故に好學の士に一讀を勸む。

四書新釋

全部六册（目次）

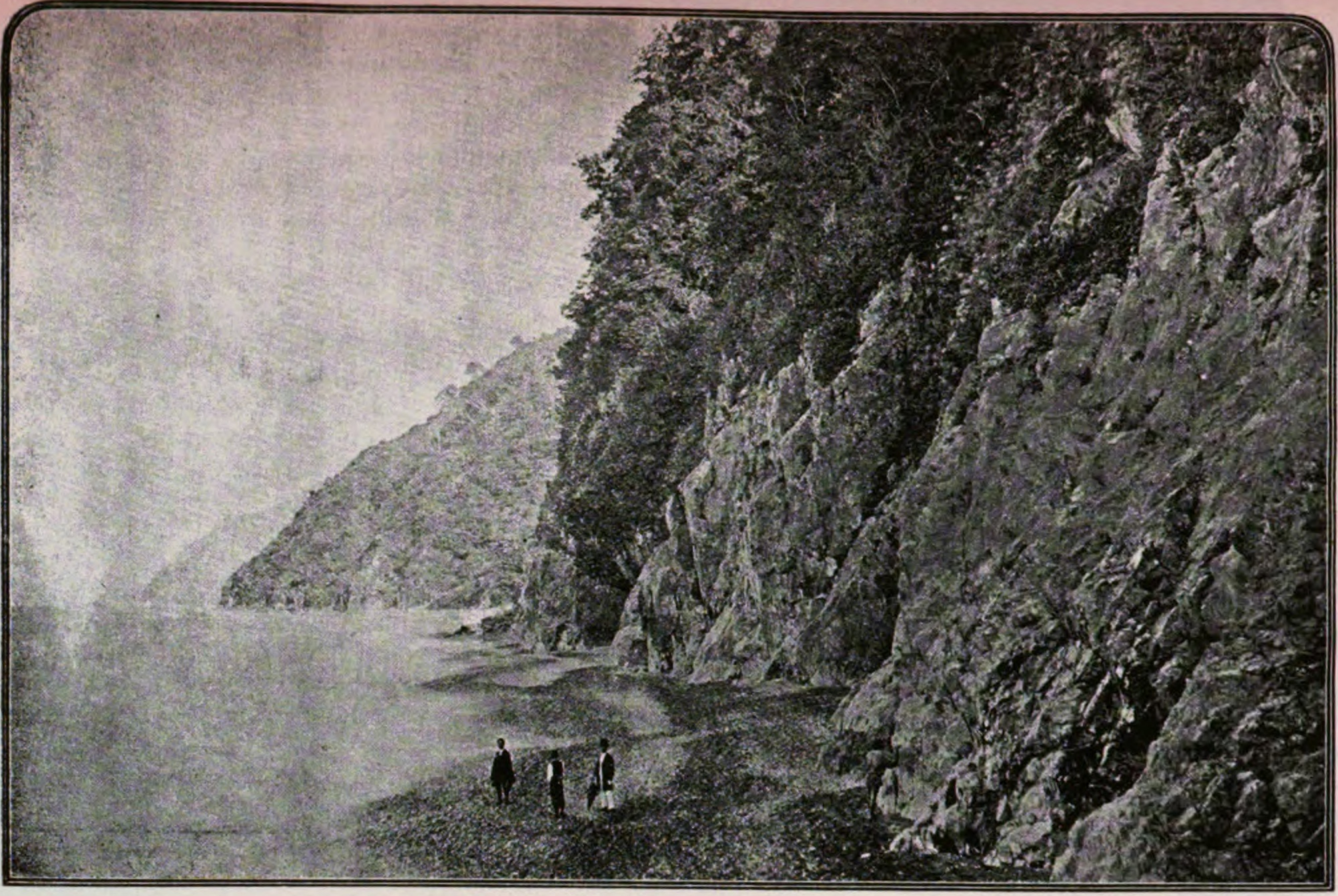
大學	全壹册
中庸	全壹册
論語	全貳册
孟子	全貳册

以上全部六册隔月發行仕候間陸續御愛購あらんことを希上候 每册價格不同

發兌元 東京 博文館

（甲の四）

越後國親不知の嶮



都人士の避暑旅行

(伯林家庭雜誌主筆)



(在伯林巖谷小波氏寄贈)

獨逸女子教育大家モルゲンスタイル女史

婦人共立育兒會員



副會長鍋島侯爵夫人以下幹事諸氏

（雜報欄參照）



東京女學館卒業生

(雜報欄參照)

壯月齋惠一焉先生編

挿花盆石 **四時の詠**

全三冊 和裝美本

正價金五拾錢 郵税六錢

本書は壯月齋惠一焉先生が門下の爲めに四時草木の挿花の秘術を懇示せられたるもの全編三冊天地人の姿風は正風の特色なり入門の士女必ず一本を購へ玉へ

發兌元 東京 博文館

寺門靜軒先生序文

秀貫齋月一珣先生編

挿花盆石 **正風花鏡**

全三冊和裝 正價五拾錢 郵税六錢

本書は斯道の妙門たる堀江秀貫翁が門弟子の爲めに其秘を開かれたるもの正風の花を學ばんと欲せらるゝ雅仁は必ず一本を机上に備へ玉ふべし

發兌元 東京 博文館

總裁 小松宮大妃殿下

副總裁 鍋島侯爵令夫人

大日本女學會發行

(東京麴町區土手三番町二八)

第六號發兌

第壹號以下再版出來せり

定價金拾五錢全國無遞送料

東京神田表神保町三 大賣捌 東京堂

本誌は學識と經驗とに富み而も婦人問題に熱心なる諸家の賛助により誠實に女子の本分を完うせんことを心がけらるゝ淑女達の友たらんことを期し世の俗流に阿りて漫りに讀者の多からんことを望まず總て不用の裝飾を省きて專ら記事の精撰に努め以て婦人雜誌たる品格を保たんとす◎本誌の欄を論説學藝修身齊家世務史傳譚艸詞藻雜錄時事彙報に別ち普通の婦人雜誌が掲載する家政上文字上の記事の外に(一)科學の大意を掲げ學理の概念を得せしめ(二)和漢名著の綱要を掲げ諸書の渉獵に便ならしめ(三)法制理財の事を平易にものし著き時事を説明し内外の情勢に通ぜしむ◎本誌は野卑なる文字を用ひず劣等なる戀愛小説を掲げず又賣藥其他下品なる廣告を載せず◎本誌は勤儉貯蓄の美風を獎勵せんが爲に每號慈善貯蓄切手を挿入して其模範を示す

工業叢書

工業叢書發行趣意

帝國の富力を培養し、世界列強の間に對峙せんと欲せば、工業を盛んにするより急なるは無し、人口多くして人皆技術に巧に、而かも賃銀及び石炭の廉價なり、惟ふに工業上の必要素盡とく具備する此の如き國、之を世界に求めて殆んど比無し、工業上帝國の將來は工業立國の方策を執らずして夫れ何にかよらん、近時國民多く眼を此に注ぎ、工業の勃興頗る見るべきが如きも、之を他の英獨諸國に比すれば日を同くして語る可らず、畢竟國民工業上の智識未だ普ねからざるに原づく、是れ今當代知名の專門學者に就き、各種工業の新著を請ひ、工業叢書と名けて、逐次發行する所以なり、若し夫れ其定價の如き、題目の大小に因て記事の內容を同くせず、故に豫め之を一定せずと雖も力めて其價を廉にし、以て普ねく全國民の繙讀に供せんこと、實に本館宿昔の希望なり、希くは高評を賜らんとを

工學士市川俊雄君著（製本出來）

水及油

全壹冊洋裝　菊判上製
正價五拾錢　郵稅六錢

水と油とは人生秒時も缺く可らざる必要品なり、人類之に由て生活し、機械之に由て運轉し、萬種の製產之に由て運轉し、萬種之製產之に由て始めて成る、而して其工業上にかての作用を詳論したるもの、從來我國に此の如き良書無し、艦船の機關其他總ての技師及技手等には皆な必ず一讀せざるべからず

發兌元　東京　博文館

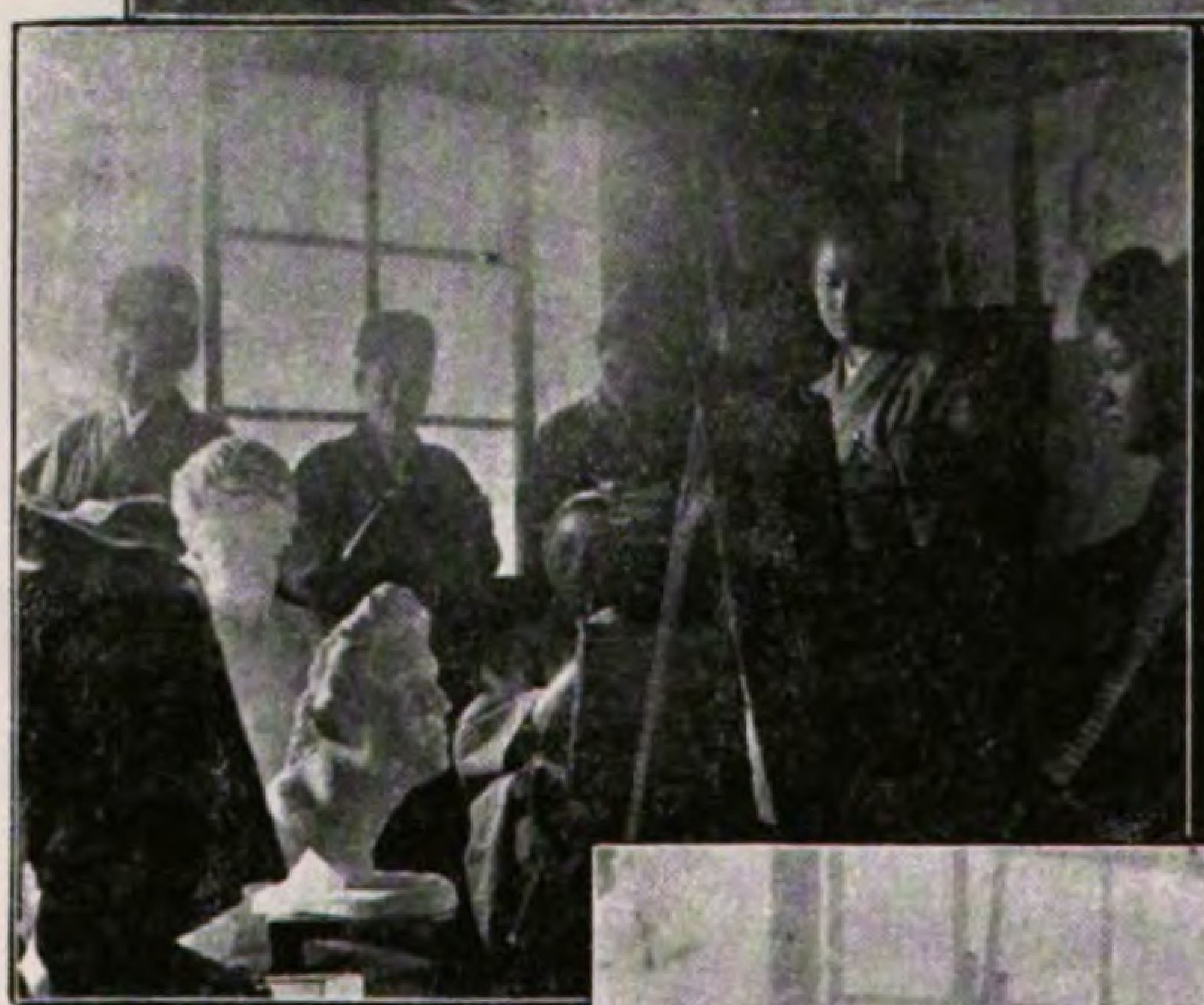
（乙の四）

東京美術學校（在本郷弓町）

（女學世界第七號紹介）



生徒の撮影

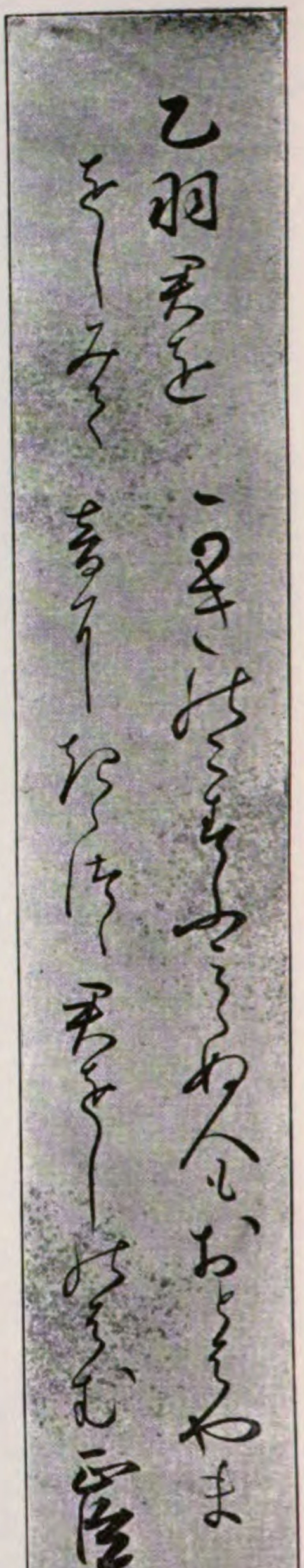


彫塑室



繪畫室

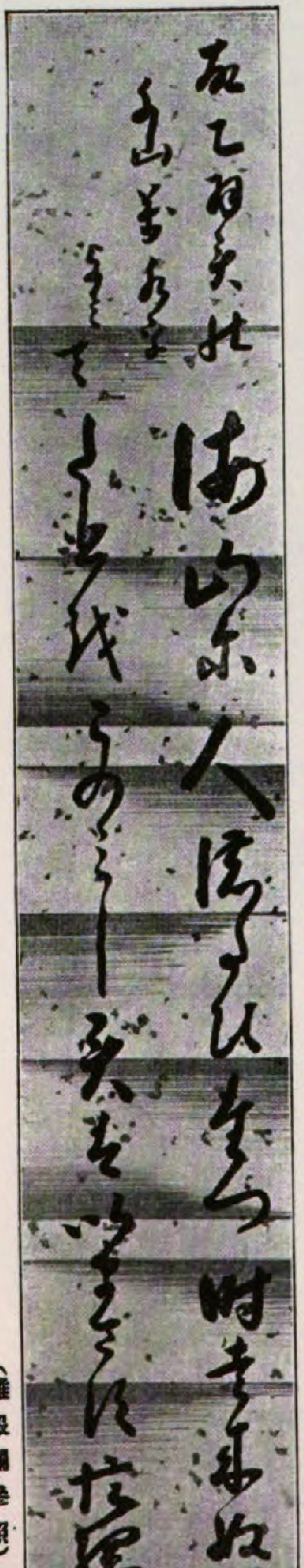
故乙羽氏追悼の歌



坂正臣先生



中村秋香先生



佐々木信綱先生

（雜報欄參照）

乙羽庵主人追悼會席畫



（雑報欄參照）

水野年方君筆、



雙鷄

續帝國文庫

既刊

- 第一編……眞田三代記
- 第二編……近世說美少年錄
- 第三編……日本歌謠類聚上
- 第四編……日本歌謠類聚下
- 第五編……修紫田舍源氏
- 第六編……竹田出雲淨瑠璃集
- 第七編……朝夷巡島記
- 第八編……兒雷也豪傑譚
- 第九編……江戸作者淨瑠璃集

- 第十編……前々太平記
- 第十一編……太平記
- 第十二編……紀海音淨瑠璃集
- 第十三編……近松淨瑠璃集
- 第十四編……後太平記
- 第十五編……近松半二淨瑠璃集
- 第十六編……脚本傑作集上（發賣禁止）
- 第十七編……京山全集
- 第十八編……落語全集

第卅六編

鶯亭長井金升君校訂　校訂 俗曲大全（八月中旬發行）

義太夫、一中、河東、富本、新内、薗八、常磐津、清元等を始じめ端唄、祭文、都々逸、その他の小唄に至るまで、三筋の絲に合せて語るもの、謠ふもの種類を網羅し、古今の歌曲を集めたれば、眞に大全に負かず文藝に遊ぶ者、座右に一部を備へざるべからず

全壹冊洋裝總クロース金文字入●正價金六拾錢●郵稅拾六錢

既刊

- 第十九編……並木宗輔淨瑠璃集
- 第二十編……紀行全集
- 第廿一編……一九全集
- 第廿二編……漂流奇談全集
- 第廿三編……那鄲諸國物語
- 第廿四編……續紀行文集
- 第廿五編……續水滸傳
- 第廿六編……文耕堂淨瑠璃集
- 第廿七編……傾城水滸傳

- 第廿八編……白縫物語上
- 第廿九編……白縫物語下
- 第三十編……北雪美談時代鑑
- 第卅壹編……常山紀談
- 第卅二編……萬物滑稽合戰記
- 第卅三編……續一九全集
- 第卅四編……黄表紙百種
- 第卅五編……俳優全集
- 第卅六編……俗曲大全

正價（壹冊六十錢●六冊三圓五十錢●十二冊六圓九十錢●廿五冊拾三圓郵稅壹冊拾六錢

發兌元　東京　博文館

（四の一）

(丙の二)

●新刊出來●

大和田建樹先生著

散文韻文 藻鹽木

全壹冊洋裝袖珍美本　正價四拾五錢郵稅六錢

我文界に知られたる大和田先生は曩に一家獨得の詩思と艶筆を以て、雪月花、深山櫻を公にし、今又此著あり、袖珍の美は以て机上の花を添ふべく、携帶の便は夏季旅行家の好侶伴たるべし、

大和田建樹先生著

●散文韻文 **雪月花**　全壹冊 袖珍　正價卅五錢 郵稅六錢

●散文韻文 **深山櫻**　全壹冊 袖珍　正價四拾錢 郵稅六錢

發兌元　東京　博文館

依田學海先生編
巖谷一六先生書
（製本出來）

新撰應用書翰

全壹冊　和裝正價金三拾五錢郵稅六錢

書翰文の要は簡にして能く意を盡すにあり。此書は一代の文宗依田百川先生の編にして。書道の大學巖谷一六先生の書なり。以て書翰文の模範となすべく亦以て習字の手本となすべし。其文辭極めて。簡明にして題を選ぶこと極めて新警適切なる多く世に類を見ざる所なり。

發兌元　東京　博文館

(丙の三)

豫約出版廣告

侯爵山縣有朋君題辭
司法大臣清浦奎吾君序文

博文館編輯局編纂

增訂十一版

現行日本法令大全

八月中に出版

全文新鑄活字を以て鮮明に印刷す

●全部二冊 洋裝脊皮上製 函入 紙數四千三百餘頁

●正價金五圓 ●小包送料 (一)百里以內金二十八錢 (二)百里以外金五十六錢

豫約特價三圓八十錢 外要郵税 豫約申込期限八月十五日限

●期限後は直ちに正價に復す●御注文の價金送料共總て前金の事●製本は御注文の順序に據る●郵券代用一割增

本書の卓群好評なるは茲に喋々を要せず今や其第十一版の發行を爲すに際し新に大增補を加へて紙數を增す千四百頁携帶閲覽の便を計りて上下二卷とし前版發兌後公布の新法令は殆んど細大漏さず悉く收載したり此に於て本書は明治元年より本年七月に至る現行諸法令を網羅したる法令大全となれり而して分類序次各整正目次索引新工夫を用ゐ加ふるに用紙頁好裝釘堅牢にして劇しき使用に堪ふ實に無比の最新最便なる書冊なり尚本書の印刷は部數に限りあれば品切とならざる內至急御注文あらんことを切望す

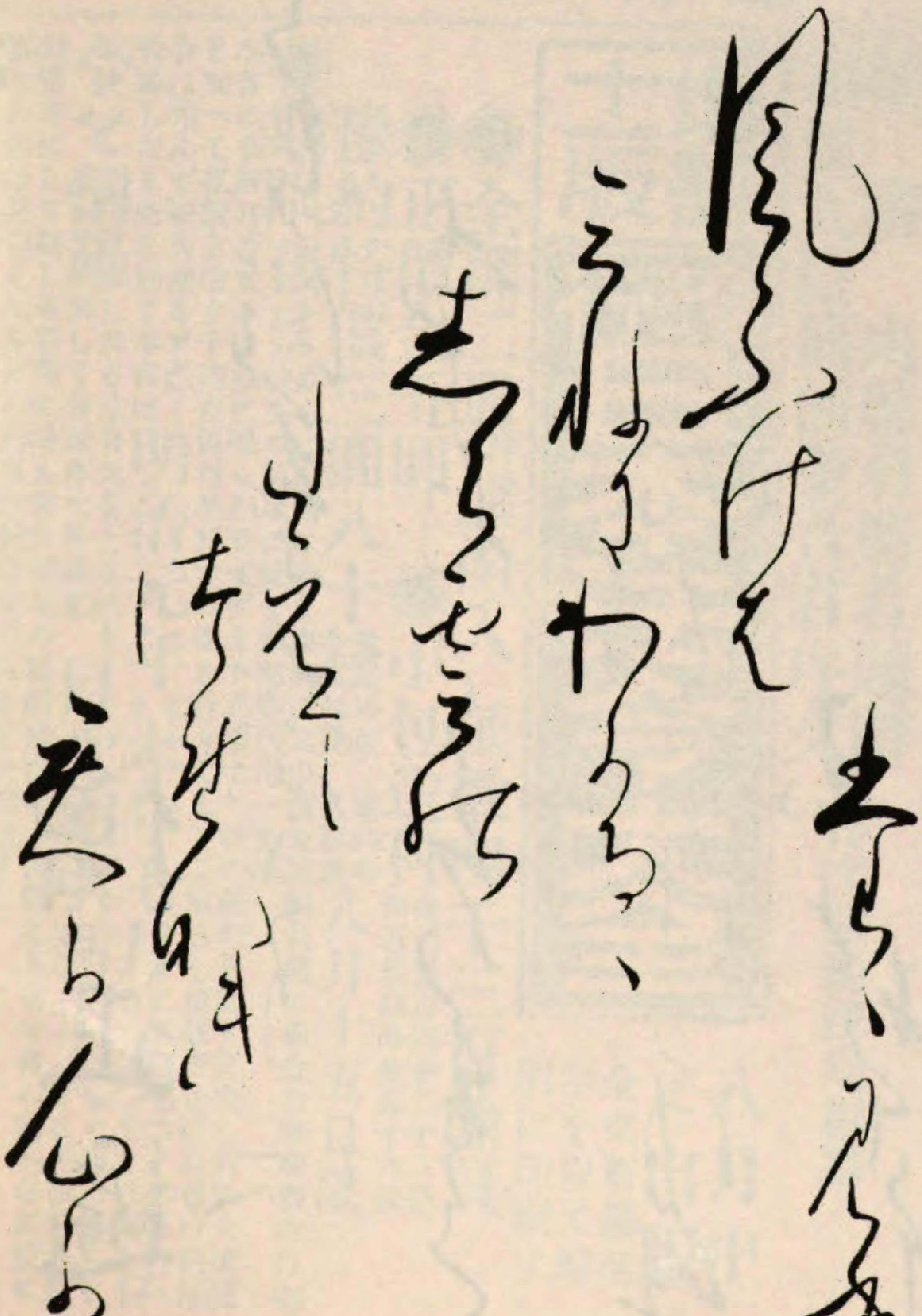
發兌元 東京 博文館

(丙の四)

僧正遍昭

はちす葉のにこりにしまぬ
こゝろもて
なにかはつゆを
玉と
あさむく

多田親愛先生筆



故父君のひとゝせ任より登りたまひし時都にておほせし家壁の萩をはと心とゞめきこえおきてわりなきゆりからせ給ふを咲そめたるはいたくせきこまれてもや時々おほしそつれとところ事にこそあれや事たまひなむし

人もあまたハそこみれハふまの世維
こゝ世はいとほしうさも明むのちまハ
せし藏のなりける所ひ給
るをこれをたゝ露にぬれたる小枝
みえくもいとゝう興せさせたまへはあ
とみえひさまつりまいらうち
まて中将とゝなむゆるしみなすは
あなりしとてうしかくて宮将あめへし



野口小蘋女史筆

野口小蘋女史筆





野口小蘋女史筆

野口小蘋女史筆



本邦唯一の週刊新誌

見よ見よ

太平洋

讀め讀め

◉毎月曜日發行（紙幅四六判四倍大）

我太平洋は論旨正大記事精確なる本邦唯一の週刊雜誌なり由來歐米に此種盛んに行はれ本館玆に一大改良を加へ紙質を撰み紙數を增し之に精緻なる寫眞版を挿入して週間内の事跡を映出し之を系統的に悉知せしめ兼て亦娛樂に供するの數編を揭げ用意周到蓋社會の要紙なるべし乃ち如何に僻遠僻陬の地に在る人と雖本誌を讀まば事每に境を踏み人に接するの感あるべく價格低廉亦本誌の特色なりとす

卷頭（寫眞銅版大版數十個を挿入し以て時事人物其他一切の最近出來事を映出して其狀態を瞭知せしめ其眞相を目睹せしむ

時報（清議讜論時弊を摘發し綱常を扶植し情の爲めに枉げず勢の爲めに屈せず益々筆鋒を鋭利にして社會の警鐘たるべし

週報（社會の上下表裏に渉りて一週間の時事を系統的に記述す秩序整然記事豐富主として現代社會の狀態形勢を明にせり

小說（江見水蔭三宅青軒田山花袋田村松魚の諸氏各得意の艶筆を揮ふの外諸名家諸氏の傑編妙作をも揭錄して光彩を添ふ

◉文苑◉雜錄等記事豐富一々詳揭するを得ず

定價（一冊六錢◉十三冊前金（三月分）七十五錢◉廿六冊前金（半年分）一圓四十錢◉五十二冊前金（一年分）二圓七十錢郵稅五厘

一部僅六錢最廉無比繪紙よりも安し蓋し天下の至廉と云ふべし

見本應需此際郵劵四錢を投ぜられば見本送呈す但し號數の指定に應せず

發兌元　東京　博文館

（丁の一）

（丁の二）

新刊

歐米小觀

歐米發信繪葉書寫眞銅版三遍刷廿四面入

（全壹册洋裝金銀クロース 袖珍卷頭コロタイプ肖像入）
正價金四拾錢　郵稅六錢

大橋乙羽君遺稿

中村不折君筆西洋繪解入

故乙羽君昨年歐米を漫遊して歸り、見聞せる所を記して歐山米水の著あり、更に觀感する所を述へて歐米小觀を公にせんとし、未だ完く成るに及はずして不幸病に罹り溘然長逝せらる。本書は即ち其遺稿を蒐集整頓し附するに君の傳記を以てす。口繪寫眞版并に中村不折氏筆の狂畫各十餘頁は君が生前の意匠に係り、以て君の面目を髣髴するに餘りあるへし

稀有の美本……製本出來

博文館發兌

（丁の四）

女學世界

明治三十四年八月五日發行

第壹卷 第拾號

紀元二千五百六十一年　西暦一千九百一年（辛丑）

論説

佛蘭西の中等社會

女子高等師範教授　野口保興

從來日本人の見た處ろで、佛蘭西といふ國は、革命の國である、隨分おもひ切つた事を行る凄い恐ろしい國であるとしてゐた。そして近頃では亦娯樂の國、歡樂の國、華奢風流にのみ耽つてゐる國としてゐる。成程佛蘭西は古來歐羅巴に珍らしい革命頻發の國で、政治上に虐殺もあれば、暗殺もあッてロベスピールや、ダントンの名を聞いても慄とする程で

ある、併し今日の佛國が此の革命に依つてどれだけ經驗をし、どれだけ改良をしたかと言ふ事は唯表面だけを見た處ろて解らない、又其の娯樂の國、奢侈の國といふ事に就て考ふるに、如何にも巴里あたりの風俗は豪華で、風流で、そして毎日御祭騒ぎでもやつてゐるやうに見へる、併し、これは元と此の佛蘭西の風土、民情が自然咏嘆的に出來てゐる所以で自から世界の樂園となつてゐるからである。巴里は世界の公園である、世界中の金持が遊びに來て散財をする處となッてゐるのであるから、其の表面に現はれてゐる處の風俗が華美、豪奢を極めてゐるのも自然の勢である、けれどもそれは世界の樂園たる巴里其物の風俗であッて、決して眞正なる巴里人士の風俗ではない。即ち巴里の豪華は一の假相である、唯表面上の有様たるに過ぎない。巴里の實相といふものは決してそうでない。漫然として歐洲へ遊び、一歩足を巴里の都へ移したものは其の豪奢の風を瞥見して忽ち巴里を不健全な處とおもひ、早晩滅亡の運を免かれまいとの感を抱くであらう、けれども、深く其の裏面に立入つて觀察すると、決してそうでなくて、其の内に非常なる健全な分子が存じてゐるといふ事が明かに了解されるのである。

健全なる分子とは何であるか、それは佛蘭西中等社會の氣風である。中等社會の市民、即

ち「プールジョワヂー」に確乎としたものがあツて、それが佛蘭西を維持して行く處ろの大なる要素である。「プールヂョワヂー」の中には宗敎に熱心な人、舊敎を信じて之を土臺にして居る人もあり、又、共和主義に熱心であツて、十八世紀から。十九世紀の迷執のない部分もあり、又學問も立派で、現世界の泰斗とすべき程の人物もある、又隨分志操も確かで、その高潔純粹なる處ろは形こそ違ふが、我邦での武士氣質といつたやうなものもある。御承知の如く佛蘭西の上等社會は駄目である。財産があツて、身分が好いので年中娯樂に耽る仲間は大抵皆此にある、又下等社會は、地位もなければ智識も劣るといふので、動もすれば他の煽動に乘せられて、始終うはづいてゐるやうな風があるから、少しも賴にはならないのである。唯此間に在つて獨り賴みになるのは中等社會の市民、即ち「プールヂョワヂー」の力である、勤勉で、質素で、愛國心があツて、そして忍耐力に富んで上下の中間に立つて國の運命を擔ふてゐるのは此の中等社會である。

扨て此の中等社會が斯くまでに克く整ひ、斯くまでに健全の分子が存じてゐるといふのは、畢竟其のファミリーが能く出來て居るからである。即ち家庭の内容が健全で、所謂眞家の家庭たる趣を存じてゐるからである。私共は永い間彼の地に居り、彼の家に住み、そして

彼の家族に接したが少しも外國とは思はなかつた。成程、人種も違ふ、言語も違ふ、風俗習慣も凡て違ふてゐるが、併し其の内に存じてゐる氣風は全然日本の所謂良家の家庭である。一家團欒の樂、往來贈答の交際ぶり、其の人に對して親切な處ろ、其の質素にして猥りに噪がぬ處ろ其の禮義の八釜しい處ろ其の子女の躾方の嚴重な處ろ、且つ正しく長者に對して尊敬を置く處ろ皆悉く日本の良家の家庭其の儘で、日本良家の家庭を其儘そつくり佛蘭西へ持つて行つたやうである。扨て然らば此の健全な家庭を作り、此の健全な分子を佛蘭西全體に及ぼし、佛蘭西の要素となつてゐるものは何であるかといふにそれは言ふまでもなく、一家の細君、即ち家の主婦である、一家の主婦、即ち家の母親たる人が、家庭の土臺となッて、萬般の家務を支配し、切盛をして行くのである、一家の主婦に此の貞淑、忠實な情操があるからして、高尚、健全な氣風は自然此の家庭から湧いて來て子女の上に薫化を及ぼし、隨て、勤勉、質素、忍耐、樽節の美しいブールヂョワジーの一階級が儼然として形造られてゐるのである。即ち佛國の健全なるは、主として其の中等社會の家庭がしつかりして居る所以である。

(本篇は巴里の家庭教育として談話せられたる一節を記者の筆記したるものにて文字上の責任は記者に在り)

家庭



臺所改良ノ話

建築技師　平野勇造

平野勇造君建築工師として令聞あり、頃日臺所設計に就て深く研究討査する處あり、建築上改良の意見を具して世に問はる、其説頗る嶄新にして經濟上、衛生上將た便宜上、方今の家政改良に資する處ろ饒し「臺所改良の話」即ち是なり本稿は曩に時事新報に掲載されたるを更に氏に乞ふて修正刪潤せしものなり

凡そ生物が各自天與の生命を維持する爲めの最大要素は何であるかと問はゞ先づ食物であると云ふことは動植物界を通し特に最高動物たる人間界では歴史以前の時代でも夫れに極り切つて居る、尤も野蠻時代は食物調理の方法を知らなかッたに違ひないが追々と文明に進むに從ッて其嗜好、種類も增し階級動作の差も起ッて身體の健康を維持しやうが爲め又は必要以外の快樂の爲めに種々なる調理法を工夫することになるのである、ソして今日の處では着物が寒を凌ぐと云ふ意味よりも寧ろ其格好色合の選定に注意さるゝと同じ樣に如何にすれば美味ものが食べられるかと云ふ問題が起る樣になッて居る、此問題は大分八ヶ間敷く到底決定する譯のものではないが夫れにしても食物料理の原料、道具、手練、方法は勿論研究せねばならぬ從つて之に關聯して我々日本人の住居に結び合ふ所に臺所は如何樣なものが宜しいか此問題を先づ解釋するのが急務だと思ふ何故と云ふに我々日本人の衣食住は今大に變遷しつゝあるのに食物調理の場所丈けは不便不利を忍んで其儘に放擲すると云ふ理由がない、それで此點に關しては家政を整理する細君、臺所に關する技師の間に定めて澤山の名説もあらう否無くてはならぬ筈であるが我輩は試みに思ひ付た事丈けを玆に述べて見度いと思ふ

英人チヨーチ氏は臺所は細君の書齋だと云ふて居る、實に臺所は一家の女王なる細君の樞要の働き場所であ

つて一家族の生活す可き大事の食物を取扱ふ處であるから最も都合良く出來て居らねばならぬ筈だが前申す通り未だ〳〵改良しなければならぬことが澤山あるので此變遷時代に於ける細君達の御心配も大抵なことではあるまい世間では美味ものは料理屋から取り寄せる、料理番も使ふ、魚河岸から好い種を買出しさへすれば夫れで宜しいと斯ふ云ふ方も多からうが我輩の考へでは何でも食物一切の責任者は細君て、細君が臺所で襷掛けで下女や料理番を相手に甲斐々〳〵しく働いて、扨て主人公の歸つて來た時に「ハイ御馳走が出來ました」と持ち出したら何うであらう其家庭の平生が推測せられて誠に立派なことではあるまいか、お客が來ても子供の躾けにも家族の團欒にも將た運動になつて健康を保つにも最も妙であらうと思ふ、兎角人任せは遣り放しで、不潔サウで、不經濟でソシて細君や主人公の氣に入つたもの許りは食られない加之に臺所の改良案も出なければ實行する場合もあるまい閑話休題、先づ臺所の改良には左の如き方針を取る必要があらう

(一)臺所に働く人數は少くて濟むやうにありたい

(二)臺所は可成小くて諸道具、流し場、竈も總て手近にあッて手數が掛らず客杯する時も平生の樣に使はれて働らく者の疲れないやうにしたい

(三)明りが充分で湯水が自由で、戸棚其他は掃除し易く臭氣なく總て丈夫に出來て居る諸道具の仕舞場所を設けて置きたい

(四)美味ものが經濟的に出來る、お好みならば西洋、支那料理も出來るやうにありたい

(五)火災其他の危險がなく各室の連絡も都合宜くしたい

此外若しお座敷で針仕事が厭になつたら臺所の安樂椅子で小説が讀まれる位に瀟洒と拵へたい、外のお座敷が坐る樣になつて居ッても臺所丈けは腰を掛ける樣にしたい即ち俎も擂鉢も立つて居つて使へるやうに、近頃の細君の用事も中々殖えたが殊に西洋料理の一課が出來た爲めに彌よ昔風の臺所が不便になつたセフテ

キも美味くないから今日は鳥の蒸焼が欲いと主人から言はれて出來ませんと云ふのは殘念ではありませんか、本問題とは少しく遠くなるが序に麪包を食ふ可しとの議論を聞て裁きたい、是れは臺所の改良上非常の影響ある大問題であるから

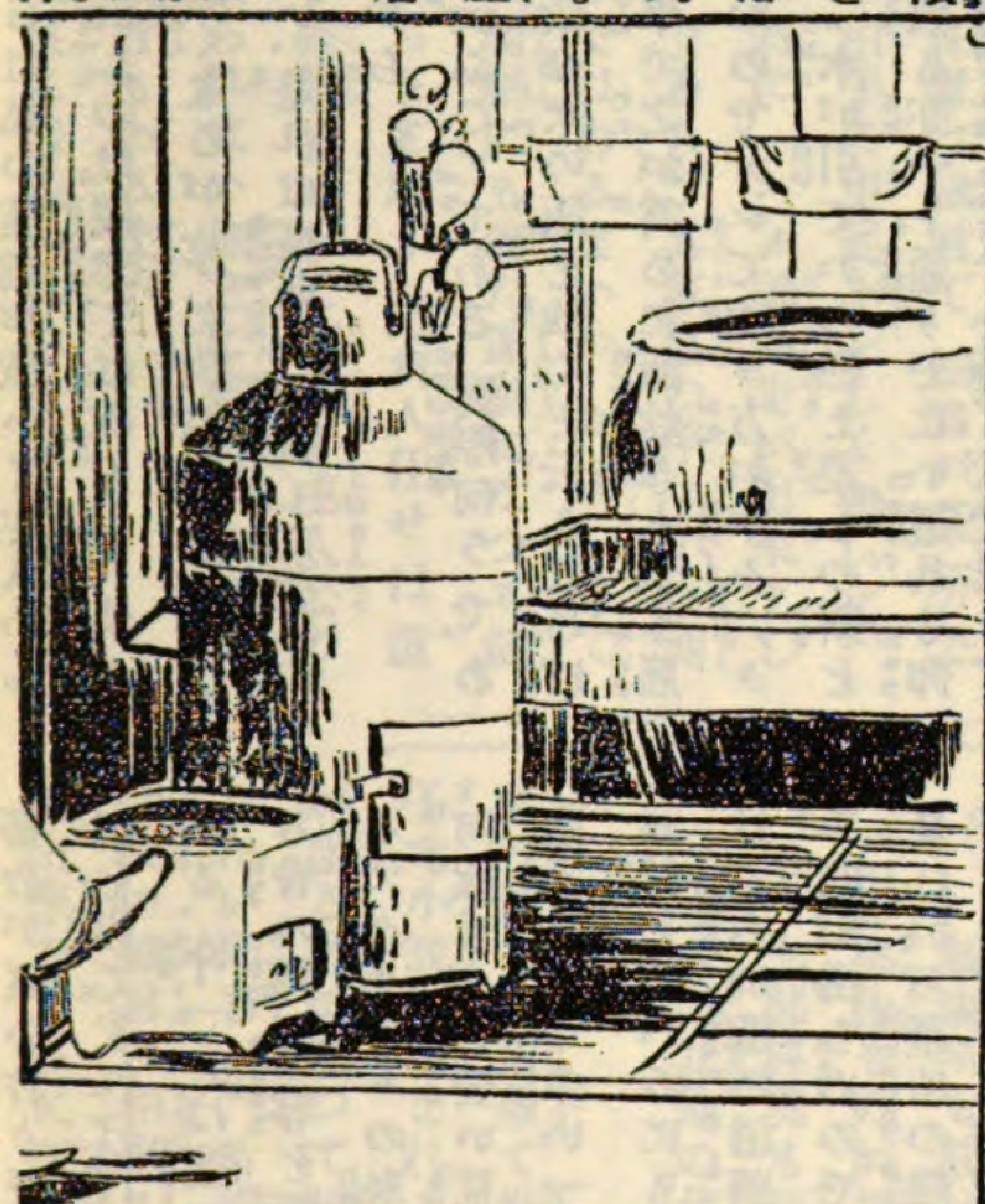
米の飯は脚氣が起ると云ふことである、實際何うであるかは知らないが何に致せ米の飯を炊くと云ふことは臺所では甚だ厄介な仕事で之が爲めに飯炊きと云ふ雇人を別に置かねばならぬのでソシて炊き方が中々六ケ敷くて堅い軟いがあつて水が引てから燃え差しの薪を取出さねばならぬ其手數も亦一ト通りでない道具も仰山に要る即ち米櫃、米研桶、釜、杓子、飯鉢、茶碗等が要る、滋養分も極りきつてミルク玉子を調合することも出來ない夏分け腐敗し冬は冷て凍る、といつて茶漬飯は不消化で殊によると砂利が交る、辨當にすれば入れ物も要るし握り飯にすれば尚ほ手數がかゝる、一寸足らなくつても買ふ所もなければ餘ると直ぐに腐つて捨てる樣な仕末、白水は下水のバクテリヤを養成するに都合が良い許りで何にもならない、處が之に代るに麪包を以てすれば以上の損失を償ふの外に大なる利益がある、今一ツは鹽醤油の使ひ方が如何にも不經濟である香の物、魚等を鹽漬にするのも普通の食鹽を使ひアイスクリームの氷に入れるものも食鹽を使ッて居るが何故もッと安い荒鹽を使はぬのか又醤油の使ひ方が馬鹿々々しく多い一體醤油は左程滋養物ではないものでお汁を拵へるにも野菜、肉類、魚類のソップに鹽味を付けた方が遙に滋養になる而して之を拵へるのにも存外手間が掛らぬのである

是れから臺所の建築の事、棚、流し、竈その他道具の事を述べやう先づ臺所の大小を申せば日本の臺所は甚だ大きい殊に田舍などでは驚く程である勿論、相當の廣さは必要ではあるが西洋諸國に比べては非常の違である、カーと云ふ人の住宅論には三百五十坪の二階建の家ならば臺所の廣さは二十尺に十八尺で充分であると云うて居る西洋館三百五十坪の二階建にすれば十五萬圓も掛り日本で云へば華族の住ふ樣な家だから家族の

五十人以上も居る處であらうのに其臺所が十坪で澤山とは一寸喫驚する様である、併しそれは間取が便利で道具の備付けに注意し働き好くて混雜しない樣に出來て居るからであると思ふ、我輩は強ち小に過ぎる臺所を良いと云ふ譯ではないが徒廣きばかりでは却つて混雜もする縮りの方が便利だと云ふに憚らない

其二

臺所の向きは南向きに限ると云ふ人もあるけれども此處に働く人は坐ては居ぬから汗も出る、火を取扱ふ所だから冬でも煖かい、夫れに普通家屋を設計するには細君の居間主人公の書齋客間等を南向きにするから臺所はドウしても他の向きに回る又西向きは隨分夏分抔は熱つて堪らぬ尤も土地の樣子によるが一番良い向きは先づ東北の方で光線は橫明りも宜しいが屋根から取る方が都合が宜しい一體臺所の光線は鍋に塵の這入つた茶碗に垢の付いた迄が分る樣に充分でなければならぬ、ソシて光線は隈の出來ない樣に配置せぬと掃除萬端に困ることがある殊に流シ元の處には必ず橫窓が入り用で可成近くなければならぬ臺所は勝手口又は內玄關食料品貯藏室物置、下女溜り茶ノ間に遠くてはならぬ殊に食堂との連絡に不便では困る又可成便所には遠ざかりたい常に乾燥ならしめて同時に空氣の流通を良くし且つ他室に此室內の臭氣を通はしめない樣に間取る可きである床は西洋では大理石もありアスファルト



もある花煉瓦チイルクロース、リノリームを敷くこともあるが普通は堅木の板で張り詰める臺所には疊薄縁は禁物にして座ることを廢したい總て掃除の善くない蟲の湧きさうな材料を使はぬが宜しい、寄木板でニス塗り抔は上等である堅木でなければペンキ塗りにして時々塗り更へると清潔なものである床の掃除は雑巾掛け許りでは宜けぬ一ヶ月三度位い石鹸を付けて洗ふ可きものである醤油を溢した時をも汚染の付かぬものを選まなければならぬ上げ板は便利の様だが竈の邊にあると下女抔が明けた儘火を焚て火の跳飛んだ爲めに火事を起した例が澤山にある又其構造に注意せぬと跳落して怪我をした妻君も數多あることを聞いた、そして



掃除の行届かぬ處から小蟲の湧くこともあッて衛生上にも宜しくない或は椽の下から盗賊の這入る例も少くない

附け戸棚は戸の建たぬ四方の壁の下の方は高さ三尺位腰板即ち腰羽目を張りたい、矢張堅木が宜いが床よりは少し軟くても差支はない、そして床と同くニス漆又はペンキで塗る、腰羽目の下の部分は靴摺り付け上は笠木を見たい

腰羽目より上、天井迄の壁及び小壁は漆喰塗りも宜しい大津壁も差支はない西洋では石膏塗りが多い薬引の瓦を張るもあり厚き光澤ある紙張りもあり板張りもあり大理石、三影石の研いたのもある、要は塵埃の附着して時々飛散せぬもの若しくは汚染せざるもので且つ光

線の反射を助け清潔なるものが宜しい色合は目に障らない目厭のしない淺黄、薄桃、薄鳶、淡白、薄卵、薄鼠、淺鶯等が良く模樣入りも差支はない、又表面は成るべく滑澤なのを選む

日本では臺處の天井を成るべく高くするが爲めに屋根裏を見する構造であるが屋根の裏板の合せ目交差せる梁及び棰木の各部分總て塵埃の堆積し若しくは附着する場所が多いから常に塵埃の飛散しつゝある有樣で何れの食物にも胡椒を振り掛けると同じことである、尤も是れ許りではなく年に一遍しか煤掃きせぬからでもあるが成るべくは屋根裏を見せずに普通の壁天井にするが宜しい高サが欲しければ此部分は高く出來ないことはない序に成るべく鴨居等の高い處には塵の積る樣な出張りを拵へぬことにしなければならぬ

臺所の窓の要は光線を導くと云ふことゝ一つは臺所で煑焚する各臭氣及び烟を排除する爲めの空氣拔と思ふ方が早い最も入口もソウであるが其向きは前申した樣に土藏湯殿の方に向けても宜しくない、窓は横窓、空窓共に鐵の棒頭を入れ硝子障子張りて之に戸締りをすれば別に雨戸を入れる必要がない、朝夕開閉の不便もなく光線も充分に取れて外も見えて清々する但日除は必要であるが普通ならば唐縮緬を使用すれば手障りも良く皺も目立たぬ其色は薄鳶色桃色抔が宜しい他の室へ通ずる出入口の建具は板戸、腰の付いた硝子障子抔は宜しいが是は他の室から見えて宜しくないといふなら摺り硝子にするも宜しい、重くて不便ならば音のせぬゴム車を附けた釣り戸にするも宜しい、何れにしても襖、紙張障子は排斥したいものである、襖障子は火を取扱ふ臺所の樣な處では失火の媒介となる、汚れた手で開閉すると清くすることが出來ぬそれに着物も汚れ又掃除に不便で修繕の早く回るものである、其破れたる有樣は假令臺所だと云つても餘り見所の良いものではない表に出入する入口の建具も前同樣硝子障子にして欲しい尤も周圍の事情によりては其外には板戸迄でなくとも窓同樣の窓掛を張る、總て臺所の如き人の勞働する場所は其目的の勞働の仕舞つた後で戸締り等に注

意を怠り勝ちのものであるから成るべく手數の掛らぬものにするのが肝要である

土間は西洋には無いことだが其代りポーチがある日本ではまだ土間を廢する譯には行かぬ若し西洋の樣に電氣鐵道が各町々に通じて居て日本橋の魚市へでも神田の野菜市へでも細君が一寸出掛けて行つて品物を手に下げて歸ることが出來てそれが又一日中の運動になる樣な鹽梅に行けば宜しいが（西洋では中以上の細君でも馬車で各町々を素見す習慣がある）未だ中々左うは行かぬから矢張り魚屋八百屋が御用聞きに來る然るに雨でも降つた時抔は外で應接する譯に行かぬから臺所の土間迄來て天秤を下さねばならぬ、又臺所の人の履物の始末もせねばならぬから何うしても土間の必要が起る、尤も夫れ位の用であるから土間は大きくも六尺に九尺あれば充分である、之に敷く材料は叩きでも宜しいが、アスファルトが最も宜しい是は衛生上都合良き材料である、又石を敷くも差支はないが物を落して壞れるとか音がするとか云ふ缺點がある兎に角、水を吸込むもの掃除に不便のものは宜しくない夫れから水の流れる勾配を付け水は落口から土管の八重曲りを通つて大下水に落込むやうになし落口には二重の鐵網蓋を置く

西洋の大家では臺所を上臺所下臺所の二間に分ち煮焚きは上臺所、仕度は下臺所と云ふ風にする例が澤山ある又下臺所に小室を分けて臺所では音響を發して喧しい料理法例せば擂鉢を使ひ肉を叩き豆粉を挽き抔する場合に使用する又パン菓子を製造し粉を篩に掛けるとき塵の立つ樣な時、甘酒抔を醸す場合抔にも使用することがある甚だ便利なもので上臺所は常に清潔を保ち又愉快な室として置くことが出來る、それから仲働きのコップ銀道具罐詰類御茶道具等を入れる小室もある、是は大抵食堂の隣りで配膳室にも使へるから小さな流しを付ける或は臺所の一隅に置くこともある、

動かない附け戸棚は普通大工に造らせると奥行が三尺であるが餘り深か過る、故に奥の物を取出し又は仕舞ふ等に手の延びないことがある又掃除にも困難である

先づ奥行は一尺五寸乃至二尺もあれば充分で膳を入れた處で差支はない、戸棚は塵埃の掛らぬ樣にして且つ空氣を强く流通させなければならぬ、それには戸棚の天井及び横側の方に穴を明け金網を張り穴の下に板を置き其周邊を更に金網で張つて一寸滊車客車の上の樣にする、戸は硝子障子が宜しい

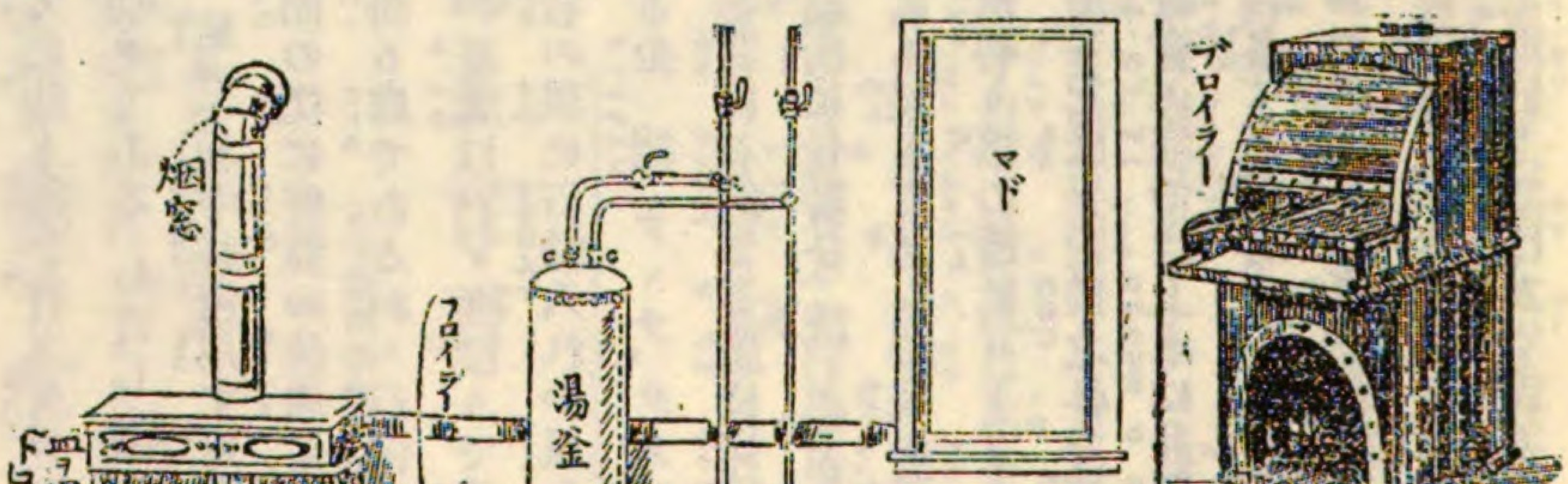
料理番の釣棚、是は種々說もあらうが先づ我輩の考ではは釣り棚を設くる場所は何れも料理番流しの傍で臺所で云ふと先づ中央に近い處にある故に臺所を無理に狹める樣になる勘定で外の者の立働きに不便である、そして其邊を暗くする、又一寸物を衝ても壞れない程丈夫に出來ない、是等の不便に換へる爲めに他に方法がなければならぬが是は後に說いて見やう

其三

東京の流し元は座つて居つて物を洗ふ習慣であるが東北地方、上方九州及び西洋でも何れも立つて居て洗ふ、何うも座つて洗ふと云ふと一寸立つて行と云ふ譯に行かぬから自から無性になる、着物が汚れる、着物の膝が切る、腰が痛くなる、釜の樣な重いものが持てぬ水瓶が高いから身體を延し惡い、一寸呼んでも聞え惡い、そして入口の戸を開けなければ暗い、開けると寒い、雨風が吹込む又流しが廣く要る、流しの上が使はれぬ、棚を置ても手が屆かぬ又流しが一段下らねばならぬから働く人の顔が床と平行して塵埃と惡い空氣を吸はねばならぬ水の掛る面積も廣くなるから從つて掃除も多くなる、低いが故に排水も困難になり又竈から流し元元重いものを下げて亦上げねばならぬから草臥れる、流しの下の掃除が出來ぬから小蟲、蛆、蚯蚓抔が涌いて不潔で衞生上最も有害である流し板も其の邊の土臺建具の裾等も早く腐れる、そして又何處へでも流しを附けると云ふ譯に行かぬ凡そ是等の諸點を取つて除けやうとするものは何んであるかと云ふに我輩は立つて居て洗ふ流し元に如くものはあるまいと思ふ併し上流しにした處で水の洩る樣なもの、流し下が暗くつて空氣の流通の惡い樣なものは不贊成である、で我輩の考へでは流しは大理石瀬戸物鑄鐵鍊鐵を銀滅金したものか又は

木製の板の上を亞鉛板で張つて掃除の根本的に行届くものでなければならぬ、位置は臺所の隅、又は戸棚等あれば其隣り、竈又はストーヴに近くして流し元の前には前申した窓が必ず必要である窓の高さは一尺以上高くてはならぬ流し元の高さは床上より底板上までが二尺五寸位、幅が二尺から三尺場合によりては三尺五寸も入用である要するに洗ひ盥の二箇も併べられる位で充分であらう何故といふに一人の手で二ッのものを一度に洗ふことはないからで流し元に二ッ以上の物を並べるのは仕事の不整理の元である即ち寸法は之によつて極まる尤も料理番仲働きの使用する流し元の入用な家は別にせなければならぬが普通の食器を洗ひ或は中等以上の家の料理番等のない處では一ッで澤山である湯を沸すことに就ては竈の時にも述べますが流しの向ひ壁の正面には水と湯の來るカラン、即ち蛇口があつて自在に使はれるやうにしたい流しの縁の高さは三寸乃至四寸高過ぐると使ひ惡い底は僅の勾配を向ふの方の落口に向つて付ける落口には金蓋を置く、是は

洋式割烹室



腐敗し易い或は下水を閉塞す可き大きな物の流れ落ちるのを止める爲めで流し元の左りには更に水切り場を設ける即ち前幅が凡そ二尺奥行が流しと同樣の板で拵へて横即ち流の方へ澤山の細溝を付ける其巾は七分位深さは上は淺く下は深く、板幅全體に割り込んで手前の端には高サ五分幅六分位の緣を付け流しの方へ勾配を凡そ二寸も上げて張り木の儘に現はして盥で洗ッた食器を直接に此處に積み布巾で淸拭して棚に仕舞込むといふ順序にする序に右の洗ひ盥のことを申せば洗ひ桶は場所は取らぬが深くて使ひ惡いから深サ五寸位とし徑は上の方を擴げて底が一尺二寸ならば上口は一尺五寸位にする但し大小は洗ふ器物に應ずることゝするそして引掛けることの出來る樣に太き針金の取手を左右に付ける品物はブリキが宜しい

流し下の下は羽目張りとして實際は左右に開かれる戸に造り水切り場の下も同樣であるが其上に引出しを設け石鹼磨き粉杯を入れる此戸の中には掃除の便利の爲めに別に棚を造らぬが鍋釜類其他を掛けて置く爲めに上の方に釣り鉤を打ち又戸の內裏にも同樣杓子菜箸、水を切ッてある「わたし」の類等總て戸棚の中に仕舞ひ惡い、重い、初中終使用す可きもの、盥、杯も掛け前申した戸棚の樣に空氣の流通を付ける、流しの上邊は何れ水の掛る處であるから西洋では大理石も張り花瓦も用ゐるが普通はペンキ塗りで汚れを落し易くし流しの向側の右の隅に石鹼入れの皿を掛けて置く、總て洗ふに用ふる金鎖、サヽラ、タワシ水布巾等も用の濟み次第流しと共に石鹼で奇麗に掃除して水を切り前申す定りたる場所に仕舞ひ、流し元を去るときは流しの邊には何んにも殘ッて居らぬ樣に淸洒りとして置く可きである又水切り場の邊にローラーに掛けた端なしタヲルも必要で手を洗ッた後之れで拭ふやうにしたい

中等社會の家では上水は井戸から汲む處もあるが今は日本の多くの都府は大抵水道が出來たから此煩ひがなくなッた中以上の家で水道を使はぬならば水溜を小高き處に置てポンプで水を上げる方法を用ひ度い是れは臺所湯殿許りではなく或る場合には火事の備へにもな

り便所を清潔にすることも出來る爲めに鐵管又は鉛管を敷設して水溜から自由に水を取らるゝ樣にするのであつて水道を使ふにしても用水規則により矢張り小水溜を高き處に置く必要がある風車を仕掛るも宜しい。」大下水道がまだ日本では多く出來て居らぬが是は衛生上大關係があつて其下水の大本は流し元であるからして流し元の下水道は殊に大切に丁寧に構造せなければならない下水の大抵の場合では湯殿、便所の手洗水、臺所の流し元土間及び玄關の掃除水或は各雨水を合併して集合せしむ可き溜桝に落すもので各々の落口の邊には必ず八重曲りの管を備へ一度此處を通過する水の臭氣は室內に返らぬ樣にする管は大小によつて材料差あるが流し元は曲折する場合が多いから先づ二吋乃至二吋半位の鉛の管を下の土管迄接續せしむる土管の徑は六寸位を適當とし曲り管の前には掃除穴を置き溜桝迄は少くも十尺に付二寸位の勾配を付ける但し其距離は多くも四間を越えては竹を入れて中を掃除するときに不便である土管の繼目はセメントで堅め、汚水の地中に洩泄せぬ樣に造らねばならぬ、溜桝からけ臭氣拔きの管を設けて屋根の高さよりも上に上げねばならぬ、又彼の鉛管內に塵埃の壅塞することがある或は冬期油類の氷る爲めに汚水の通ぜぬこともあるが是は其長サ以上の割竹手ポンプで疏通せしむるか氷る許りならば冬期以前に藁抔で氷らぬ樣に外を包むかする地中一尺二三寸以下は大抵は氷らぬものである溜桝からは更に他の大下水又は滯等に落す迄の構造をする此汚水の流れるのゝ見ゆるのは臺所から少なくも十間以上を隔てゝ欲しい近頃は氷らない管の敷設方法もある

《次號完結》

割烹實習

女子職業學校割烹科教員　井上善兵衛講述
岡野をりえ筆記

▲なんば豆腐

豆腐を布巾で包み、上より壓石を置きて水を搾る、これを裏漉にかけ、摺鉢にて摺る、『別に寒天を水に浸しひや

けし後鍋へ入れ、寒天一本につき水二合五勺の割にて煮る、これを水嚢で漉しつゝ、まへの豆腐の中へ初は少しづゝ注ぎ入れ、どろ／＼となつた時、一度に入れて三十分時間文火にかけながら煉る、煉る時豆腐一丁につき砂糖三十目、寒天二本、鹽五匁を加ふ』煉れ加減は杓子でおけて見るとつながッて垂れる、それを度に鍋を卸し、ブリキ箱に流して放冷す、凡そ三時間も經てばかたまる、』これは精進料理の刺身につかひ、酢味噌にて侑める。

▲煮凝り

寒天一本につき水二合五勺を加へて煮る』。別に鍋へ胡蘿蔔（線にうつ）、筍子（小口切り）、椎茸（線に切る）、以上いづれもまへ方サット湯煮にして置いたのをとりて、煮汁一合、醬油一合、味淋五勺、砂糖三十目ばかりを入れて同じくサット煮る、これを汁共にまへの寒天の中へあけ、醬油がすくないかどうかは、この時鹽梅を試る、煮つまつたらブリキ器（塗物其他適宜である）へあけて放冷すと三時間ばかり經てば煮凝る、それを柏子木なり、斜なりに切ッて口取りに盛る。

▲コロッケ

牛肉一斤をよくたゝき、これへ馬鈴薯（湯煮をして裏漉しにする）、玉葱（細かに切りバタにていためる）、これを肉と共に鍋へとる、醬油一合、生酒五勺、味淋五勺、鹽少量、胡姜少量で味をつける、（これは和洋折衷であるからで、もし純粋の西洋料理なら、鹽と胡姜とて味をつける）、鍋の肉に狐色に煮あがつた時、皿へとッて放冷す、これを卵大の形にまるめ、米利堅粉をつけ、鷄卵のといた中へころがし、その上へパン粉をつける』別に鍋へヘットを煮立て、これでまへのまるめた肉を揚げる、狐色に揚つたら洋紙の反古へあげて油をきり、一皿へ二個ぐらゐ盛りて侑める。

▲五月汁

破竹、燒豆腐、蕗、蠶豆、牛蒡、干瓢（これはなければ加へずともよし）のゴッタ汁である、』「破竹」「蕗」、「牛蒡」は湯出て斜に切り煮汁二合、味淋一合、生酒一合、砂糖十匁、醬油二合位の割で下煮をする、』「燒豆腐」は平に二片

に〜ぎ、〜ぎた方を下にして玉子焼鍋（油を敷き）て焼目をつける、これを水にとッて賽の目に切る、これも前の煑汁同様の割で下煮をする』「蠶豆」は鹽を入れて湯煑をする、湯出あかつた時皮をむいて、まへの各種の上へばら〳〵ふりまく、これで丼へ盛れば五月煑であるが、五月汁とするには、別に白味噌をよく摺ッて、裏漉へかけ、濃き煮汁でのばし、まへの各品を椀へ盛り、その上へかけて侑める、

▲引茶かん

寒天を水に浸け、よく搾ッて、寒天一本に水二合五勺の割合で煮る、溶けたところへ砂糖百三十目程加へる』一方別に甘藷（寒天一本につき芋百二十目位の割合）の皮をむき、小口から切り湯煮をする、これを裏漉へかけて、まへの寒天の中へ入れ、凡そ三十分時間ほど煉り煉りあがりに碾茶（價一錢ばかり）をどろ〳〵に溶かして加へる』これをブリキ器へ裏漉にかけながら注ぎこみ、三時間もさますと凝まる、適宜にきッて口取にする、

▲豚の角煮

豚一斤を煑立た湯の中へ一寸入れて油を拔き、これを厚五分ほどの大切にして、煮笊の中へ並べ、鍋へは水を豚のかぶるほど入れ、これへ生酒一合を加へ、凡そ一時間ごと〳〵煮る、しかるとき砂糖二十目程入れ、同時に水飴價三錢ほど加へ、又一時間ほど煮る、汁の煮つまつたところで、醤油二勺入れ、又々十五分時間煮れば、それで煮あがつたので、丼物につかふ。

▲紫蘇の甘露卷

鹽漬の紫蘇を水に侵し鹽氣を去り、庖刀にて葉の中央の心を除き、葉の表の方を板につけ三枚くらゐ並へて置く』一方蓮根の皮をむき、小口からうすく切り、鍋に湯をたつぷり煮立て、これへ切つた蓮根を入れさッと湯を通す（湯の中へは酢五勺ばかり入れる）。放冷た時、再ひ鍋へあけ、砂糖四十目酢一合ほどを加へて煑る、煑あげてさめた時まへの板にならべた紫蘇のうへへ並べ、五分位の丸さにぐる〳〵卷き、長さ一寸五分位に切り、重箱に詰め、其上へ白砂糖をふりかけて置けば、日の經つほどよく馴れて風味がよくなる、これも口取に

つかふ。

〔注意〕、紫蘇の千枚づけは、漬物屋にあり、東京にては京橋南傳馬町川村、又は日本橋の小田原屋などのがよろしい、一把一錢ぐらゐ、

▲オムレツ

牛肉一斤をよくたゝいて置く、』別に玉葱を細かにきざみ、フライパン（西洋鍋の一種）の中へペタ一匙を落し、まへの葱をこれで狐色になるまで煎る。』以上とゝのつた時まへのたゝき肉を鍋へ入れ、煮出し一合、味淋五勺、鹽五匁を加へ味をつける、（この調味は折衷料理であるからで、もし洋食仕立にするなら、食鹽ばかりで味をつける）、肉に火の通るまでかきまはしそれへまへのペタで煎つた玉葱を入れ、肉へ火の通ッた時を見て鍋を卸す。』皿へ龜甲笊を載せ、鍋の肉はこの笊の中へあける、これは肉の汁を皿へしぼるためで、汁はそのまゝ冷して置く。』肉は五人なり十人なり頭數ほどに一樗蒲づゝ俎板のうへに分配して置く、』以上とゝのッた時、玉子を一人前二個の見當で、その數たけこはし、よく掻きまはし、胡姜を入れ、又まへの皿へしぼつたさめた汁を一杯加へ、フライパンへ油をしき、かきまはした玉子を入れ、まへの肉一樗蒲をその中へ入れ、半煮になつた時、箸を入れて柏餅形につゝむ、直に皿へ盛ッてすゝめる、ちかごろ折衷料理が流行するのでこれを燒物のかはりにつかふ。

▲春菊胡麻ひたし

春菊三把を葉ばかりとり、さつと煮立つた湯の中をくゞらせ、直に水へとり、再度水をかへて、細かに切りよくしぼつて置く。』一方には黒胡麻二合を煎ッて、擂鉢てよくあたり、すりあがつた時、砂糖二十匁、生酒五勺、味淋五勺、醬油一合を加へ、これへまへのしぼつた春菊を入れて交ぜる、これは鉢物又は燒物の附け合せにつかふ。

▲梅ヶ枝でんぶ

鰹節一本を削り、庖碌て煎り、これを擂鉢へ入れ細末になるまでよく擂り、水嚢でふるへば細かな粉になる、ふるひのこりの分は再度煎つてまた篩にかける。』一方に

は鍋に生酒一合、砂糖二十目位、醤油一合を入れ、その中にまへの細末の鰹節を入れ、凡そ三十分ばかり掻まはしながら煮る、あんなに汁があつてと思ふほどの汁が煮つまつて、ぽろ〳〵になッて來る、その時鍋を卸してよろしい』これを八ッ頭芋など甘煮にした時パラリと上へかけて侑める、其ほかひたしものなどへかけてもよろしひ、又病人の食用としてこればかりをむかしから用ゐる、梅ヶ枝田麩といふのはこれである、

〔注意〕煮汁などをとつた時、鰹節の殻が出たら、それればかりでは不足ゆへ日に乾かして溜めて置く、田麩を作るとき、これを交ても い丶、普通市中で賣ものにする安田麩は、この殻を半分位入れてある、

▲擬製豆腐

豆腐を水から鍋へとり、手でつぶして、下から煮立て來たら、笊へあけ水を搾る、再び鍋へとりから煎りをして水氣を除き、これへ煎汁五勺、砂糖二十目、醤油一合、生酒五勺（以上豆腐一丁につきての割合）を加へ、別に又牛蒡、人参など細かに切り、サット湯煮をし、煮汁、砂糖、醤油で下煮をしたのを、この豆腐のなかへまぜ煮あがつたとき鍋を卸し、少しさめた時鶏卵一個の白身ばかりを入れて混ぜて置く。』玉子焼器に油をしき、この中へ前の煮あげた豆腐をつめて七輪へかける、』七輪は火をこと〳〵く除き、ほんの餘熱ばかりにして、其上にテツキウ（渡し金）をわたし、その上へ玉子焼器を載せ蓋をして、蓋の上に鬼瓦を壓石にする、三十分ばかり經つてから、角の板を鍋へあて丶鍋をかへし板の上に豆腐をあけ、今度は前に上になつた方を下に入れかへて、又十分間ほど焼く、豆腐は兩面とも狐色になる、卸してさめたとき適宜に切ッて精進の口取などにつかふ、

▲バタケーキ（洋菓子の一種）

擂鉢にバタを大匙一杯落し、これへ砂糖百目入れて擂る、これへ米利堅粉五合、焙り粉（ベーキング、パウダー）を茶匙一杯、鶏卵四個、牛乳一合入れよくまぜる、ブリキ器に入れ、輕便ストウブ（鐵板製の箱なり、普通『テンピ』といふ、中子は『テンパン』といふ、ブリキ器にて、

これをつめて燒く〳〵、十五分ほど經ち、テンピの蓋をあけて加減を試み、又十五分特燒く、綌から出してさまし適宜にきりて侑める。

▲同上別法　小形のうすい丸いブリキ器二枚へ同上の製品をつめ燒いてから卸し二枚とも板へあけてさまし、別に砂糖大匙一杯を鍋へ入れ火へかけると砂糖は熔ける、卸して鷄卵一個のしろ身を加へ、摺蜜のやうによく〳〵摺る、これを刷毛でまへの菓子一個の上に塗り、その上に他の一個を重ねて二枚合せにする、重ねた上へ又その摺蜜をドロリと厚くかける、そのまゝ十分程立つと乾く、庖丁をに入れ、三角形の菓子として皿へもりて侑める。

〔注意〕　庖廚ストーブを用ゐるは、洋食料理には必要ではあるが、日本の臺所へは高價でもあり、又取あつかひに不便でもある、テンピは七輪の上へかけて、直に間に合ふゆへ、便利である、一個は中子とも上製にして二圓五十錢内外で出來る、西洋人は夏季旅行などの時に、大概これを携へてゆく、これさへあれば田舎でも一寸直に洋食も出來、ビスケット杯を燒く事が出來る。

▲章魚の櫻煮

生の章魚の頭の下部へ指を入れ、そこから庖丁を入れ、一方だけ頭をはなし、頭を裏がへして洗ひ、兩の眼を庖丁で除き、又鳶烏をも除く、それから流板へ章魚（足の方へ上にして）を置いて、左手で押へ、右の手の掌で水をかけながら、何べんも〳〵章魚の足をこきて、ぬめりを除く、（ぬめりを全くとるまでこうする）、それから足を一寸位に切り、鍋へ煮汁を入れ、章魚一はいにつき、よく煮出した番茶五勺ばかり入れる、章魚をこれを二十分位煮て、それから生酒二勺砂糖二十目位いれ、凡そ汁一合位になるまで煮てから、醬油一勺ばかり加へ、五分時間煮て卸す、醬油を入れてから永く煮ると堅くなるゆへ注意ものである、これは丼でも鉢でも盛つてすゝめる、

〔注意〕　生章魚の新鮮を試みるには、疣へ指を觸れ

て見ると、ピクリと縮まる氣味がある、それがふるのはこの力がない、ゆで章魚はどう煮ても弱かにならぬゆへ、用ゐてもダメである、

▲フーカデン

牛肉一斤に豚半斤をたゝき合せ、擂鉢へ移し、鹽十匁を入れ擂り、それへ砂糖十匁、生酒五勺、味淋五勺、醤油二勺位を入れ、よく交せて、板の上に取る。』又別に鷄卵を茹て皮を剝き、丸のまゝ前の牛肉の中へ並べ、肉で包み、これを蒲鉾形に丸くして、テンパンにうつし、テンピにかけて蒸し焼きにする、三十分時ばかり立つてから、テンピの蓋をあけて見ると、肉から汁が多量に出て居る、この汁を匙で肉のうへに幾度もかける、又三十分はかり經ちて、魚串をさして、串に肉のねばりがつくか、つかぬかを試みる、つかぬ時はそれで火の心まで通つたしるしゆへ、卸してよろしい、さめた時適宜に切つて皿に盛る、洋芹又は苣、或は馬鈴薯の空揚げにしたのなどをあしらつて侑める。

〔おことはり〕 前號引筒ゝ圖は、下部の口の尖りがあんまりひろすぎ、實物とちがふ。そのおつもりで。

室內裝飾

華族女學校教授 近藤嘉三

◉配合

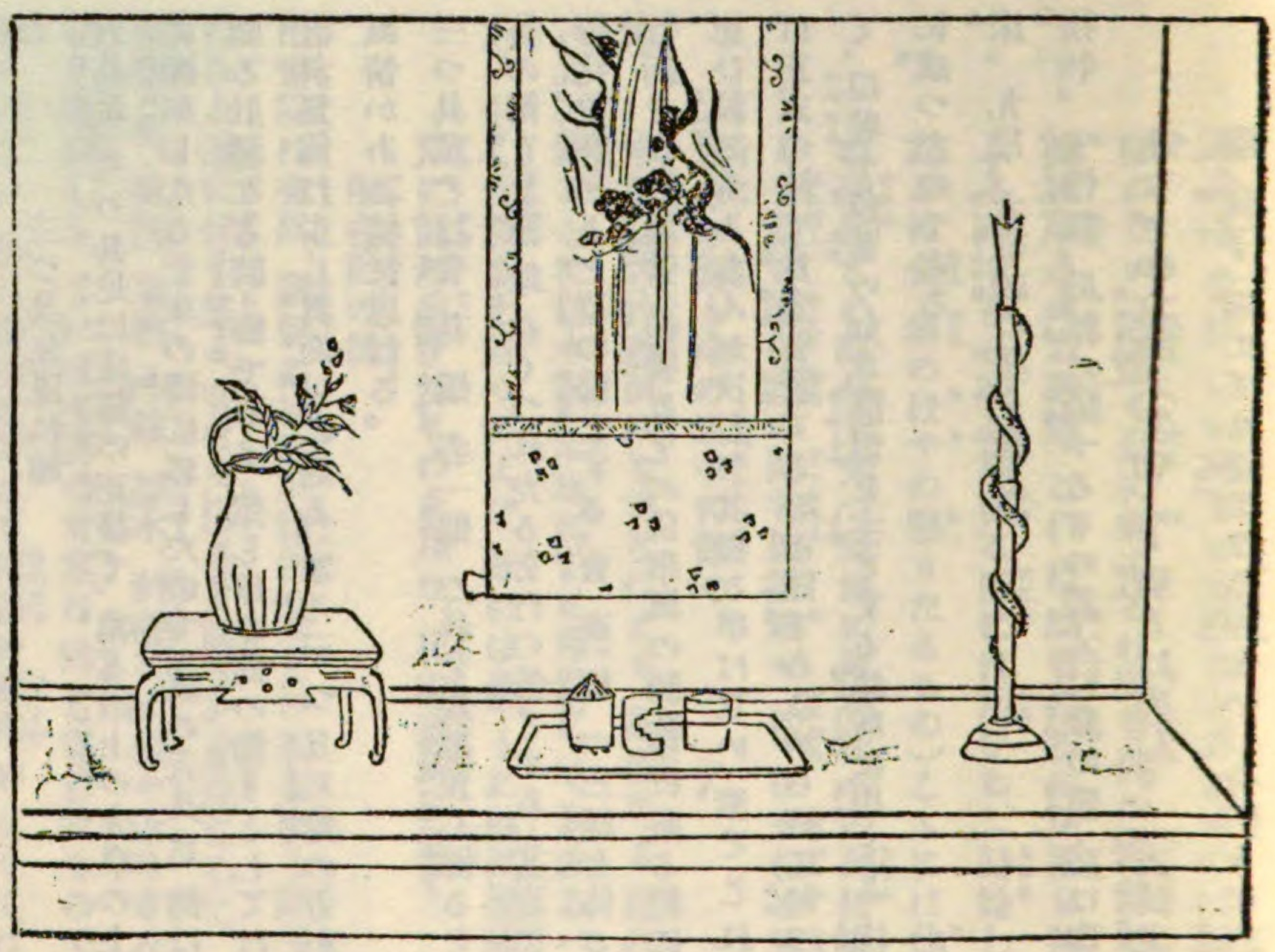
色や形や勿論裝飾上大切なる要素に相違ない、然し單に色彩形狀のみの配合が能く出來たりとて決して裝飾の完美するものとは申されぬ、この色彩や形狀の諸種が湊合して成りたるものや、時や所や種々の有形無形の事物の配合が尤も六ヶ敷いのである、世の裝飾を説くものゝ多くは色彩形狀にのみ注意する、それが一局部に限界されたるが多ひ、故に一局部に就ては隨分長短廣狹紫白紅黄の取合せも能く出來て居るもある併し全躰から申すと同し樣な事を操返す計であるからとうも平凡を免れぬ、少しも變化が無い、意匠が或るものに着する故に脫化の妙を缺く、例之斯々のものには斯々

のものか似付ぬとか斯樣な事には何々か相應であると、云ふ似合ふと云ふことは無論大切である、併し相應と申す事は同し樣な事や似たもの計りを集るの義ては無かろふ、時としては反對のもの、集つて全幅の美を整ふこともある、業平に小町、金瓶に牡丹、奇麗なには相違ないが、それては少しも風情がない斯樣なる配合を斯道の術語でだれると云ふ、活氣を缺くの意である、武骨なる辨慶には優しゐ牛若丸か似つかはしく、牡丹や海棠の樣な艷なるものは古銅器か竹籠の如き素朴なる器にさした方が遙に取合が好い、即ち配合の妙は必しも同類相集むる計りではなからふ、それから装飾の器具の充分に過ぎたるはよくない足らぬのはゆるやかに見ゆる、兎角餘裕のなきものは非常に配合上の美を損ふもので、今一點の調度をと思ふ所にて止るのが大切である完成したるものには變化が無く、變化なきものは見ても欝陶しく見ゆる、兼好も装飾の調度の多に過ぐるを嫌ふて、いやしげなるもの。ゐたるわたりに調度の多きと云ふた。誠に至言である。

◉園遊會の装飾

園遊會は文字の示すが如く家屋外の遊びであれは室内装飾の條に述るは少し區域を超ゆるかも知らぬが配合の事を申す序に一言申さふ。

近來園遊會は非常に都鄙に流行する、これは多人數の集會には大層便利で特に我國の如き家屋建築の國ては混雜を避くるには餘程妙である、加之ならず室內と異りて陽氣で快活であるから可成此種の集會の益々行れむことを企望する、然しこれに就ての装飾が、何所の園遊會に參ても、葭簾張で茶店やおでん屋を擬すると云ふが千篇一律である、千篇一律は別に嫌ふに及ばぬが、樹の蔭や石河原に葭簾張、それは當り前で只々同じ樣なるものを取合はせたるばかりで、如何にも平凡に失する、山や野原や凡て周圍の自然的、天然的の場所には尤も人巧的の趣味を加ふるが必要である、例之ば樹下、水邊などには純子の縵幕でも張り廻して、蒔繪の椅子を置くと云ふ樣なる事が好い、それから何所でも多くは白木造のテーブルか何か粗末なるものが置てあるが



斯様の場所には寧ろ燃え立つ様な眞紅か何かの美麗の卓袱でも掛たテーブルを置が好ひ。これは一班を申したるのみであるが諸事斯の如くするのである。白砂庭に綾王を舞ふ、どうも其の配合は云ふにも云はれぬ妙味がある、其の優美な趣が目の前に見ゆる様である、今日の装飾は兎角金殿玉樓で綾王を舞ふたり、白砂汀邊で竹皮包の辨當を喫する的の趣向であるからつまらぬ、園遊會で趣向の面白かりしならむと思はるゝは秀吉の大德寺の茶會である、が、流石に秀吉である、場所から調度から當時の記錄を見るに其配合は實に妙を極めて居たらしく思はるゝ、園遊會など催す人は中流以上の富豪であるから相當に立派な器物も所持する向が多ひ、とんな飾りでも出來る、然るに園遊會と云ふと必す何も彼も山野的に成るのは如何にも殘念てある。これは配合と云ふことは同し樣なるものを集むむるの義と誤會したるの弊であろふ。

床飾　七種

三つ具足亂れ飾

五具足、三つ具足は床飾の正格で、素と殿上の大卓の上に配列したるを床の間に移したので、眞の五具足飾は頗る壯嚴なる裝飾である、然し床の間の飾りとしては五具足飾は少し眞面目に過る、寧ろ三つ具足飾の方か風情かある樣に思はる。

三つ具足とは香、花、燭、各一個、これを規則正く飾るを眞の飾とし稍趣のくづれたるを行の飾とする、其更に變化脱躰せるを草の飾とする。香、花、燭、の三種を飾るは何となく追善、供養などの佛事風の裝飾に限る樣に思ひ誤るもあらんが決して其樣な事はない、素とこれは正式の飾て貴賓を饗する時の飾であるから終に移つて、追善や供養の如き謹愼を主とする場所に用ふる樣に成つたのである。

△床。九尺、大紋縁の疊を敷く。

○○掛物。大懷紙、時候に適へるもの若くは雜の歌、或は山水などの立物（半切より廣きはわるし）表裝金襴、純子、何にても優美なるがよい。今假りに探幽の筆瀑見觀世音の圖を挂ぐ。表裝金襴。

○花。花瓶は銅磁器何れも可なり、銅器なれば尉斗方又は立猪など、すなはに丈長きかよい、それも掛物との配合に由ることであるが、三つ具足飾には廣口や水盤の樣な廣つたいものは似つかぬ。朱檀か何かの高等な花臺の餘り高からぬ物、すなほなる花瓶を置くがよい。玆には段に朱檀製圓形臺に古銅の手附花瓶を置き甘草を二三本を極めて無作意に挿む。そして床の左に置く。花は四季折々時候のものを挿む、花の姿は眞、行、草、何れにても搆はぬ。眞、行の床飾なれば可成は眞の花が好い。

○○香爐。眞の飾なれば香爐は花瓶、燭臺と同じものを用ふるを規則とすれども行、草の飾にては別樣のものを用ひて搆はぬ寧ろ特殊のものを配合したるが面白ひ、香爐は四方盆か春日盆の上に置く或は香爐臺に置くも惡くはなかろふ。香盆も蒔繪あるもの梨地のものなどは品も好く大人しく

見ゆる、定紋、いかめしい定紋などあるものは趣味がない、香爐も盆に載するは聞香爐か燃捨香爐に限る火取香爐、これは聞香の折に炭團を運ぶものであるから斯樣な所には用ひぬ、(蒔繪したるに金、銀のほやの懸りたるもの)こゝには他の調度との配合上先づ梨地に菊花流水の蒔繪ある長盆に青磁燒の聞香爐を載せ、傍に香包と重香合を飾り床の正中に置く。

○燭　木製、銅、竹器何れも可なれども、斯樣なる亂れ飾などには木製、本地にても漆器にても成るべく丈高きを置くがよひ、茲には假りに純銀製網形に龍の卷けるものを用ひ、床の右側に置く

附書院の飾

附書院は書院、廣間の床脇か椽側などの如き明り障子のある邊に付て居る、昔は文房具を飾るを正規として、硯塀、硯、筆洗、卷物、呼鐘、撞木、羽帚など種々唐めきた物を陳列した、これは支那の文案の飾を寫したもので惡くはない、然し時勢に伴ふて何程か變化がなくてはならぬ、勿論文房具を主とするが好い、先づ三四種で裝飾して見よう。

一硯、料紙硯箱。　一寫眞帖。　一二帙。
一一輪生花瓶。　一呼りん。

硯箱は梨地に何か蒔繪あるもの料紙一折を敷て上に飾る、傍に短冊箱位あるも可い。これは最も右脇によせて置く。

寫眞帖は大小二帙程一帙には風景、一帙は人物など挿みたるを重ねて左側に飾る。

花瓶、青磁燒か古銅瓶の細永きを薄き臺の上に載せて時の花を一輪挿す、花も椿とか牡丹とか花の麗るはしきを撰む、萩だの山吹だの女郎花などは面白味がない。

呼りん、尤も右側の手元に近き所に置く、凡て調度は何に拘らず勝手の好い所を撰みて飾るが大事である、硯箱を左脇に置たりなどするは使用に不便なるのみならず裝飾の法にも違ふのである。

衣服のはなし

水原翠香

衣服といふ物古より女の織て着たる物なるよしは神代の巻にも天照太神の神御衣織らす御機屋へ素盞烏尊云云といふ事古事記に見えたり人の世と成ても代々機はなべての女の織たる事は云も更なり染色とても又手づから染て始蠶養より糸を採り機に織り色を染て張もし打もし裁縫して衣服に仕立上る迄悉皆家々各々の妻女兒らが職掌なりし事は中昔の物語などにも多くみえて皆其父夫兒等及女聟の爲に心を盡せるさまをいへり機屋染物屋などゝそれらを家業とする者の出來しは遙に末の世鎌倉の頃よりやありけむそれも京鎌倉の繁花なる所にのみ在しなるべし其後世は戰亂打續きて夫が爲に物事の進歩する事甚遲緩なりけらし下りて德川幕府に至りて天下太平古今に比類なき迄年を重ねて萬事勃興し京江戸大坂の三都のみならず諸國にも機場隆盛になり紺屋と號する染物業も又次第に工を極めて婦女子の嗜好を滿せしかば皆其商人の物を買て又自ら織り自ら染る事をせず田舍には今も猶手織手染を爲す者もなきに非ねど都會の婦女らは機はいかにして織る物やらむ染は如何なす物やらむ知らざるは勿論人の爲すを覗たる事だになくて生涯を終る者のみ多し近頃は裁縫をすら仕立物屋に任せて女にて在ながら男子に等しく衣服の事一切他人に爲させて我身に着るより外手に觸るゝ事なき者あり傳聞く西洋各國にては婦女子も外交にいそがはしく衣服の仕立などする者なしとかや去年の事なりし我知人の洋行して歸朝せしが談話に佛國の旅宿にて或時ボタンのとれたるを旅宿の下女に附てくれよと依賴しに仕立屋に非ざれば附られずと云彼奴面倒なるが故に然云ならむ是しきの事何條仕立屋に及ばむやよし〳〵さらば糸と針を貸せ我自ら附べしといふにいぶかし氣なる顏しつゝ持來りしかば即其針に糸を通してボタンを附終たれば女大に驚き日本人は手先器用也と兼て聞しが違はずとて稱贊おかざりしとぞ日本にては釦一ッ付たりとて誰かは譽る者あらむ又いかなる

田舎の這出者なりとも女として釦一ッ附る事の出來ぬ者もなかるべし是習慣の然らしむる處あながち日本人が器用にて西洋人が不器用なるにはあらず今もし東京の婦女にして機を織染物の一ッも心得て手づから爲す者あらば人皆器用なりとて稱賛せらるゝ事なるべきも昔ならば女として當然の事誰か又譽る者あらむやは又我若かりし頃迄は髮結といふ者は遊所か然らずば料理や等の派手家業の外は大かた雇ふ事なく各々家の女兒は母親が結ひ妻は自髮し大家にては御髮上と號して一の役員たり是に髮結業に熟練せし女を召抱へて奥樣孃樣を始家内中の髮上げを役とせし也髮結女などを入るるを下卑なる事といやしめかつ奥向の事の世間に洩るゝをいとひて渡り者を家中に入れず物堅き家風なるは手際の美なるが故に世間を憚りて極内にてゆはせても別家手代の家内迄も髮結を禁制せりされども髮結は其人もし其髮の美を稱して何誰など問時は母姉など答へて髮結を雇ひし事を隠すを常とせしなり明治の今日は恐多き事ながら皇后陛下こそ猶昔よりの御くしげ殿と稱する役局にとかせたまふらめ其外の皇族がたの御息所やんごとなき御簾中までも公然として髮結女を召させ給ふ事と成ぬれば上を習ふ下々は田舍迄も髮結流行して自髮する者老女にはなきに非ねど夫とて次第になくなり行けば終には自髮といふ事は絶果るなるべし今にても都會の婦女らは髮は自らは結はれぬものとのみ思ふ事かの釦一ッも仕立屋に非ざれば附られぬと思ひたる西洋の女にひとし世の開けて物事の進歩する程反比例に押なへての人は不器用になりゆく也今の女生徒等は學校の課業多きが爲に昔の如く裁縫專門に修行するいとまなければ手利のなきも無理ならず今五十年百年の後に至らば殆ど西洋同樣に何事も皆それ〴〵の職工に任せて家にては日々の食拵への外何も知らず得せぬ不器用至極の者が普通となるならむ其時今日の女生徒輩ほどに曲りなりにも衣服の形を縫得る者あらば嘸器用と稱賛せらるゝ事ならんと思ひやれば又をかし。

こゝろえ艸

武田鶯塘

水に溺れし時の心得

日本の婦人は概して内氣なれば、端艇もて遠海に漕ぎ出づるが如きは極めて希なるも、汐干狩、さらずもそれに似通へる船遊散は試み給ふ方もあるべし、さるにても覆り易き船に踞して、未然の災厄を想はざる程、我身のあるを知らざるに等しく、おどけたるものはあるまじきを、水に溺れし時の心得もまた必要なり、河にまれ海にまれ若し乗り居る船の覆りて、身は水中に投げ落されし時、まづ身を平にして、水の流れにまかせ、兩脇に手を働かせて、足もて水を蹴れば、大方は泳ぎ得るものなり、さらずも身を水に任せて靜かに仰臥し居らば、自然に水面に泛くものなれば、徒らに周章て惑ひて手足を働かさば、反つて底深く潜り入りて什麽とも爲し難き悲境に陷るべし、さてまた小兒の池などに陷ちたる場合には、直ちに引上げ躰を逆さにして水を吐かせ、惡水を吐き盡くさば靜かに横臥せしめ、躰温を復活せしめて後熱き粥を與ふるを可とす。

車に乗れる時の心得

假令什麽なる事情ありとも、日本の汽車は其停車せざる間は、決して乗降を許さゞれば、今は鐵道馬車に就きて昇降の心得をものすべきか、婦人が鐵道馬車の昇降には、車掌必らず停車を告げて、然る後昇降せしむるが常になり居れども、若し婦人にして急速なる用事を想ひ出し、停車の暇なく乗らんとする時には、昇降口の左手にある把手を右に掴み、車の進行する方向に躰を向けて、横様に乗れば危險なく、また下りんとする時は少しく躰を後方に反らして、車の進行する方へ下りれば決して倒るゝ事なきなり、されどこは萬止を得ざる場合に用ゆる手段にして、假令熟練したればとて、日本の婦人が馬車の飛乗り飛降りを試むるは餘りに見好きものにあらず、停車を俟ちて昇降するこそ女らしくして、危險もなき事なれ、婦人の自轉車に召し給ふ世の中なれば、さる御方も在し給はんかとの婆心までに、此心得

をものしたれど、實は強いて勸むべき心得にはあらず。

潰傷を被りたる時の心得

潰傷は其輕重によらず恐るべき障害を身躰に與ふるものにして、皮下を貫通する血液の排泄奈何によりては遂に大事にも立ち至りぬべく、さらでも其傷口より惡しき病菌を吸入し、不測の病を釀す事尠からねば、潰傷を受けたる當時極めて深重に手療すべき事なるが、素破負傷したりと見なば、猶豫なく微温湯若くは冷水にて其傷口を洗滌したる後、

酒精	一　匁
醋酸	一　匁
水	四　匁

を混和して再び洗滌し、綳帶を施したる後、重傷ならば醫師の手術を俟つべし。

毒蟲に刺されし時の心得

蜂によらず、虻によらず、蟲屬に刺さるゝ時は其餘毒躰中に止まり、痛み激しく、蟲類によりては其刺されし毒全身に瀰漫して大事に及ぶ事尠からず、さまでの毒蟲にあらざる限りは、左の處方にて大方愈ゆるものなり。

醋酸	一　匁
酒精	一　匁
水	四　匁

潰傷と些の差別なし、尤も葱の汁を搾りて塗抹するも好く、安僕爾亞を用ゆるも隨意なれど、要は毒の瀰漫せざる間に、早く治療するを可とす。

犬に噛まれし時の心得

諺に『飼犬に手を噛まるゝ』と云ふ事あり、犬は家畜中尤も人に馴れ易きものなれども、恐水病に罹れる犬、若しくは狂犬ならずして、不意に人を噛む事あり、かゝる折の好治療は其噛まれたる局部へ『硝銀』を貼附するにあり、されども何處の家にても『硝銀』など云へる藥劑を貯ふるはあらざるべく、別に之と云ふ療治に乏しき時は、假りにブランディ乃至酒精を塗抹して、然る後醫の治療を享くべし、尤も犬牙には必らず毒素を有するものなれは一旦『硝銀』を貼附し置くも、必らず醫の治療を乞はざるべからず。

育兒の心得

日本の附紐と云ふものが著しく兒童發育の上に阻碍を與へ、之が爲めに成長後胸膈狹く、胸部と腹部との間縊れて、瓢簞の如く、見ぐるしき躰格となる由は、東京病院長元の海軍々醫總監高木兼寛氏の持論なるが、洵に兒童の附紐を緊縛するは兒童發育上大なる影響あるものにして、こは注意して成るべく緊縛せざるやう爲したきものなり、また兒童を脊に負ふ事も、其胸部を壓迫するの虞あるものなるが故に、こもまた成るべくは抱くか橫臥せしむるやう心懸くべし、體格好く健全なる國民を造り出すも、體格醜く不健全なる無能力者を造り出すも、偏へに此間の注意不注意に止まるべければ、婦人の研究すべき問題としては最も大なるものなるべく、さて其兒が稍意識を有するに至らば、極めて活潑なる運動をとらしめ、且つ獨立の養成を計るやう心懸けられたし、假へば其兒が他人より物品を受けたる時の如きは、親よりは先づ其兒に謝せしめ、跌きて轉ぶも其起きるに任すやう心得なば、其兒は不知不識の間に强固なる獨立心と牢乎たる克己心とを養ひ得べきなり、總じて親は其子の愛の爲めには何事も犧牲とするが常にて、無意味の不憫を加へ、無意義の干渉を施すものなれども、放任せるか中に緊縛し、緊縛せるが中に放任するの中庸を得ざるべからざるは勿論なり、故に兒自身に爲し得る限りの行爲はなるべく放任して親の慈悲心を假さゞるやうにし、惡戯僞行は充分に叱責して再びせしめざるやうするは親の其兒に對する一種の義務にして、また將來健全なる國民を造り出すの基なりと知り給ふべし。

風邪の心得

風邪は種々の呼吸器病を惹起するものなれば、輕微なるものと雖も油斷はなり難し、畢竟我人ともに風邪に冐され易きは皮膚の强固ならざるに起因するものなれば、されば皮膚の强固を計るには、毎朝起出づるや直ちに冷水摩擦を行ふべし、こは日本の手拭にても充分なれど、大なるスポンヂを用ゆれば最も妙なり、大醫アストレー、クーパー氏は常にかく云へりしとか『予が健康

を保ちしは完く冷水摩擦の力なり、予は毎朝起き出づるや、直ちにスポンヂを以て冷水摩擦を行ひたるに、三十年間遂に一度も風邪に冒されたる事なし』また一度風邪に冒されたりと見るや、其未だ發熱せざる間に早く發汗劑を試むるか、橙を熱き湯の中に搾りて飲み、又はアンチピリン少量を用ゐて驅除し給ふべし、熱は種々の病因となるものなれば、かゝる時には早く醫の治療を享くるこそ肝要なれ、また冬期など薄着し居る時惡寒を感ずる塲合には、直ちに重衣して風邪を防ぐは云はずもあれ、若し公會の塲所等にて、これを防ぐの衣に乏しき時にはフランチルを頸部に纒ふか、それすら間に合はざれば木綿の手巾を疊みて、襟の所に宛て置くべし、簡便にして當座の寒氣を凌ぐに足れり、若しまた咳嗽激しく出づる時は、

吐根劑　二ドラム
海葱の醋蜜劑　十ドラム

を混和して用ゆれば直ちに癒ゆべく、藥劑に乏しく小見など藥劑を嫌ふ塲合には、亞刺比亞護謨少量を上顋に貼布し置かば、次第に納まるものなり。

火災に於ける心得

家人が洋燈などを覆して、既に大事に至らんとする時には、早く毛布又は蒲團を以て掩はゞ、能く消留め得るは何人も知る處にして、さなくも常に一個の消火器を具へ置けば足る事なれども、天災は何處如何なる時に起らんとも圖られず、婦人に限らず若し誤つて洋燈を覆し、其火の衣類に燃えつきたる塲合には、直ちに地上に轉顛せしむべし、かくして火は尙滅せず、危險に迫りたらば、其人の全身に毛布、毛氈、何にても隙間なく打ち懸けて、應急の手段をとるべし、憖衣服を脫かせんとて、周章てたる折なれば、堅く結べる帶どもを解き試みつゝある間に、火は早く全身を纒ふやうなる事なきに限らず、それよりも外氣を壓して、火を滅するの庶きに若かざるべし、さてまた愈々大事となりて、一家の手に餘る事ともならば、自家の器具を取纒むるよりは、早く隣人の救を乞ふは勿論、專ら消火に盡力して、近隣の人に迷惑を懸けざるやう心懸ぐることそ肝要なれ。

以上は只婦人の日常心得べき事柄を筆に任せて綴りたるまでにして、此他主婦の心得、交際の心得等は既に本誌に見え、さらずとも餘りありふれたる心得をものせんは、反つて蛇足を添ふるに似たれば、爰に筆を擱く事をしぬ、杜撰の罪は幸に見赦し給へかし。

火傷せし時の心得

俗に『やけど』と云ふものには、火傷と湯傷との區別ありて、火傷は比較的湯傷より痛み強く且つ危險なるものなり、湯傷は常に局部廣く瀰漫すれども、深くは徹らず、大方水胞となりて癒ゆるものなれども、火傷は甚しき障害を皮下に及ぼすものなれば極めて注意すべき事なり、さて火傷にせよ湯傷にせよ、『やけど』したりと云ふ時には、

石灰水　一分
亞麻仁油　一分

を混加して塗抹すれば、痛み疾に癒へ、之に和かき繃帶を施し置かば、三日ならずして痕もなく消え去るべし、アルコールを塗抹し、又は水にて揉むが如きは、極めて姑息なる手段にして、到底痛み除れ難き事なり。

洗濯の話

本多幸子

洗濯をするには、餘り汚れのひどくならない中に爲ねばなりませぬ、又汚れたものを其まゝ長く捨てゝ置くのもよろしくありませぬ、あまり汚れに染みたり長く捨てゝおいたりすると、地質を惡るくし其上洗濯に多くの時と力とを要するやうになります、凡そ洗濯をするには、第一石鹼ソーダのやうな入用の品をよく揃へ、盥や桶などの破損の有無を調べておくことが必要です、これは云はずものことの樣ではありますが、實際不注意な婦人は洗ひかけて、石鹼が不足になつたりするやうなことをしますから、氣をつけなければなりませぬ、

其次には洗濯すべき品物をよく撰り分けることです白いものは白いもの色物は色物と、夫々區別して別々に

洗はなければなりませぬ、又甚しく汚れた部分とさほどでない部分とを見分けて、袂の中の塵などは先によく拂て置くことが必要です、

次に垢を落すに入用な材料は、普通は水と石鹼と曹達灰汁等であります、水には石鹼のよく溶けるのと、石鹼の一部の固まつてしまふのとの二種があります、前者を軟水と云ひ、後者を硬水といひます、そこで石鹼のよく溶けた水で洗へば、垢がよく落ちるのです、それであるから硬水も、或方法を用ゐて石鹼をよく溶か



すやうにしなければなりませぬ、其方法の極めて簡單なのは、之を沸騰させることであります、併し硬水の或種類に因つては、わかしただけではまだ十分に石鹼を溶かすことは出來ませぬ、此樣な水には曹達を入るゝことが必要です、若硬水のまゝ用ゐたならば、垢も落ちず凝りたる石鹼は全く無益に廢物となつて仕舞ふのであります、それ故少しの手間で沸して用ゐたならば、却つて大きな經濟になります、又か樣な考へのない人は水の中へ直に品物を入れて、後から石鹼をつ

けたりソーダを加へたりしますが、これでは垢が先へ地質へ浸み込んで、なほ落ちなくなるばかりであります、故に洗濯をするのには、先づ石鹼なり曹達なりを溶かしたる水を作りて、偖後其中に品物を入れなければなりませぬ、

石鹼は物によつては軟石鹼を用ゐますが、普通には先づ例の洗濯石鹼でよろしうございます、灰汁は平常から用意をしておくべきであります、

次に品物を入るゝには、無暗に盥に一杯に入れぬ様十分洗ふべき場所を殘し、又水の温度は始から終まで餘り變りのなき様注意せねばなりませぬ、夫故熱い湯では、仕舞まで同温度を保ち難うございますから寧ぬるい方がよろしくあります、序に申ますが洗濯物を前の晩から浸けておく事は、善いと云人と惡いと云人と有りますが、極汚れたものは格別其他は大抵は浸けぬ方がよい様です、

尚次には我國の洗濯をする時の姿勢でありますが、從來の仕方では胸や腹を押し、或は腰部や脚部を冷して衛生上甚害がありますから、出來るならば箱様のものを造りて、中に座るとか腰を掛けてするとか、何とか工夫をして爲たらばよろしうございませう、

是から各地質や汚れ工合に付ての洗濯の仕方を、一々申述べると致しませう、

絹布は白色の石鹼三蜂蜜三燒酎廿の割合に混じて、切を張板か何かの上にのせて、柔かなブラッシに此液を付けて、そくそくと表裏兩面共摩擦りまして、其後で清水の中に一時間斗付けておいて微温湯で濯ぐのであります、それから絞らずに乾し生乾きの時に、餘り強くない火熨斗をかけますと、全で新らしい物の樣になります、若材料のない時には豆腐の汁で洗ひましてもよろしうございます、

綿布麻布の類は石鹼を溶かした温湯で、よく洗ひ能く濯いで乾すのです、若色の出るものならば明礬か酢を少し加へまして、餘り揉まぬ様に洗ふのがよろしうございます、そして乾す時には陰乾にすれば、色の褪るのを防ぐ事が出來ます、

凡べて洗濯は濯ぎが肝心でありまして、これにはやたらに水ばかり多く使つて、ざぶ〳〵やつても決して落ちるものではありませぬ、其證據には私が先年軍艦を拜觀に參つた時に、案内をして下された士官の御話しに、艦中の水夫が洗濯をするには、三のバケツを用ゐて卅分間に十五人分百枚餘りのシャツやヅボン下を洗ふのです、其洗ひ方は先づ最初一つのバケツにて悉皆洗ひて、第二のバケツでゆすいで、第三のバケツで濯ぎ上るといふことです、其乾してあるのを見ましたが、誠にまつしろで清潔に洗へてありました、實に其分量を一枚に割りあてると、僅に三合位にしか當りませぬ、其故洗濯といふものは強ち水ばかり、澤山用ゐたとて落ちるものではありませぬ、

フラネルは微温の石鹼水を作りて、之にソーダ少許を入れて振り出すのが宜しう御座います、板の上で摩擦てはいけませぬ、こすると纖維を損ずるからであります、洗ひ上げた後はやはり絞らずに乾して、稍濡れて居る内に火熨斗をかけます、其時白き物ならば白木綿を上にあてゝかけねばなりませぬ、小切ならば他の切の間に入れて濕氣をとりてほします、若色物であつたならば、よしや色は出ずとも白色の物と共に洗つてはいけませぬ、それは拔けて水中に浮いて居る纖毛が附着するからであります、

天鵞絨ベタ或は胡麻油かアンモニヤ水を切に浸して、すりて後テレビン油の中に入るゝのであります、次に湯氣を通して毛を立たせます、此時には下に木綿をしき、ブラッシで毛をおこすことを助けると早くよくなります、

レース　徳利にまきつけ、其上から又白い麻の切をまき、糸で結び石鹼を水でといた液に、一日一夜ぐらゐつけて上から切で徳利を押すやうにし、其上から又石鹼水をとりかへ、其後冷水の中に入れて石鹼をふり出し、次にアラビヤゴムと藍粉とをまぜて浸して置いて、後巻いたのを解き切の間に挾みて弱い火熨斗を掛けるのです、黒レースは石鹼水の代りにビールの中に入るゝのであります、

手袋は牛乳に炭酸曹達を交へ、フランネルに此液を浸し手袋を手に嵌めて、それにて擦りて洗ひまして、生乾の時に竪横をよく伸ばすのです、

物によりましては必しも水の中へ入れずとも、塵芥のつきし時などは、ブラッシ或は絲瓜天鵞絨羅紗などにて擦ればよろしう御座います、殊に毛のものに垢の付いた時などは、温飩粉を付けて擦りて拂ひ落すのも一つの方法です、

次に洗濯物を乾す時に注意すべきは、必竿をよく拭ひて悉皆皺を伸して、仇僻のつかぬ樣氣を付けて、特別の物の外は日向を撰んで、早く乾すのがよろしうございます、白い物は殊に日向でないと眞白になりませぬ、又糊を付けるには白地には米糊（或は之に白玉粉を加ふるもよし）黒地には鹿角菜をよく溶いて、裏からむらのない樣に付けるのです、

乾いた後取りこみまして、後は霧を吹いて能く皺を伸して、物によりて弱くない火熨斗を掛けて、疊みつけ押をしておくのです、

凡へて衣服の類を疊む時には泥や塵をよく見て、絹物等は天鵞絨、羅紗にて取り、洋服等はブラッシにて擦り、和服は振ひて後疊み付ける事が肝要であります、紋や襟等は必紙を充て翌年迄仕舞ふものは、殊に注意し度々用ゐた物は、必洗濯してしまはなければなりませぬ、又全躰を洗ふに及ばぬ物はかけ襟だけ洗つて置くことです、

これから汚點拔き法につてい御話し致しませう、

凡そ汚點を拔かうとする時には、第一何によりて汚點ができたかといふことを、よく調べて其原因に應じた處置をしなければなりませぬ、大抵は直に洗へば落ちますが、さう行かぬのもありますから、左に其拔き方を申しませう、

汗はアンモニア水で洗ふがよろしう御座います、もしふるくなりたらば蓚酸がよろしい、併しこれは一寸間にあひませぬから、簡便な法は石鹼を其部分へぬりて、暫らく日陽へ出しておいて後で洗ふのです、

水の汚點は其布の糊の一部分が、落ちた爲に出來る

のでありますから、其周圍の糊氣をも程よく取り去れば目立たぬやうになります、されば汚點のところと其周圍とを少しぬらし、西洋紙を其上にのせ火熨斗をかけるがよろしう御座います、

血 は冷水で石鹼をつけて洗ふのがよろしい、又はふくみ水で洗ふのも宜しう御座います、

墨は飯粒をすりつけて洗ふのです、

インキ はなるべく早く御洗ひなさい、直ぐならば石鹼水で落ちます、そうでなくば稀鹽酸で御洗ひなさい、或はレモンの汁をつけて其上に鹽をふり、日陽におき二三遍くり返へせばおちます、

ペンキ は牛の脂をこすりつけ、揮發油で洗へばよろしい、又はイーセルでもよろしう御座います、

泥は澤山つきて居たら先づそれをとり去り、水で洗へばよしもし其で落ちなかつたならば、卵の黄味で洗へば落ちます、

油類 は凡べて揮發油で洗ふがよろし、若落ちぬ時はアンモニア水で洗へば落ちます、又筆の粉を其部分にのせて、押をして置けばよくとれます、車の油ならばテレピン油で洗ひ、揮發油と卵の黄味をまぜて上にぬります、

菓物液汁 は鹽の上に切れを張り、汚點の部分へ熱湯を藥罐の口から注ぎます、汗も直ならば此仕方でとれます、

酒 はぬれて居る中に、灰をかけ乾いた後でとればよろしう御座います、又は烟草の烟を吹きかけるともあります、汚點になつてしまつたならば、豆の煮汁で御洗ひなさい、

錆 のついたのは、蓚酸を水に溶いて御洗ひなさい、

煤烟 は揮發油の中にひたし海綿でこすり、其後に揮發油と卵の黄味とをまぜて、温めたものをぬります、

尿 はアンモニヤにて又は古くなりたらば、蓚酸で洗へばよろし、

黐 は大根のしぼり汁でおちます、

蠟 はわつ灰でとれます、

附張物につきて

絹布或は多くの他の布を張る時には、籡を用ゐますが、通例は板張にします、張板は初めによく拭ひて、切の布目の曲らぬ様竪横十分伸して張るのです、之に用ゐる糊は生麩、布海苔、米糊等でありますが、此糊を用ゐるのは、能く天氣を見計らひ、何れもよく漉して、糊糟の付かぬ程にし、布の裏より付けるのであります、

夏の衛生

春江女史

一利あれば一害あり、夏は小供の發育速かにして身躰の生長すると同時に、怪我病氣等も冬よりは多し、冬は戸内にのみ居るが故に不慮の過ちを來すと少なけれども、夏は之に反して戸外にのみ出づるが故に危き事多し母の注意の必要なるは之より始まる、

◎汗腫物　大人にも間ゝあれども小兒は格別汗腫の發るものなり、その腫物の小さくして群集する内に、天花粉、葛粉等を散布せば功あれども、あせもの親とて中に大なる腫物を生ずるとあり、これは能く〳〵手當をせざれば次に〳〵擴がりて起居動作に不便となるに至るべし、時に小供は掻きに堪ふると能はずして掻くが故に膿汁所々に散して、非常にひろがるとあり、もし一つにても其の腫物を發する時は、早く米の糠汁にて腫物の上を洗ひ、清水にて又その汁を洗ひ去りたる後へ亞鉛花膏といふ膏藥を求めて塗るべし、一日中少なくとも三四度づゝ此如すれば膿化せるとせざるとに關せず、そのまゝにて枯れ失すべし、膿化せしもの成るべく孔をあけて膿をおし出し、後を洗ひて先の藥を塗りつくべし、もハヤ膿の出でざるに至れば膏藥を付けざるべし。

◎上せ眼と乳かす、初つ生れの小さき小供は特に父母が大切になすの餘り温か過ぎて上せ眼となるとあり、長して後も、屢々眼の邊の赤くなりて痒くなるとあり。之れには藥屋より硼酸水なるものを購ひて、茶飲茶わん一ぱい位を生まぬるく成る迄温ためて、切の清潔なるものをひたして、一日數回眼を洗ふべし。此の藥は小

供の舌に乳かすとて、白きもの付きて取れさる時に洗滌すれば、取り去るの効もあり。乳かすは舌を屢々洗わざるより生ずるものにして、甚だしきに至れば、乳兒共の傷みに堪へずして、乳を呑まざるに至る。殊に夏は舌を屢々洗わざれば、胃病腸の病等を發するとあり。

◎皮膚病　夏分汗の出づる頃は、皮膚病の傳染殊に甚たし。凡て皮膚病は身體の不潔より來るものなれば、已にかゝりたると否とを問はず、屢々入浴するか、もしくは手拭にて拭ふべし。慢性ならざるものは、度々洗ふによりて自然に治るもの多けれども、慢性に至りては昇汞水の如き劇藥を塗末せざれば治し得ざるに至る。劇藥は醫師の手を經るにあらざれば、求むるを得ざれば玆に書せず。

◎眩景　夏向は大人小人に限らず、屢々目まいするとあり。目まいのする時は、頭部と足とを高くし、腹部を凹くゝして、靜づかに臥せしめ、冷水を以て頭部を冷やし、成るべく運動を避くべし。

◎頭痛　頭痛にも種々ありて、或は腦のあしきために頭痛する人もあり、胃病より來るもありて、一定せざれども、凡て患者は大小便の通じを能くし、軟らかき食物を食し、運動を怠たらず、酒類を嚴禁し、劇務と劇動は勿論、精神を使ふを止め、空氣の清潔なる處に住居すべし。

◎腦膜炎　だん／＼暑氣に向ふにつけて最も恐るべき病氣は小兒の腦膜炎なり、小兒死亡者の過半數は腦膜炎にて兒を持る兩親達は今より注意が肝要なり、腦膜炎に禁物なるは一番に暑氣なるが小供の頭を日光に照りつけさせるなどは最も愼しまざるべからずわけても暑中は頭を剃る事は禁物なり、清涼の空氣中に小兒を置事は一番望ましき事にて夜分などは空氣の流通のよき室へ寢せるやうにせざるべからず、又食物も善く注意して消化の善きものを選み間食などは禁じて胃を丈夫にさせる事も必要なり、大人でも小兒でも胃と腦とは至大の關係があるといふ事は常に忘るべからず。

◎小兒の手　小兒の手といふ事は多くの母親に忘却されて居る事多し、尤もこゝに忘却といふのは衞生上よ

り忘却されたるの意味にて多數の母親は殆んど手なるものを眼中に置かず、これは頗る嘆くべき不注意にて小供の手を打ちやらかして置くやうでは衛生思想はなか／＼普及されさうな事はあるまじ、この子供の手といふは極めて不潔になり易き部分で殊に危險なるは赤兒の手なり、どんな不潔物乃至バチルスの類が附着して居るか分らざるものを遠慮もなくすぐ口へ持つて行くゆえ、手が媒介になつて病魔を傳へるといふ場合は實際に甚だ多い、赤兒のみならず四ッ五ッ尙それより以上になつても汚た――どんな傳染病のバチルスが付いて居るかも知ぬ――手で勝手に食物を手づかみにする、或は指を啣へる、いろ／＼の事をする故矢張り危險は赤兒の手と同樣なり、これは始終母親が注意して度度洗つてやりまた自ら洗はせるといふ習慣をつけざるべからず、全躰小供のみならず日本人は手を至つて無性にする性分にて便所にでも行つた時でなければ容易に手を洗ふといふ事はない、衛生思想の養成などゝいふ事は手近から始めるのが何よりでこの小兒に始終手を洗ふ習慣をつけさせざるべからず。

未來の家屋

有名なる米國のエヂソンは非常なる廉價を以てポートランド、セメントを製造する方法を發明したりこに左迄必要なる事の如くに想はれざるも家屋の建築に關しては大々的の影響を與ふべしと云ふエヂソンの言に據れば此發明の結果として石造及び煉化造の家は今後造られざるに至るべく家屋の建築費は非常に低廉となり隨て家賃の下落を生ずべし此セメントを用ひて家を造るには單にセメントを注ぎ出すのみにて乾きたるときは直ちに之に住するを得べく其輕便自在なること例ふるに物なし然もセメントの價は一噸十圓に過ぎずと又之を以てコンクリートを製するにはセメント一分砂三分石片五分の割合にて可なり尙又堅牢無比なる家を造るには鐵骨を用ひ此セメントを以て包まば可なりと

修身



女德

恭謹

野中千代子

凡身を修め家を齊ふるには禮を以てせねばなりませぬ、禮とは天地のつねにして人の則で御在ます、即ち人倫の作法で御在まして身に則あるを禮と申します。愼みなく則なければ人の心を失なひ身のわざあしく人に交はれば人倫の道が立ちませぬ。全躰人の禽獸に異なるところは禮があるからで御在ます、禮がなければ禽獸と擇ぶことは御在ません。扨斯禮を行ふといふことは大變に六ケ敷苦しきことかと申すに決して爾では御在ませぬ。人のわざ事毎に行ふべき筋目に從ひて行ふ故に心安くして身の行おだやかで御在ます、丁度坦々たる平地を行くやうなものです。故に人萬づの事禮あれば行はれ易く心も亦さだまりて安いが禮がなければ筋目たがひ亂れて行はれず心も亦安からず實に危う御在ます。故に人と生れたからは必ず禮を行はねばなりませぬ。威儀を正さず氣隨我儘にして己れを是とし人を非として侮るは恭では御在ませぬ。身を保つに萬づの事心を用ひざるは謹では御在ませぬ。謹とは心におそれありて事のあやまりなからんやうにするので萬づの事はつゝしみより行はるゝので御在まして つゝしみなければ萬事みだれて善き道は行はれませぬ。萬づのあやまちもわざはひも皆つゝしみなきより起るので つゝしめば心におこたりなく身のわざにあやまりが少なう御在ます。謹の一字は最も大せつの事ですから取分て若き者はよく之を守らねばなりませぬ。

婦女子も今日は昔とは世の中が違ひますから閨門を出でず閉籠つて居るやうな事ではなりませぬ、をり〳〵外に出て有益な場所や公會などに臨み見聞を廣うして智識を進め、又社會公益の爲なり私交の上に禮節をつとむることは聊か差支ないのみならず進んでせなけれ

ばならぬことで寧ろ奬勵したい程の事で御在ますが、扨斯に大に注意を要することは、正しからざる席即ちしらけたる酒の座やけがらはしき場所に立入らぬ事で御在ます。勿論場合によりては餘儀なく妾だの藝妓などゝいへる賤業婦と同席することも御在ませう、都て是等の者は人間以外に屬するもので禽獸を以て論ずべきもので、淑女貴婦人の共に伍を爲すべきものでなく賤しみても尙餘りあるもので御在ますけれども、去りとて明らさまに賤しむの意を外面に現はして辱しむるは却て自身の品格を落すのみで婦人の嗜みではない、深く愼み敢て他を犯さずして自ら自身を重んじ禮義を亂さず溫恭の心を以て之に接し聊か侮ることなく寧ろ之を憐んでやるこそ慈悲の道にも適ふ道理で御在ますつまり是等の者は事情の許す限り當方より之を近づけないが第一で御在ます。同時に又人より不作法な事を仕懸けられぬやう常にシャンとして威儀を正して居ることです、女子が如何に良き敎育をうけ何一つ讀み書きの出來ぬこともなく才學勝れて居ても其氣品高からずして露程も言語擧動に鄙陋不品行の風がある日には淑女の本領は已に全く消滅したので御在ます。又第一夫の相談相手となり、又は子を敎へ、娘の手本となり、世の風俗を良くし、一家の萬事亂れぬやう整ふる事は迚も出來ませぬ。況や女子として生醉機嫌で座を崩し管を卷くやうな書くも穢らはしいやうなことが萬一世間にあらば夫れこそ一家の立行はなりませぬ、到底家の破滅は免れませぬ此恭謹の事に付或る本に一の話が御在ます。

或紳士に頗ふる美人の妻君がありましたが、或男が此妻君に懸想し酒の座の小蔭にて一二度想をのべましたけれども夫ある身のいかで靡くべき、妻君は主ある身なればとて堅く愼みて從ひませぬ、其後妻君は其母や友達連れにて住吉明神に參詣し掛茶屋に休息して居ましたところが不圖彼男も參り合せ一座となりて食事なども終り。妻君は母や友達と共に濱邊の高燈籠を見物に打連れ行かんと致しますと、彼男も亦ご一所に見物せんとて付添ひ出行きました。する

と、妻君はそれをひどくいやらしく思ふたものと見え途中腹痛といつはり獨り先だちて茶屋に歸り居りました。ところが何ぞ圖らん彼男も立戻り來て妻君を出刄庖丁で數ヶ所切付け遂に殺して仕舞ました。此話は決して作り話ではない、事實でありまして其男は無論死刑になりました。此妻君なども我身我心だけは如何にも恭謹にして愼みましたけれ共猥りに酒席に列し彼の用心といふことを怠りましたから遂に箇樣な馬鹿な目に遇ひました。世の中には色戀となれば無理無躰なる馬鹿者が隨分御在ます法なしの人恨みといふやからもあるならたからうか〳〵して爲ると測らざる災難に遇ひます。

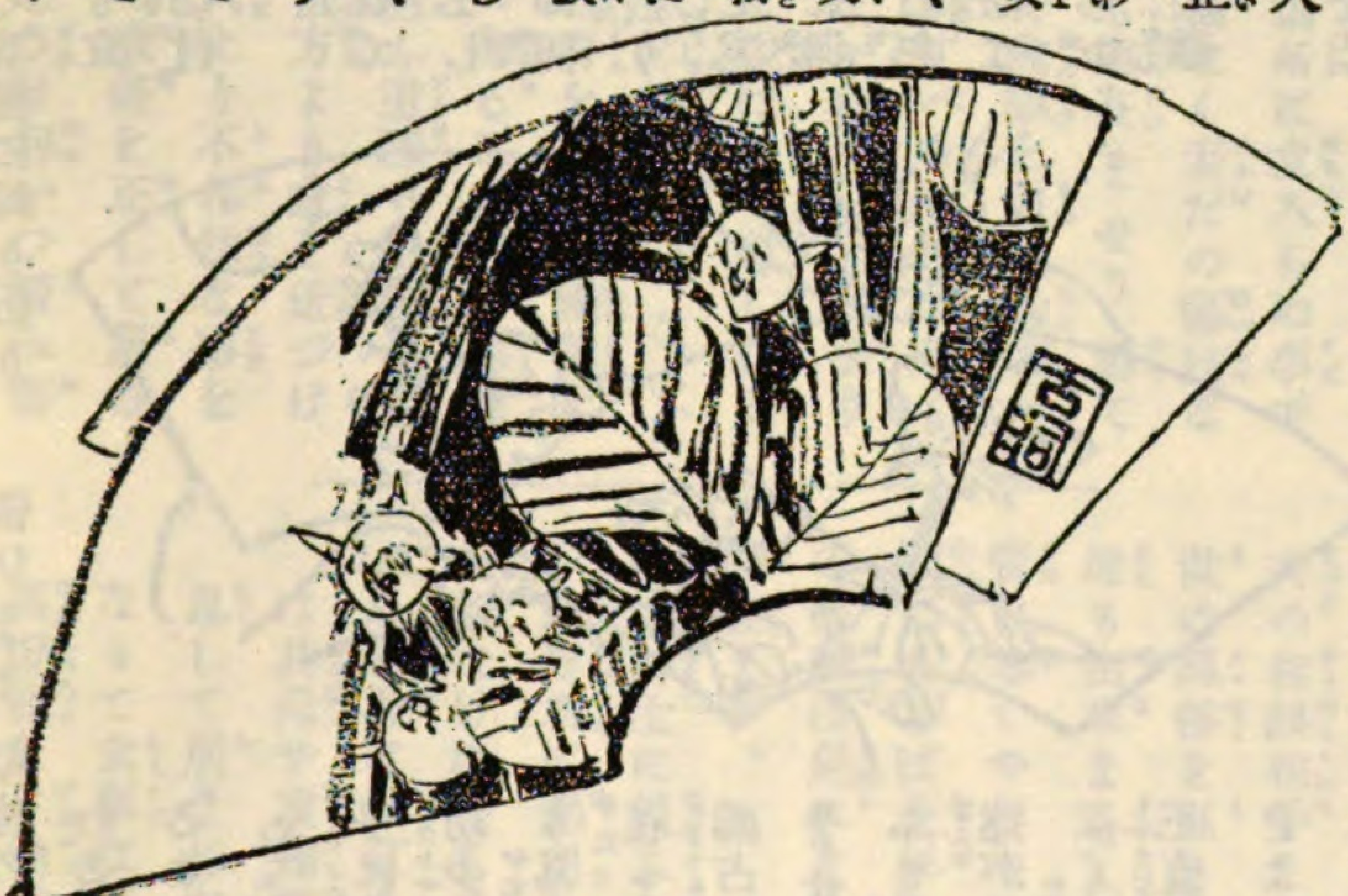
箇樣の實例もある事ですから常に孝順貞節の道を學んでかりにも淫佚なる事を聞き又習てはな



りませぬ、淫聲を好み淫樂を習へば人の心をとらかし傷ひます、斯樣の卑しきたはむれたる事を以て心を慰むるは最も惡き事にて宜しく高尙閑雅なるよき事を以て心を慰さめねばなりませぬ。昔から兎角世の中は淫聲を好んで女子に敎えますが甚だ風俗心術を傷ひます幼少の時より惡き事を見聞習ては早く移り易う御在ますから最も畏るべき事で御在ます。又道理なき正しからざる札守祈禱占考などを猥りに信じて迷ふてはなりませぬ。幼少の時から斯樣の事に心が迷ふて居ますと其心がくせになりて一生其迷がとけないもので御在ます。我身に道なく私ありて神にへつらひ祈りても神は正直聰明ですから非禮を受けずへつらひをよろこばれませぬから少しも利益のないことで御在ます。

凡女子の德育には相當の本もあり父老の物語も決して

わるくは御在ませんが讀むよりも聞くよりも一番手近くして有力な敎は父母自身の行狀で御在ます。或本に德育は耳より入らずして目より入ると御在ます通り、父母の品行方正にして其思想が如何にも高尚であれば家風が自ら美しくなりて子女の德義は敎へずとても自然にうつくしくなるは必定で御在ます、故に父たり母たる者の身を愼しむことは獨り自身の利益のみでなく子孫の爲に遁るべからざる義務で御在ます。故に先づ第一に禮を守りて內行を正しくすることが肝要です內行が正しくなければ外に善を行ふも皆いつはりとなります、是れが禮を行ふ初めで御在ます。內行を正しくするとは父子兄弟夫婦の間だむつましくうやまひあり、家人をあはれみて恩あり、人をつかふ



にせはしからずゆるかせならず、財を用ふるによきほどにしておごらずやぶさかならず、色欲をつゝしみ、耻を知りて淫行なきが即ち內行の正しいのであります。故に家を治むるには是非男女に別正しく內外の防をきびしくし混亂させてはなりませぬ男女の別なく家法正しからざれば子女に禮儀なく風俗みだりにして淫行多く家風をけがし必らず禍におちいりますから子女をゆるして淫邪におもむかしめてはなりませぬ。

人のいましめは堤のごとく大水を防がんためかねて日てりの時つゝみをつきをけば洪水のわざはひはありませぬ、人もかねての防なければはうれひの來ることは測られませぬ。家の內年若き子女はいまだ惡事できざるときかねて禮法正しく內外上下のへだてありて家法を

きびしくせねばなりませぬ。殊更酒色のつゝしみきびしくせねばなりませぬ。打まかせをきて放逸をゆるし姑息の愛を專にするときは不意なるわざはひが出くるもので御在ます。惡事出來てのちは中々おさへがたいものです、きびしくせむればうらみそむきます、顏之推が婦を初來にをして子を嬰孩にをしゆと由しましたのも此心持で御在ます。初めに早くふせけば力を用ひずしてしるし多く、末をすくはんとすれば力が及びませぬ、故に家を保ち身を保つには豫するを先にせねばなりませぬ。後のことを早くおもんはかりて用心せねばなりませぬ、かねての計なくしては、行あたりては如何することも出來ませぬ、遠き慮なければ必近き憂ありと聖人の申されましたが眞に其通りで御在ます。

實傳

班婕妤（上）

文學士 久保天隨

秋の扇と棄てられても、君王が曩日の恩情を憶ふて別に怨みもせず、その操行は百代に亘つて巾幗者流の摸範とするに足るべき者あつた上に、錦心繡腸、優に鬚眉の男兒をして後に瞠若たらしめた、班婕妤その人の如きは、古今東西、稀に見るところであつて、誠に尊ぶべき、重んずべく、少くとも東洋的女子の標型である

そもく班氏は代々文學の家であつたからして、男子に於ては班彪と班固とを出し、女子に於てはこの婕妤と曹大家とを出した。要するに、累世訓化の慶澤であつて、天地の閒氣が一門に鍾つた結果であろう。

婕妤の名字は、何と謂つたか、今さら分らない。その

素生を尋ねると、左曹越騎校尉班況の女であつて、徐令班彪の姑に當るとのことである。少い時分から才學あり、且つ容貌絶麗であつたものだからして、孝成帝即位の初に、選ばれて後宮に入り、始めは少使であつたが、その後、大に幸せられて、遂に婕妤となつた。婕妤といふのは女官の名であつて、昭儀の上である。佚は列侯に比し、動もすれば遷つて皇后となる者なりと書いてある點から考へて見れば、日本でいふと、むかしの女御、今の典侍などいふ者と、同じ格ぐらゐであろう。班姫はすでに婕妤となつて、増成舍といふところに居つた。これは、後宮八區の中の第三である。とかくする中、二度まで龍種をやどしたけれども、いづれも生れて數月の中に亡くなつたとのことで、これが後年の不幸を招いた一因であろうと思はれる。

生れつき、貞淑の質を得た班婕妤のことだから、一たび後宮に入つて後、愈よ其身を愼み、かりそめにも非難すべき行のなかつたことは、云ふまでもない。平常は詩三百篇の外に、窈窕德象女師などいへる古い箴戒の書どもを讀んで、精神の修養を怠らなかつた。その造詣の如何ばかり深くあつかたは、言行に就いて吟味すれば、思半に過ぎるであろう。ある時のことであつたが成帝は後宮に遊び、婕妤と車を同うして、何處かへ出かけられようとした。すると、婕妤は、きつぱりと御斷を申し上げた。古の畫などを見ると、賢聖の君の側には、屹度名臣が御つき申して居る。唯だ三代の末主になるといつでも女嬖がある。今私と輦を同うされるといふのは、之に似ぬとは云へぬ。恐ろしいのは、後代の譏である。かく言上したものだからして、成帝も頗る感心されて、之を御聽濟みに成つたといふことである。誰が言ふとなく、此事は宮中に傳はり、やがて太后の御耳に入ると、之れも頗る御褒めなされて、古しへ樊姫あり今は班婕妤ありと言はれたそうだ。そも樊姫といふのは、春秋時代、楚の莊王の妃であつて、賢婦人の譽が高く、王が狩を好んで遊び廻はつてばかり居られたとき、姫は禽獸の肉を食らはずして、諫をなしたのとである。班婕妤の如きは、君の寵を得ても之に甘へず、古を

引いて、過失の無き様にと勉めたもので、流石に高い見識の程も分かる。何にしろ、尋常の女子の到底及び難いところであつて、後宮の婦女が、こんな人ばかりであつた時には、眞違なぞ起るべき筈がない。婕妤は尙ほ進見する度ごとに、上書して古禮に依則したとの事で、誠に見上げた者であつた。

鴻嘉より後、成帝は漸く政治に怠られて、內寵は隆になられた。婕妤は、おのが侍者の李平といふ女を進めた。ところが、非常に寵を受けて、これもやがて婕妤になつた。成帝の謂はれるのには、前代の衞皇后も、元は賤しい處から出た者だ。之にあやかれといふことで、李平に姓を賜ふて、衞といひ、衞婕妤と呼ばれることになつた。何故班婕妤がこんな事をしたかといふと、當時後宮の有樣、日に亂れ行くを見るにつけて、若し長く今の儘にして居ると、不測の禍は免れない、そこで退引の志を決したものと思はれる。

成帝は、衞婕妤を以て滿足されなかつたものと見えて、その後、趙飛燕の姉妹二人を微賤の裡から御引き上げになつて、非常に愛幸されたものだから、この二人は大得意で、やがて寵を恃んで禮制を踰ゆることにも立ち至つた。こうなると、班婕妤、許皇后などは、榮枯地を易へ、一朝にして寵を失ひ、春の日の暮らし難きを嘆き、秋の夜の寐られぬを喞ちながら、進見することも全く無いやうに成つてしまつた。それはまだしも、鴻嘉三年になると飛燕は兼てより烟たく堪まらなかつた班婕妤と許皇后との二人を讒し、媚道を挾んで後宮を咒詛し、主上までも罵詈して居ると申し上げた。そこで、許皇后は直に廢せられて終まつたが、班婕妤に於ては、元より身に覺えの無い事であるから、詰問の時など、びくともしない。死生命あり、富貴天に在りといふことは、兼てより聞いて居ることとて、人は正しき事ばかりしても、尙ほ福を蒙ることが出來ない。それに態々邪な事をして、何が求められよう。實際鬼神にして人の事を知つたなら、決して不臣の振舞から出た愬訴を聞くべき筈がない。さて又鬼神が人の事を知らないものならば、いくら祈りを爲し訴へた處で、何の役にも立た

ない。だから私は決して咒咀などいふ詰らないことは毛頭爲た覺がないと申し上げた。成帝は、この答に感心し、舊日の恩愛を憶ひ出で、痛く之を憐んで、黄金百斤を賜はつた。こゝらは、婕妤が儒敎の眞精神に感化されて、あらゆる事を運命と諦らめた結果である。婕妤はかくの如くして、將に來らむとする禍を逃れたけれど、趙氏姉弟は嫉妬益す甚しく、到底安心して落付いて居られない。そこで、太后を長信宮に共養せむことを願ひ出で、、首尾よく許され、こゝに機を見て、身を隱くして終まつた。

（次號完結）

中將姫

田村松魚

（一）

むかし人皇四十七代大炊天皇の御代に從一位右大臣横佩の朝臣藤原の豐成と申さるゝ人あり、朝廷の賢臣、當代の博覽と呼ばれて其名一代に高く、家富み門榮へて何一つ心に任かせぬこともなかりしが、まことにこれは人爲の及ぶべき業にあらざるにや、齡半ばを過ぐれどもいまだ一人の子をも産けざるに、これのみ日夜の悲しみとなして、只管前業の致す業かと夫婦共に心安からず、身は三台の位に昇り、寵は萬人を越えて世に肩を幷ぶものなき身ながらも、夜半の寐覺には思はぬ涙に枕を濕ほすこともありしが、餘りに子の欲しさに長谷寺の觀音は靈驗あらたなれば是に祈誓をかけて子を授けたまはらん、古き例を引くも畏こけれど天照大神は祈りて正哉吾勝〱早日天の忍穗耳尊を產みたまひ月蓋長者は諸天に祈りて子を得たりとかや、されば眞實を籠めて觀世音の御力を借らんになどか御利益なかるべきと、それより夫婦長谷寺に參籠しぬ。

南無歸命頂禮大慈大悲の觀自在菩薩形を三十三身に分ち、人を度し、十九說法の粧ひ貴く、殊に二九兩願は此尊の誓ひなり、況んや除三毒滅三惡弘誓深如海歷劫不思議の金言、われ等夫婦によも空しからじ、願くは廣大の御慈悲を以て、我等夫婦に獨りの子を授けさせたまへやと天に仰ぎ地に伏して祈りしが、不思議や七日滿

ずる夜に夫婦互に靈夢に感じて利生を蒙りぬれば、歡喜すること斜ならずして下向したまひぬ。さてそれより懷胎十月滿ちて普門品の金文の如く便生端正有相之女宿殖德本衆人愛敬の一女子を產げたまひしかば、まことにこれ觀音大悲の授けたまふ所と夫婦の喜悅云はん方なく綾羅の袂にすへては玉の如く愛しみ、顏貌の膚を摩ては月の影ともてあそびて、金殿玉樓の中にかしづき、翠帳紅閨の間に育くみ愛しみたまへば、幾程もなくしてなよ竹のすら／＼と生ひ立ちたまひて、玉はいよ／＼光をあらはし、月はます／＼輝を添ゆるが如くなりければ、夫婦の御喜悅は世に譬へんものもなかりけり。

然るに此の姬君三歲の春の比、御母君不圖風邪の心地とて打臥したまひしが「只假初のことゝのみ思ひしに、日に增して頭重く枕上らせたまはず、次第／＼に花の顏色うつろい行くにぞ、大臣は申すに及ばず、上下たゞ肝を消す斗りなり、されば北の御方或夜重き枕を上げたまひて、聲も微かに、いと惱ましげに大臣殿に語りたまふやう、まことに君とは果敢なき契を結び候ひしものかな、初め妾君に見みえし時火の中水の底までも死なば共に死に、行かば共に行くべう約しぬれば、炎魔の廳までも我をいたはりたまひなんや、といと果敢なげに泣く／＼語りたまへは、大臣殿袖をしぼり、まことに諸共に行くべき道ならば、さることながら、生るゝ時も獨來たり、死する時も獨死す、去る時もまた獨去るべき道なれば、如何に云ひたまふとも甲斐なき事の例なり、まことに世に悲しきことの極みなれどもこれも前世の業と斷念めたまふべし、されど我お身の果敢なくなりなん後には、身をかへ袖を染めて朝夕佛事供養して、後の世には一つの



蓮に成佛を願はんと云ふ。此時北の方のたまはく、あら果敢なの御言葉や、情なの御契りや、とさま〴〵に掻き啣きたまへども詮方なく、唯涙に病の床も浮ん斗りなりしが、やゝありて苦しげの氣息もたへ〴〵にのたまふよふ、子は三界のくびかせと云ふ、まことに念佛申して往生せんと思ふても姫君の事心に添ひ身につき纒ひて往生の障となるぞかし、唯一つの願ひには此の子の人となるまでは搆へて他人にみせたまふなよ、又なさぬ中に副たまふなよ、もし我がいまはの言葉に背きたまはんには、草の蔭苔の下までも深き恨みに侍る、此事ゆめ〳〵おろそかに思はせたまなとて、またさめ〴〵と泣きたまへば、大臣殿も涙ながらに、たゞそのことなれば心安かれよ、お身一人の子にもあらず、豐成が爲にも子なれば、如何で由なき人にや見せんと云ふに北の方うれしげにうち首肯きたまふ。

（二）

かくて北の方今は早やこれまでと思ひたまひ涙の床に姫君を召し、苦しげの御聲にて、まことに人間の果報汝ほどすくなきものはよもあらじ、世の人の子は盛りの年に至るまでも二親共に相添ひて、いと心安くわるものを、汝いまだ三歳にも足らずして、母を失ひて孤兒となることこそ此上なき悲みぞかし、また日ならずして繼母に事ふべき身となるべけれど、其人如何に心に染まずとも、唯其命に從ひて必らず惡まれたまふなよ、後の親を親とせよといふこともあれば、よく〳〵其理りを悟りて身を愼み心を直ほし、かりそめにもかへり言などしたまふべからず、もし此の言の葉に少しにても違ふことあらば、露の身の置き所少しもあるべからず、おほよその女人は邪見にして嫉妬深く柔和忍辱の人だにも繼子繼母の中はねたみ心深くして鬼になり蛇になると云へば、かへす〴〵も母が今の言葉を肝に刻みて後の母たらん人にしたでふべし、とせき上げ〳〵說きたまひしが、猶云べきことのおはすらん、はふり落つる涙を抑へては幼なき人の俤を打ち眺め〳〵て再び言葉を續けたまひぬ。

さて汝も我も五障三從の女人なれば、今より後人とな

りたらんに、經をも誦し念佛をも唱へて信心の心深く道心堅固にして後世を吊ひてたびたまへ、云ひ遺すことはこれまでなり、おなかしこ、忘れたまふなよ、と物のあやめも得知らぬ幼なき人に向ひて、くどく／＼しく云ひ敎へたまひ、やがて夕の風の音悲しく次第／＼によはらせたまひぬ。

月日は早くも經ちて姫君七歳となりたまふ、或時乳母花園に姫君をともなひてなぐさめたまふ折から、賤が子來りて花を手折らんとせしに、その父母驚きて掻き抱きつゝ逃げ去るに、姫君これを恠しみたまひ、その故を尋ねたまふ、乳母答へて云へるやう、彼の父母の子をつれて歸りしはその子の花を折りたらんには君が怒りに觸れたまはんことを恐れてなりと申せば、姫君、父母といふことといぶかし、我には唯父のみありて、母ゐまさず、その故如何にと問ひたまふ。乳母答へてそは姫君いまだ三歲の折御母君はかくれさせたまひぬ、その時御遺言共數々ありしかども君幼なくまし／＼て御耳に殘りたまはず、と往昔のことを語りけるに、姫君いとゞ悲しげに問ひたまふは、その母上の御遺言とは如何なることぞや。乳母即ちその始終を具さに物語りしければ、姫君今は得堪えず聲をあげて泣きたまひつ、やゝありてまた云ひたまふは、その御遺言の中にて後の人に違ふべからずとは何事ぞや、乳母答へて云ふ、御父若し御臺かたをまふけさせたまはゞその人也。姫君これを聞きたまひて、やがてして父大臣に申したまふは、わらは幼なき折ふし母君に離れまゐらせたれば母君の御姿を見ず、願くば父上、後の母を迎かへさせたまへ、これをわらはが母君とかしづき申すべし、と屢々父君に願ひたまひしに、大臣やがて姫君が志をあはれと思召して、左大臣諸房卿の息女を迎へ入れさせたまひぬ。

（三）

父大臣殿此度迎へたる北の方に語りていはく、お身を迎へ入れたること、まことに姫君養育の爲なれば、姫君をまことの子と思ひてゆめおろそかになし玉ふな、只今の契約その爲なりと云ふに、御臺のたまひけるは、

仰せまことに理なり、妾にも幸ひ子もなし、たとひ子ありともなどてこの御子を等閑になしはべるべき、まして此の御子の容貌世に優れて尊きこと限りなし、心をこめていつきかしづき育み侍らんと答ふれば、大臣殿もいと心安く思ひたまふ。

されば暫時が程は北の方この姫君を愛しむこといみじく、寵愛のふすまの下に夜を明かし、摩頂の褥の上に日を暮らして、波いと靜かに暮らしければ、大臣殿もいと嬉しと思ひたまふ

しかるに女といふもの丶習慣こそいとも淺間しけれ邪見の心劔の如く、嫉妬の思ひ火のもゆるが如く、おのがなさぬ中の子なればこそ、亡き人のことなどいとねたましく思へば、自づから、この姫君の惡く丶覺え、事にふれ、折につき、忌はしき心の起り來て兎角に姫君を惡しざまに大臣殿に告げたまふなど、先に誓ひし言の葉も今はいと淺間しく聞えける。

さて姫君やう〱齡重りたまへば、心も自づからおとなびたまふ、常に思ひたまふやうは、母御世を早うしたまひし時、仰せ遺れしは、汝も我も五障三從の身なり、よく〱追善供養に心をとめ、經讀み佛に事へよとのたまひしが、今は九歲の月日を經ぬれども、拙なき女の身の露ばかりの孝養をだにせぬこそ悲しけれ、とて或日明眼の僧を請じて、我等如き愚痴無智の女人の佛になるべき事のあらば願くばおしへをたれさせたまへと云へば、僧答へて、佛は三世におはしませども、阿彌陀如來の御誓いと深し、一念十念の力によりて、五障三從の女人をもむかへさせたまへば、此佛をたのみ奉りて念佛申させたまはゞ、母諸共に往生したまはむ、このよしを述べたまふ御經をば、稱讚淨土經と申すなり、此御經よみかきて廻向あるべしと答ふれば、それより毎日その御經を六卷づゝ誦し、母上の御菩提を弔ひたまひ、世の無常を觀じ、厭離穢土欣求淨土のをもひに耽りて、唯念佛三昧に朝夕を送りたまひぬ。

やがて十三歲になりたまふ。秋の長月の末つかた、中將の內侍に任ぜられたまふ。この容色世に比なく三千の宮女も顏色なく、金殿紫閣の中に花も匂ひ月と輝く

ばかりなれば、やがては更衣后にもめさるべしと、父大臣はいと末頼母しく思し召されける。これよりこの姫君を中將姫とはよびたまへるなりけり。

（四）

女人は地獄の使、よく佛種子をたつ、外面は菩薩に似て內心は夜叉の如し、とまことに彼の繼母なる北の方は、中將姫が官位にすゝみたまひしを見るにつけ、聞くにつけて、世にやすからぬことに思ひ、むら〳〵とねたましの心胸に滿ち〳〵て口惜しく、夜は蛇身のごとく髮を亂し、顏を赤めて腹を立、晝は鬼形のごとく目をすかめ、口をあけ、舌をねぶり、大息をつき、拳を握りて、只管に姫の身に惡しかるべきことを考へ謀むこと、いとおそろしけれ。

されば或時は姫君の局の前に、冠きたる男の子を通し又は出家の人を語らひてこの部屋の前を斜に歩ませな



どして、豊成公にわれお覽ぜよ、姫が人もなげなるいたづらを、など指してさま〳〵に姫が身に惡しからんやうに云ひ罵り、これをだに見許したまはんには天が下に隱れなき面目を失ひ、耻をかき、やがては家をも失ない、身をも失なふべきことなりて、これ唯事にあらず、大臣家の運の末、我家の滅亡の初なりとさま〳〵に口を極めて姫をおとしめたまふ大臣殿はよき程に云ひてにげたまふを、北の方は猛り立ち、さる程の大事ををこの儘に捨ておかせたまふ程ならば妾に永く御いとまたびたまへ、など恨みの淚を流して罵るに、豊成公は唯おきれ惑ひて物をものたまはされば、北の方はいよ〳〵泣き叫び、げに親子の事なれば是非をのたまはぬも理りなり、所詮そのまゝに捨て置かせたまはんには世に恐ろしき災をも招ねかんに、此後は姫君を永く妾にたびたまへ、兎角はよき

に計らひまをすべし、と云ひくろめて猶恐ろしきことと
などさま〴〵に考へこしらへたまふ。
されば母北の方は中將姫を惡むことい よ〳〵甚だし
くなり行きぬ。ある時一人の猛き武士を召して、ひそ
かに語らひていふやう、われ汝をひたすらに頼むなり、
大臣殿の命なれば、かまへて此事他に洩すべからず、
さて汝に仰せつくべきことゝいふは、彼の中將姫を何
處にか伴ひ行きて、人知れずうしなひ奉れ、此事一大事
なり、若し人の洩れ知ることもあるべければ人跡絶へ
たる遠き奧山にて失ひ、深く土中に埋みて其跡をくら
ませよ、若し此儘に姫を生け置かんには由々しき大事
ともなり、一家の危難これに過るものなかるべし、ゆめ
〳〵疎にして人にさとらるゝな、もし此事世に洩れも
せば忽ち汝が生害たるべし、よきに仕了せよと引出物
など數多賜はりぬ。
かくて或時大臣殿御歌の會に參內したるその留守に、
北の方私かに姫君の御方へ女房達して使をやりて仰せ
けるは、亡き御母君の御墓へまゐりたく覺すらめ、今
日は恰かも好き機會なれば、何となきやうに立ち出で
御まゐりありて然るべし、此方好きに計らひ申すべし、
といと親しげに云ひやりければ、姫君は繼母の心の底
は知り玉ふべくもあらず、あな、有難き仰せ事かな、わ
らは三歲の折節母君に分れたてまつりてより此方、九
歲の時なりしか、白地に御墓に詣で參りしことありし
が、それより今歲十四歲の今日までも思ふに任せぬ果
敢なき身のいまだ一度もまいりたてまつらざりき、ま
ことに帝の御ゆるされなければ、此の五六年が間は籬
の外の花をも見ず、庭の內の草をもふまで居たりしに、
斯樣の仰せごとを承はりしことの嬉しさよ、これ偏に
母君の御慈愛の深きによることぞ、とうれし淚を下し
て母君の御方に打ちむかひ御手を合せたまふぞ殊勝な
る。

（五）

さて姫君は御輿に召されて忍びやかに、小門より出で
させたまへば、武士さあらぬ體によそ〳〵して御供仕
りて出でしが、都の內もいつしか過ぎ去りて、鄙びたる

方に御輿をやるべき樣なれば、姫君いと侘しみ、母君にわかれ參らせてより唯一度御墓に詣りしことありしが斯斗りに道の程遠しとも覺えず、如何にしつると思ひ惑ひ玉ひしが、まことに考ふれば、是は繼母の御作にぞ侍らむ、日頃より我をいと惡きものに思し玉ふとはおぼろげに知らさるにはあらざりしが、斯る恐ろしの御作こそ味氣なの世や、果敢なの身や、いかなる生死の海山とか行末を定むらむ、たとへ母こそ母たらずともなどや父御の斯程の謀計を乳母にもとひ、近習の召使ひにも問はせたまはで、なさぬ中の言葉に付て淺々と御計らひの程情なき父御の御心や、また亡き母上の御遺言に後の親を親とせよとの仰せなりしかば、夜け夜ゝすがら心に掛け、晝は終日相從かひ參らせつるに、其甲斐もなく、あらぬさまの事共云ひきせて、つらき涙の濡衣の、はる〴〵來ぬる道すがら、行末を見んとすれども涙の雨に道も分かず、後を振り返れど夕の雲や隔つらん、いとも心細げになり行きしが、急ぎ行く程に紀伊の國有田の郡鶴山(又は大和宇田郡雲雀山とも云へどこは非なるべしの)麓に着きにける。



やがて武士は中將姫を御輿より出したてまつり、其餘の供人は空しき輿ともに都に歸し、武士は姫君を背負ひて行くほどに、下ればのぼる雲雀山の木葉深き谷合に着きぬ。

武士は木蔭の下の清水を掬びて喉を濕しながら、傍の松ヶ根に呆れて腰打ち掛け玉ひたる姫君に向ひていふやう、姫君我を恨みたまふなよ、と云ひもあへず、氷なす刄を振り翳して、あはや後に廻りて手を下さんとせしとき、姫君涙ながらの手を揚げて、暫時まてとて留めたまひつ、泣く〴〵のたまふは、我が身に

科はなけれども繼母の讒によりて斯く成行きし身の如何にせん力もなし、さりながら我れ母上の爲に此經を一千卷書きまゐらせんと思ひ立ちぬるが、既に書き出したる御經を、先づ御墓におさめまゐらせんと思ひて此迄も持ち來れりとて妙香かほる花の袖より、御經取り出して、ひそかに母上の御墓へよといひて、苔蒸せる巖の上に之を置かせ玉ひながら、武士に向ひて仰せたまふには、われ前世の宿業拙なうして、今汝が刄の露と消えんことさら〳〵に恨むにあらず、またこの生命を惜しみていふにもならねど、今暫しばしが程、我れを助けよ、我九歳の時より母上の御爲に毎日稱讃淨土經を六卷づゝ誦して、この御菩提を吊ひけるが、今日はいまだ讀み奉らず、一度よみて母御の爲に廻向し、一つにはまた我が身のためにもせんと仰せられれば、武士も流石物のあはれを知るものなれば、即ち刄を納めて相待ちけり。

やがて中將姫は御經取り出てよみたまへば、岩にや咽ぶ谷川の、水の流と落つる涙とゞまらず、僅か三卷ばかり讀み終りて、卷き納め、西に向ひて御手を合せてのたまひけるは、この三卷の御經、一卷を父の現當二世の諸願成就と祈り、一卷を母御の出離生死往生極樂の御ため、一卷をば、母上とみづからと、一ッ蓮に迎へさせたまへと、西に向ひ、今はの際の十念と思しくて、いと高聲に念佛申させたまひけるが、武士今はとて再び刄の鞘を拂ひて、やをら後に立ち廻りしが、柳の綠の御くしの下、花の顏、雲の肌、まことに十五圓滿の月まどらかに笑ませたまうが如き御形、見るからに餘りに御痛ましく、身も心も消え果てゝ、涙と共に倒れ臥し、泣より外のこともなし。

（六）

やがて武夫涙を拂ひ、あら悲しの御事や、情なの御有樣や、この御最愛しき御姿に、何とて此の刄あてらるべき、假令如何樣の恩賞をたびたまへばとて、我れ此後千萬年の壽を保つべきにあらず、五十年の夢の世を、何とて深き罪業を犯かせる身となりて生きながら人の世の闇に踏み迷ふべき我が此の生命あらん程は力の限り姫君

を岩の隈木の下の蔭にも隠し參らせて、みやづかへせんと心を定め、あはたゞしく刃を抛げすてゝ畏こまり姫君今は心安すく思召したまへと、やがて程よきあたりに柴の庵をしつらへて、かすかふがらも其所に姫君を入たてまつり、木の實を拾ひ、水を汲み、或時は芳野詣の人の袖にすがりて物を乞ひ、熊野まゐりに頭を下げて憐を受け、心をこめて養ひ育くみけるが、姫君は朝夕唯御經を誦し念佛を申させ、只管難行苦行にお身をやつさせたまひて、九重の雲の上のありし昔に事かはりて、深山の奥の松風の聲もあはれはあれに修行したまふ。

さるほどに或日武夫ゆくりなく昔の友に行き逢ひしかば、我汝にふかく頼べき事あり、窃かに我古都に行きて、我が妻に我れ今此の深山に隠れゐれば、私かに此に尋ね來るべき由を告けよ、此事かまへて他し人に洩すなと固く誓ひけるが、其友誠に約を踐みけるにや、程なく彼の女房尋ね來りけり。

されば今は夫婦していと懇ろにみやづかへし、ひとつ庵の中にして同音に念佛して只管に西方極樂の三尊のおもひをなして心を起し、いよ〳〵菩提にすゝみける姫君或時、

　中〳〵に山の奥こそすみよけれ
　草木は人のとかをいはねば

など口すさみたまひて只管に心をすましたまふ。

かくて或年の秋のくれつかた、彼の武夫は霜に落つる木の葉と共に散り行きしに、姫君、女房の悲嘆は譬ふるに物なく、やうやう涙ながら庵の傍に形ばかりの營なみして懇ろに供養しけるが、兩人の歎の程察しやるだに涙なり、其後姫君女房におほせて、汝料紙を求めて我に得させよ、去る頃より書きのこせる稱讃淨土經一千巻をかきて汝が亡夫の後世を吊ふべしとて、それより只管その事に務めたまふ。



文苑

和歌

秋花夏開（宮中御歌會詠進）

久我建通

みそきしてかへる紙の川きしに
　秋ほのめかす月草の花

男爵　渡邊千秋

何事もおくれぬみよのためしには
　秋またて咲くきちかうの花

侯爵　鍋島直大

夏はまたなかはなれとも萩かはな
　さきそめにけり月くさの花

黒川眞頼

いふせしとみてし岡への夏草に
　さきましりけり秋萩の花

本居豊頴

萩の花かつ咲夏の夕庭に
　もよほされてや虫もなくらむ

伯爵　津輕承昭

頃ひとへ秋をへたつるくさむらに
　いろめつらしき月くさの花

伯爵　松浦詮

しけりあふ夏野のくさの下かけに
　はや秋近う花さきにけり

男爵　渡邊清

なてしこの中にましりて秋萩の
　花もひとえたさきそめにけり

男爵　小畑美稲

すゝみゆくよにならひけん秋またて
　花さきそめしませの朝顔

伯爵　大谷光尊

むしのねもまたきこえぬに秋草の

にほひそめたる夏の野へかな
子爵 竹屋光昭

なつもはや秋のしたつゆかゝるらむ
やちくさの花さきそめにけり
子爵 前田利鬯

七草のかすには入れと秋またて
かきねにさける萩もありけり
子爵 牧野忠敬

村雨のはれしみそのに咲にけり
秋にさきたつ月くさの花
小原迪

すゝみゆくよにおくれしと萩の花
秋をもまたてさきそめにけり
千種任子

秋くさの花さくみれはわしひきの
山へは夏もすゝしかるらむ
小倉文子

さをしかもまたこゑたてぬ夏の野に
秋をみせたるはきか花つま
園祥子

ひめゆりの咲るなつ野にうちましり
にほひそめたるをみなへしか
姉小路良子

むしのねも催すまてにさきにけり
秋まつにはのなゝくさの花
小池道子

ありあけの月草のはなさきそめて
つけふむ庭は夏としもなし
藪兼子

つゆしけきよもきか庭のをみなへし
秋をもまたてさきそめにけり
北島いと子

夏の野のくさふみわけてゆく道に
あきはきの花みいてつる哉
津森好守

秋かせはまた立たねとも園の中に

つゆをふくみて萩さきにけり　いさを

つゆしけき草のまかきのふちはかま
秋をもまたてほころひにけり　平田三枝

蟲も音をやかてたつらむ夏草の
しけみか中にはきさきにけり　愛子

夏草のたかくしけれる庭のもに
秋またてさく花もありけり　宮地嚴夫

こむ秋をまちかねかほに此夕
にほひそめたる月くさの花　阪正臣

せみのなくをかの草はらかけくれは
秋またてさく花もありけり　嚴雄

おきかはる露をもまたて草ふかき
夏のすゑのに萩さきにけり　小杉榲邨

やかてみむのへの錦のひろはたの
はつるゝ夏のいとはきの花　植松有經

またきより秋のちくさの花さきて
夏のみしかき山のおく哉

雨中會友（不忍池長酡亭小集）

おもふとちかたらひ草の花さきぬ庭あるかれぬ
雨のめくみに　高崎正風

ふる雨に心もちらておもふとちよりてかたれは
樂しかりけり　東久世通禧

さみたれはふりくらせとも思ふとちかたりあふ
にはさはらさりけり　大谷光尊

ふる雨に軒端しつけきこの宿のけふのまとゐの
面白きかな　綾小路有良

みちのほといとひし雨もわすれけりちきりし友ともかたりして　竹屋光昭

うちとけてかたりあふには降雨のしつかなる日そうれしかりける　宮地嚴夫

おもふとち雨のふる事くりかへしかたりかはしてくらすけふ哉　北郷久政

ことのはの友にしあれは降雨にぬれてつとふもたのしかりけり　阪正臣

はちすはのうきはにそゝく雨をみてこゝろきよくもかたるけふ哉　植松有經

あやにくとおもひし雨もさはりなくよりてかたれはよき日也けり　小出粲

魂あへはかくこそありけれ梅雨のふるもいとはす皆つとひけり　大口鯛二

うちとけてかたらふ程は村雨のくもゝ心にかゝらさりけり　千葉胤明

夏池（同上）

はちすはの風こゝちよくふくなへにきのふの春もしのはすの池　高崎正風

花はまたさかぬはちすの若葉よりわたりてかをる風そすゝしき　東久世通禧

しのはすの池は夏こそとふへけれうきもゝ蓮のはかくれにして　大谷光尊

さゝなみのよするもすゝし池の面のはすの若葉に風わたりつゝ　綾小路有良

はちすはのつゆふきこほし涼しくも風かをるなり不忍のいけ　竹屋光昭

いけのおもの蓮のうきはにまかゝやく玉こきちらすさみたれの雨　宮地嚴夫

しのはすの池のはちすのひまことにうつるは岸の若葉なりけり　北郷久政

夏なからかもの青葉もうかひけり涼しき池のはちすかくれに　小出粲

夏はこの池の端こそすゝしけれはすの葉渡る風たえすして　大口鯛二

をちこちに魚はをとれど蓮葉のつゆもこぼれず
不忍の池　　千葉胤明

和文

蚊

鹽井福子

あながま〳〵、世の中にかほど憎くきものはなきよ。それもねぶたしと思ふ折りならばしも。此の夕風のすゞしきに、晝の怠りをとりかへさばやと、やをら机にうち向ひ、書ひもとけば、さても數萬の蚊、鯨波の聲を擧げて襲ひ來たり、せめどよみぬ。己れと云ひさま、彼方をうち、此方を叩き、さては、團扇とりかざして、追ひ拂へども、追ひ拂へども、憎くきものは中々退かんともせず、よせてはかへし、かへしてはよする群兵何處までつゞくらむ、軒端はくろうつゝみたり。

時宗やある、彼を退治せずやとさけべば、うれしや、女の童の蚊遣をもち來たりぬ。さしも、あふぎたつる煙りにまかれて、あはれ、數十萬の蚊軍、一瞬も殘らず失せにたれど、あたら、さやけき月のかげ、くゆるはいとをし。我れも眼をこすり〳〵、机を正し、二三行よむとすれば、又もや名告り立つる聲。羽風の耳をかすむよと思ふまもなく、又や、どつとうちよする大軍、見れば蚊遣は消えたり。そださしくべて、敵を追ひ拂ひ、衣紋とりつくろひ、机にさしむかへば、あなや、燃え上るほのほ、消しとめて、机を正せば、程もなく消えんとす。また燃えんとす。書はやう〳〵二三行をくりかへしたるのみ。

あはれ、かやうのものと戰ひをらんよりは、城にこもりて、さやかに月のかげながめんこそ中々にかしこけれと、書物うちたゝみて見出す窓に、とびちがふ螢、ふと古へ人の心にうつるもあやしく、蚊遣かきたてゝ、今一時と机に向ひたれど、ともすれば消えかへる蚊遣り、すきを伺ふ蚊にせめたてられて、わりなくも蚊帳の内にはひ入るくやしさよ。さるにても、同じ虫ながら、螢はふみよむ人の燈火ともなりにたりと聞くを、憎くきは蚊なりけるよ。しかも毒虫の毒をさへ、人に傳ふると聞く。あな恐るべし。人の中にも、小人の徒、これに似

たるがありと聞きぬ。

夏之水

坂正臣

なつは水こそ命なれ。さみだれも今はとはれて、照りはたゝく日の影、目もくるめくばかりなるに、中川のやどりならずとも、水せきいれたるわたりにゆかむは、生きかへる心地すべし。岩が根こゞしき山坂を、あへぎつゝのぼりゆくに、はるばると海みえわたるも、いひしらず涼し。うみといふことばのもとは、大水にて、ほとづと省かり、おのうに轉りしなるべし。

京都はあつき所にて、夏ゆくにふさはしからねど、加茂川のながれはさらなり。まちなかの家々も、水のいと清らかなるに心とまりて、長居もせらるかし。書に見、話に聞く、ないやがらの瀧よ。すゐつゝるの湖よ。あはれいかによからん。いのちあるうちに一たびはゆき見てしがな。

鎌倉はよき所なれど、水清からぬかあかぬこゝちす。昔住みける頃、おやしき皮膚病にかゝりしは、この水の故かとさへおぼえき。横濱はさらなり、東京もなつかしからぬ水なるを、幸に水道の設あり。ちかき年よりは、その下樋も鐵にあらたまり、こゝかしこに給水場とかいふものもきづかれ、ちりあくたのたぐひを漉し取りて、四方にましみづをおくるめれば、まへまへにくらべては、こよなくめでたき水となりぬらん。これにしも蛭のすむよしいひさわぎしを、人のうはさも七十五日とか、今はながれうせにき。

我が家は、つひえをいとひて、なほ堀井の深井をもちゐてあれど、これはたよき水にて、夏のいのちをさゝふるに事足るにつけても、この物のあしき所、ともしき所にすむらん人のうへおもひやりてかへりみれば、いみじかりける幸福なりや。

をりをり草（一節）

山崎とね子

夕月夜

夕日消えてさて暗うならぬ程と書きそめたる文、いまた書きはてぬひまに暮れはてけり。燈火の下も暑しとためらひつ、見出たる空はすみ渡りて星かゝやき、日一日、日にさらされし軒の青桐、息つくやうに風にそよぎたり、庭の方には笑ひ聲聞えて、本郷の姉君と幼き子のよふに、うなかされて立いてぬ。涼しう水うちたる木のもとに、人々つどいゐたれは其數に入りつ。東京にいてゝより本郷にのみすみて、神田の人になりつるは此頃の事なり。いひなれたる幼き人は、我母上のことをも、本郷の伯母君といふ。かしこの靜なりしに引かへ、こゝにはまた幼き三人の從姊あれば、さなから生れかはりたらむやうに、日毎さわぎくらしつ。騷かしき夕けすまして、くつろきたる夕涼みは此頃の命なりけり。今宵五日はかりにや、また細き月淸う、涼しき風はかろき袂を吹かへす。うさき〳〵とうたふは四つになりたる子、片言に物いひそめたる子は、叔母君のせに月を指して、何か頻りにいひ居たり。上の子は此頃手習なとする、月を仰きて、月といふものは二つあるやといひ、出たれは、ゆくりなくて人々あやしかるに、二つあるべきものよ、本郷にて見し時もありき、こゝにも見ゆるをといふ。誰も〳〵笑ひぬ。聞かぬ子までをかしけに笑ふ。おとなはそれをも又笑ふ。樂しのまとゐや。本郷の月のかけには、父なき子一人の母とさびしうのみ語りあひて、何となう悲しきこと多く思ひいてられき。誠や異なりたる影なるべし。かしこに散して物いひつる子も、うさき〳〵とうたひて飛び騷くに引いれられて、おもしろう笑ひつ。月は程なく近隣の屋根に隱れたり。あたり廣かりし本郷の月はまた入りはてしと思ふ。こたひは花火を騷きたる子もかやに入りて、晝間は物にまきれてきゝし事なき大時計の音のさやかに數多くかそへられぬ。今こそ我世と机に向ふ。



學藝

避暑の海邊（其二）

女子高等師範學校教諭　藤堂梅軒

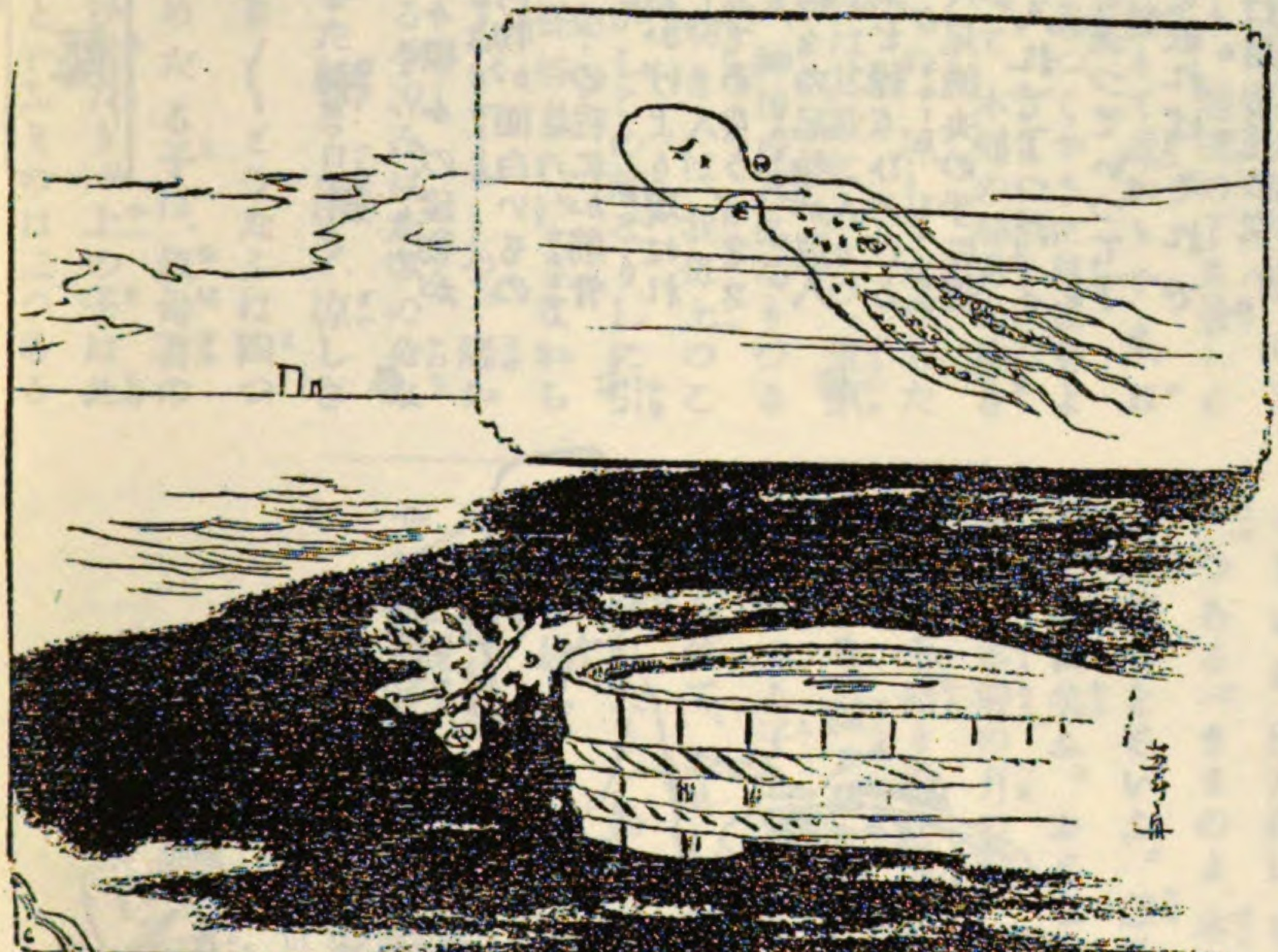
磯邊の遊も中々樂しみが多い、色々樣々の珍物が我々の目を怡ばせた。ア、未だ何物が面白いものはなからうと考へて居る間に、いつの程にか筋骨たくましい人に打網を手にして岩かげより現はれた。いはずと知れた此の邊の漁夫であらう。サット打ち下した網の中には、早や樣々の品物が這入たらしい。やがて陸の上にその網を繰りひろげると、銀刀のやうな魚が確かに七八尾漁夫の手に握られて、さうして手速く腰の籠に入れて了つた、さうして彼れは後をも見ずに此處を去つていつて了つた。成る程彼は目星い魚さへを取れば、それで澤山である、殘物は藻屑やなんどは目も止めない。

第七圖



それが我々のやうな避暑に遊ぶ者に取つては、面白いことで、中々其の中に珍しい獲物があるのである。ドレ盥を取つて來やう。がやて宿より手頃な盥を持ち運びて、これに海水を容れてサテ何物か見つけ出さうと、今しも漁夫の取殘し置いた藻屑を掻き分けて見るに、小さな章魚がピリ〳〵と頭を振り立てゝ居つた。直樣之を引攫んで盥の中へ投げ入れたところ、見る間に水は一面の墨と姿が變つて見えなくなつた。これは何うしたんであらうか、これは章魚が墨を吐いて水を

第八圖



濁らせたのである。何のためかそれで姿を隱して一身の危難を逃れやうとするためである。實に其の墨は色の濃いもので一滴で以つて盥の水を眞黑にして了ふといふ程である、西洋繪具ではセピアといふ墨として之を用ふのである。

さて其の墨は章魚のどの邊から出されるのであるかといふに頭から突き出て居る漏斗（第八圖）（イ）から噴きつけるのである全躰章魚の頭とは何處だらうか、俗にドーピンといふ所は頭のやうで實は頭ではない、それは色々の臟腑を藏めて居る

腹である漏斗は即ち此の腹から突き出て居るのである。さすれば頭は何處であらうか、即ち眼(口)のある所が頭なのである。章魚の眼は中々大きなもので、それで以て自由に餌を探つたり又敵を見て身を隱すのである。

いふ中に段々と盥の水も澄み渉つて小章魚の所在も見えて來た、漏斗も見える、腹も見える、眼も亦見える、ところで口は何處にあるであらうか。ナニ、口は漏斗ではないか、漏斗が即ち口ではないか。イエ、漏斗は漏斗口は口である。漏斗はそれから決して物を食べない、墨を吐くのが其の役目、否それから糞を出すのである、誰も糞を出す所を口だとは思はないであらう。そうすると愈々口の所在が別になければならぬどこであらうか、それは八本ある足で取り圍まれて居る底を伺つて御覽。屹度大きな口のあることが見出される、しるも其の中に黑い鳥の嘴のやうなものが二つある、これを俗に「とびからす」といふて居る、即ちそれは章魚が餌を食べる道具なので、先づ齒といふてもよろのいしである。

サアこんな丈夫な齒があるとすれば、章魚が常に何物を食べて居るかといふことが知られやう。章魚は蟹を捕つて食べる、又隨分大きな魚を捕つても食べる。成る程そんな齒があれば左樣でもあらう、しかしそんな餌を何うして取るかといふに、それには八本の長い足がある、否八本の手である、その手に手に大きな吸盤が蛇の目形をなして二列に端から元まで並んで居るのが何よりの利器である。若しも大きな魚などがござんなれ、此の八本の手が熊手となつて強く之を引きつける、その強さといふものは中々大したもので、もーそれだけてその餌は締め殺されてしまふ。それから悠々と之を口へ持ちて來て喰ひ始めるのである。章魚の大きいものになると、手の長さが一丈程もあるそーで、屢々小舟に引掛けて覆すといふことである、それで人が海へ墜ち込めば、得たり仕濟したりとて直ちに其の人を餌にするそうである。昔にあつたことだとて聞いたことがある、或る日猿が海邊の松に遊んで居つたところへ、

不意に章魚が躍りかゝつて其の足に取りついて到頭海へ引込りこまれたといふじや。可哀相なは猿ではあるどんなに力を入れても章魚の腕力には敵されないのである。

アラ盥の中に居つた小章魚が見えなくなつた。何處へ行つたのであらう。我々が盥を圍んで咄をして居つたのであるから、外へ逃げることも出來ないに、さてはどうしたであらうか。ツク／＼と視れば矢張り居つたのであつた、盥の底の隅に小くなつて靜に居つて、それに體の色が盥と同じやうになつて居るからである。白い章魚が何故こんな色になつたのであらうか、彼れは其の居る所に隨つて體の色を樣々に變化する一種の働をもつて居る。何のためであるか、それで己れの所在を晦ますのである、若しも章魚が緑々とした藻の中に居るならば、又體の色が緑くなる、屹度それを試めさんために、此の盥の中へ緑い藻屑を取りて入れて置くがよい。

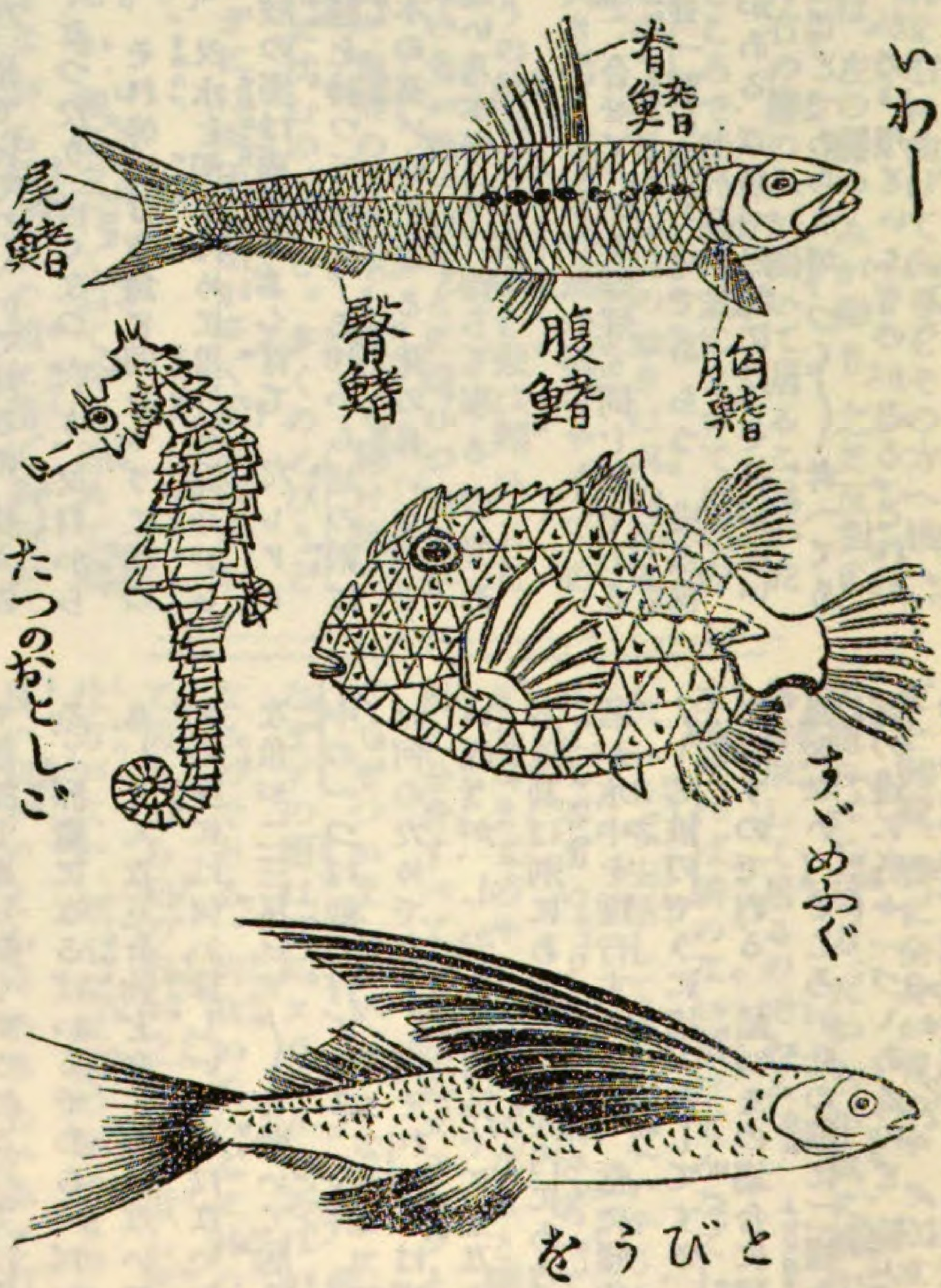
第九圖



チヨイト其の小章魚を指の尖で突いて御覧、アレ／＼動き出す、どうして動くか、ドービンを眞先に振り立てゝ進むところなにかは魚が鰭で泳ぐとは大分具合が違つて居る左樣魚とは餘程違つて居る、章魚には鰭が無い、しかしそれがどうして泳げるかといふに、漏斗を以てする

のである。ナニ、漏斗、漏斗ではどうして泳げるか。外ではない漏斗から急に水を噴き出す勢によりて、反動が身を後の方へ退かせるのである。すれば其水は元と何處から體內へ取るかといふに、ドービンは全躰弛やかな嚢を被つて、丁度我々が羽織や外套を着て居るやうである、そうして其の襟がドービンの元の所で、其處に漏斗が突き出て居るのである。それで此の襟を寛げば水が自在に入り込んで來て、今度は其處を固く閉ぢて強く外套を締めつけるのである。さすれば水は勢よく漏斗から噴き出されるのである。つまり章魚は常に外套の襟から水を吸うて、之を漏斗から呼き出して居るのであるが、御覧よ、章魚が動かなくとも外套の襟が閉ぢたり開いたりして居る。それが運動するとき其の呼吸が一層烈しくなるのである。

第十圖



果して盥の小章魚は色緑くなつて姿は藻屑の中へ搔き消されてしまつた。

先づ章魚の話はこれで分かつたとして何か外に獲物はあるまいかと、しらべて見るに、似寄りも似ついた烏賊の小いのが居つた。指で以てつゝいて見るに、切りに體を藻掻いて、赤くなつたり、青くなつたり、又口から墨を夥しく出した。それ等は皆章魚と同じやうに體の色を自在に變化し、又水を濁すために墨汁を漏斗から吐くのである。烏賊の姿は章魚によく肖て、たゞドービンは長く之れに鰭を持つて居る。それから足の數は八本ある外に猶二本の長いのがある、此の長いもので餌をつかみ取り、短い八本で口へ持ちて來るのである。

さて此の章魚、烏賊に合せて、蛤や蠑螺と同じ類であるといへば、誰れも皆一驚を喫するであらう。成る程蠑螺や蛤には貝殼がある、章魚や烏賊には、それがないから、思ひも寄らぬことであらうが、つく〴〵考へても御覽、烏賊には「いかの」甲といふものがある、これが貝殼となるべきものであつたのが發達しなかつた遺物である。體の運動が自由になつて、難を逃れることとなどが思ふまゝとなれば、貝殼のやうな重荷は必要がなくなるのである。今日人間の戰爭も其の通りで、鐵砲や器械で專ら働くやうになつては甲冑のやうな重荷は全く邪魔になるばかりである。だから章魚の如きは少もしそんな厄介物を身につけないのである。

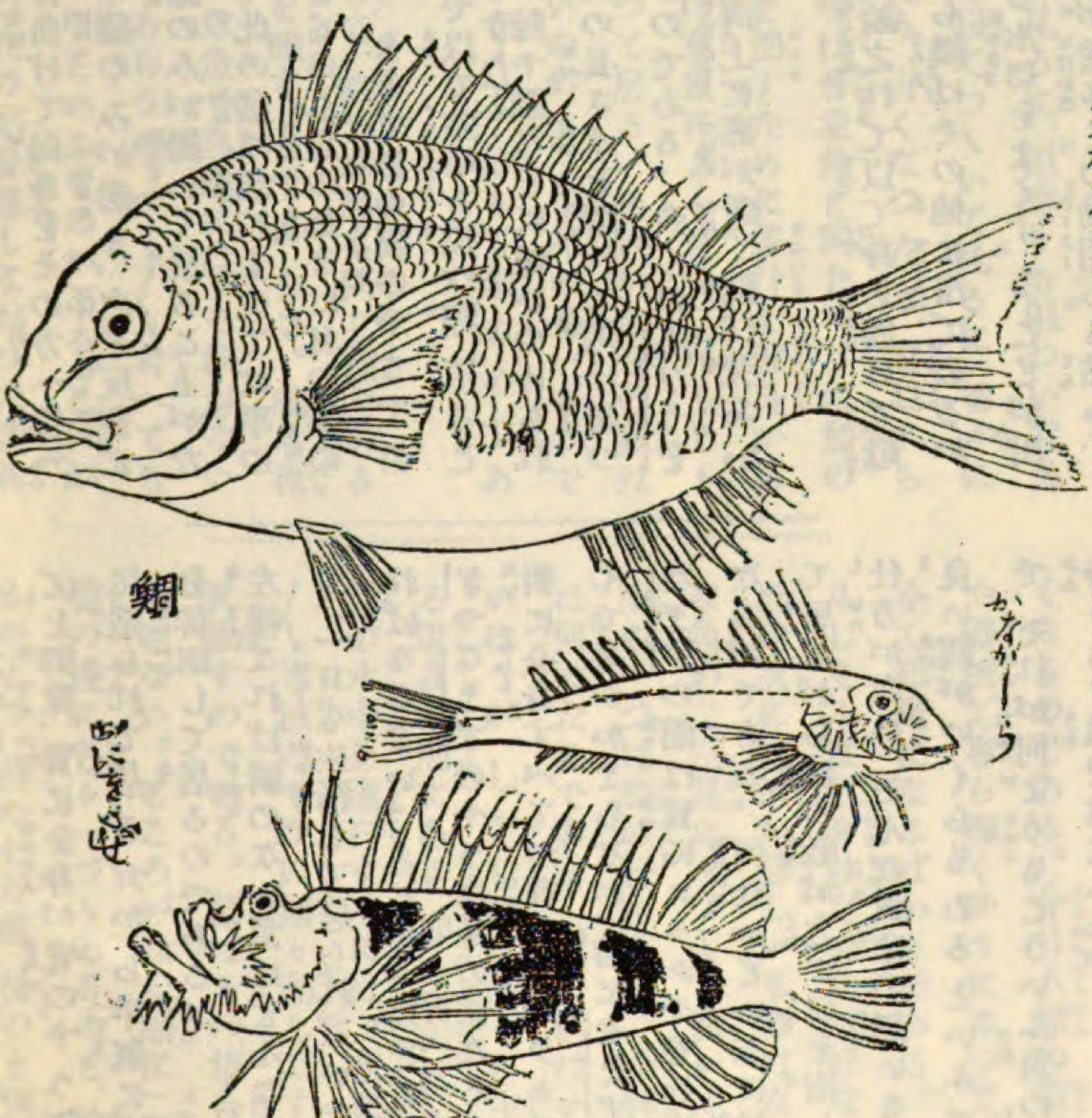
此の次には何か珍しいものはないかと注意するに小さな魚が二三尾ピリ〳〵と動いて居るのが見えた。その中の一つは鰮の仔である。全躰、魚に鰭と鱗とがあるは何のためであるか、それはいはずと知れたことだといほうが、しかし鰭は泳ぐに主なる道具ではない主なる道具は別にある、即ち體内にある脊骨である。實に魚が水中を進行するには、常に腰の邊を左右へヒラ〳〵と波のやうに搖り動してする、それが即脊骨を互に動すのである。鰭はその場合に補助の用をなすのに過ぎない。ところが此の鰭に二樣あつて、脊筋と尾と臀の邊に各々一づゝあるのと、胸と腹とに一對づゝあるのとで、前のを奇鰭、後のを偶鰭といふ。奇鰭は主に躰の進行を助け、偶鰭は躰の方向を換へる用をなすの

である。だから此の小魚を盥の中へ入れて、よく視ろがよい、成る程、正面へ進んで行くときは奇鰭のみが働いて居る、然るに躰を右に曲げて向きをその方へ換へやうとするときには、左の鰭のみが働き、之と反對に左に曲げるときには右の鰭のみが働いて居ることがたしかに知られる。ところで此の鰭は魚によつては事の形が様々である。とびうをといふ魚の如きは其の躰の大さにも不相應に大きくて、まるで鳥の翼のやうである、勿論それだからうの鰭で以て空中を飛び翔けることが出來る。よく此の魚が鯨や鮫などに追ひつめられると水面より飛び出て數間の長さ水を離れて翔け廻つて、それから又水中に沈むのである。多くのとびうをがそのやうにするときには海上に燕が多く飛び交ふかと疑はれる程である。

鱗の用はどうであるか、無論之れで以て身を固めて敵を防ぐのである、さりながら鱗はその他に滑であるから、水に摩れないやうに即ち水切をよくすることが出來る。しかし身を固める方が猶多くの効用ある點で、そのためには驚くほどに面白く造られて居るものがある。たつのおとしごうみすゞめ(共に第十圖にあり)などを御覽、實に全身が冑のやうな丈夫な鱗を以て堅固に造られて居る、だから平氣に海中の多くの敵ある中を徘徊して居るのである。左樣なれば鱗のない魚はどんなにして身を守るであらふ、一日も生活して居られないやうな始末にならなければなるまい。ところで篤と考へて見るがよい、うなぎやなまずのやうなものになると鱗が堅固であると反對に全身すべてが非常にヌラクラとして我々が手で攫んでもつかまらない、俗になまずに瓢簞といふが如く、なまずの面は實にヌラクラでそれが又身を守る方便になるのである。何故かといふに躰の表面に粘液を塗つて居るから他の敵が之に口を指し向けても氣味惡くて仕方がない、そんな氣味の惡いものよりは、他にもつと良い餌がいくらもあるといふて打ち棄つて仕舞ふので、それが何よりもこういふ魚の仕合せなのである。隨分コスイ魚ではないか。

ところが鯛のやうな魚になると又格別なもので、少しもコスク卑屈に魚の仲間に生活することはない。實に鯛は魚族の王とも稱せられる程あつて、悠然として威風邊を拂ふといふ有樣である。何故かといふに彼の躰には堅固なる鱗があるばかりではない、彼れには實に鋭い利器を所有して居るからである、即ち彼れの脊筋には恐ろしい棘を背負ふて居るからである。恰も鋭い牙と爪とをもてる獅子が群獸の中を横行するやうなるのである。

第十一圖

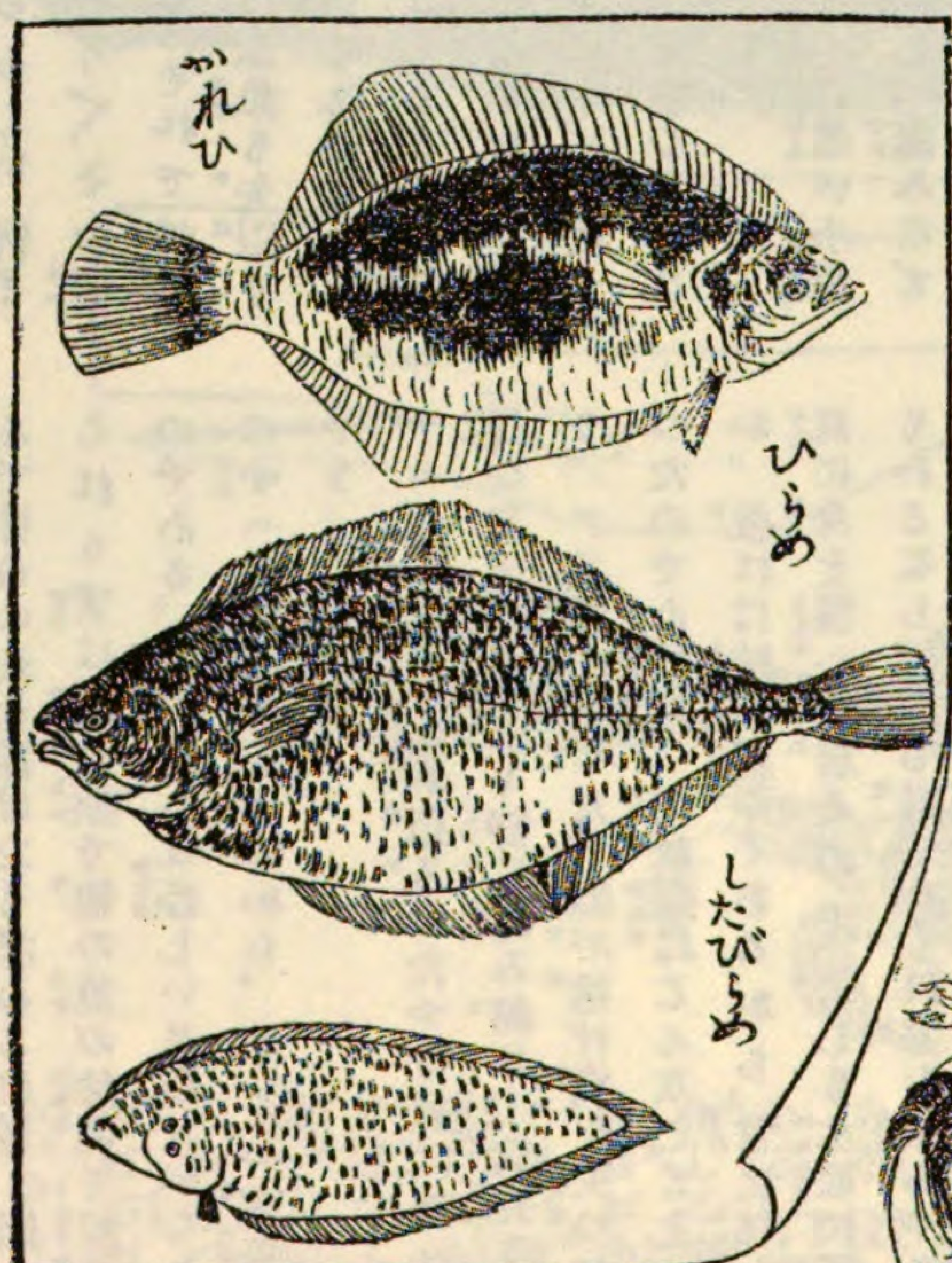


それに鯛の色がどれ程か美しく較えて錦の衣を着たやうで、いよ〳〵益々威風を添えるばかりである。昔より緋縅の冑着たる武士は三軍の將であつたが如く、如何に雄々しく勇ましくあることよ。全躰、章魚、烏賊などでいふた如く、動物は一身を守るために、成るべく躰の色を曖昧にして、目立たないやうにするが普通であるに、何故に鯛はそうはしないかといふに、それ

も彼れが勇ましいからである、他に恐るゝ所がないから何も、そんな必要がないのである。多くの魚は脊が青くて腹が白い、それは何のためかは分るであらふ、鷲や鷹、鴫、鴈などの水面から魚を狙つて食ふものがあるから、成るべく海水の青く見えるに色を紛らせなければならない、海の表面に常に生活して居る鯖、鰮や鰹の如きは最も左様である。それから腹の白い理は、海の表面に居れば、それで鳥などの害は免れるが今度は下から大きな敵に攻め狙らはれる憂がある、ところで水中から天をながめると眞ッ白に見えるものであるから、それに紛らはせるためである。

鯛は別段海の表面にのみ生活するではないが、左程に身を守るための色を要しないのである。只彼れは敵を悔して不意に躍りかゝつて

第十二圖





之を捕り喰ふために紅い色を具えて居るらしい、何となれば彼れは割合に海の深い處を好むやうて、その深い底には紅い藻が一面に繁つて居るから、それで都合の好いやうに思はれる。かながしらといふ魚も矢張り鯛の類で常に深い底にばかり生活して居るものであるそれに彼れ等の眼が躰の割合に甚だ大きくあるも亦深い薄暗い處に生活することが多いからでもあらふ。獅子でも躰の色が砂に似て、それで砂の上に常に横はつて居るから、不意に他の動物に躍びかゝて喰つてしまふそうだ。

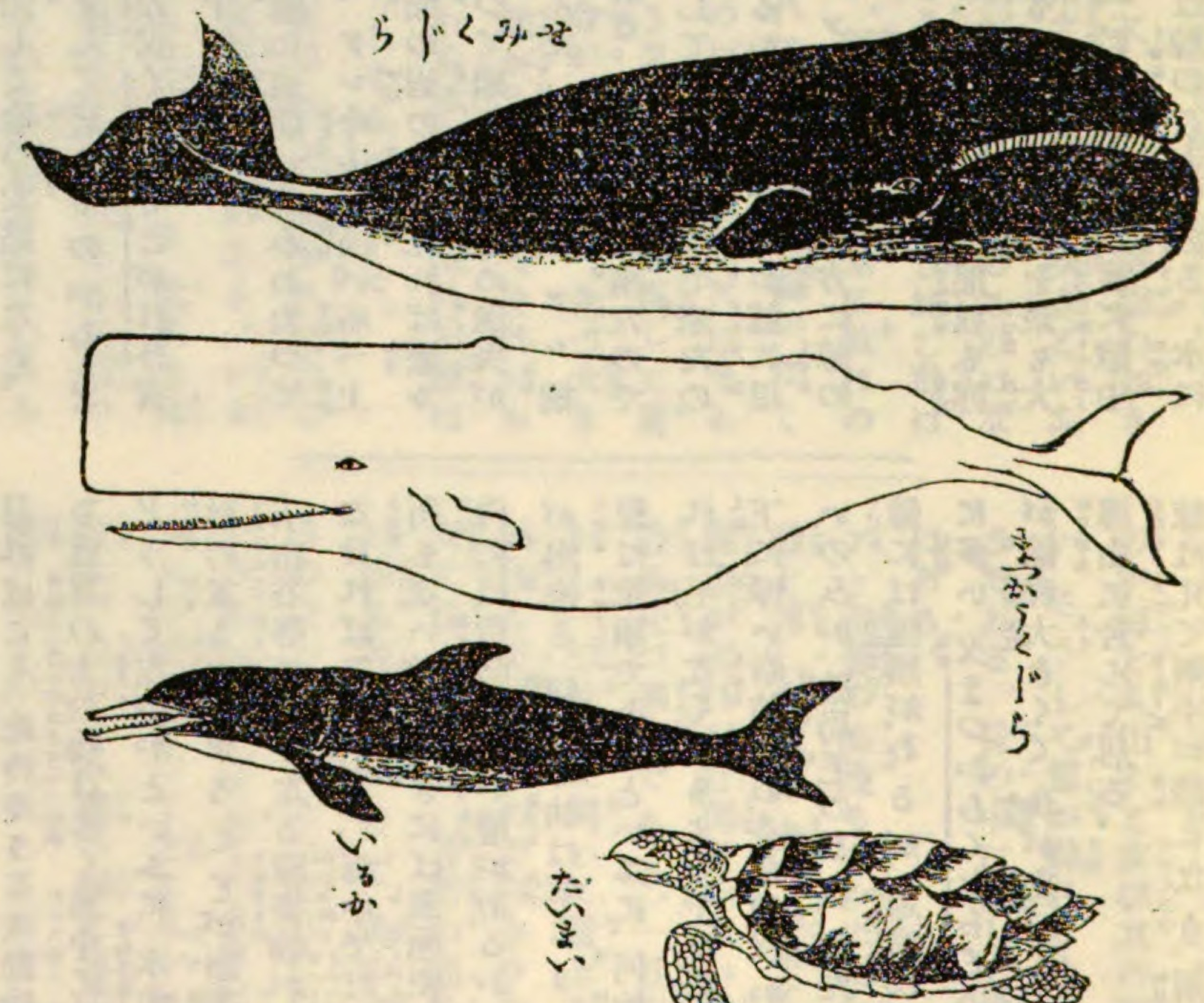
アレ〳〵此處に何だかピリ〳〵半死半生の紅黒い小魚がある。ヤア指を觸れてはよくない、決して攫みなどはしてよくない。何故だらうか。其の姿(第十一圖)を御覽、をにをこぜといふもので、實に名の通り恐しい姿である。姿ばかりではなり其の背の棘に恐るべき毒液を含んで居つて、若しもそれに觸れると棘でさゝれて、中の毒が見る〳〵間に全身に傳はつて、それで生命を取られてしまふのである。漁夫が暗夜に誤つて之を攫んで非命の死を遂げたも者あるは屢ゝ聞く所である。これも實は鯛の類で他の魚の仲間で威張つて居るものである。此のやうな恐しいものだからこれだけは盥の中へは入れないで置から。サア一度海へ潰つて來やう。

ナニ、足の下へ何か這入つたやうだ。それは屹度魚に違ひない、ドレ〳〵靜に踏み締めて御覽な、捕へて見よう。アラ鰈であつた。鰈が逃げ場を失つて足の下へ竄つたのであつた。何故鰈はこんなことをするであらうか。彼れは躰が扁平くあるから、常に躰を平にして砂底に身を横へて居るので、若しも水底に騷しいことでもあるならば忽ち其のかくれ家を求めやうと思つて人の足をも知らずに竄るのである。全躰、此の魚はこんなに平に横はるべきものではなかつたが、躰の色が砂に似て底に居るものだから、成るだけ身を見付けられないやうにするには躰を砂底にベツタリ附着けて居るのが好い、それで段々扁平い躰に變化したのである。現に鰈の兒の間はこんなにはなくて、通常の魚の姿で

あるが段々成長するに從つて左樣に變化して來るのである。

さうして海の底に居るのは啻に身を守るのみではなく、不意に他の魚などに躍びかゝつて躰を被せて之を捕り喰ふにも都合よろしいのである。こゝに其の鰈の目が二つ並んで居るといふには何か譯がありそうだ。別に譯のあるではないが、躰の一方を上にのみ出して橫はつて居るものだから、下面にある目が一向役に立たない、そこで其の目が少しづゝ上の方へ移つて來たのである。俗にいふやうに一方の目が他の方へ貫き透つたのではない、鰈が兒のときに躰が段々扁くなるに從つて目も亦、段々引移るのである、丁度中間程に變化して來たものでは其の目が中途の所にあることが見える。

第十三圖



鰈とひらめとはどれだけ違つて居るか、左樣鰈とひらめとを興して二つ並べて御覽、鰈の方は右が黑くて左が白い、ひらめの方は左が

黒くて右が白い。其の他には差して違つた點はない。ひらめの種類に牛のやうな形をして居るものがある、これをしたひらめ又うしのした又くつのそこがれひ又べろなどといふのである（第十二圖）

ソレ〳〵彼處何であらふ、彼處の海面が黒みわたつて何だか漣が盛に打つて居るよ。ドレ今少し高い所へ上つて見やう、此處がよからう、此の岩の上で見れば歴々と見える。ソレ段々此方へ近つて來る。近邊の漁夫が俄に網を引いて彼處を取り圍んだ、アレ船で、アレ網で、グル〳〵と引き回はして居る。全躰、何が來たのであらうか、アレは鰮が群をなして岸近く寄つて來たのである。何故そんなことがあるか。それは鰮が鯨に追ひつめられてのことである。ソレ御覧、遙彼方に鯨の潮吹きが見える。

鯨は獣である、水棲の獣である、身の長けは十間程も亦最も大なるものは十五間程のものがある。象を最も大なる獣と見るも猶其の三分の一に足りない。實に獣中の大獣、否動物、中の大動物とは鯨のことである。水に居ればこそ、此のやうな大動物も生活が出來るので、即ち世界の大動物は多く海中に生活して居るのである。どうして左様かといふに、水中にあつては、總て幾分か躰の重さを減ずることが出來、且つ陸地にありては樹石山谷等の種々なる障害物があつて狭く究屈に暮らさなければならぬが、海中では茫々渺々何處を果とする所もないで立働きには至極便利である。それに鯨の躰内には脂肪の厚い層があるから自在に水面に浮ぶことが出來る、何でも油は氣よりも輕いからである。全躰、鯨は獣類であるといふに、何故に躰に毛がないか。それは毛がなくてもよいやうに出來て居る、それは皮の下に厚い脂肪があるものだから、毛が無くても寒くないのみか、結局毛のないがために水滑りがよろしい。

鯨には種類があるが、通常はせみくじらといふて北海に多い、又まつからくじらといふて南海に多いのは頭が餘程大きくて、角が立つて、その中が空でそれに脂を澤山に含んで居る。

鯨は凡て兩手が鰭となり、兩足は全く發達しないので

見えなくなり、別に肉が伸び出て尾鰭となつて居る。頭の上に一對の鼻の孔が開いて、それから霧烟の如き鼻息を出すものだから、世俗之れを鯨の潮吹きといふのである。さても海中の動物が鯨には敵するものはない、群をなして爭つて逃げるまでである。しかし鯨は決して大きなものを食べない、何故かといふに彼れの口の奥の孔が小さ過ぎる、それに尋常嚙のむ歯がなくて、只上顎から鬚のやうなものが下つて居るだけであるからである。だから鰛のやうな小くて且群集して居るのは之を嚥み下すに最も好合がよろしい。先づ大きな口を開けば水と共に群れる鰛が入つて來てそれから口を閉ぢて水を吐けば口の鬚から水のみは洩れて鰛は殘る、それを一度に嚥み下してしまふのである。

鯨は此のやうに恐しい大獸であるから、海中に敵なしといふか、否ゝ鯨でさへ猶恐れ居る大敵がある。いるか即ちしやち(第十三圖)といふものである、之れも海獸の一種であるが、鯨よりは遙に小くて大さ二三間の身長けではある。鯨は若しもこれに出會すことがあらばセッセと逃げ出してしまふ實にいるかは恐ろしいもので鯨を見出すと直樣其の咽元へ喰ひ付くから堪らない、さうして鯨が斃れるまでは決して取り離さないそうである。世の中は決して尊大には暮されないものではある。

ア、避暑の海邊も中々に面白くあつた、種々樣々の智識を博し得た、一身の健康を得たばかりではない心の健康がどれだけ加はつたか知れない。モーこれで海水浴も先づ滿足である。一旦引き上げて歸へらふか。しかし一つ此處に聞いて置きたいことがある、海には龜が住んで居るものであらうか。左樣、住んで居るとも、大に住んで居る、昔話の浦島太郎が乘つたやうな大龜が即ち海に居るので、世に之を大うみがめといふて居るのである。大さは五六尺以上もあつて手足は皆鰭のやうに、變化して居る、それは通常の水龜のやうに五本つゝの指があつて之に爪を具えて居るのとは少ゝ形が違ふ。此のうみ龜の類に瑇瑁といふのがある(第十三圖)大さが二尺程あるが其の甲が即ち我々の本鼈甲と

なるのである。實に其の天然のまゝの甲を見るるにも透明で黒い斑があつて美々しいものである、何でもない動物がこんな贅澤な飾物を身に脊負ふて海中を漂ふて居るとは驚くべきことではないか。

先々これで切り來げて、來年又改めて海水浴に出かけて更に新しい智識を得ることにしやう。（おはり）

日本名蹟雜話

文學士　喜田貞吉

◉京都の郊外（其の二）

鞍馬から南して京都へ歸ると、其途すがらに

◉市原　といふ所がある、こゝに補陀落寺といふ寺があつて、小野小町に就いていろ／＼の事を傳へて居るけれど固より信じ難い、但、此地方は、むかし市原野と云つた所で、源頼光が鬼同丸といふ强賊を退治した有名な噺のある所として、世に知られて居る、此噺は古今著聞集といふ書物に出て居る事で、其筋書ぎは大躰こんなものである、

ある日　源の頼光が、其弟の頼信を訪問して、酒盛をして居た、スルト廐の傍に縛られて居るものがある、頼光はあれは何ぞと問へば、鬼同丸なりといふ、如何に鬼同丸ほどの强の者を、そんな手緩い縛り樣やはあると云ふ譯で、更に金鎖で逃げぬ樣嚴しく縛つた、鬼同丸は深く之を恨んで人々の寐靜つた間に强力を出して右の金鎖を捻ぢ切り、この市原野で頼光を待ち伏せした、これは頼光がこゝを通つて鞍馬へ行くといふ事を聞いたからである、然るに遂に頼光の運が强く、鬼同丸は、頼光のお供の一人なる綱の爲に、見顯はされて、一箭射中てられた、射中てられながらも鬼同丸は頼光に打つてかゝり、やがて首を打ち落されても、尙仆れずに、刀を拔いたまゝ鞍の前つぼに切りつけ、斬られた首は飛んで馬のむながひへ嚙ひ付いたとの事である、

頼光が大江山で鬼を退治したといふ昔噺は畢竟この鬼同丸退治の噺が、大袈裟に書き立てたに過ぎない、市

原野から南へ返れば、前回に述べました上賀茂神社へ出る。

◎更に京都へ戻つて、七條の停車場から、京都鐵道の汽車に乗つて、京都市西郊の名蹟を一巡りする事としやう　此鐵道は、京都から丹波を經て、丹後の舞鶴まで開かうといふ豫定のもので、今日は丹波の園部町まで出來て居る、

◎七條から此鐵道に頼つて進まうなら、先づ左には東寺の五重の塔を望み、右に東西兩本願寺の廣大な建物を見て、むかしして平安京では丁度市街の中央の大路であつたといふ千本通りに並んで北へ進み、二條離宮の西裏から西北へ折れて、花園、嵯峨と過ぎて、遂には丹波へ入るのである、

◎花園　は、もと右大臣清原夏野の別莊の地て、花園の名高いものでもあつて、それで花園といふ名の起たものと見える、後にこゝが花園上皇の離宮となり、ついで其離宮を寺とせられたのが、即ち今の妙心寺である上皇は其寺中の玉鳳院にお住まひ成されたので、やがて御稱號をも花園と申上げる事と成つた、

◎凡そ天皇の御稱號は、御崩御の後に奉つた御諡號もあるが、多くは御讓位後の御住居の所、或は御陵の所在等の地名を以て呼び奉る事が通例である、花園天皇の如きは其一例で、又醍醐天皇の如きは其御陵地の名を申上ぐる方の例である、近ごろはまた諡號を奉る舊例に返つて、光格天皇より先帝に至る迄、何れも御諡號を以て呼び奉る事に成つたのは、尊とい次第と云はなければならぬ、

◎妙心寺　は臨濟宗妙心寺派の本山で、前回に述べた京都五山（○第三號六〇頁）の中には入つて居らぬが、而し今日では臨濟宗中最も盛な宗派である、開山は關山禪師で、寺院の廣大なる事は云ふ迄もない、妙心寺から少し東北、等寺院村に

◎等持院　がある、之は足利尊氏の創建て、足利將軍代々の菩提所であつたから、寺には其代々の木像も安置してあるが、維新前尊王主義の盛であつた時に、浪士等甚しく足利氏の逆を憎んで、尊氏、義詮、義滿三代の木

像の首を刎ね、之れを梟首したといふ奇談がある、花園村の西には、

◉雙の岡といふ丘がある、一の岡、二の岡、三の岡の三岡南北に相並んで、誠に見事である、むかし仁明天皇は、此地に遊獵し給ひたる折、此雙の岡の東の墳の上に登つて四方を眺望し給うた所、其眺望が甚しくお氣に協つたものと見え、承和十四年に、雙岡の東墳に從五位下の位を授くといふ事が、續日本後紀といふ當時の正史に見えて居る、此東墳は今何れを指すか知らねど、眺望のよかつた事から思へば、雙の岡其ものゝ如くは思はれる、何にせよ此東墳は、其後位記返上仰せ付けられたといふ事を聞かねば、今に至つて倘從五位下の位を有する譯であるから、無位の者はもとより、六位以下の輩などは、之に對して相當の敬禮を盡さねばならぬ道理である、

◉むかし秦の始皇帝は、雨宿りの功を賞して、其松を五大夫に封じた事があつた、又清少納言の枕草紙を見れは、一條天皇は其御寵愛の猫に五位の位を授け、命婦のおもとゝいふ名をつけて、乳母まで付けられた事があつた、然るに翁丸といふ犬は、不都合にも其五位の位を有する猫を追ひかけたが爲に打ち懲らした上で大島へ流罪にあひ、猫のめのとの馬の命婦といふ人は、御勘氣を畏れて引き籠つたといふ騒ぎがあつた、この丘に位を授けると云ふのも、先づこの松や猫に位を授けたと同じ類のものであらうか、

雙の岡の北はお室村で、こゝに有名なる

◉仁和寺がある、これは光孝天皇の仁和四年の建立で、宇多天皇も御讓の後、法皇と成つてこゝに居給ひ、其後常に皇族の御住職成さるゝ寺となつた、寺の西の方には光孝天皇の御陵があり、宇多天皇の御陵は北の山にある、此邊の地名は、もと小松と云つた所である、光孝天皇のお名前を一に小松天皇と申し、又、維新の比まで此所の御住職で有らつしやつた彰仁親王殿下を、小松宮と申しあぐるも、皆此地名から起つたを稱號である、

●雙の岡の西麓には、兼好法師が草庵を結んで居たと

ふ址がある、兼好は徒然草の著者で、南北朝の比の有名な文學者である、兼好がこゝに住んだといふのは、其優美な景色にめでゝでもあらうか、古歌に、

秋風に思ひ亂れてあやしきは　よみ人しらず
君とならびの岡のかるかや

など云ふのもある、

雙の岡の南西に太秦村がある、これはむかし秦氏の居た所で、秦の川勝が、聖德太子の命を奉じて建立したといふ

◉廣隆寺は今も尙殘つて居て、當時の建築物を見る事が出來る、今日迄殆ど一千三百年實に、我國最古の建築物である、

太秦の西北二十町許に

◉廣澤池といふがある、周圍十二町ばかり、寬朝僧正の開いた所であるとの事で、池の面が極めて靜で、堤には櫻樹もあり、月見の場所として古來名高い、此廣澤池から西五町ばかりに

◉大澤池がある、之は前のから見れば餘程小さいが、もと嵯峨天皇離宮の境內で、其離宮を改修した寺とせられた

◉大覺寺は、すぐ此池の西にある、仁和寺と同じく眞言宗の門跡寺で、代々皇族の御住職せられた所であつた、此邊はすべて、

◉嵯峨野といふ所で、淸盛の薄情を恨み、浮世をはかなんで遁世したといふ

◉祇王、祇女等の舊蹟なる祇王寺、又、高倉天皇の御寵愛の女房にして、之も淸盛の暴虐を恐れて遁世したる

◉小督局の舊蹟など何れもこゝから遠からぬ所にある、祇王祇女が、佛御前の爲に寵を奪はれたるを悲んで、

萠え出づるも枯るゝもおなじ野邊の草　いづれか秋に遭はではつべき

と、一首の歌を殘して、淸盛が西八條の第を退出し、其後再び招かれた時に、

佛もむかしは凡夫なり　我等も遂には佛なり、

いづれも佛性具せる身を隔つるのみこそ悲しけれ

と、今様一首憐れにも歌うて遂に此嵯峨野に世を捨てた事は、平家物語にも出て、極めて物憐れな噺である、流石の佛御前も、ひどく之に感じて、自分も十七の年を以て世を捨て丶、同じ庵に念佛を事として居たとの事である、又小督の局の事も、同じ平家物語に出て居る事で、同じく此嵯峨野に隠れ捿んで居たるを、彈正の卿仲國が天皇の仰を承りて、月夜に笛を吹きつ丶尋ね出すといふ、極めて憐れな、而も優美な物語である、今大堰川の北岸、嵐山の對岸の邊に小さき石塔があつて、之を小督の局の墓と土地の人は云ふ、固より信用し難い事ではあるが、而し此邊が其遺蹟であるから、後人が供養の爲に建てたのかもしれない、小督は後に尼と成つて、東山の清水寺の東南、清閑寺の邊に住んで、こゝの高倉天皇陵の傍に、其墓があるとの事である、

大覺寺から南、京都鐵道の嵯峨驛のほとり、大堰川の北岸に

◉天龍寺 がある、足利尊氏建立、禪宗京都五山の一で立派な建築であつたが、維新の兵火にかゝつて、漸く近ごろ再建が出來たけれども、もとより前のには及ばない、天龍寺の南の川が即ち

◉大堰川 で、水が清く、昔は藤原氏の盛んであつた時など、こゝに詩歌管絃の船を浮べて、遊び興じた所であつた、此川は丹波から來て居るので、上流を保津川と云ひ、極めて兩岸の景色のよい所である、又其下流は、有名なる桂川で、桂鳥羽等を過ぎて淀川へ合流して居るのである、

大堰川のほとり、天龍寺の邊から吐月橋といふ橋を越えたら、そこが有名なる

◉嵐山 で、櫻と紅葉とに昔から世に聞えて居る、此山の櫻は龜山上皇が大和吉野の櫻を移し植ゑられたのが始との事で、山には大悲閣がある、此大悲閣の下手には遊覽の客の爲に温泉浴場の設も出來て居る、大悲閣には角倉了意の碑が建つて居る、此人は今日で云へば土木工學の技師で、所々に大きな事業を起したが、此保津川を浚渫して、舟の通る樣にしたのも實に此人の力に

よつてゝある、
天龍寺の西北には
◉小倉山 がある、こゝは小倉百人一首の撰者なる定家卿の別莊のあつた所で、また紅葉に名高く、

　小倉山峯のもみぢ葉心あらば
　　いまひとたびのみゆき待たなん

といふ歌は、よく人の知つて居る所である、
小倉山の西には、
◉清瀧川 が北から流れて、大堰川へ落ち込んで居る、此川のほとり、紅葉の名所が多く、中にも、
◉高尾 ○高雄とある 栂尾、槇尾 は、之を三尾と云つて最も紅葉に名高い所と成つて居る、高雄に神護寺、栂尾に高山寺、槇尾に西明寺、何れも名高い寺であるが中にも高雄山神護寺は、和氣清麿の建立で、其墓もある清麿を祀つた護王神社も、もとはこゝに在つたのであるが、近年京都御所の西へ移つた事は已に前回述へた通りである、
◎愛宕山 は此西に聳えて居る山で、高さは比叡にも勝り、山上愛宕神社は頗る繁昌の神社である、
◉嵐山の南の方、丹波街道の山城から丹波へ越える坂は、之を老の坂といふ、頗る嶮しい所で、トンネルなどを作つて峠を越えて居るが、これは即ち古書に
◉大江山 と云うた所で、小式部内侍の

　大江山生野の道の遠ければ
　　まだふみも見ず天のはしだて

と歌にもよみ、又源賴光が酒顚童子を退治したなど、恐ろしいお伽噺の傳はつて居る所は實に此所なのである、近世になつて之を間違えて、大江山は丹波丹後の境にあるものゝ樣に思ふのは、甚しい間違である、

右述べた所で、京都郊外の名蹟もほゞ終つたから、最後に、京都にはドンナ產物が出來るか、京土產には何がよいか、一ッ數へ立てゝ見やう、
先づ京都で最も名高いのは、言ふ迄もなく
◉西陣織 で、其地は應仁の亂に西軍の陣した所其織物業のはじめは、泉州堺から明國風の織方を傳へたの

にあるとの事であるが、其後西洋の法に倣ふて、天鵞絨蒙流などをも織る樣に成り、遂に今日にては、日本一の織物の本場と成つた、近年の織上高は毎年價格千六百萬圓にも及ぶとの事で、繻子、博多、金襴、緞子、錦、綾、縮緬、羽二重、何でも出來るといふ有樣なり、又

◉友禪染一名鴨川染、鹿子絞、緞通、其他刺繍の業も大に進歩して居る、

◉燒物には、清水燒、粟田燒、及び七寶燒、

◉日用品には、京紅、京白粉、縫針、京團扇、同扇子

◉漆器にも京塗は隨分名高ひものがある、又

◉農産物には聖護院、岡崎の蕪菁、之を漬けた千枚漬近在の竹藪から出づる筍、稻荷山の松茸など何れも名高く、東京などから、態々松茸狩に京都まで出かける位である、

◉鑛物には白川から出る花崗石、此地名を白川といふのは、此石の崩れた砂が川一面に敷いて白く見えて居るからで、清水、粟田などに陶器に作る土も畢竟は此石の風化したものである、倘、又、

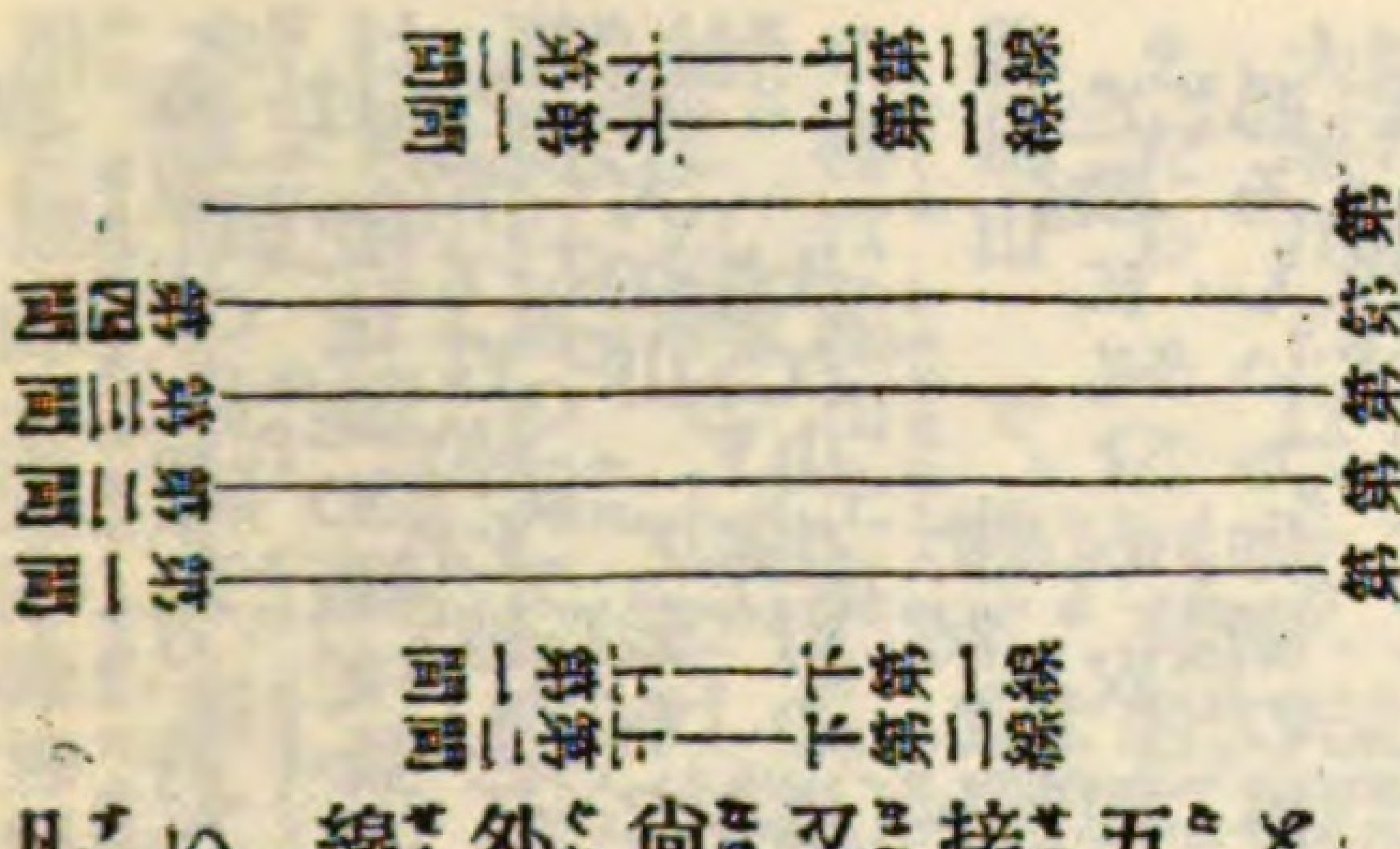
◉菓子に聖護院の八ッ橋、

◉煮物に鴨川の鷺知らずなど、何れも京土産にして適當なものである、

音樂の栞　大林小星

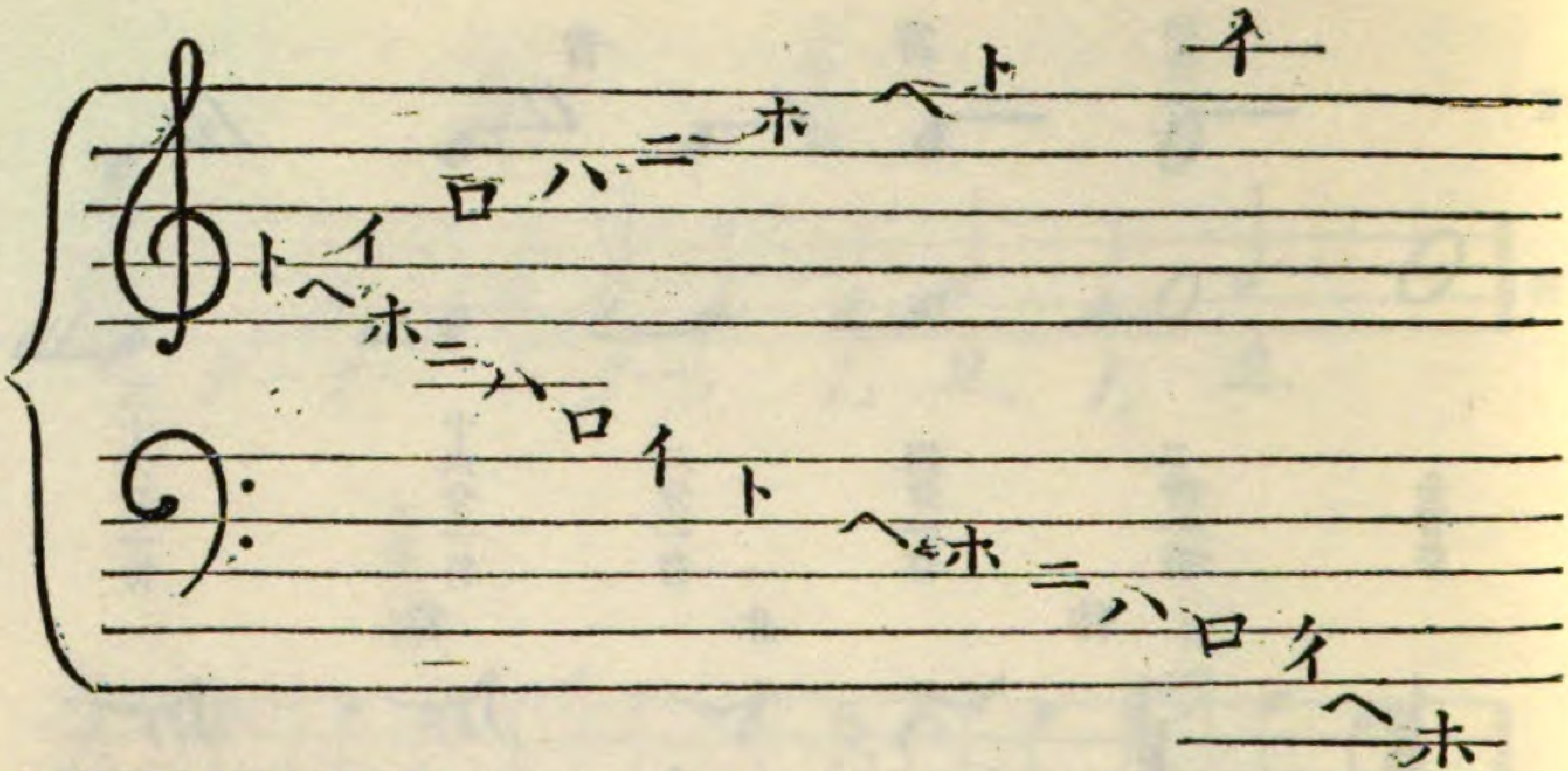
(二) 譜表

音符は總べて五線上に排記す、此の五線を譜表と名づく、而して此の譜表上に記することを得る音符は十一個あり、即ち五線上と線間と最上最下の線外に接して一個を記す。



又此の譜表上に排記する音より倘高きか或は低き音は、上下の線外に短線を附加して、其線間或は線上に記す、此の短線を加線ともいふ。

凡て音には高低の別あり、單なる



唱歌に用ふる音符を記すは、上圖の如く短線を附加して足れりとすれども、通常音樂に用ゆるものは大譜表と名づけて、十一個の線より成れり即ち上圖にあるは是なり、然れども十一個の線中中央にあるものは略して短線とす。

第三章　音符の名稱及び音部の記號

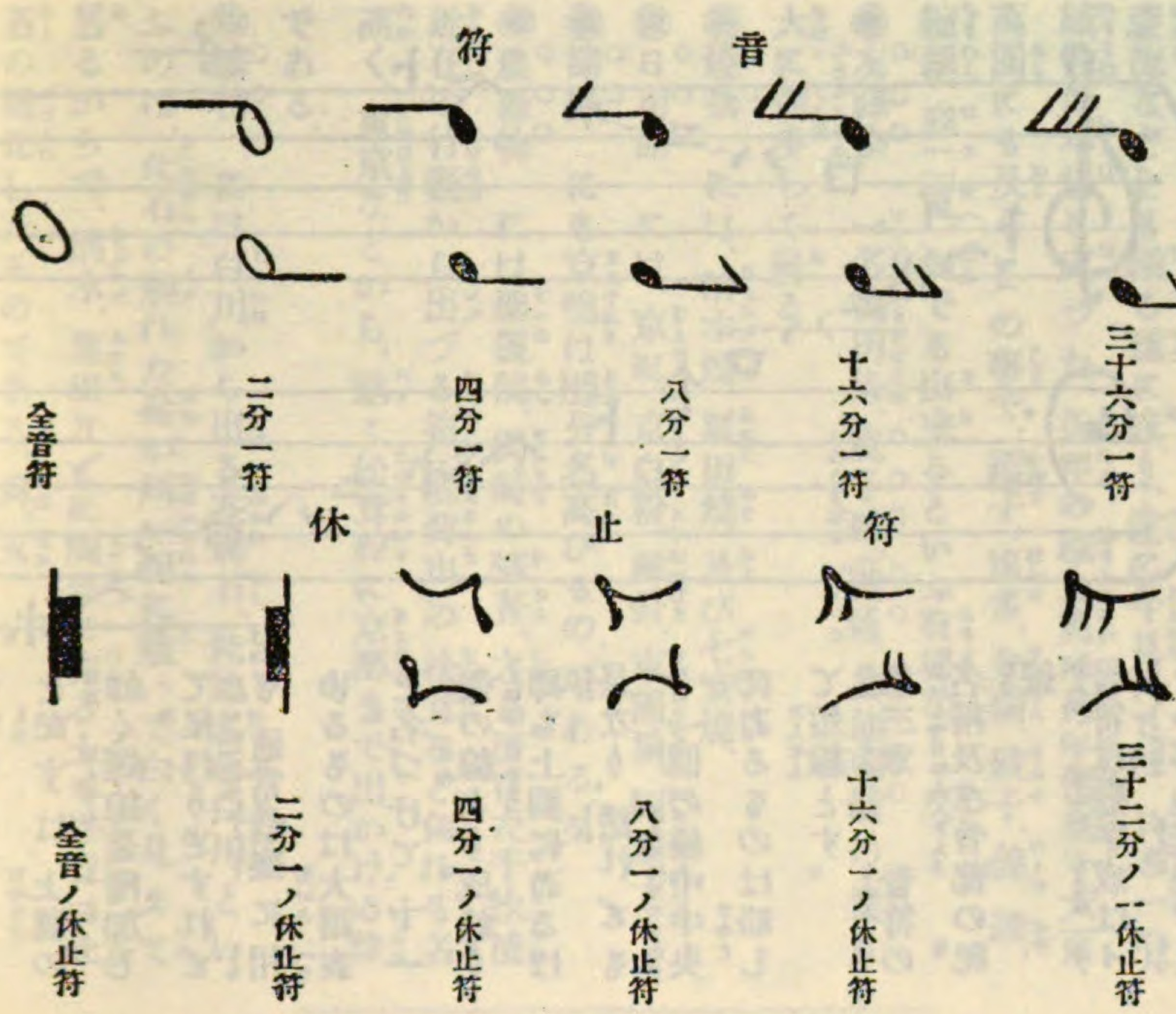
音符は數字或は(イ)(ロ)(ハ)等の文字を以て表はすものにあらざれども、初學者の音樂を究むるに便なるを以て之を用ゆるなり、

前に云へる如く、音には高低の別あるかゆへに、其區別を明かにせん爲め、最高部譜表に於ては、上の譜表の第二線上に記號を附す、之を(ト)字記號と名づけ、下の譜表の第四線上に記號を附して、之を(ヘ)字記號と名づく、之れ最低部譜表を示すなり、

(三)　音符の種類及び休止符

音符は音樂上の聲音に長短の別あれば、其聲音の長短を形狀を以て表示するものなり、而して普通使用する所の音符の種類は、全音符、二分一音符、四分一音符、八分一音符、十六分一音符の五種とす尙ほ三十二分一音符なるものあれども高尙音樂の外用ゆることなし

上圖に示せるは音符の種類と、其音符と同等なる休止符とす、全音符は音符の最長音を示すものにして、其形隋圓なり、此音符は秒數一二三四と數ふる其數の間同一の音を謡ふべき時間を有するなり、休止符も亦其時



間だけ休止するを示せるなり、休止符は以下同じなるを以て之を略す、

二分一音符は音長全音符の二分一に當る音符にして、形また楕圓にして譜表上三間にわたる鉛直線の符尾を有す、此音符は秒數一二と數ふる其數の間同一の音を謠ふべき時間を有するなり、

四分一音符は、一二三四と數ふる其各の一時間を謠ふべき記號にして、符首圓黒にして符尾を有す。

八分一音符は四分一音符の時間の二分一を謠ふべき記號にして、四分一音符に似たれども尾端に一鈎を有す、
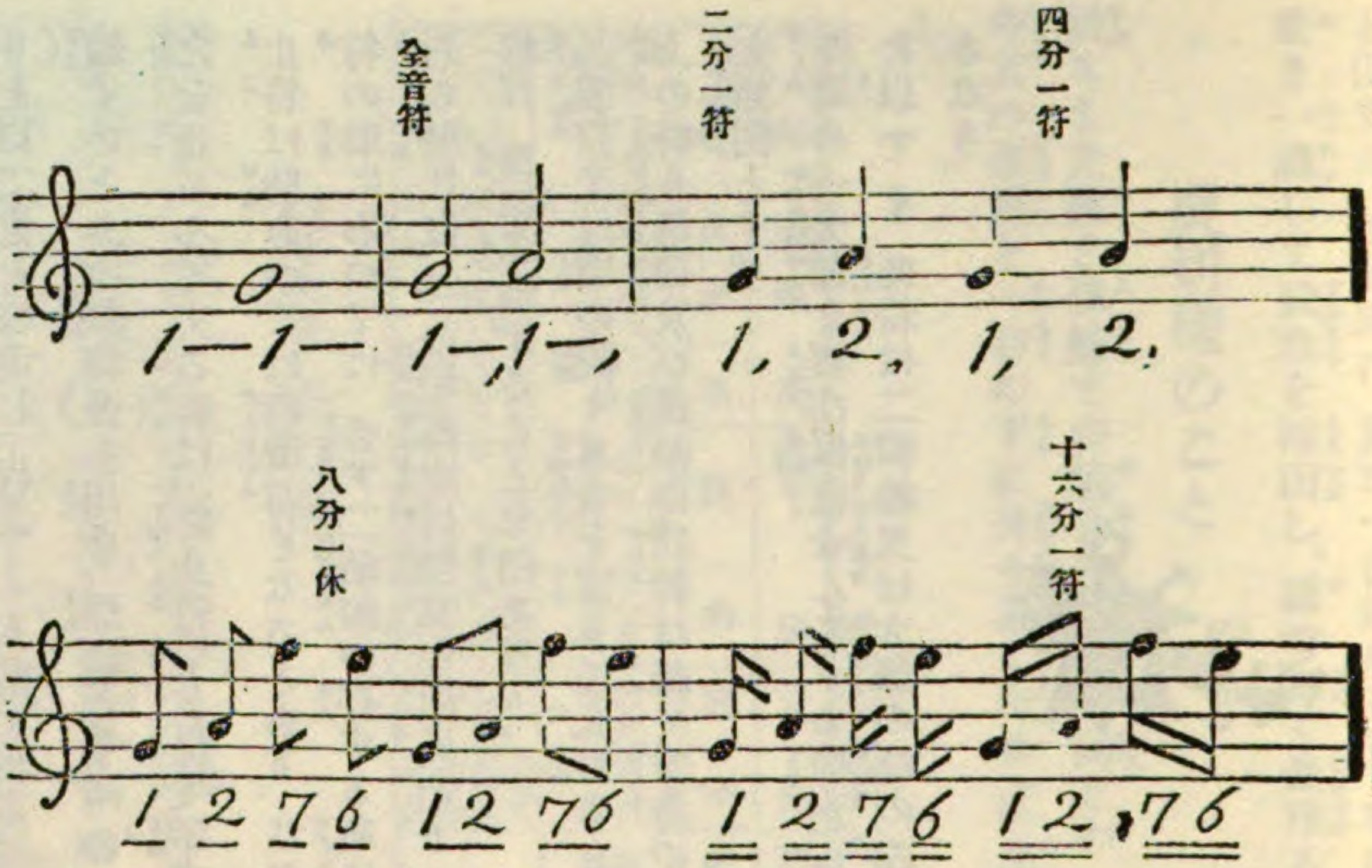
十六分一音符は八分一音符の時間の二分一を謠ふべき記號にして、即ち八分一音符に似たれども尾端に二鈎を有す。

今音符及び休止符を數字の略符に易ふる時は左圖の如し
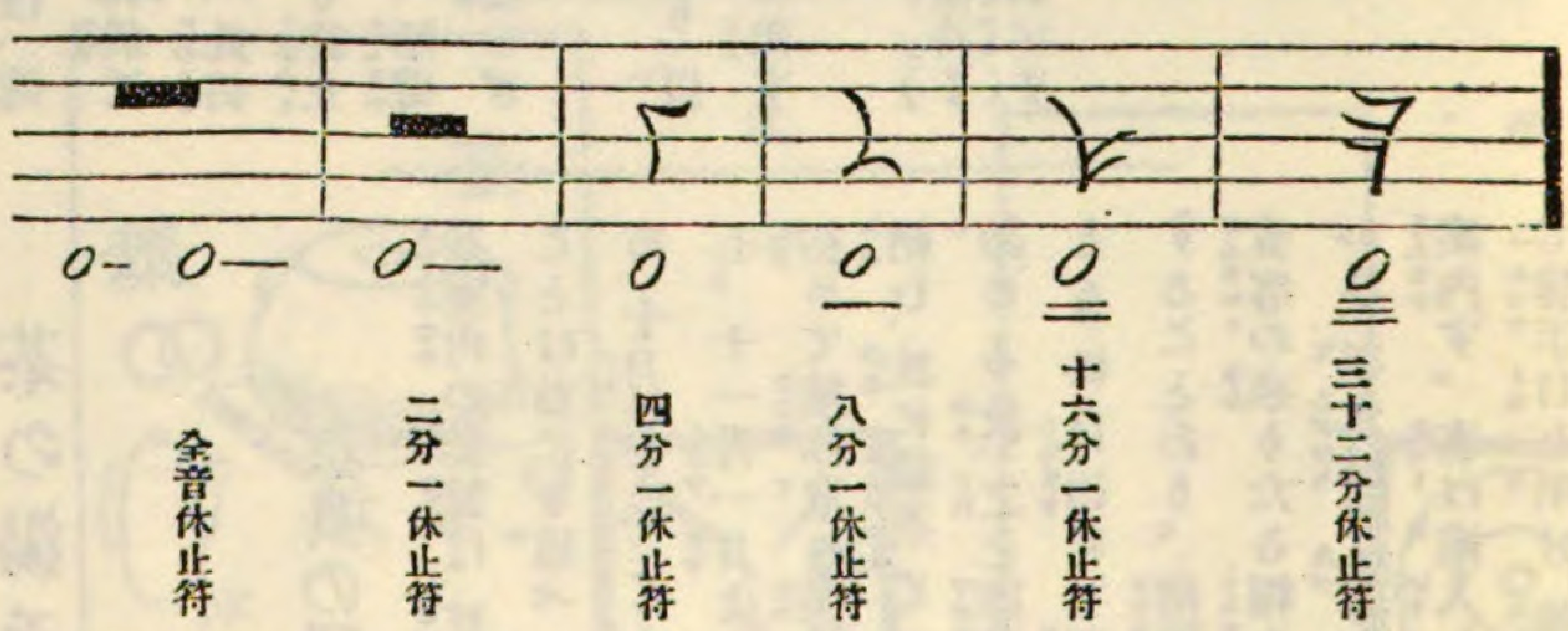
附點音符

附點は音符の右方に(●)付するものにして其音符の有する時間に、其二分一の時間を加ふることを示すもの

音符



休止符



なり、例令ば全音符を四の拍子とせば、六の拍子となるか如し、二分一音符は四分の三拍子となるか如し、以下此理に同じ、

此他尚ほ譜表に示せるものあり嬰符變符本位符終止符延聲譜及び連續符是なり、

嬰符(♯)は通常用ゆる音より、半音高く用ゐる時之を付するなり又用ゆる音より半音低く用ゐる時には、變符(♭)を付す、又一旦高めて用ゐたる音をして、再び之を低くして用ゐんとすることあり、即ち其音をして本位に復したるものにて、之を本位符(♮)と稱するなり、此等の符號は音符の左方に置くものとす。

一樂譜の終りたる時には、縱線

(‖)を以て之を表示し、尚之より前に移るべき時は、連續すいとふ連續符(⌒)を用ゆ、然れども譜の中途に於て之を止めんとする時は、終止符(𝄐)を以て示すなり、此終止符は時あつては延聲符となることあり、されども終止符の時にあつては、必ず二縱線の存する所にあり、延聲符の時には、一の縱線或は隨意の所にありて一定せざれば、直に識別することを得るなり。
延聲符とは聲の限り其音を謠ふて止むるものなり、以上の終止延聲及び連續の三符は總て音符の上部に記すを通例とす。
樂譜の一大節を再び反復せんとする時には、反復符(:)を以てす、此符は二縱線又は大節の終の左方に表示するなり、

茶の湯手びき(承前)

利休流家元　正瓢庵宗月述
坪谷水哉補

茶具の置附及び爐と風爐

茶室内の装置は、夏と冬とにて、風爐と爐との區別あることは前にも述べたり、風爐は凡そ五月一日に用ひ始め、十月末までとす。十月中は中風爐を用ふるも可し。十一月一日より爐を開き、翌年四月の末まで用ふ。初めて摘み取る茶の芽を濃茶と云ひて、袋に入れ壺に納む、故に袋茶とも云ふ。其次に摘みたる茶を其傍に詰める故、之を詰茶又は薄茶とも稱す。此の壺を開くときに口切とて客を迎へ、また爐開きにも客を招待することあり。偖豫ねて案内し置きたる定めの刻限に賓客の來りたる報あるときは。亭主は室内に羽箒をつかひ、手水鉢の水をかへ、所々に水うち、羽箒持ながら案内す。客は座入して咳するを相圖に、亭主は咳を受て勝手口を明け、挨拶を爲す、風爐のときは直に會席

を出すも、爐の時は、炭取へ仕込をなし、右の方へ置き一禮して炭取を持出し、圖の如く置附るなり。

炭切様のこと

炭もまた爐と風爐との場合によりて同じからず、今其の切様を一目の下に分り易く示せば左の如し。

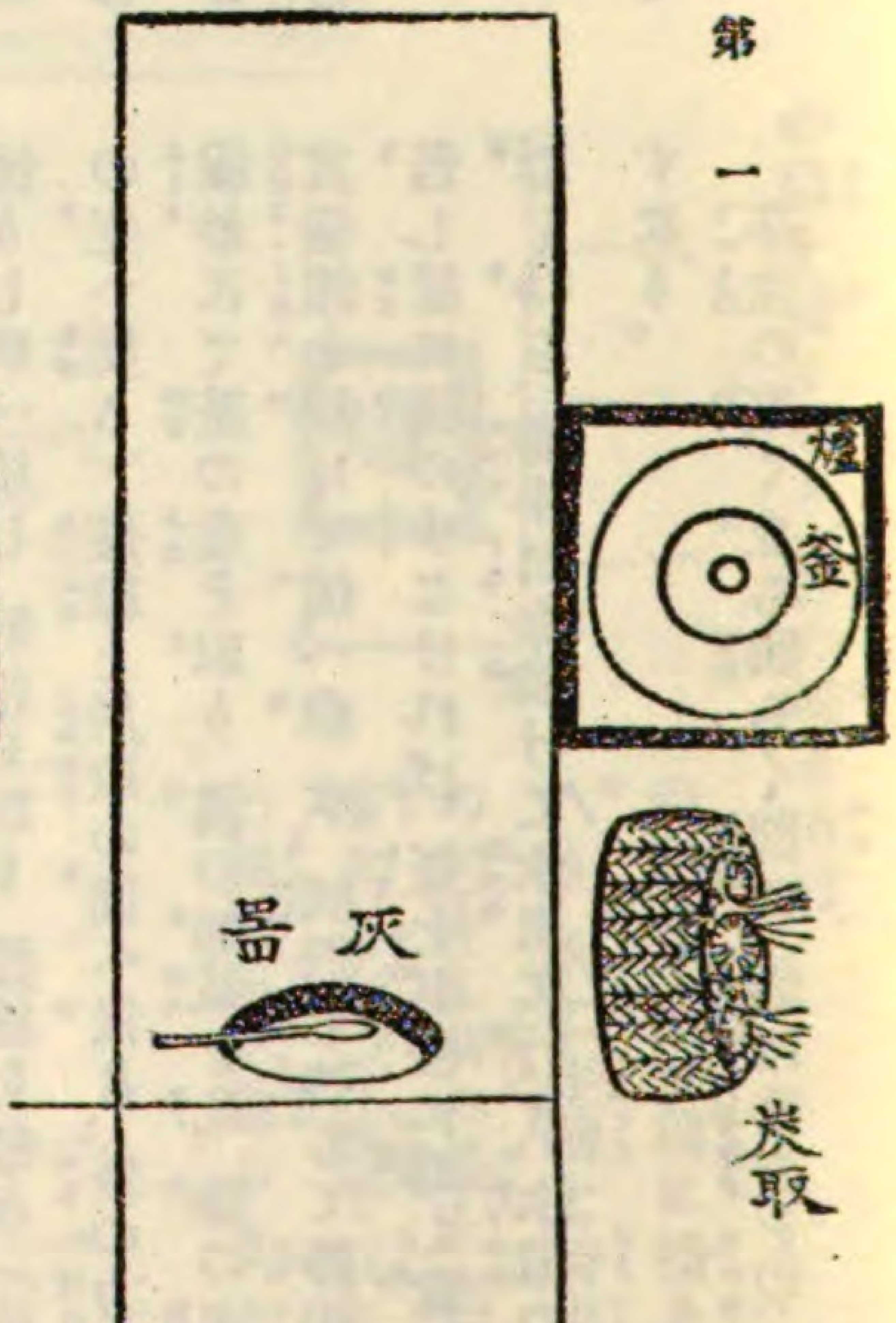
區分種類		爐にて用ふる時	風爐にて用ふる時
胴炭	經	二寸一分位	一寸五六分
	長	五寸或は四寸位	四寸或は三寸五分
輪炭	經	三寸	一寸七八分
	長	二寸三分位	一寸五分より八分位
點炭	經	八九分より一寸五六分まで	七八分より一寸以上の物ありて用ゆ
	長	二寸五分	一寸或は二寸又は八分位
管炭	經	七八分	七八分
	長	五寸乃至四寸餘	四寸或は三寸五分位
四分炭	經	割炭	
	長	二寸五分	

相手炭とも云ふ

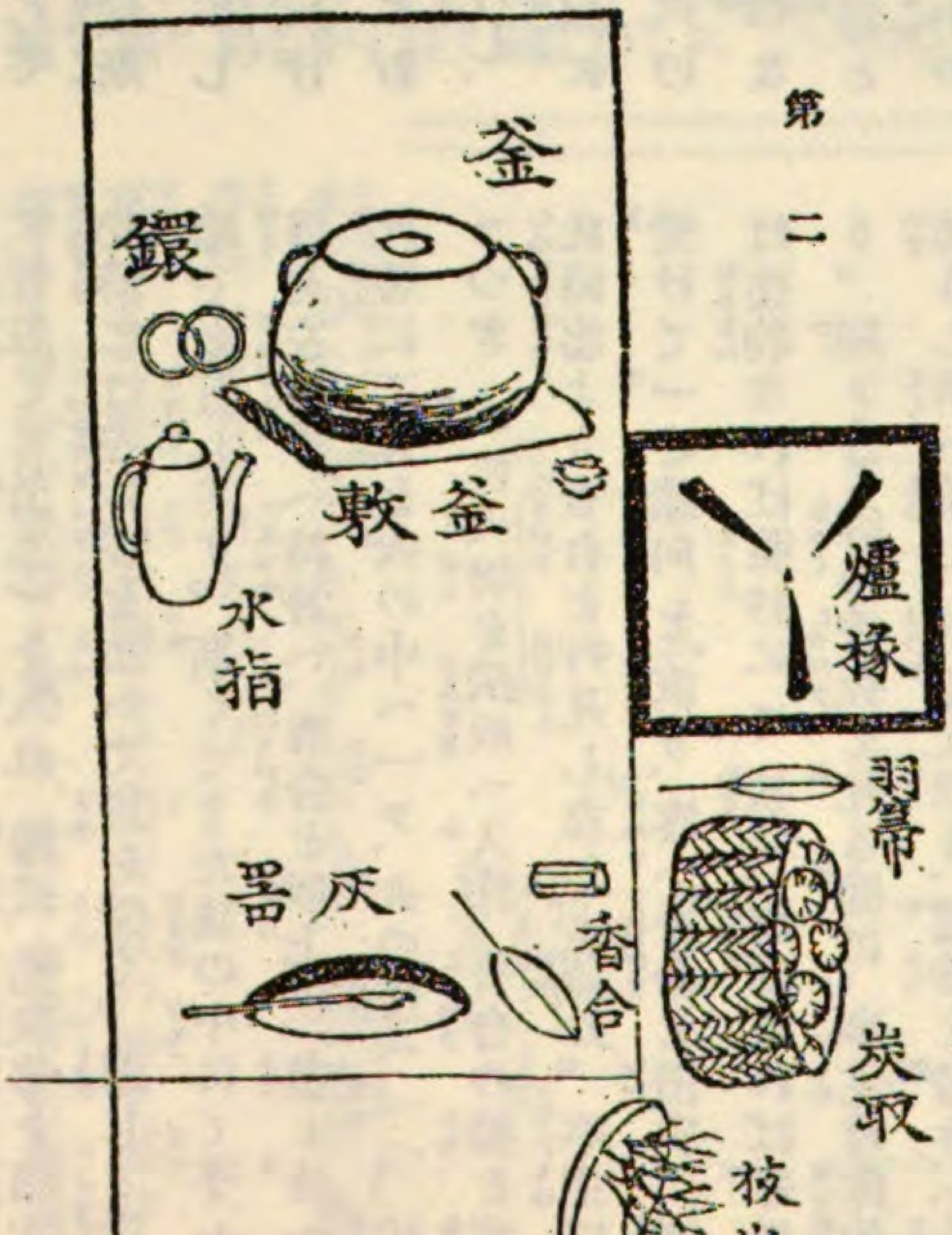
爐炭手前の事

前に述べし如く爐の場合に、亭主は一禮して炭取を持出し、次に灰器を持ち出し、勝手口を閉め、灰器は第一圖の如き所へ置き、次に第二圖の如く羽

第一



第二

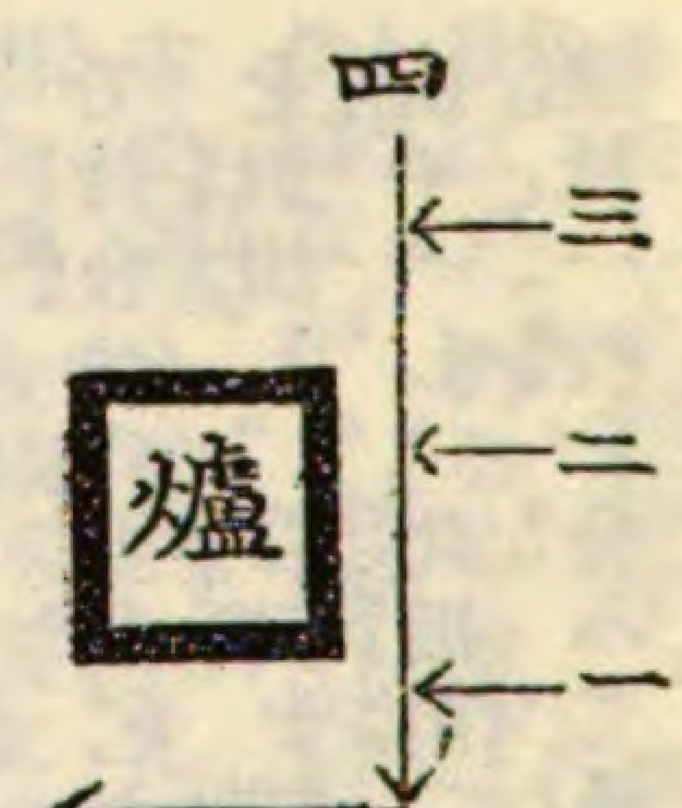


箒を出し、爐緣と炭取との間に置き、次に服紗捌しして艸にたゝみ、釜の蓋を締め、其の上をゆの字の形に拭斯くて、懷中に豫め用意したる美濃紙一折を四ツにしたるを取り出して釜敷と爲し、釜に鐶をかけ（鐶をかけるには客附を後にし外すときは客附を先にす）釜をあげ、一と膝向き直り、釜を疊の大切目へ寄せ鐶を外し、釜の脇へ置き、向き直り、羽箒にて掃き、圖の如く斜に置く。此時客は拜見と云ふて爐内を見、また下た火の立ち具合を見る。其間に亭主は香合を取出し、塗物なれば服紗にて拭ひ、陶器なれば手にて拭ひ、之を羽箒と置き合せ、次に炭取りの、中より火箸を取り、爐の中の下た火を直し、火箸を炭取へ入れ、次に灰器を取り出して炭取と爐緣との間に置き、其中より灰匕を取り灰を撒き、灰炮烙を右へ炭取と羽箒との間に置き、再び火箸を取り、左の手へ渡し、兩手には炭取を爐の方へ寄せ、枝炭を出し、灰匕の上へ載せ、手にて假置し、また手にて、胴炭をも取出して、之を爐の中へ入れ、袂の中にて其の手を拭ひ、また火箸を右の手に持替へ、相手炭へ一に管炭とも云ふ）を入れ、輪炭、點炭等を順次に繼ぐ。此時には左の手を添へて炭を受く。而して炭は半目に繼ぐを宜しとす。斯くてまた袂の中にて手を拭ひ、火箸を左の手へ持替へ、香合を取上げ、蓋を前へ取り置き火箸にて香を火の中へ一ツ、火の傍へ一つ、炭の上へ一ツつぎ、次に火箸を炭取へ入れ、香合の蓋を爲すなり。此時客より香合を拜見したしと望む。亭主は輕く之を受けて一と膝向を直り、客へ香合を出す。此時も香合は塗物なれば服紗にて拭ひ、陶器なれば手にて拭ふなり。斯くて客の香合を見る間に、亭主は灰炮烙を最初飾りし所へ戻し、羽箒を取り、爐緣を掃き、（此時客は元の坐へ戻る）爐緣と炭取の間へ置き、釜の方へ向直り、服紗にて釜の蓋を取り、湯の加減を見、湯の多きときは其儘鐶を掛けて爐へ載せ、灰器を持ちて勝手に入る。若し釜に湯の少なければ、釜を其儘に爲し置き、先づ灰器を持ち、勝手口を明けて水屋に行き、水指の用意を爲すなり。

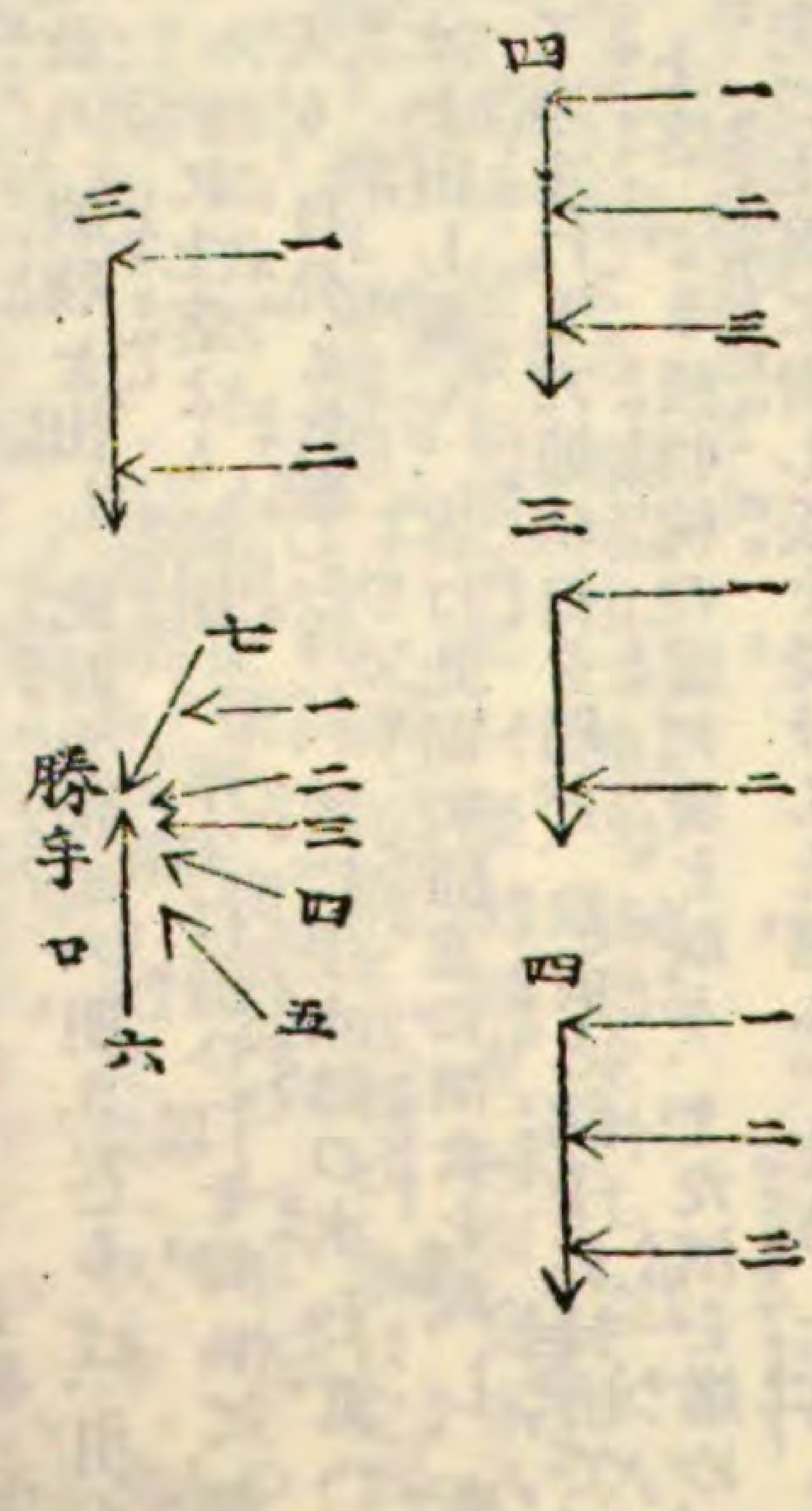
亭主の斯く立ち働らく間に、客は香合を引寄せ、上に

より順次に香合を拜見す、其の見樣は、先づ懷中より服紗を取出し疊の縁り外に置き、篤と形を見、右の手にて取上げ、左の掌に載せ、先づ周圍を見、次に蓋を取りて蓋裏を見、服紗に載せ、懷中より紙を出して香合の口へあて、香のこぼれざる用意して香合の底を見、其底に花押あらば注意して見るべし。見了りて蓋を爲し、次客へ送る、次客もまた同樣に見了りて末坐より上客へ戻すなり。

此間に亭主は水指蓋置を持出し、第二圖に示す如く、水指は勝手の方へ置き、蓋置は客附へ置き、手巾を取り、釜の蓋を取りて蓋置の上に載せ、水を釜へさし、手巾にて釜の蓋を締め、蓋より下まで手巾にて釜を拭ひ、手巾を折返して水指の中へ挾み、蓋置を取り水指と共に勝手へ持入り、再び出て釜へ鐶を掛け、爐へ釜を載せ、位地の具合を見て、鐶を掛け置き、釜敷を取り、炭取りの中に塵を拂て懷中し、次に鐶を外して火箸へ掛ける。此時旣に客より香合戻り居れば、取り上げて炭取へ入れ、斯くして炭取を持ち、勝手へ入り、また出で丶羽帚にて爐の脇を掃くなり、其の掃き方は、



の如く五ッ帚に掃き、勝手へ入り、次に坐帚を持出し、亭主の居りし所の疊を左圖の如く掃き、了りて勝手口を締め、次の間の塵を掃ふなり、客若し



未だ香合を見了りざりしならば、此時道具、疊、又は勝手口へ香合を戻すべし。

亭主また勝手口を開きて出で、釜の蓋を開けかけ置き、客より香合の挨拶を爲し、其の由來又は箱書附などを

尋ねたらば、之に答へて後勝手口に入り禮を爲す。之に對して客も總禮を爲すなり。此場合に若し香合の勝手口に戻り居るときは、亭主は香合の挨拶を受けて後に釜の蓋を明けかくるなり。

斯くて亭主は只今勝手を見計らひ、湯漬を差出すべき旨を述べ、勝手口を締めて入り、次に會席となるなり。

會席順序の事

茶室の搆造上座床なれば、客は前よりの席順にて宜きも、若し下座床なれば、會席となる前に客は入替り上客床の前に座す。是れ茶席には爐風爐を上座とし、食事には床を上座となせばなり。斯くして亭主は勝手口を明け、自ら膳を運び上客より順に出し置き、勝手口へ下り、粗末ながら召上られたしと挨拶し、勝手口を締る、(此時膳に菓子楊枝を添へてあらば、後に腰掛にて菓子及び煮〆等の出づべき準備なる故、客は豫め其の箸を膳の隅に取り置き、喫飯の後紙に包みて懷中にすべし。)客は上客より次客へ順次に禮して箸を取り、先づ飯汁とも各一と口づゝ食す。此時亭主はまた勝手口を明け、銚子を持出し、上坐より順につぎ、了りて銚子を持去り、また銚子を替へて持出で上客へ預け置き、次に飯器も持ち出て上客へ預け置き、替盆にて汁をかへ、汁椀は勝手へ留め置き、平、或は椀等を出し、また銚子飯器を改め、吸物を出し、此時平椀等の明きたらば、引くなり。次に上客より挨拶し、亭主は通ひ口を締めて勝手に入り、自分も食事を爲し、次に手水鉢の水を更へ、清淨水を出し置く。客は此間に隨意に酒食を爲し、暫くして亭主はまた通ひ口を明け、取肴と銚子を持出て、順に上客より吸物椀の蓋に肴を取り、また酒を進め、次に先づ上客に對し盃を受けんと請ふ。此時上客は辭して亭主より新しき盃を請ふべし。然とも亭主は強て持合せの盃を乞ふとき、上客は次禮して懷中より紙を取出し。呑口を拭ひ、左の掌に載せ、右の手を添へて出すべし。此時第二客は銚子を取り、酌を爲す。上客は懷紙一枚を疊みて肴二種以上を取り、分ちて亭主に侑む。亭主盃を盡さんとする時、上客は返盃を講ひ、亭主

即ち上客に返盃し、次に第二客より末坐まで同樣に廻り主客の獻酬畢りて後、上客は湯を請ふ。此間に料理の鹽梅を賞め、或は遠來の珍味佳殽などあれば、特に挨拶すべし。次に亭主は湯桶と香の物を盆にのせて持ち出で、其盆にて吸物椀と盃を引く。此時上客は香の物を受け、次禮して香の物の鉢を取り上げ、左の掌に載せ、菜箸にて飯椀の蓋に取り分け、故の如くして之を次客に廻すべし。若し喫飯中なるときは、疊縁の外に置くべし。第二客以下之に倣ひ、末客は香の物を取り盡くして鉢を通ひ口に近き所に置くを例とす。若し相客の內に婦人雜るときは夫婦、親子、孫及び未だ婚嫁せざる處女の外は、總て手渡せず、其の中間に置くべし。

飯すみたらば、客は皆な自分の用ひし膳椀は、揉紙を出して奇麗に拭ひ、殘りし物は豫め油紙又は其他の容器を所持し居りて、之に入れ、さて上客より膳を二客へ出し、二客は之を我が膳に重ねて三客へ出し、此の如くして次第に重ね、末客にて膳湯桶ともに通ひ口に出す、此時亭主は通ひ口をあけ、膳湯桶を引き、銘々盆にて菓子を持ち出で、一々客に渡し、勝手口にて、暫く御休息ありたしと挨拶す。客は之に對して、御案內は御歩びに及ばず、御知らせ下されたき由を述べ、亭主は、然らば失禮ながら合圖を打ち申すべき趣を約し、通ひ口を閉ぢて退くなり。但し此時客は貴人ならば、亭主は相圖を用ひず、矢張り後に自ら出迎ふを禮とす。斯くて客は銘々に菓子を懷中し、盆を重ねて勝手口まで出し置き中立とて席を去るなり。

客の去りし跡にて、亭主出で來り、掛物を外し、花を入れ、炭を直し、坐敷を陽氣にし、坐を掃き、水指壺、茶入等を飾り、總て準備整へたる時、相圖を爲せば、客は之に應じ、次禮にて起ち、小用を便じ、喫烟などし、手水をつかひ、口中をそゝぎ、順次初めの通りにて席へ入り、先づ室內の飾りつけ等を一覽したる上にて坐につき、各々坐席の定りしとき、上客より咳にて着坐したることを亭主に相圖す。此に於て亭主出で來りて此れより、始めて濃茶を進むる順序となるなり。

(以下次號)

習字の順序

小野鵞堂

どうしたならば早くよく書ける様になりましやうか、これは御尤ものお尋ねながら、一月や二月にて出來べきものでない、其人の素養如何により相違はありましやうが、前申す通り、先づ三四年はかゝるものと心を定め、扨その習ひ方により、又勉强の仕方によりて、思ひの外早く書けるやうになる事もあるのです、その習ひ方と申しますのは、順序よく手習するのが肝要です、たとへば一定の目的地に達するものに、遠回りすると近路するとの違ひがあるやうなもので、順序をあやまると遠回りして無駄な道を踏んだ上に、一年かゝる處が一年半も二年もかゝるのでありますから、どこ迄も先蹤に就て近路を尋ね、無駄な道を行かぬやうに心懸けて勉强せねばなりませぬ、扨其順序よくといふのは、楷行草かなといふやうに、正躰のものなり順次に習つて行くのです、これにはなか〳〵議論がありますが次の何から始めるのが捷徑でありますか、との御尋ねと關係して居ますから、取纏めて御咄し致しましやう、處で私は楷書は文字中の正躰で、行以下總ての筆法はこれより割り出されるものだから、先づこの楷書を手に入れて、順次に略躰(行以下をいふ)に及ぼすのが宜しいと思ひます、然るに假名が一番やさしいから、假名よりはじめて草を習ひ行に移り楷書に及ぼすのが、疎より密に入るといふ道理にかなふといふ正反對の説もあり楷書は習ふに及ばず、行書以下にてよろしとの説もあり、又漢字と假名とは別物だから始から假名を專修して可なりといふ、漢字に冷淡な説もあり、まして各多少の論據があるのですが、私は自己の實驗上、どうしても正躰のものよりするのが捷徑だとおもひます、尤も右反對の三説中、楷書は習ふに及ばず、行以下にて足れりとの説は、私も試みて居りますが、これは楷書に近い行書ならば大抵楷書と同樣な筆意ですから差支ないと思ひます、其假名より始むる説に至ては私の方でも正反對です、楷行草は多少習つた事があるから、假字をと

いふ人々もありまして、據ろなく先づ假名を習はせて見ると、段々に草行の力が足りない事を感じて、終に楷書まで逆つて習ふといふ經驗も隨分ありますが、これは餘程の損がある、なぜならば楷書よりする時は、其時に習た筆法で應用が出來ますから、行草かなに至るまで大いに樂に覺えられますが、假名より始むる時は、其字格といふものが楷書など判然と致しませぬから、敎ふるにも敎へを受くるにも不便で、到底行書や楷書に應用が出來るものではない、つまり順に行けば始め一度習つた筆法でどこ迄も應用が出來るものを、逆する故に假名は假名、草行は草行、楷書は楷書はいふやうに、一々筆法を聞かねば分らないといふ結果になります、又假名を專習して可なりとの說は、思ふに後世の御家流から出たものと存じます、これは假名には草行も込めて習ふものだから、それで普通の應用は充分出來るとの意味でしやうが、かくては假名の力で漢字を書くやうなものです、いろはのみにて、辨用した時代には、それでも濟みましやうが今日では女子とてそれ相應に漢字も入用ですから、かな丈の應用では、とても活用は出來ますまい、

右の次第ですから習字の順序は楷行草かなと行くのが正當かと私は信します、勿論習字者の都合で、行より始むるもよろしう御座いましやう、又楷行と順次に習ひ草とかなと同時に兼習するのも一法でしやう、只逆して習ふのは大に損があるから、隨て捷徑でないと存するので御座います

（完）

畵法指南

野口小蘋

黃蜀葵を畵くには、先づ花を作り、蕾を畵き莖を作り、而して下の正面に見たる葉より畵きはじめ、順次に葉を作り、少しく乾くをまちて、葉すし及花心を作るべし前なる正面の表葉は墨色を濃く、裏より見たる葉幷にうしろになりたる葉は、墨色淡き方よろし、いつれも墨の濃淡に注意肝要なり、

秋海棠を畫くには、正面の大なる葉を最初に畫き、次にくきを作り、側面の葉及び小なる葉をゑがきのち花を作るべし、秋海棠の如き大なる葉は、殊に用墨に注意肝要なりうらがへりたる葉は墨淡く表より見たる葉は濃墨を用ゆべし、

雁來紅俗に葉けいとうといふ、晩秋に至りて色いよ〳〵麗はしく、葉色さま〴〵になるものなれど、水墨の畫は只墨の濃淡を分つの外なし、上のかたの葉よりゑがきはじめ、莖を作り又漸次葉を添へ、かたち全く成りて後葉際に、小なる點をうち、而して少し乾くを待て、葉すしをゑがくべし、左に添たる野菊は花をゑがき後葉を作るべし、こゝに寫し出せる雀は先づ嘴を書き、次に眼次に頭背次に翼と尾　腹部足のつけぎわ等を作り終りに足を書くべし、雀全く成りて後、桂花の枝をゑがき、葉及び花をゑがくなり、

前號の萱草の説明に蘭の葉にならぬやうとせしを蘭のとありたるは誤謬なるに付訂正す

造花科

女子職業學校造花教員　伏見藤三郎述
松本和子筆記

姫百合の造り方

今回は姫百合の造り方を御話し致します、此花の瓣は大層光澤のあるもので、御座りますから尤もよい絖で造るのが宜しう御座ります、先、其絖と寒冷紗とを其儘て、第一圖の形よりも周圍一分程大きく裁ち置きます、そして絖の方は初め餘り淡くない「チウラミン」で丸染に致しまして、又他の二つの器に別々に「ヨーシン」を淡めに、「ズカレット」を濃く解かし置き、彩色筆に先づ「ヨーシン」の

第一

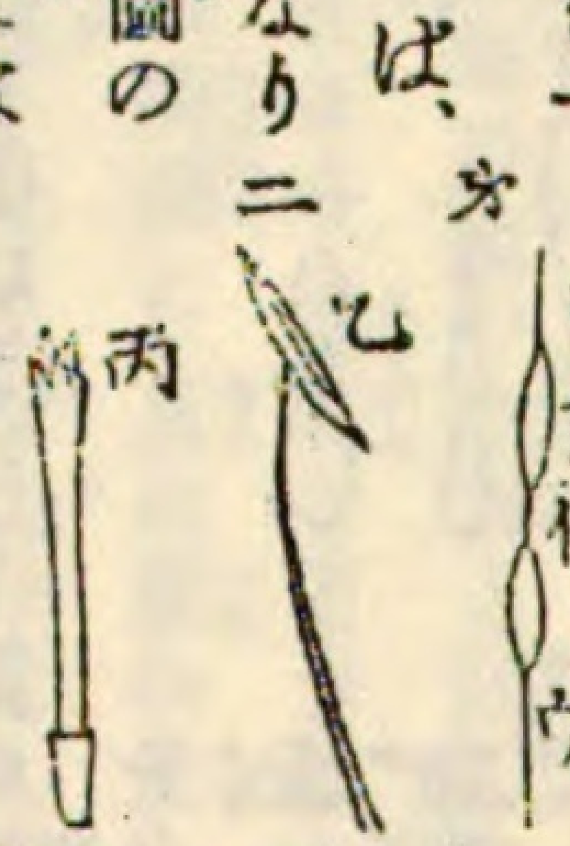


液を含ませ、下の方の點の記して御座ります所、丈、黄色を殘し置き、あとを染め、又次に、「スカレット」で上の方を濃く餘りきわずきませぬやう、追々と模糊す心持で染めるので御座ります、（尚圖に點の記してあります所、即黄色を殘しますの

も、必らず、きわずきませぬやう、水筆を使つて、能く〳〵注意して糢糊さねばなりませぬ）又寒冷の紗の方の染方も、絖同樣に致しまして、只總躰の繪具を絖よりも淡めに致しまして、乾かし置きます。

此二通りの、瓣が乾きましたら、眞鍮の針金に雁皮紙か又は薄美濃かを其儘細くきり、瓣の軸になります細さに巻き、長さ凡三寸位に切り、前の寒冷紗の瓣（即ち裏の瓣になるべきもの）に、姫糊の餘り堅くありませぬのをしき、先の方を一分位わけて針金をつけ、絖の瓣をとり、光澤のあります方を表に出して、皺の出來ませぬやう張りつけます、左すれば花瓣の表裏がちやんと出來るので御座ります。表裏の瓣を張合せましたものが乾きました上は、圖の通りな大さに切り縮め、細い筆に「コンゴーレット」に淡糊を入れました繪具をつけ、點をうちます、夫れから「菊の一筋鏝」で、瓣の眞中即ち以前に針金が入つて居ります所の下の方から、上の方まで、筋を引き「中の瓣鏝」で下の方を表から兩端へ、皺のよりませぬやう少し丸みを付け、後裏返しまして、瓣の上から矢張「中の瓣鏝で」強くあて、瓣をそり返すやうに致します、かやうに各〳〵瓣へ鏝をあてゝ置きまして後蕋を造ります。

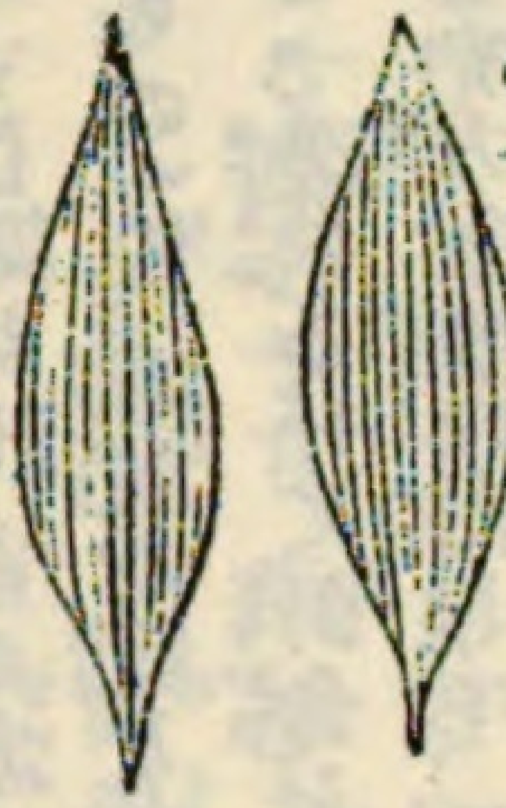
先づ雄蕋を造りますには、眞鍮の針金を四五寸の長さに切り、初め綿で第二圖甲のやうに、（イ）の所はズット細く、他は皆圖のやうな大さに（ウ）の所までまき、其上に、ほそく切りました白の雁皮紙で、平らに（ウ）の邊まで巻き、（ア）と（ウ）との所を一所に合せまれば、（イ）の所が上になり二まして、第二圖の乙のやうな形になります、そして下の方は綿で下巻を致しまして、其上を雁皮紙で上部を細く、下部を少しく太く巻き、夫れに姫糊をしきまして、光澤を出し、花瓣と同じ色にそめ、「コンゴーレット」を紛のまゝ付けるので御坐ります、蕋の長さは、大抵瓣の長さと同じ程に致します、次に中心にわります雌蕋を造ります。雌蕋を作りますには、前と同じやうに、針金を綿と雁皮紙でまき、第二圖の丙のやうなものをこしらへ瓣と同じ



色に染め、下の方を少し青紙でまき、周圍に「カマ糸で前の雄蕊を六本丈大抵同じ位の間を置いて括くり付けまして、後瓣をとり出し、大きい方から先に大小各三枚づゝ堅く結び付けるので御座ります。半開も皆開きと同しやうに致しますが、只他の花を作りました時の通り、內側に多く丸みを付けるので御座ります。

葉は、薔薇の葉と同じ染方で御座りますが、少々淡めに致します、そして第三圖のやうに、大小二通りきり、青紙をまきました

才三



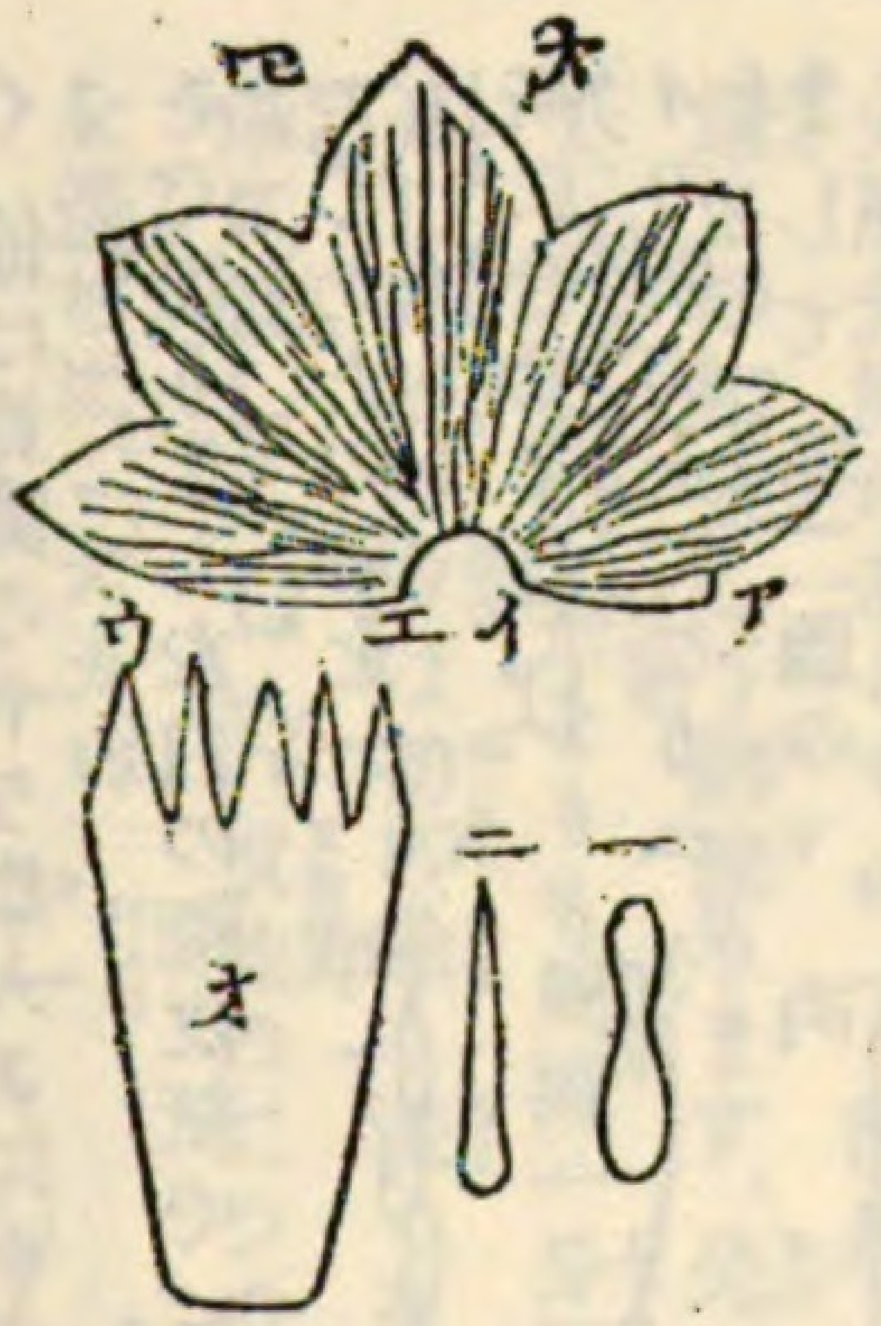
から「小の瓣鏝をあて、蠟をしきます。

針金をつけ、「筋鏝」で表から縱に筋を引き、裏かやうに致しまして後、開きなり、半開きなり、隨意の花を上に出し、花の一寸程下から互ひ違ひに葉を出し、形よくまとめるので御座ります。次は

桔梗の造り方

をお話し致します、桔梗の花を造りますには、先づ寒冷紗に極淡く糊をしき置きまして、第四圖のやうな形に切つて、水に一寸つけ「ピヲレット」に少しの「マセンダ」を入れて湯で解かしましたものを、器にとしらへ置きまして、大の彩色筆の一本に此繪の具を含ませ、尙他の一本に水を含ませまして、花瓣の先を濃く、下を淡くぼかします、之れが乾きましたなら、前の繪具と同じものを少々濃いめに解かし置きまして、其中に淡い糊を入れ、極々細い筆を使ひまして、圖のやうに瓣の上に筋を入れます、其筋の太い所、又細い所の加減は、よく〱實物に注意して書くので御座ります。

才四



花瓣の彩色が終りましたなら、次に、萼を作ります、萼は礬水引の厚美濃の紙を用ひ、餘り濃くありませぬやう、染めまして、第四圖の(ウ)のやうに切り、上の方を極々淡く「ピヲレット」でぼかします、其造り方は、是迄時々を話致した通りで御座ります。次に

蕊を造ります、蕊は初め針金の細いのを心と致しまして、綿で第四圖の(一)のやうな形にこしらへ、淡い糊で堅めて置きます、又別に厚い紙、即書學紙のやうなもので(二)の通りの形をきり、細い針金に白の雁皮紙を巻きましたものを心としまして、此形のものと二枚合せます、そして(一)も(二)も花瓣と同じ色に(少し淡く)染め、乾きました時、軟きのりて、全體に米の糠を付け、(一)の方を中心と致しまして、其周圍に(二)の蕊を五枚つけてまとめます。

第五



開きは「筋鏝で」を名々の瓣の兩表から名々の瓣端へあてまし、の中心に筋を引て、後(アイ)に(ウ)き、「中の瓣鏝」(エ)の所を糊で張で裏へ返しますり付け、萼の中其上「小の瓣鏝へ入、又前に造りました蕊を入れたので御座ります、此花の造り方は、前回に申しました霧島と大抵同じで御座ります。

半開を造りますのも、矢張「筋鏝」を表から引きますが、「中の瓣鏝」は開きと反對にあてます、是れも霧島の時と同じで御座ります、只半開は花瓣、萼、蕊など皆々開きよりも一分位小く造ります。

蕾は、開きよりも大凡二分位も小さな形に裁ちまして上の方は「マセンダ」「チウラミン」「グリーン」の三色を少しつゝ解合せて染めまして、内側の方には丸みを付け、圖に御座りますやう上の方をつぼめ置きます。

葉は、寒冷紗の他の葉の染方と同様に染めまして、第五圖のやうな形にきり、青紙をまきました針金を付け「筋鏝」を表に「小の瓣鏝」を裏に使ひまして、葉の筋をこしらへました後、蠟をしき、仕上げました上で、片栗の粉を裏に少々ふりかけ置きます、

かやう出來上りました上、實物に倣ひまして適宜に形よく、青紙で纏めるので御座ります。

裁縫科

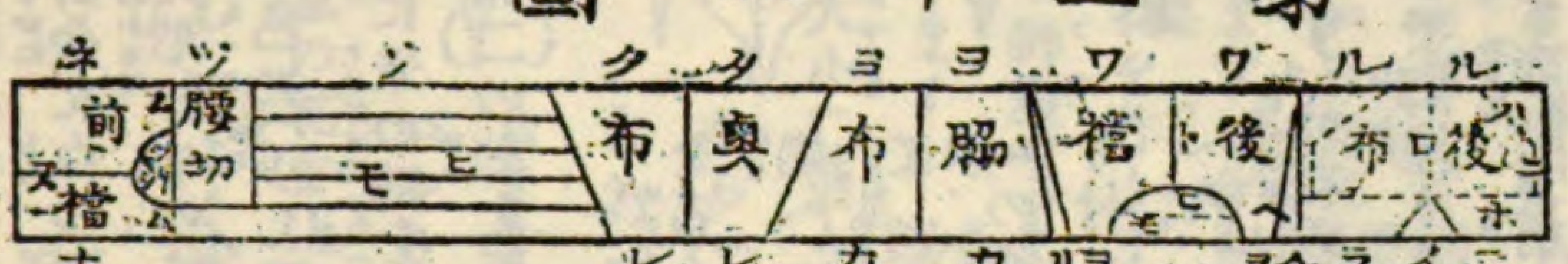
女子職業學校裁縫教員 金子銅子述

袴

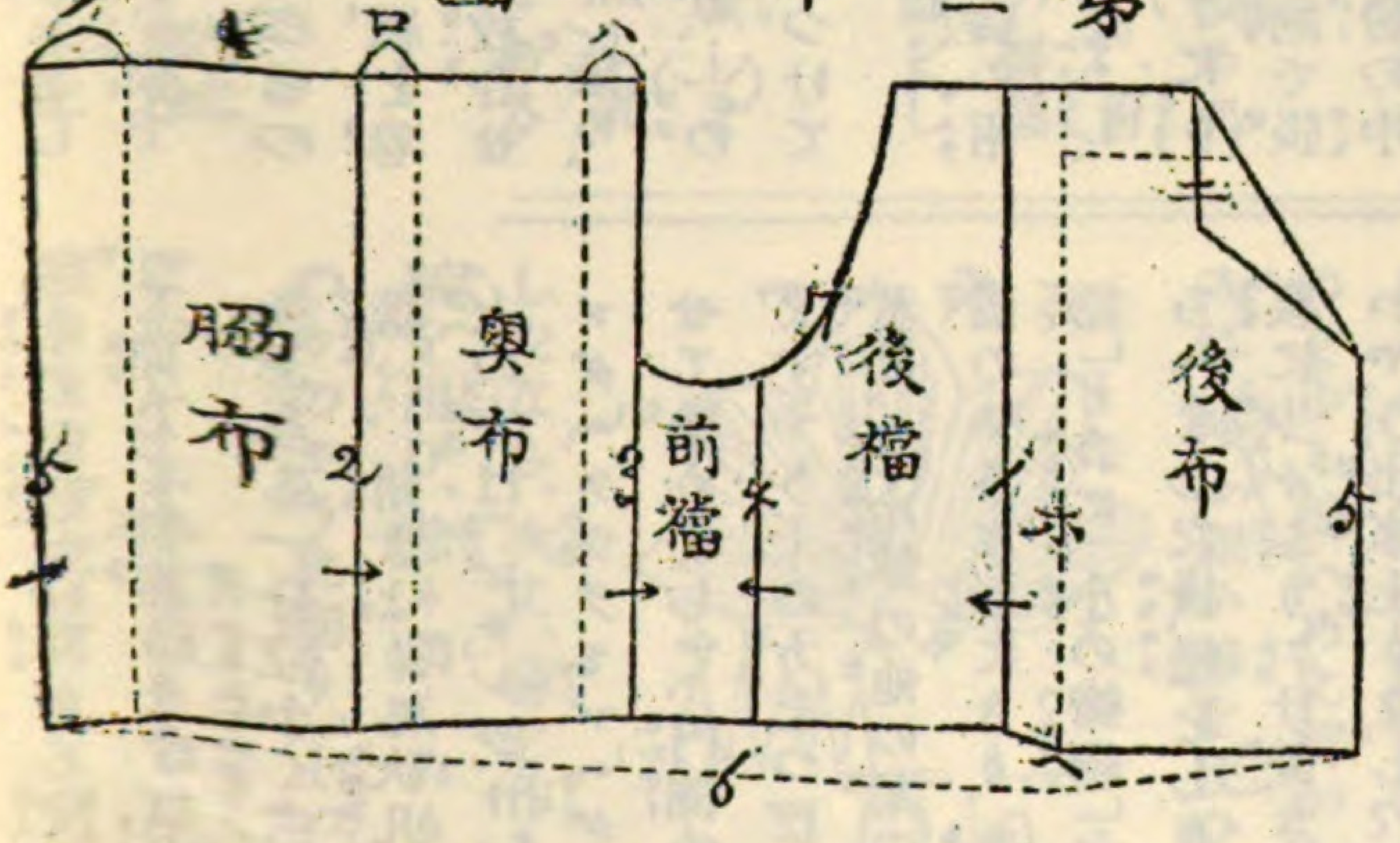
通常の馬乗袴即ち十番馬乗袴につきまして、お話し致しませう、先づ其裁ち方は第三十二圖に示しました通りに致します其積り方は、紐下の丈に三寸を加へ、それに前襠の(ヲ)の寸法腰切(ツ)の寸法、八倍して、

紐丈(ソ)の寸法とを加へ、其中より三寸八分を引きまして用布をうるのでございます、又總尺を知て居て各部の寸法を知るには、前襠(ヲ)、腰切(ツ)、紐

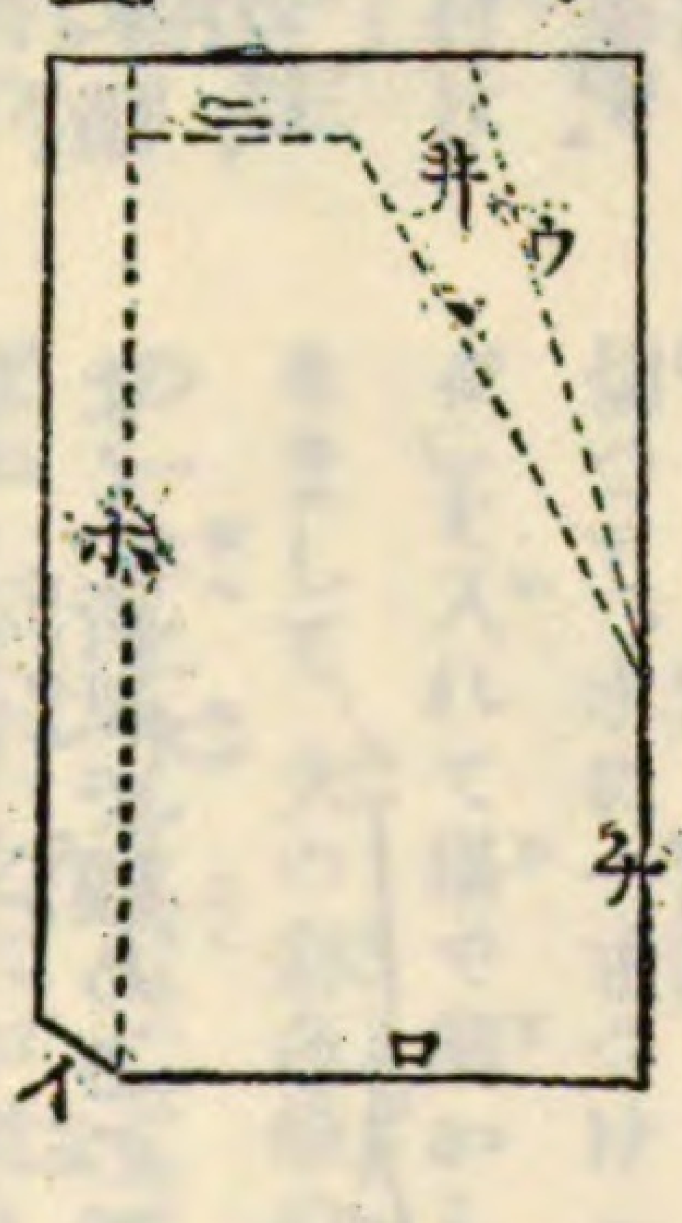
第三十二圖



第三十四圖



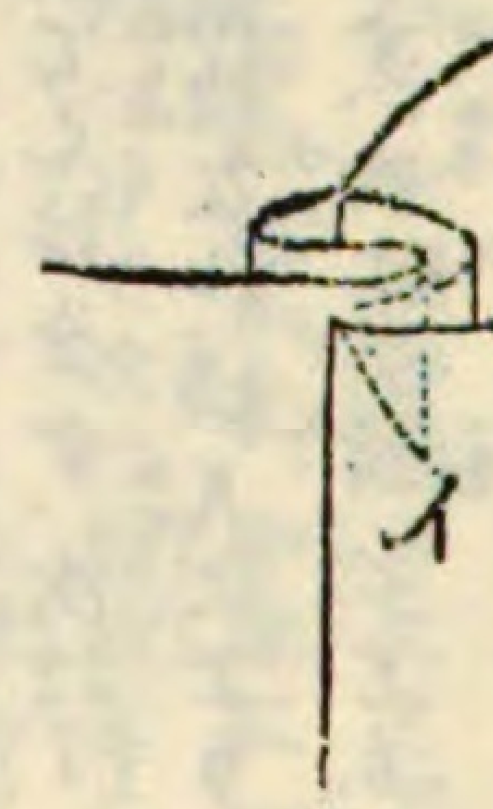
第三十三圖



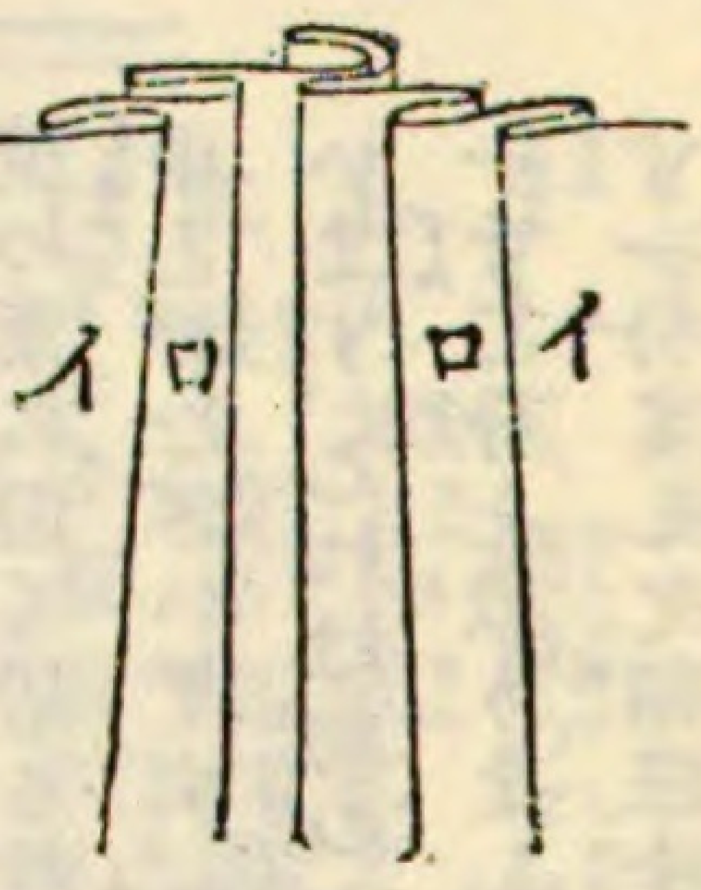
切の丈(ツ)と三つを加へて總尺より減しまして、三寸八分を加へて、八ッにわるのでございます、この兩方の積り方の中に三寸八分と申しましたのは、形の總尺でございます、袴の裁方は至てこみ入て居りますから少しくど〳〵しくなりますが、其寸法等につきまして、説明を致しませう、先づ初に、後布二枚をとります、これが、初の積り方にて紐下に三寸を加へたもので、後の積り方にて最後に八分しました寸法で丁度圖中の後布の(ル)の寸法でございます、其布の(イ)の所は三分ッ、の形がつきます、それゆへ(ラ)の寸法は(ル)よ

り三分つまりましたものでございます、（ロ）ハ八寸三分の巾で袴の後巾、三分といふのは縫ひ込みの見積りでございます、次に後襠をとります、これは（ワ）の寸法は後巾の丈より三分つまりましたもので、後巾（のラ）と同様になります、（チ）の所に一寸三分の巾の斜の切がとれます、又（ト）の所は四寸五寸にして圖の、、、、、、りまして、其切り取した切を紐のたしに致します、（ヲ）の寸法は一尺四寸でございます、次は脇布、後襠との間に（リ）の所五分の斜の切をとります此脇布の（カ）は後布の（ル）同様、（ヨ）がそれより八分つまりましたものでございます、次が奥布（タ）は脇布の八分つま

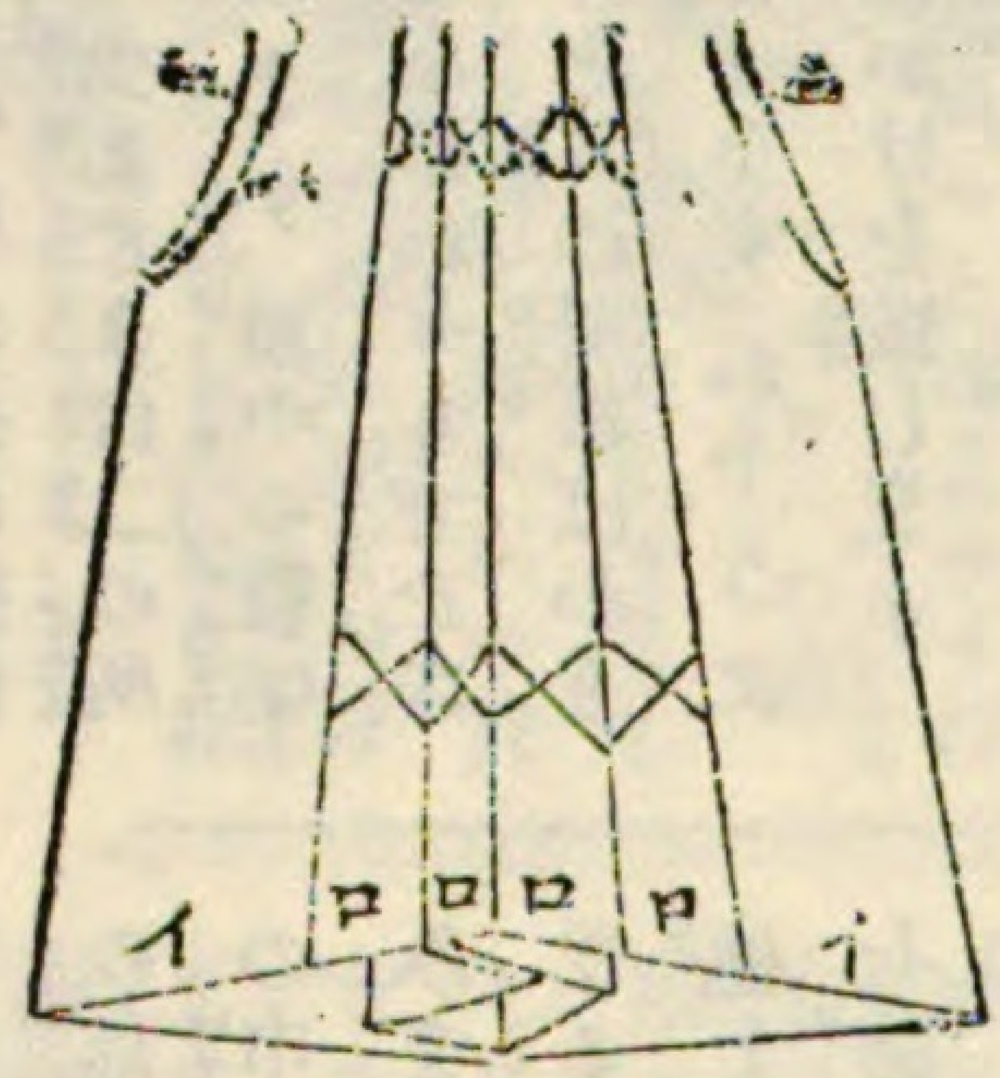
第三十五圖



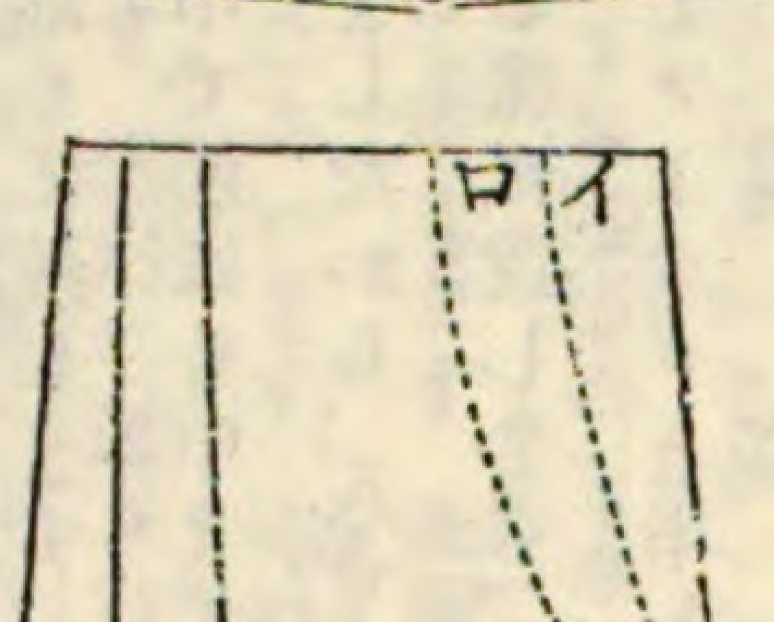
第三十六圖



第三十七圖



第三十八圖



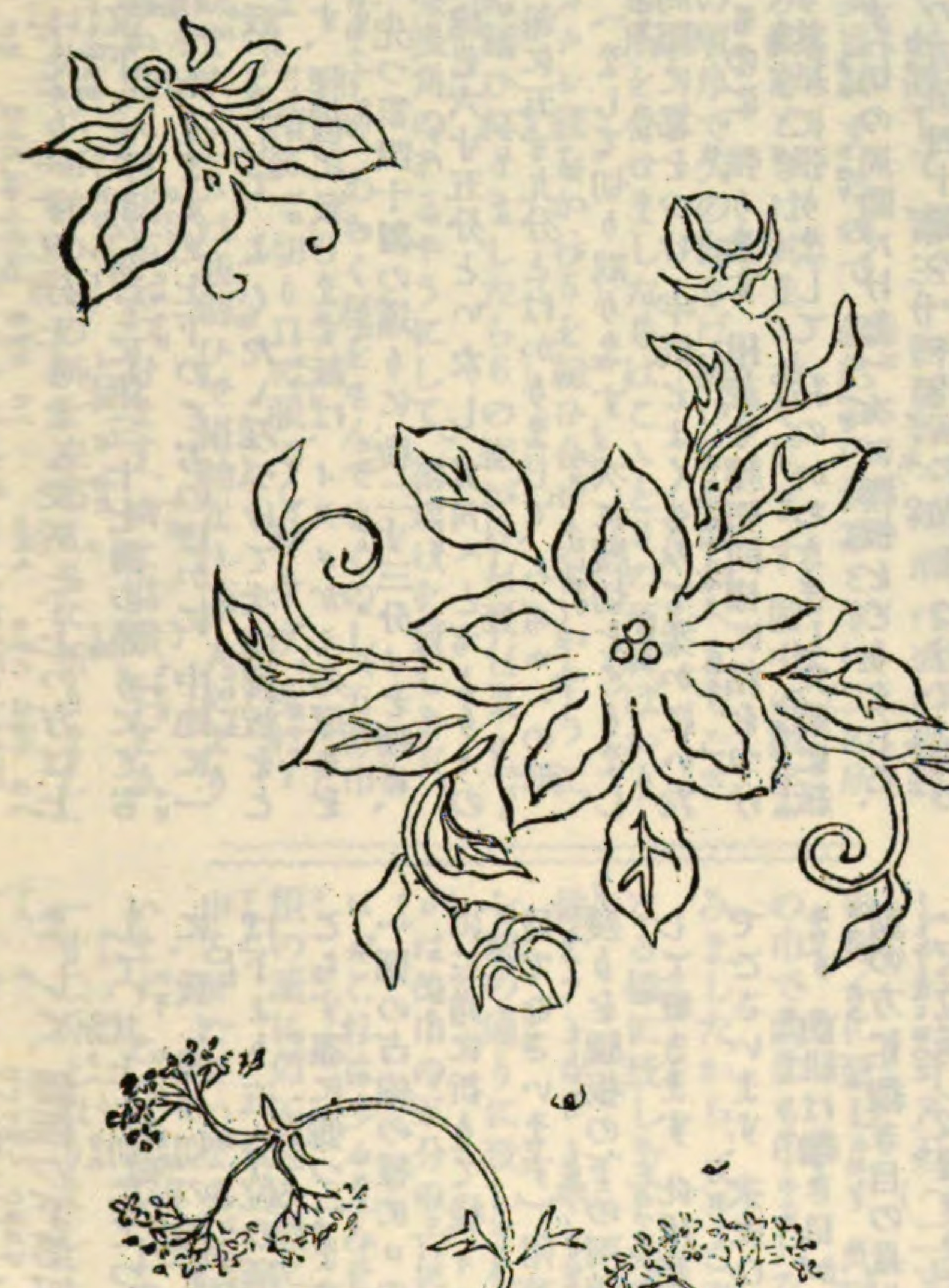
りましたもの（ヨ）同寸法、（レ）が（タ）より八分つまります、紐丈（ソ）の所は一尺八寸位、切の丈の長きものは、一尺九寸位に致します、褄切が六寸、前襠が一尺六寸、これは（チ）の寸法で、（ヌ）の所は一尺四寸となります、（チ）の所は三分より五分までといたします、以上ので裁ち終りました標は後布を裁ち切り直てつけます、これは第三十二圖の所に記しにありますが、猶大けく記しますれは、第三十三圖の様で後布を二枚とりまして、表を中にして重ね下に置き（ホ）（ニ）（ハ）（ウ）の標をつけます（チ）は相引、この長さは紐下の三分の二に五分（裾がけ）を加へましたたけの長さにいたします、

後丈の標(ニ)は紐下より二寸一分長く致します、これは一寸六分の形に五分の裾を加へたものでございます、さて縫ひますには初めにナゲ(井)の所を標の通りに三ツ折にしてくけまして、第三十四圖の(ニ)の所は表の縞目合ふ樣に眞直にするので、縫込みの少きときは(二)の所を折り込み多きときは其まゝでくけます、圖中の數字は縫ひ方の順序で矢の向きは縫ひこみのかへりでございます(4)の所を合せましたらばこゝと(3)の所にばかり縫ひ込みカクシ躾をかけ(5)を縫ひ合せます、かやうに兩方ともに縫ひ終りましたら(6)の裾がけを致します、(へ)の所は矢張角のあるやうにして、裾がけを致します、絹物になりますと、あらく紙をもんでよくのし、五分巾位に切りまして粘にて切り口に張てくけます、次は(7)の股を縫ひます、こゝは袋縫ひで絹物なれば人によりまして眞綿か若くは絹布をつけます、次に襞積をとります、襞積は先づ、布後の(ホ)の所を左右ともに折りまして背のかへりと反對に右が左の上にかさなる樣に重ねて中の所を折りこみますことは第三十五圖の通りにいたします、圖中(イ)の所は八分か一寸位かさねかけを致します、次に此所に躾をかけそれより前ヒダに移ります、前の襞積は第三十四圖の(イ)の所を四寸八分といたし(ロ)が一寸八分(ハ)二寸八分として折をつけ第三十六圖の如くに致します、此襞積の巾は、後巾(第三十三圖(ロ)の巾で前にも申ました通り八寸三分の三分丈縫ひこみましたから、八寸となるのでございます)の十分一になる樣に致します、此圖の(イ)を一のヒダ、(ロ)を二のヒダ、他をフトゴロと申します、此ヒダの下部の方は第三十七圖の通りに致しまして、(イ)は後巾(八寸)の五分の三(ロ)は後巾の五分の一にいれずのでございます、次に笹ヒダこれに少々丸みをつけて積襞をとりまして、先は笹の葉に似て居る樣にするとかにて、此名があるとか申とでございます、即ち第三十七圖の(ハ)の通りでございます、これは袴の上の方の端より第三十八圖の(イ)を一寸二分と取りまして裏にかへし、又そこより(ロ)を一寸一分として第三十九圖の通りに折りまして、此圖の(イ)の所を少しく伸す樣にして丸みをつけてくけます、

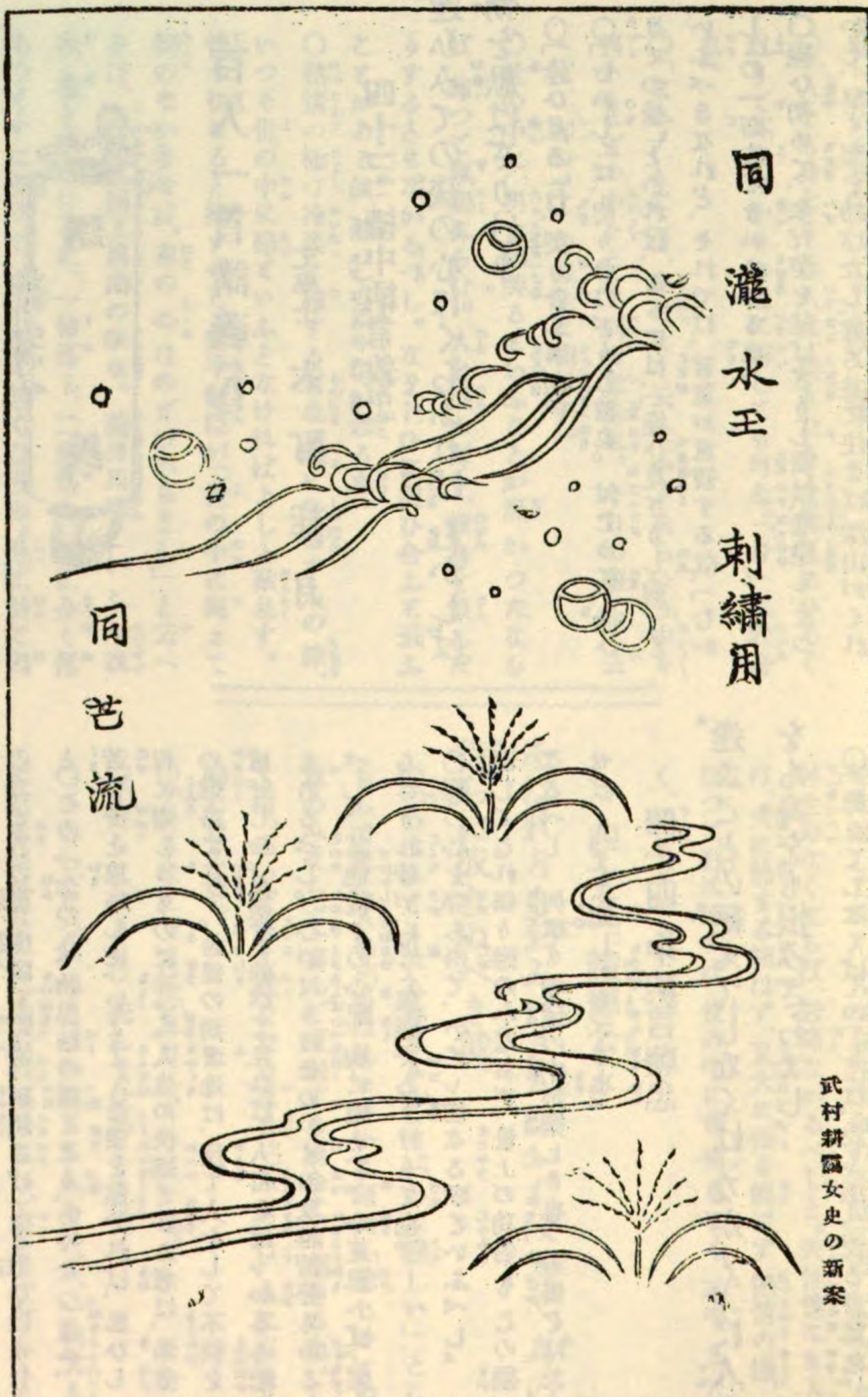
そして此端より端までが（第三十七圖の（ニ）ニり（ニ）まで）八寸になる様に致します、これで先づあらかた出來ましたから、下より一寸五分上りました所と、上の方は上より三寸位下りました所とに第三十七圖の通りにとぢます、絹物でありますと上下のとぢのほかに、中途に一つとぢを致しまして、よくたゝみつけて次は腰板をこしらへます、腰板に致します紙は、イタメガミの厚きを用ゐます、先つ第四十圖の通りに、縦二寸三分（イ）を極め、下（ロ）の横線を六寸五分といたし、其角（ヘ）と（ホ）より（イ）の横線まで斜に五寸九分とはかりまして、（ハ）（ニ）（ホ）（ヘ）の形をこしらへまして切り取ります、次に腰切をとりまして、裏の周圍に粘をつけ、半紙をよくもみて柔かにいたしましたものに、張ります、附菱も腰切同様に粘をつけて、やはり其紙に張りまして、粘のかわきました時に紙を切ります（切の周圍だけを）次に腰板をとりまして、其裏の上の方第四十圖の（ハ）（ニ）の所に粘をつけて、表の切を張りつけまして、腰板の表には粘をムラなくよくぬり、それを猶よくふきまして、裏の上に張りつけ置きまして腰板を引かへして、角をキッカリ折りまして、縞

の曲らぬ様に張りつけます、次に紙捻をかたくよりまして、其長さは腰板の下ひ巾より左右一寸位短くきりまして、腰板の下第四十圖の（ホ）（ヘ）の端に粘にてつけまして、其上を切にてつゝみ丁度玉ブチを取りました様に、致し殘の切の端を裏に張りつけます、それより左右は下より五分位の所に鋏を入れて、其上の所だけをこちす裏に張つけます、次に附菱をとりまして、其角を（ハ）の様一圖の占線の様に（ロ）の所を折りまして、第四十に三角に折りて後、（イ）の所と折りまして、（圖中の線は縞目でございます）附菱の表に出る所の格好をよくして殘りを腰板の下の兩端の兩裏に糊にてつけお〼とはむるして置きます、此附菱の高さは、大概腰板の二分の一位でございます、次にひもをときまして、心を入れてくけます、前紐は繼き目が澤山ありますから、よく注意して前の方に、繼き目の見へぬ様に、致します、紐の中央の所一尺位殘して置きます、後紐は左右二本に致します、之は殘らずくけますがたゞ腰板につく所一寸位くけ殘します、紐の心は袴をつけて、外にゐる方にくるみてくけるのです、

圖案 桔梗女郎花蝶 刺繡用



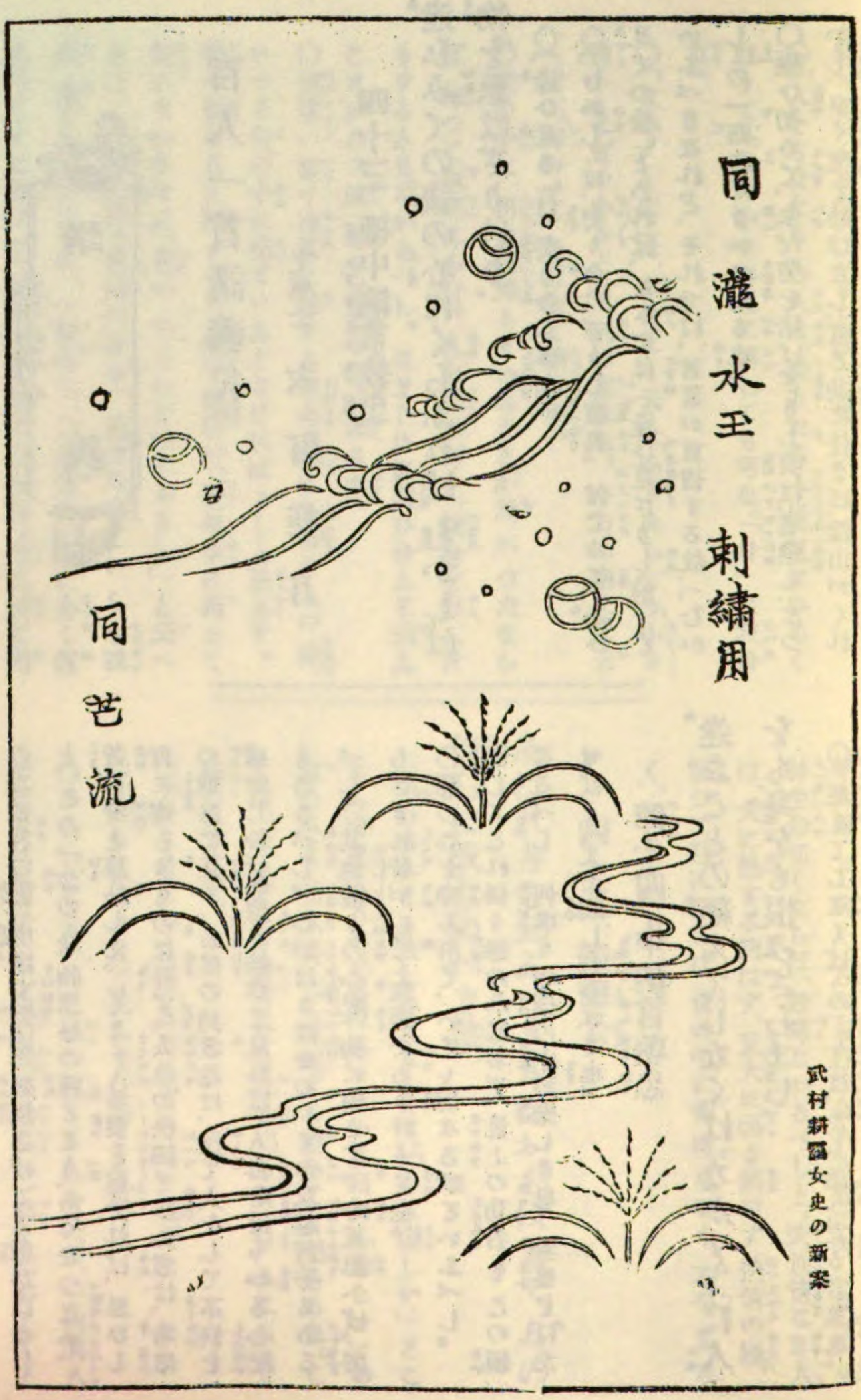
武村耕靄女女の新案

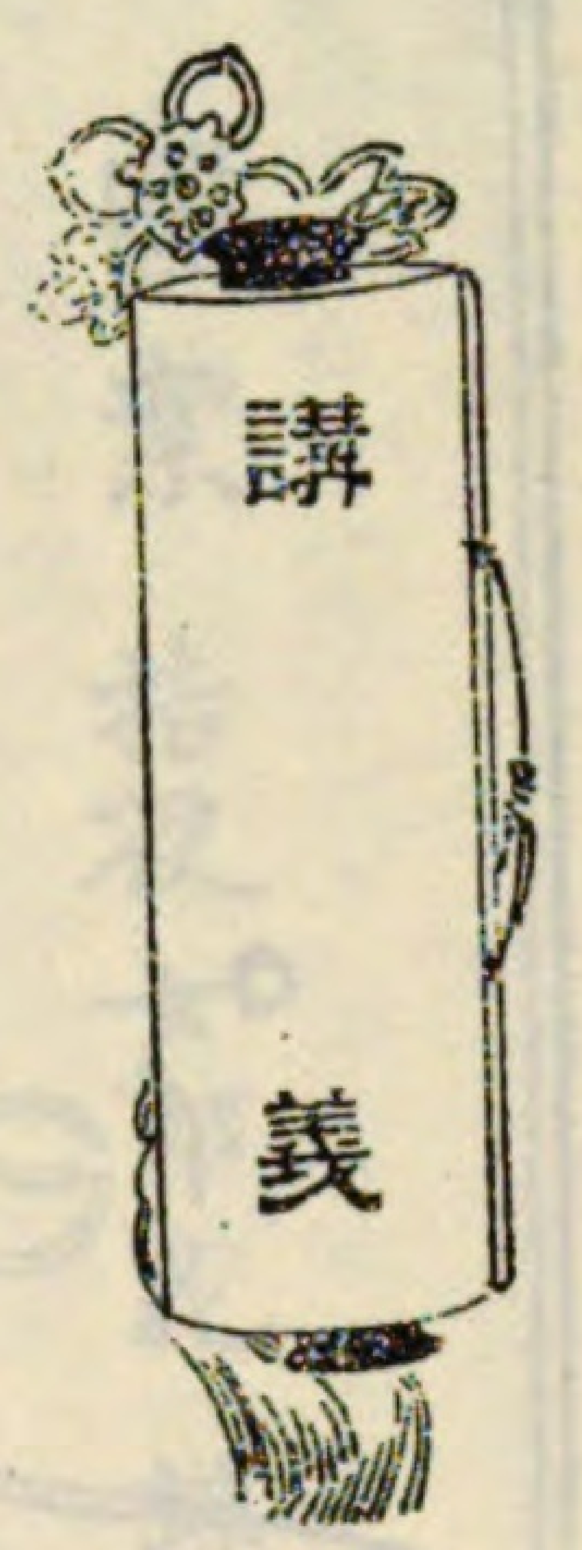

同　瀧水玉　刺繍用
同　芒流
武村耕靄女史の新案

圖案 桔梗女郎花蝶 刺繡用



武村耕靄女女の新案


同
瀧水玉 刺繍用
同
芒流
武村耕靄女史の新案



百人一首講義（八）

文學士　大町桂月

四十三、權中納言敦忠

逢ひみての後の心にくらぶれば、むかしは物を思はざりけり。

○「逢ひ見る」は、契り合ふ事也。

○「むかし」は、契り合はざりし前也。はじめに「逢ひ見ての後」とあれば、こゝには、「逢ひ見ざりし前」といふべきなれど、それでは、言葉が重複する故、「むかし」の一語にてきかせたる也。

○戀ひ初めて、未だ契を結ばざりし頃は、唯戀し、なつかし、早く契を結びたし、君と共に住まば、深山がくれのおどろの奥、虎臥す野邊、破鍋さげても厭ひはせじと、この一念のみ、物思ひの種となり、あゝせつなや、苦しやと思ひしに、いよ／＼希望を遂ぐれば、思ひし程に樂しきものに非ず。人生の快樂といふ者は、希望の進路に在り。希望の到着地は、反て人をして不快を感ぜしむ。愈契を結びて見れば、人目をはゞかる心配もあるべし。心がはりはせぬかとの取越苦勞もあるべし。其他種々の心配、胸に絶えず。今更思へば、契らざりし昔が、反て氣樂でありけりと也。

○戀の心を穿ち得て、いとゞ切なる歌といふべし。而してこれ獨り戀のみならず、世上の功名もこの類なるべし。何事も希望の中が樂しき也。希望をはたせば、さまで樂しからざる也。

四十四、中納言朝忠

逢ふことの絶えてしなくば、なか／＼に人をも身をも恨みざらまし。

○「絶えてしなくば」の「し」は、たゞ添へたる言葉也。

即ち「全く無かつたならば」也。
○「人をも身をも」の人は、契りたる人也。更にひろく取りて、「世の中」の意に解しても可也。「身」は我身也。
○「なか〳〵に」は、今日よく云ふ「中々ゑらい」「中々強い」などの中々とは、別の意味也。今日の語にて云へば、「却つて」の意味に相當す。
○世の中に、男女相契るといふことが無かつたならば、却つて氣樂ならむ。人を恨んだり、我身を恨んだりするともなかるべし。なまじひに契ひ合ふと云ふことがある故、却つて色々恨が起る也。
○熱情の極は冷淡に歸する者也。戀に失望するの餘、いつそ世の中に戀といふとなければよしと歎息す。情の切なると掬すべし。業平朝臣が「世の中に絶えて櫻のなかりせば、春の心はのどけからまし」と云へるは、之れと同工異曲の歌也。瀧澤馬琴といふ小説家、齒を病みけるに、一齒落ち、二齒落ち、終に全く落ちつくすに及びて、痛は全く無くなりぬ。是に於て馬琴大悟して曰く、人は身躰生命ある故に苦しき也。身躰生命なくならば、苦痛なかるべしと。天性情なき人は、大に熱する能はず、又大に悟る能はず、熱情の極、悟つて茲に至らば、世の中に苦痛もなく、不平もなく、恨もなかるべし。

四十五、謙德公

あはれとも云ふべき人はおもほえて、身の徒らに成りぬべき哉。

○「あはれとも云ふべき人」とは、「あゝ戀しい」とこちらで思ふ人也。「あはれ」といふ語は、「悲しい」の意のみならず、喜んで感服する場合にも用ゆる也。こゝは、あつばれと感じたる意也。「人は」は「人には」を略したる也。
○「おもほえで」は、「思はれずして」也。
○「徒らに成る」は、死んで仕舞ふと也。
○いとし、なつかしと思ひ焦るゝ人あれど、一向其人には思はれなくて、鮑の貝の片思ひ、終にぶら〳〵と

戀の病、この病ばかりは扁鵲の力も及ばず、空しい憾を懷いてこのまゝ死果つるとか。さても情なきと哉。

○世によくある境遇、よくある恨み、よく謠ひ得て人を動かすの節なしとせず。

四十六、曾禰好忠

ゆらのとを渡る舟人楫を絶え、行方も知らぬ戀の路哉。

○「由良の戸」は、淡路と紀伊との間の海峽、戸は瀬戸の事也。

○楫は、櫂や艪の總稱也。後に轉じて、舟の方向を定むるものをも楫といふ。この楫は艪の事也。

○行方は、行く方角也。「ゆくへ」と書くべし。往々行衞と書くものあれど、誤り也。「ゆくへ」を書きて、「ゆくエ」と發音する也。

○「由良の戸を渡る舟人楫を絶へ」は「行方も知らぬ」と言はむ爲めの序也。由良の瀬戸を通る舟人、楫を失ひて、舟を漕ぐこと能はず、舟は波に任かせて、いづち行くとも、はかり知るべからず。その行方を知らざる如く、戀の路も行方がわからざる也。

○「行方も知らぬ戀の路かな」だけが、歌の意味也。戀は人を狂はするもの、又迷はするもの、人ひとたび戀の路にはまり込めば、身を誤るとあるべく、家を破ることあるべく、どこにどう落ち着くやら、洵に果敢なき者哉也。

○戀の果敢なきことを説明したるだけにて、別に面白き節もなき歌也。

四十七、惠慶法師

八重葎しげれる宿のさびしきに、人こそ見えね、秋は來にけり。

○「八重葎」、又「かなむぐら」と云ふ。一種の蔓草也。普通にいふ「むぐら」とは、別也。

○人の往來絶えてなくして、草のみ生ひ茂りて、さらでだに寂しきに、悲しい秋が來て、更に寂しいと也。

人は來ないが、秋が來たと、言葉の文をなしける也。
○ひと通り孤棲の宿の秋のさびしさを謡ひ得たるまで也。草しげれるにて、人の來らざることをふくますべきに、「人こそ見えね」と云ひたるは、巧を弄びて反て餘情乏しきものと云ふべし。杜甫の有名なる詩に、「國破山河在」といふ句あり。山河在りの一語にて、他の城郭も、宮殿も、當時の榮華の様も何もなきことをふくませて、餘情云ふべからず。詩歌を作らむものは、此趣を解せざるべからず。

四十八、源重之

風をいたみ岩うつ浪のおのれのみ、碎けて物を思ふころかな。

○「風をいたみ」は、「風のいたさに」、「風のはげしさに」也。
○「風をいたみ岩打つ浪の」は、「己れのみ碎くる」と言はむ爲めの序也。
○「おのれのみ碎くる」は、おのれ一身ばかりて心を碎きて、色々心配する也。
○「おのれのみ碎けて物を思ふ頃哉」にて、歌の意をなせり。今日この頃は、同情をよせて呉れる人なく、また人に打ちあけて心を慰むる由もなく、獨りてくよ〳〵と心配するとなるが、さても味氣なき浮世かなゝなり。
○世によくある情なれど、さばかり人を動かす節もなし。「おのれのみ碎くる」は、浪には、あてはまれど、「心を碎く」に言ひかけむは、少し無理にて、斧鑿の痕あるを免れず。

四十九、大中臣能宣朝臣

御垣守り衞士の焚く火の夜はもえて、晝は消えつゝ物をこそ思へ。

○「御垣守り」は、御所を守るもの也。衞士は、護衞の士卒也。「御垣守りの衞士」と、同じことをつゞけて言ひたる也。衞士は、毎夜火を焚いて護衞する也。
○「御垣守り衞士の焚く火の」は、夜燃え、晝消ゆる

と言はむ爲めの序也。

○「おもひ」の「ひ」は、火と同音なる上に、「思が燃ゆる」、「思ひ消つ」など、古來言ひならはせることとなれば、心の思を衛士の焚く火にたとへたるも適切也。一首の意は、燃えたつばかり、夜は心に思へども、晝は流石に人目がある故、自から思ひ消して、それと樣子にあらはず、たゞよく／＼と思ふのみなりと也。

○戀の歌として、可もなく、不可もなし。

五十、　藤原義孝

君がため惜しからざりし命さへ、長くもがなと思ひける哉。

○「命さへ」の「さへ」は「までも」の意也。

○「長くもがな」は、「長くもあれよ」と願ふ意也。「もがな」は、願の意をあらはす場合に用ゐる言葉也。

○我が戀ひ慕ふ君の爲めには、命までも惜しからず、死んでも恨みずと思ひこみしが、今その思がかなひて、契を結びて見れば、連理の木、比翼の鳥、千年も、萬年も、千代も、八千代も、相愛し、共に棲みたし、死んでもよいと思ひしに、今は忽ち其命が惜しくなれりと也。

○痴情の極をうたひ得て、一種可憐なる歌也。

五十一、藤原實方朝臣

斯くとだに、えやはいぶきのさしも草、さしも知らじな、もゆる思を。

○「斯くとだに」は、「斯うとでも」也。

○「いぶき」は「伊吹山」にて地名也。

○「さしも草」は、「よもぎ」也。

○「もゆる」は、草木の芽生へすることを、萠え出づるとも、萠ゆるとも云ふ。草木が萠ゆる、思ひが燃ゆる、さしも草と云ひたるより緣を取りて、もゆる思ひとなせり。

○「えやは云ふ」を「えやは伊吹」に言ひ懸けたり。「えやは云ふ」は、「え言はんや」也。「えう言はうかまあ」也。即ちとても言ふとが出來ぬ也。

「さしも」は、「左様にまあ」也。上に「さしも草」と云ひたる故、同じ語調を取りて、「さしも」と云へり。これ文字鎖にて、「さしも草」は、「さしも」を文字鎖にせむ爲めに言へるにて、歌の上には、毫も意味なし。

○この歌、言懸あり、文字鎖あり、又縁語あり。非常に言葉をひねくりたる歌たる也。「伊吹山のさしも草」は、上は言懸に使ひ、下は文字鎖に使ひて、歌の上には意味なしと知るべし。而して「もゆる」は、さしも草の縁語也。

○一首の意は、「斯くとだにえやは言ふべき、言ひ得るよしもなければ、さしも知らじな、このもゆる思を」と也。即ち、「斯うとでも言つて仕舞へばよいが、それがとても口に出して云ふとが出來ざる故、このやうに燃え立つやうに思うて居れど、先方では、さうとは少しも知らざるべし。我切なる思ひも、先方には通せざるべし。あはれ、我思が叶ふよしもがな」と也。

○戀のうたとして、多少あはれなる節なしとせず。

五十二、藤原道信朝臣

あけぬれば暮るゝものとは知りながら、なほうらめしき朝ぼらけ哉。

○夜明くれば又日暮れ、日暮るれば又夜明くるは、自然の循環也。今は夜明けたれば、戀人に別れざるを得ず。されど、またやがて日が暮るゝものなれば、戀人に逢ふことを得るものとは承知し居れど、さても この曉の別の惜しきこと哉。この早く明けたる曉のうらめしき哉と也。

○後朝の別の恨み、思ひやられざるにあらざるも、明けぬれば暮るゝものと知ると云ひては、少し理路に陷りて興醒むる節なしとせず。

五十三、右大將道綱母

なげきつゝ獨りぬる夜のあくる間は、いかに久しきものとかは知る。

○「ぬる」は、「寢るに」に同じ。

○「かは知る」の「は」は、たゞ添へたる言葉にして、「知るか」と云ふも同じ。この『か』は、咏嘆の意をも含め

り。

○夫の兼家、通ひ來りしに、少し門をわくるとが遲かりし故、まちわびて、じれつたいと、恨言云ひければ、この歌をよみける也。御身は、門を明ける間が待ちどしいとて、不平をこぼし給へど、少しは我身の上を察し給へ。君を思へども見えず、嘆息しつゝ、空閨にあかす一夜は、如何程長いものと思ひ給ふか。それに比ぶれば、門をあけることが少しおそくなりたる位は、何でもなき事ならずや。さほどに不平をこぼし給ふなと也。

○頓智即妙の才見えて、且つ面白き歌也。

五十四、儀同三司母

わすれじの行末まではかたけれど、けふを
限りの命ともがな。

○男の心と秋の空、今日の誓は決して忘れじ、一世まで契りかはさむと云へど、行末までは如何ならむ。今の契を全うせむことは難からむ。行末までは難けれど、されど、今日明日はまさか浮氣も起さゞるべし。今や互に相愛するの情、人も我れ燃ゆるが如し。秋の扇と棄てらるゝ行末を見ずして、掌上の玉と愛せられつゝある今の中に死んで仕舞へば、身は如何ばかり幸福なべるき。今の中に死にたきと哉と也。

○婉切にして人を動かす。一代の名歌と云ふべし。「難ければ」の下に、「今日明日忘れまじ、一心に思へるならむ云々」の意をこめて解すべし。之を「難ければ」と云ひては、平板に過ぐべし。

五十五、大納言公任

瀧の音は絶えて久しくなりぬれど、名こそ
流れてなほ聞えけれ。

○これは、大覺寺に赴きて、古き瀧を見てよめる歌也。久しき前より瀧は水なくなりて、音もせざるやうになりたれど、まだこの瀧の名は、世間に聞えて居ると也。

○瀧、音、流れ、聞ゆなどの緣語のつかひざまが一寸と

面白きまでに、別に趣もなく、内容は平凡也。

五十六、和泉式部

あらざらむ此世の外の思ひ出に、今一度の
あふよしもがな。

○「あらざらむ」は、「死んで仕舞はむ」也。「此世」にかゝる也。

○「思ひ出」は、追懐也、紀念也 慰みぐさ也、昔の事を思ひ出して、自から慰むる事也。

○「この世の外」、即ち、「あの世」也。

○死に臨みて、戀人におくれる歌也。長くもかなと祈りし甲斐なく此を去つて仕舞うてあらうが、この儘君に逢はずして死ぬるは、餘りに本意なし。せめて死んだ後の思出の爲めに、今一度君に逢ひたきものかなと也。

○悲哀纏綿、人をして魂を斷たしむ。絶唱と云ふべし。

土佐日記講義（八）

文學士　鹽井雨江

海を見やれば、

雲も皆波とぞ見ゆる蜑もがな
いづれか海と問ひて知るべく

となん、歌よめる。さて、十日あまりなれば、月おもしろし。

○歌の意は、海上を見わたせば、大空をつゝめる白雲も、全く白浪と見ゆる。さて、漁夫も來よかし。いづれが海なるかを漁夫にたづねて知らうと思ふに、漁夫も來よかしといひたるなり。畢竟は、渺々たる雲波の差別なく見ゆるけしきをよみたるなり。○あまもがな。あまは漁夫なり。もがなは希望の詞なり。

舟に乘り初めし日より、舟には紅濃くよき衣着ず。それは、海の神に畏ぢてといひて、

何んのあしかげにことづけて、海鼠のつまの貽鮓、鮓鰒をぞ、心にもあらぬ脛にもあげて見せける。

○此の段は、舟より出でて、湯あみに行く女子たちの、かゝる舟路のことゝて、容姿を粧らず、衣服もつくりかざらず、平生にはいと恥づかしげにする立居振舞の謹みも、今日は無くて、平生にはいと恥かしげに包み隠すところなどを、はしなくもあらはしたるなど、自から平生にはことかはりたる舟路のをかしきありさまを記したるなり。○船には紅濃きよき衣着ず。「舟中にては、女子たちも、紅の色よき美しき衣服を着ず」となり。○それは海の神に云々。「舟中にて美服を着ざるは、海神は美しき物をめづる癖あれば、美服を着くる時は、海神に見込まるゝ恐れある故に、美服を忌みて着ざるなり。されば、平生にも似ず、かゝる粗服をつけ、衣裳も容姿もつくらずして、湯あみに行くなりといひて」、といふ事なり。○何んのあしかげにことづけて。「何んのかのと理窟をつけて」といふ如き意に、「葦などを踏みわけ行くとて」といふ事とを兼ねたる詞づかひなり。されば、「何んのかのと理窟をつけて、平生のたしなみも無く、葦の間を踏みわけ行くとて」といふやうに見るべし。○海鼠　形はなまこに似て圓く拳ほどの大さにて、色は赤きものなり。多く鹽にして食ふ。○つま。添へ物の意なり。○貽鮓　貽貝を酢に漬けたるなり。○鮓鰒。鰒の鮓に漬けたるなり。此の頃舟中にて食せる破籠などの中にありて御馳走に海鼠の添へ物としてありし貽貝の鮓や鰒の鮓といふ事なり。○心にもあらぬ云々。衣服の裾をまくりあげて、はしなくもあらはしたりとなり。

四日。曉より雨ふれば、同じ所に泊れり。

船君節忌す。精進物なければ、午の刻より後に、かぢとりの昨日釣りたりし鯛に、錢なければ、米をとりかけて落ちられぬ。か

ゝる事多くありぬ。かぢとり又鯛もて來たり。米酒などくる。かぢとり、氣色あしからず。

○船君。舟中の主君にて、貫之をさしたるなり。○節忌。月の中に、八日、十四日、十五日、廿三日、二十九日、三十日を、六齋日とて、其の日には、精進潔齋したるなり。今日は十四日なる故に、貫之が精進潔齋したるなり。○精進物　俗にしやうじん物といふに同じ。肉類にあらざる食物なり。○午の刻。今の午前十二時なり。ま晝なり。○かぢとり。船頭なり。○米とりかけて。金子なき故に、米を、鯛の代金として買ひたるなり。○落ちられぬ。節忌の精進を廢めたるなり。今にても、精進落ちといふ事をいふに同じ。舟中の事にて、魚貝の肉はあれど、精進物は無き故に、一日精進する事能はざる故に正午すぎより、船頭の釣りたる鯛を求めて、それを食ひ、精進を廢たるなり。○かゝる事云々。かく精進すべき日に精進の出來ぬ事が多くありたりとなり。○米酒などくる。くるはやるに同じ。○氣色あしからず。船頭が酒や米を多く貰ひたる故に、機嫌よしといふ事なり。

十五日。今日、小豆粥煮ず。くちをしく、なほ日の惡しければ、膝行る程にぞ、今日二十日あまり經ぬる。いたづらに日を經れば、人々、海をながめつゝぞある。女の童のいへる、

立てば立ち居ればまた居る吹く風と
波とは思ふどちにやあるらん

いふかひなきもののいへるには、いとにつかはし。

○小豆粥。正月の十五日には、小豆粥を煮て食ふ例なり。一年の疫氣を除くといふ。それを、舟中の事故、今日は煮て食ふ事も出來ず、いと殘念なりといへ

るなり。○日の悪しければ。天氣の良からぬ故になり。○膝行る程。舟の進みの遲きを形容して言へるなり。天氣の良からぬ故に、港に泊まり居る事のみ多くして、船の進みのいとはかどらず。僅かばかりの海路を渡りたるのみなるに、既に、二十日あまりをすぎたりとなり。○いたづらに云々。かく思ふ都へは、なか〳〵達かず。いたづらに多くの日數を經る故に、人々は、皆、海上を思ひながめてのみ居るとなり。○歌の意は、風ぞ吹き立ては、波は立ち、風が靜まれば、波はしづまる。さても、吹く風と海の波とは、蓋し、相思ふ仲よき同志ならむといふ事なり。○いふかひなきもの丶云々。か丶る稚き女子の歌には甚だよくつりあひたりとほめたるなり。

十六日。風浪やまねば、なほ同じ所にとまれり。唯、海に波なくして、いつしか、御崎といふ所わたらんとのみ思ふを、風浪ともに止むべくもあらず。ある人の、此の波の立つを見て、よめる歌、

霜だにもおかぬかたぞといふなれど
波の中には雪ぞ降りける

さて、舟にのりし日より、今日までに二十日あまり五日になりにけり。

○唯、海に波なくて云々。どうぞ早く、海上波靜にして御崎といふ所へ渡らむとばかり、ひたすら思ひ願へど、風も浪もなか〳〵荒くして、靜まりそうもなしとなり。○歌の意は、「土佐は南國なり。南國は霜も降る事は無しといふ所なるに、波の中には、雪が降るワイ。さても、けしからぬといふ如き意なり。白氏文集に「南國無霜雪」といふ語あるによりて作れる歌なり。

十七日。くもれる雲なくなりて、曉月夜いと面白ければ、舟を出だして漕ぎ行く。この間に、雲の上も海の底も、同じごとくに

なんありける。うべも、昔のをのこは、棹は穿つ波の上の月を、舟は壓す海の中の天をとは言ひけん、きゝさしに聞けるなり。

○曉月夜。曉に月のある頃をいふ。月の光りにほふ曉色の甚だ面白かりし故に、室津より漕ぎいでたりといへるなり。○雲の上。天なり。○波の底。海をいへるなり。天も海も同じごとしとは、天に月あり、水にも月のうつりたる故に、かく同じやうなりといへるなり。○うべも。なる程マアーと贊成したる意なり。○昔のをのこ。昔の人といはむ如し。○棹は穿つ波の上の月云々。これは、唐の詩人賈島といふ人のよめる詩句にて、「棹穿二波底月一、舡壓二水中天一」といふあるを指したるなり。月影のうつる海上を漕ぎ行くけしきを、かく形容したるなり。○なるほど、マアー、昔の人は、棹穿波底月云々と詠んだことであるよ 今朝の景色、誠に其の通りなりと、貫之が此の曉天の舟行につけて、賈島の詩句を思ひだしてほめたるなり。○きゝさしに聞けるなり。半聞きに聞き居りたりといふ事にて、此の賈島の詩の事を聞きかじり居りたりとなり。全くは聞き知らず、少し聞き知りたる意なり。謙遜したるなり。

また、ある人のよめる、

水底の月の上より漕ぐ舟の
棹にさはるは桂なるらむ

これをきゝて、ある人のまたよめる、

影見れば波の底なるひさかたの
空こぎわたる我れぞわびしき

○はじめの歌の意は、今、海の月の上を漕ぎ行く舟の、さす棹さきに觸るゝ物は桂であらうといふ事にて、月影うつる海上を漕ぎ行く舟の棹さきに、海藻などの觸るゝを、月の中に桂樹あるよしのはなしある故に、かく洒落ていへるなり。○月の上よりのよりはをに同じ。

○次の歌の意は、今、海面にうつる影を見れば、我が漕ぎ行く海原は、やがて大空の如し。渺々たる波上を漕ぎ行くのみならず、大空を漕ぎ行くかとも見ゆれば、さても、おぼつかなさよ、いかなる行末ならむ、思へば〱心細く悲しといへるなり。○ひさかたは、空の枕詞なり。

○二首、共に、歌としては、見どころなし。たゞ駄洒落にすぎず。次の歌などは、わびしきといひて、心細き悲しき情を言はむとしながらに、少しも、その情きこえず。これ、唯に小細工に組みたてたる歌なればなり。

かくいふ間に、夜やうやく明けゆくに、かぢとり等、黒き雲俄に出て來ぬ、風も吹きぬべし御船かへしてんといひて、かへる。此の間に、雨降りぬ。いとわびし。

○かく、月色おもしろき曉の海上に、歌をよみなどして漕ぎ行かれ行く間に、夜もだん〱と明け行きたる所が、船頭どもが、黒き雲が俄に出でたり、此の樣子にては、暴風も吹き來たるならむ、さては、危險なる故に、船を後へ漕ぎかへさむと言ひて、また、殘念にも、もとの室津へひきかへしたり。かゝる間に、雨降り來たれり。さても〱、いつ都へかへれる事ならむ、いと心細く悲しといへるなり。

十八日。なほ同じ所にあり。海あらければ、舟いださず。此の泊り、遠く見れども、近く見れども、いと面白し。かゝれども苦しければ、何事もおぼえず。

○此の室津の泊りの邊り、見わたす遠近のけしき甚だおもしろき所なり。されど、心地あしき故に、その景色の美につきて、何の考へもうかばず、歌よむ心もなしとなり。

男どちは、心やりにやあらん、唐詩などいふべし。舟も出ださで、いたづらなれば、あ

る人のよめる、

いそぶりの寄する磯には年月を
何時ともわかぬ雪のみぞなる

此の歌は常にせぬ人のことなり。

○男どち。男同志或は男仲間なり。○心やりに。心の憂欝を晴らす慰みにといふことなり。○唐歌などいふべし。支那の詩などを歌ふやうなりといふ意なり。男の仲間は、心の憂欝を晴らす慰みの爲めに、支那の詩などをうたふやうなりといへるなり。此の日記は、例の女の書きたるやうにせるなれば、かくいふべし（歌ふやうなり）と言ひたるなり。○いたづらなれば。空しく爲す事もなき故にといふ意なり。○いそぶり。磯に觸れ碎くる波といふ事なり。○何時ともわかず。何時とも區別せぬといふ事なり。○常にせぬ人のこと。平生歌をつくらぬ人の歌といふ事なり。

○歌の意は、白波の打ち寄せては碎くる磯邊には、年月を何時とも區別せずに、常に白雪ばかり降るといふことにて、磯によする白波を、雪に見たてゝよめるなり。常に歌をよまぬ人の歌なれば、とかう難ずべきにあらざれど、さても〳〵平凡陳腐なる拙歌にこそ。土佐日記の歌は、實に見るべきもの少し。

また、ある人のよめる、

風に寄る波の磯には鶯も
春もえ知らぬ花のみぞ咲く

○風に吹き立てられて白波の寄する磯邊には、鶯も春も知る能はざる花ばかりが常に咲くといふ事にて、これは、磯に寄せ碎くる白波を、花に見たててよめるまでの平凡陳腐の拙歌なり。

此の歌どもを少しよろしと聞きて、船の長しける翁、月ごろの苦しき心やりによめる。

立つ波を雪か花かと吹く風ぞ

寄せつゝ人をはかるべらなる

○此の歌どもを云々。此の歌どもを聞くに、少しく心地よろしくなりてといふことなり。○船の長しける翁。前に船君といへると同じく、貫之のことなり。○月ごろ。日ごろの誤りならむといふ說あり。然らむ。「日ごろの苦しき心やりに」とは、此の數日來、心地あしく思ひむすぼれたる心の鬱憂晴らしにといふ事なり。

○歌の意は、吹く風が、立つ白波を、磯邊に吹き寄せて、雪か花かと思はせて人をだますやうナ、さてもさても面白しといふ意にて、前の雪がふるといひ、花が咲くとよみたる二首の歌をうけて、よめるなり。此の歌も、たゞ一時のだじやれといふべきのみ。歌としては、何の韻致もなし。

此の歌どもを、人の何にかといふを、ある人のまたきゝて、耽りてよめる。その歌よめる文字、三十文字あまり七文字。人皆、えあらで笑ふやうなり。歌ぬし、いと氣色あしくて、笑ます。まねべどもえまねばず。書けりども、え讀みあへがたかるべし。今日だにいひがたし。まして、後にはいかならむ。

○人の何にかといふを。人々が此の歌どもを、何にかれと善し惡しを評するを、ある人の聞きてなり。○耽りてよめる。とやかくと人の評する歌の興にうかれて、詠まれぬ人の、よせばよいのに、度を忘れて、深入りしてよみたる故に、かくいへるなり。○その歌よめるもじ云々。その歌は、文字の數が、三十一文字にあらずして、三十七文字ありたるなり。○人皆えあらで。人々が、皆、その三十七文字もある歌のをかしさに、たまりかねて、ふき出だして笑ひたるなり。○歌ぬし云々。その三十七文字の歌を詠みたる人は、人々の皆ふきだして笑ひたるを見て、まづい顏つきして、人々の笑ふ中に、此の人一人りは笑はずとなり。

梅紅葉

（一）

川上眉山

梅の間と、紅葉の間といふのがある。七折澤の松の溪間を西へ蜿つて、岩から岩を逆落しに幾里の碧瑠璃を鎔かして行く北隈川の流れに臨んで、一間續いて南向左は八疊梅盡しの一間は、東を廻椽に南へ取つた角座敷、床に寄つた丸窓の此方から、山と山との切目を下に、田野村落。遙か彼方の海原の白帆の影までを悉く目に入れる。右は十疊北から南へ吹通しの一間で、川を隔てゝ前は山、水に突出して居る座敷であるから、背後も同じ流れを繞らして、時は青葉の楓林を抱込むやうにして、ぬいと高い千丈が嶽の翠嵐が目近かに目覺めるやう。

座敷は翠錦樓といふ旅館の奥、名高い温泉場で、都の人の遊び處である。

既夏を言ふほどになつて、土地は待構えたやうに景氣立つて、一汽車毎に客足の繁くなる時であつた。今朝まで隔ての袷襖を取拂つて、一行七人、藝人交りの物騒がしかつたのが、駕籠を揃へて八時頃に上の山の温泉へと立つて行つた。女中が跡片付けに來て間もなく出て行つたあとは、もとの青葉に溪河の水、岩を打つて、日を碎いて、雪を亂して流下る水の光は、晝に迫つてまともに照らす日影に反射して、座敷の軒裏にちら〳〵目まぐるしいやうな波紋を映じて居る。向の岸から、水の上を三尺ばかり、高く低くひら〳〵飛んで來た蝶が、河を越して暫く前の柱に縺れて、軈て座敷を通抜けて、裏の青葉の中へ隠れて行つた。

此日の一時頃、宿の前に車が四臺、一臺は荷物ばかりで

先に乘つて來たのは、焦茶の中山高、四十恰好の、見た處氣まじめらしい、色は惡い、が肥えた人で、扮裝は微塵の壁市樂に海鼠の同じ羽織、白の扱帶に黃金鎖、次は三十五六のしッとりした、色白の、品の好い、然るべき内室に見えた。次の車は、十七八の孃樣作、高髷に、透彫の平打、絽縮緬に繻珍の帶、土佐繪の上臈のやうな顏を、深張の紋緞子の傘で隱して居た。

此地に初めての客で、娘は殊に、生れて初めての旅、袖と袂と、家と家とで目を突くやうな東京の中から、一足飛に。勿論汽車の窓からではあるが、海を見る、山を見る野を見る、川を見る、肩に掛けた鍬の先に、蜻蛉を止まらせて、あけらかんと汽車の通るのを眺めて居る百姓を見る、箱庭物の模型を大きくしたやうな茅葺の家根を見る、其家の棟の紫羅傘の花を見る、琉璃のやうな其眼に殆んと應接の遑がないほど、何も彼も、假令へば路傍の古草鞋までが、狹い見聞の其眼を少からず引付けてすべてが、物珍らしいものばかりで、汽車を降りると、其先三里の山路を、これも初めての電鐵で二里、あとの一里を、田舍式の車の上で、畫も及ばぬ山岨水涯に目の休まる時もなかつた。着いて見ると、山の中、雲の近くに、又も目を迎へる數の旅館の建振、車が止まると共に愛らしげなる其胸は得ならず時めいたのであつた。

土手三番町に、師岡文平といふ、中處の紳士、妻の直枝娘の妙子の一行、思寄らぬ儲物の半月ばかりの閑暇が出來て、何處へか湯治といふ思付の、折しも勸める人があつて此處へ來たといふ、茶代の挨拶に出た亭主へ文平の物語。

通されたのは、如上の紅葉の間。

妙子の物珍らしさは、片時も坐つては居ぬ。文平の落付顏に亭主と談話して居る間も、既樣に出て、欄に倚つて、下の溪川、川に重なる石のいろ〳〵、石に躍る波の目の綾、釣橋、岩燕、山百合の花、花の中の東屋、況して對岸の青山と白雲といづれも、東京には見る事も出來ぬ光景を、手に取るやうに我物にしての一時、眼は全くの事殆んど我を忘れて居た。

いつの間にか亭主は去つた。それも知らず、彼方此方と

跡から目を移して居ると、母の直枝が、いつか傍に來て居て、不意に、

「妙、お前何を那樣に夢中になつて見て居るの。」

言はれて氣が付いて振返つた。

「あら阿母樣、いつの間に入らしつたの。」

「まア私の來たのをさへ知らないのかえ。」

「でも種々なものについ氣を取られて居たのですもの。」

「種々なものッて甚麼もの？」

妙子は其おッとりした顏に言はれぬ笑みを見せて、

「甚麼ものッて矢張種々なものよ。」

「おほゝゝゝ、可笑な人だ事、それぢや譯が解らないぢやないかね。」

「でも私には解つて居てよ。」

と年よりはあどけない。それも母の身には愛らしい一つで、笑つて同じく欄に倚つて、押並んで前の景致に對ふと、妙子は直ちに、其處から此處と忙がはしく指點して、思ふ處、言ふ處、さも樂しさうな顏色を打付けに、

「まア阿母樣、あの釣橋の處から、向ふの山の方の景色と言つたら、本當に何と言ふのでしやう。全でパノラマを見て居るやうね。」

「ほんに何とも言へない景色だね。おや〳〵松の蔭に瀧があるね。」

「瀧は彼方にもあつてよ。それ彼處に、段々になつて細い徑が付いて居ましやう。あの途中の崖の處に、それ見えましやう。」

「おう眞個に、まア奇麗だね。」

「あの傍へ行つて見たら甚麼に可いでしやう。阿母樣、此家の庭から彼方へ行かれるのですねえ。」

「然そうのやうだね。」

「行つて見たいぢやありませんか。」

「此處へ來て居れば何時でも行かれるはね。」

「ぢやア今ッから、」

直枝は笑出した。

「今ッからつて、お前まアお茶も飮まずに騷いで居る少し落付くが可いではないかね。」

「おれお茶なんぞは何うでも可くつてよ。」
其時座敷の中から、
「これ湯に入らんか。」
と文平の聲に、急がはしく振返ると、父は立ちかけて、女中が案内顔に浴衣を持つて待搆えて居る。湯と言はれると、妙子は又今更のやうに、
「おゝ私すッかり忘れて居てよ。阿父樣あの直に來るのですか。」
「然うさ。」
と文平は微笑みながら見返つた。
「お湯は那方、遠いの。」
と妙子は女中に聞く。
「いえ直ぐ下でございます。御案内を、」
と浴衣を抱へ上げて先に立つ。同時に文平は、「さア、」と再び妙子の方へ、促すやうにして立つ跡に續いて、母と諸共、妙子の上草履の足取りは、三年前の學校の運動會よりも若かつた。

（二）

小松の下、百合の此方に、今日は薄鼠の縞御召、段織の絽縮珍の帶が日に輝いて、白の絹足袋、緋の蹴出三枚裏の雪駄の鼻緒の、鳩羽の色がさも鮮やかに見えた。流れを隔てゝ振返ると、山を負ひ、水に倚つた翠錦樓の建振は今更に打仰がれるやう。自分の紅葉の間は殊に勝れた方を占めて、父と母との今しも對座して居る其影さへも一風情であつた。
妙子は一人、此方の岸に、青葉を渡る朝風に鬢のほつれを戰がせて、ちッと目を上げた時、不意に上の松の彼方で、
「兄樣、」
未だ若い、恐ろしい美しい聲、
「兄樣」
再び呼ぶ。妙子は振仰いで目を遣つたが、樹々に遮ぎられて人は見えぬ。間を置いて、
「兄樣」
と又も呼ぶ。返事がないので、

「兄様、居ないの。」
何かは知らず起直つたやう。
「あれ、兄様ッてのに、あア、餘りだわ。」
輕く飛下りる音がして、忽ち駈けて行く氣勢であつた。
只見ると、崖の上の、青葉隠東へ寄つて、今迄氣が付かなんだ東屋の端が見えた。昨日母と共に橋を渡つて此方へ來た時は、瀧の傍の、下の東屋を指して行つたので其方に又、行く處見る處があらうとは氣も付かなかつた。何様、山の裾の小笹を開いて、段を付けた細い徑が松の彼方へ入つて居る。妙子は心ともなく其處を登つて行つた。
去年浴客の爲に新らしく切開いたといふ。背後の崖を削つて下を平らした百坪ばかりの地、其處から海を見るに最も好い向にある。前を隔てゝ居た樹蔭を離れると、南に三里、それから先は際涯もない青海原を不意に目に入れて、ぱッと日の光を横顔に浴びて思はず瞬きして立止つた妙子は、右手の縁の蔭下に掛渡したハンモックの中には空氣枕と、半ば編掛けたまゝの毛糸の編物があつて、主は居ないのに、不圖目を掛けると曩に見掛けた東屋の中に二人。
一人は多分、曩の聲の主であらう。十六ばかりの、すらりとした、翻れるやうな愛嬌のある面貌、御納戸地に蔭蔦の中形物に、帯は海老茶に金銀通しの波、片手を中の卓子の上に置いて、身を寄せ掛けるやうにして立つて居た。
一人は見た處二十七八の、體格の好い見事な男振、兄妹と見えて、何處となく面差は似通つて居るが、落付いた重みのある、妹とは少からず變つて何となく打沈んで見えた。
人の足音に、二人は齊しく振向いて、同時に妹は逸早く
「あらお隣室の方。」
とばかり妙子を見てにこ／＼と笑み掛けた。
妙子は男の姿を見て少し鼻白んだが、それと聞いて、笑顔を挨拶代りに一寸頭を下げて、其儘歩出して彼方の見晴らしの好い方へと逸れて、此方を背にして崖の端にイ立んだ。

「なに隣室の方。それは丁度可い。行つてお談話でもして來るが可い。少しの間だ。邪魔をしてくれるな」

と言つた切り、卓子の上に讀みさしの、ウプトマンのハンネレエの昇天を引寄せて又讀出した。

「でも知らない方だもの。」

竊と妙子を見返つて言つたが、兄は顏も上げず。

「兄樣、兄樣ツてば、」

と甘えるやうな調子、

「五月蠅いな。用もないのに何だな。」

「だツて。」



と笑顔にじぐねて見せる、兄は不意に、

「可し。俺が行つて頼んで遣らう。」

「あれ、」

と言ふ間もなかつた。ずんと立て、つか〳〵と妙子の方へ近寄つた。物に馴れぬ妙子の思はずはッとして急に振向くと、此方は何の見得もなく、輕く會釈して其儘衝と傍へ寄つて、

「貴孃お隣室に居らつしやるお方ださうでつい存ぜんので失禮をして居りました。實に今承まはつたので、お隣室づからの



好誼に甘えて、御厄介な事を願ひに來ましたが。」

と彼方に立つて居る妹の方を見返つて、

「あれに居ます妹がな、此地へ參つてからお談話相手がないので、酷く淋しがつて困つて居るのですが、何うでしやう甚だ自由がましいやうですが一つお近附になつて遣つて下さいませんか。」

妙子は少からずどきまぎしたが、漸くの事に塲を繕つて、羞かしげに、

「お言葉で恐入ります。私こそ、あの、お願ひ申したいのでございます。」

「や、それは早速に有難い。美津、早く來い。」

とばかり振返つて目顔に招寄せた。美津子は立つたまゝ、未だ面羞げの妙子を見て氣の毒さうに、

「兄樣は亂暴だから……」

獨語くやうに言つて漸くに近づいた。兄は更に心を置かぬさまに、

「はゝゝゝ、や、何分願ひます。」

向直つて妙子に挨拶して、二人を置いて前の東屋へ引返すと、既何も忘れたやうに再び讀耽けるのであつた。

「まア兄樣の勝手な事、」

と振返つて見て居た美津子は、妙子に打詫びるやうに、

「貴孃御免なさいましよ。兄は彼の通りのぞんざいな人で、何も搆ひませんものですから、」

と莞爾やかに、最の兄に向つての口吻にかへて頗るませて居た。

「いえ何う致しまして。全體私の方から御懇意を願はなけりやならないのですが、何だかきまりが惡いものですから、昨日もお目に掛りながらつい失禮を致しました。」

妙子と美津子とは昨日浴室で逢つたのであつた。美津子も同じやうに、

「あれ私こそですわ。」

と稍親しげに、

「あの貴孃は何日此地へ入らして。」

「昨日參りましたの。貴孃方のお出になる二時間ばかり前でした。」

「おや然うでございますの。矢張東京から。」
「はい。何ですか最う初めて參つたものですから、何も彼も珍らしくつて這麼好い處はないやうに思ひますの。貴孃は最う度々此方へお出のやうでございますね。」
「はい。兄が旅好だものですから、よく方々へ連れられて參ります。」
「あの、お兄樣は何と仰有いますの。」
「兄ですか、兄は高村幹夫と申します。」
「えッそれでは、彼の、たしか油繪をなさいます?」、
「よく御存じね。然うでございますの。」
「まア些少も存じませんで。彼の方があのお兄樣でございましたか。」
知つて居る筈、父の居間に、現に其人の手に成つた製作が掛つて居るので、妙子は父から幾度か其書に付いて、所謂巨工苦心のあとを仔細に聞かされて居るのである。」
我にもあらず振返ると、靑葉の中の東屋の中に、飽まで輪廓の正しい、言はれぬ品位を持つた其面差は今更のやうに目に付いた。
何かは知らず胸の轟くのを覺えた。此お方がかね〴〵父樣の、あれほどに譽めちぎッて居た名手であッたか。思設けず同じ宿の、隣座敷の襖一重、何といふ緣であらう。
折節登って來る客もなかつた。海と空と、山と雲と綠に動く日の光の、此處は暫く三人の世界で、妙子と美津子の談話は漸く奥に入つて、二人共に底のない心を交はして親しく打解けた。妙子が幹夫に向つての好奇の心は倘止まず、それとはなしに多く美津子に問出す言葉を、美津子は何も包まず其上にも兄の事をさま〴〵に語つた。妙子は我にもあらず熱心に耳を傾けて居た。暫くして幹夫も書を伏せて徐て此方へ來る。妙子は始終伏目になつて居たが、耳と其眼とは、人知れず驚かるゝほど鋭かつた。

（三）

其日を過ぎず、梅の間と紅葉の間の隔ての襖は取放さ

れて、師岡夫婦も思はぬ知己を得たのを喜んだ。端居の月に水のやうな空の、宵には幹夫と文平の素謡の聲、後座には水鷄に妙子の薄茶手前、軒端の松の影もいつか椽を外れて、別れて枕に就いた頃は。瀬々の河音のみの高い既夜更であつた。

翌けの日は誘合つて、近くの勝地に袂を連ねて行く。女三人、男二人前後に笑ひさゞめいて、美津子と妙子とは其中にも、二つ離れぬ蝶を其儘、搦合つて子供のやうに浮れ廻つて、先へ着いて一休みした頃は、山路に馴れぬ都女の揃つて綿のやうに疲れて、途々折つて來た野の花の束木の葉石、挽物細工、名物の栗羊羹などを脇に直枝も同じ仲間入して駕籠に釣られて歸つて來た。

次の日の文平と幹夫とは局に對して圍碁の半日、直枝は脇に周旋して、妙子と美津子とは女中を案内に、麓の村祭を見物に行つた。夜は打寄つて、今宵も隈のない月の下に、多く世を見た文平の昔話、續いて幹夫が洋行中の物語などにいつものやうに更けた。

此やうにして六七日は夢のやうに過ぎた。夢、寔に夢のやうであつた。妙子は是迄、此時の如く言ふやうもなく浮き〱して、我を覺えぬ日を送つた事はなかつた。時の間に美津子とは、幾年越の馴染のやうにもなる、幹夫には更に、初めて來て初めて見た山水のそれよりも尚、日に新らしい心を重ねて日に其胸にさま〱の綾を織る、譯は知らず現ともない時は飛ぶやうに流れた。けれども今、突然其夢から覺めたのであつた。覺めると共に、急に我身を振返つて見る。振返つて見て妙子は殆んど言ふ事を知らなかつた。

妙子の身は疾くに定まつて居るのである。去年十一月、事の成るまで妙子は何も知らなかつたが、遠い親戚の名古屋の遠藤といふ方へ、早く結婚の約束が出來て、一月後には先へ迎取られる事になつて居る。議が熟してから妙子は初めて始終を聞かされたが、其やうな事を充分に解釋するには未だ心が餘りには若過ぎた。寔の事、妙子は此地へ來た時も、未來の其人の事一月後の大禮の事などは、殆んど念頭に置いては居なかつた。極めて無邪氣な、極めて不用意の間に、妙子は今迄につ

いぞ覺えぬ心地を覺えた。覺えながらも、それが何といふもので、何のやうな事を望むものか、それをすらも知らぬのである。

幹夫は又、其の身の藝術の上から、多少の觀察をした外には、妙子に就いて餘り重きを置いて居なかつたので、何の心搆えもなく、胸を打開いて語りもすれば、妹と同じやうに愛らしいものに思ふほどの淡泊な男であつたから、一擧一動無心に唇を洩れた其一言をさへも、妙子は竊かに何れほど深く味つて居たらうとは夢にも知らなかつた。

すると今朝になつて、名古屋から文平へ宛て丶一通の封書が屆いた。いよ／＼來月、某々の日、妙子を迎取るに付いて、豫め打合せの書面であつた。妙子はそれと聞いて、自分ながらも怪しまれるやうに、俄かに胸が塞がつたのであつた。

耳に入れると共に竦然として、思はず色を失ふばかりになつて、初めて自分は外に心を何れほど深く運んで居たかといふ事を知つた。妙子の初戀は此やうにして胸に燃初めて、それと自身に心付いた時は、出口に向つて何處までも垣を結ふ其人が、儼として既居るのであつた。

席にも堪へられず、父と母との其事に付いて語らう間を一人走出して外へ出た。母に問はれたらば其場に泣倒れもしたらう。足のふみども知ず、何も夢中に人目のない裏の楓林の中へ入つた。何としやう。妙子は如何なる事情の下にも、飽まで其意志を貫くほどの、力量のある婦人には生れて來なかつた。其初め双親に、此縁談の事を言はれた時にも、顔を紅のやうにしたのみで、何も言ふ事が出來ず、又言ふほどの考をさへ持たなかつた。何の考もない中に、事は決つて、既結納も取交されて、何くれとの支度さへいつの間にか出來上つた。父の命をば殆んど絶對に拒む事の出來ぬ妙子、まして今になつて何と仕様があらう。

林を拔けて、河原に優しげな撫子の中に、臥牛のやうに横はつて居る巨石の前へ來ると、それなり其上へ突伏して了つた。身を知るほどの涙は一時に堤を切つたや

うに後から衝上げて來る。双の袂に顏を掩うて、聲にさへ出して泣くのであつた。

（四）

一人庭傳ひに、湯上りの袖を捲り上げて、葉卷を口に當もなく裏山の方へ出て行つた幹夫の跡を追うて、妙子は今、心ばかりは精一杯に思定めて同じく山の麓へ來た。最早包まず何も彼も打明けて、成るならば幹夫の力を藉りて免がれぬ羈絆を解いて貰はう、と人も聞かぬ唯二人の今此時を得難い機會に、兎もあれ必を決して來たのであつた。

胸は含郤む、目もあやなく、其處にも臨まぬに身は既慄はれるやうに、人や見ると後を振返つて、路を横に、態と幹夫とは離れた方の松の彼方へ出た。

松に隱れて、ちらと見ると、幹夫は後向に、未だ濡髮の艶々しい色を見せて、廣い肩幅に華美な宿の浴衣を夕日に染めて立つて居た。それと見たばかり、胸は轟いて、聲さへ掛けられず、素知らぬ振に、ときめく心を押へて前へ出て、其處等を眺めて居る態に佇立んで居た。

「おッ、妙子さん。」

不圖目を移した幹夫はゆくりなく其姿を目に入れて直ちに近寄つて來た。妙子は振向いて初めて氣が付いたやうに、顏を見合せて、

「おや、」

とばかり、幹夫は近づきさまに、

「お一人、」

「はい。」

其間につか／＼と傍へ來た。我にもあらず妙子は俯向かれて、譯もなく足元の草の上に眼を逸らした。

「何時入らしつた。」

「あの只つた今參りましたの。」

と未だ耻羞を含んで居る。幹夫は心にも止めず、

「然うでしたか。些少も知らなかつた。貴孃、最う此處等も少しも珍らしくなつたでしやう。」

「いゑ私は未だなか／＼飽きは致しませんわ。」

「ふむ、よく／＼お氣に入つたと見える。同じ此處へ來

るなら貴孃のやうにありたいものだ。私なぞは最う歸風が立つて、今も明日あたり發たうかと思つた處、」
「えツ、」
と妙子は不意を打たれて、急に振仰いで思はず顏を見詰めて、
「あのお歸りなさるのでございますか。」
幹夫は微笑んだ。
「はア、實は種々用もありますし、長く遊んでは居られんので、間がよかつたらば明日の一番で歸らうかと思つて居ます。」
「あの本當に、」
と度を失つたやう。
「尤も天氣都合もあるけれど、外に障りがなくば明日にしやうと思つて居ます。折角お馴染になりましたが、いづれ又東京でお目に掛かる事にしましやう。」
別離、別離といふ事を妙子はそれ迄少しも思つて居なかつた。結んで解けぬ身の悶えさへあるに、其人は既歸るといふ。跡は何となる事か。これほど思ふせめて十分一でも知つて下さつたら、みす／＼振捨てゝ歸つて了ふやうな事はして下さるまいに、と心はあせつても口には出ず、怨めしげに、
「まア、餘りではございませんか。未だお知己になつたばかりですのに、何で那樣に早く歸つてお了ひなさるのでしやう。貴郎方が歸つてお了ひなされば、私も何だか最う居る氣はございませんわ。」
思に餘つて漸くに言つた。それとも知らず、幹夫は輕く聞流して、
「然しいつまでも御一所に居る譯には行かんから、」
と言つたが、流石に常ならぬ妙子の氣色を見て、
「貴孃方もいづれ東京へお歸りなさるでしやう。歸つた上で何のやうにも御交際が出來るではありませんか。」
妙子はそれ處ではない。あゝ、少しも察しては下さらないのだ。とばかり言葉もなく、悲しげに差俯向いた。
「まア室へ行つて茶でも入れましやう。實は未だ歸る事は誰にも話してないのです。美津も屹度貴孃のやう

に、那樣に早くと言つて未だ〳〵此方に居たがるでしやう。」

と座敷の方へ引返さうとした。

「貴孃、入らつしやらんか。」

妙子ははツと思つた。今此時を外したら、最早再び此やうな機會は、と我を忘れて慌たゞしく、

「わ、もし、貴郞、」

と口を銜いて不意に迫つた聲、

「え、」

と一足踏出した幹夫は何事と振返る。其眼に出遇ふと、口は敢なくも又噤まれて、颯と顏を赧らめておど〳〵した。

幹夫はぢツと見て、訝かしげに、

「何ですね。」

と流石に聲を優しくして言つた。妙子は殆んど自分にも意外に、

「いえ、なに、あの美津子さんに伺ひましやう。」

幹夫は尙、不審らしい眼を注いで、

「何ですか。私に解る事なら、」

傍へ差寄つた。こゝで言はなければと、妙子の胸には、我と我に烈しく責寄せるものがあるやうに覺えた。それにも拘はらず言葉は餘所に、

「いゝえ、矢張、後に美津子さんに、」

泣かぬばかりであつた。

「然うですか。それでは後に。まア參りましやう。」

踵を返して幹夫は先に立つた。妙子は又もはツとしたが、追うて出るほどの聲は出なかつた。

其時忽ち、

「あら妙子さん、此處に居らしつたの。私先刻から甚麽にか探してよ。」

松を外れて聲と共に美津子の影。あゝ、機は早く去つて了つた。妙子の胸の苦しさは更に言ふばかりもない。

（五）

豫期した通り高村の兄妹は翌日東京へ歸つて行つた。

主人を先に宿の女中共の聲々に送出されて、車に乘つ

て、行く姿の見えずなるまで、同じく上り端まで送つて來た兩親の蔭に、座敷へ歸るのも忘れて瞬きもせず妙子は見送つて居た。車は矢のやうに既影もなく、路には跡に輕い塵の、空しく立舞つて居るのが只目に入つた。東京へ歸つたら、屹度入らしつてよと美津子も言ひ、遊びにお出でなさいと幹夫も言殘して行つたが、それが何にならう。自分が東京へ歸つた後は、數へるほどの日數の中に、自分は最早師岡の娘ではないのだ。

前後合せて八日ばかりの間、妙子は其間に、物の始と終とを見た。夢のやうに來て、夢のやうに去つて、胸から胸へ人知れず深く葬られた。胸の其墳墓の、未だ餘りに眞新らしい。人事の變轉の豫め期する事は出來ぬけれど、妙子は何時此夢から忘れやう。

父と母とに促されて、心付いて漸くに座敷へ立戻つた。こゝも昨日の家とは思はれぬやう。山の姿、水のたゞずまゐ、何が面白くて這麽ものに目を喜ばせたのだらう。七時二十五分、二人は最早電氣鐵道の上に居ると思つた。

隣りの梅の間へ入つて、絶えず其人の居馴れた席へ、せめての心ゆかしに坐つて見た。耳に其聲、目には其影、去つて歸らぬのは昨日の其一時、と思ふと身の置處もない。

床を見ると、昨日幹夫が下の河原で手折つて來て、未だ朝露の置いたまゝに、籠に投入にした撫子が其儘挿けてあつた。妙子は其中の一二本を拔いて取つて、疊紙に入れて大事に納つて置いた。

晝になつても、食事さへ進まなかつた。直枝は氣遣はしげに、

「妙や、何うしたのだね。先刻から欝いてばかり居るぢやないか。

「え、」

と妙子は、思はず母の眼色を見上げたが、

「でも美津子さんが行つて了つた、何だか最う詰らなくなつて了つたんですもの。」

「それで那樣に欝いで居るのかえ。僅かの間に大變仲好しになつたものだね。まア可いはね、こゝに居る中に

はね、又いろ〳〵のお知己が出來るはね。」
何も御存じないから、と妙子は母をちッと見た。何れほど知己が出來やうとも、あゝ最早何にならう。
「阿母樣、いつ東京へ歸りますの。」
それには答へず不意に聞いた。母は笑つて
「あれ最う歸りをいふやうになつたの。未だ暫くと父樣も言つてお出なさるよ。お前も今度は歸るといろ〳〵用があるのだから、此方に居る中に出來るだけ樂をして置くが可いよ。」
「然う」
とばかり力のない返事であつた。風が起つて、松に揉まれて、颯と座敷へ吹入れた。瀏々として行く溪河の水、汽車は今頃何處を過ぎたらう。



雜録

物語の發達

文學士　中内蝶二

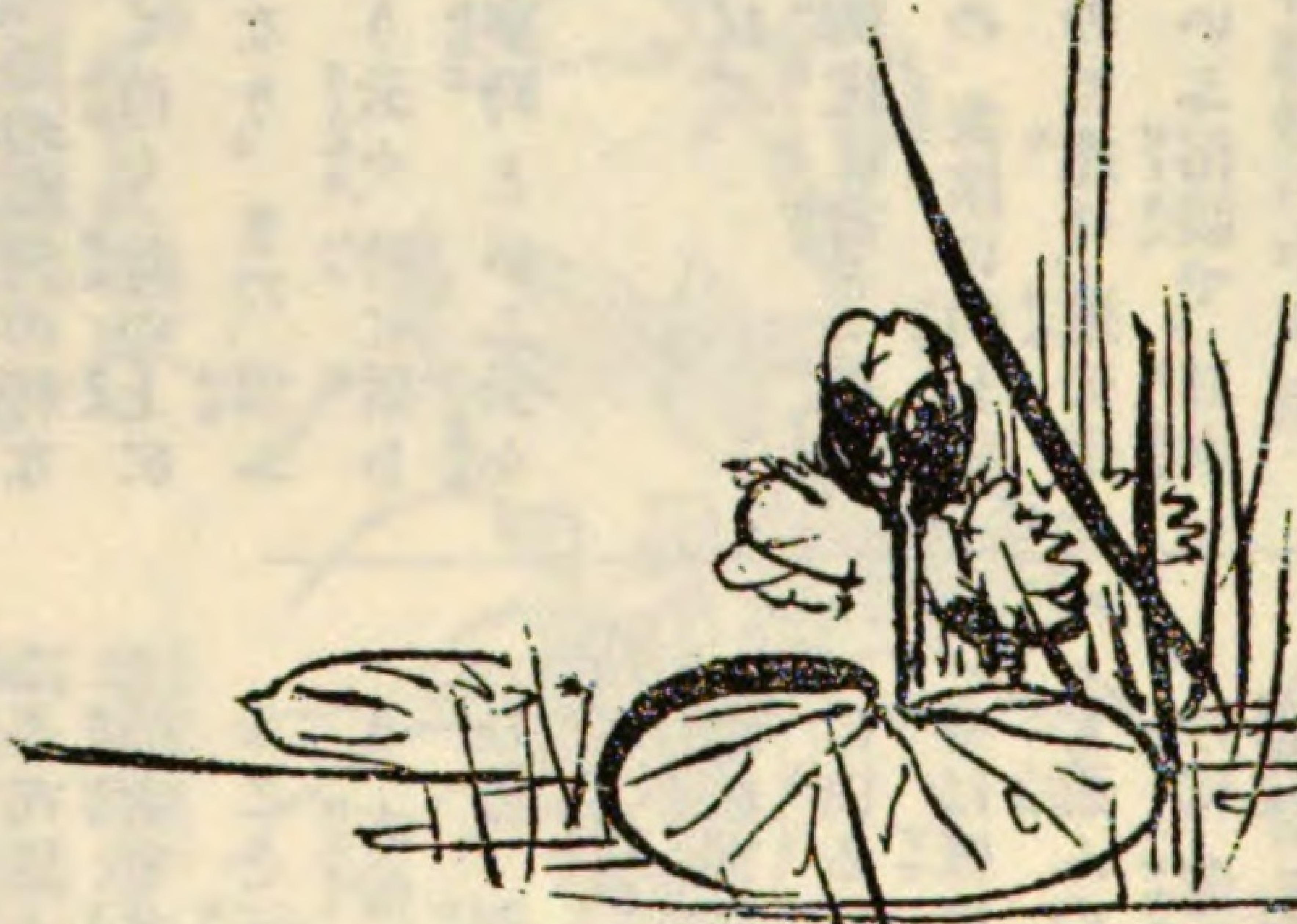
一　物語の意義及起源

物語とは談話と云ふ義にて、後の世に所謂小説と等しきものである。小説の意義は、漢書に街談巷語、道聽途説者之所レ造也とある通りで、もとは浮世話を聽くに從つて書き綴つたものであるけれど、文字の發達進步するに隨つて、詞藻に富みたる才士佳人が、その艶麗なる筆を弄びて、歷史や傳記の中にある事柄を敷衍し、或は些細ばかりの面白さうな事實を根據として、これに自分の想像を加へ、或はまた、世の中にあつた事を其儘に記錄し、或は跡方もなき事柄を空中に搆へて、それで以て一篇の冊子を作り、讀者を樂ましむべき一つの

道具としたので、我國では、昔から之を稱して物語といつたものである。

さらば、この物語といふものは、いつの頃から始まつたものであらうか。神代のことはさて置きて、人皇の御代となりては、日本紀に見えて居る夢野の鹿の物語と、雄略記に載せてある浦島か子の物語の如きものを、先づ物語の濫觴と云つてよからうと思ふ。

夢野の鹿の物語は、仁德天皇の御代にあたりて、攝津國莵餓野といふ所に、牝鹿と牡鹿が住で居たが、或日牡鹿は憂はしき顔をして、牝鹿に語つていふのには、われは昨夜變な夢を見た。霜が澤山降つて、我身にかゝつたと見て夢がさめたやうに思ふが、これは何かの前兆ではあるまいかと尋ねると、牝鹿は暫らく首を傾けて、それこそ、御身か獵人の矢に斃れて、遂には肉



に鹽を塗らるゝ應に違ひないと判斷したが、果せるかな、其牡鹿は曉に獵人の矢に中つて死に、其肉は天皇の御饌物となつたといふ物語である。今日本書紀に載せてある文を見るに、

俗曰く、昔一人ありて莵餓に往く、野の中に宿れり。時に二つの鹿傍に臥す。鷄鳴に及ばむとするや、牡鹿、牝鹿に謂つて曰く、吾今夜夢みらく、白き霜多く降りて、吾身を覆ふとみつ、これ何の祥ならむと。牝鹿答へて曰く、汝出で行かば、必ず人のために射られて死なむ。即ち白き鹽を以て其身に塗ること、霜の素きが如き、これ應なりと。時に宿れる人、心の裏に之を異む。未だ昧爽に及ばざるに、獵人ありて、牡鹿を射て殺しぬ云々(原文漢文)

とある。また、釋日本紀に引いてある攝津風土記には、父老相傳へて云ふ、昔は刀我野に牡鹿ありき、其嫡牝

鹿この野に居る(中略)明旦牡鹿その嫡に語りて云ひけるやう、今夜の夢に、われ背に雪零りおけりと見き。また、すゝき草生ひたりと見き。この夢何の祥ならむと。その嫡(中略)これを相して曰く、背の上に草を生ずるは、矢背の上に射るの祥なり。また、雪ふれるは、白き鹽宍に塗らるゝの祥なり云々、終に射られて死す。故にこの野を名づけて夢野といふ云々(原文漢文)

と見えて居て、多少の異同はあるやうだ。

また、浦島子の物語は、雄略天皇の御代に當り、丹波の國の人で、水の江の浦島子といふもの、海濱に釣を垂れて、大きな龜の少女に化けて來たものに逢ひ、遂に手を携へて海に入り、蓬萊山に到つたといふ俗談で、日本書紀には、

丹波の國、餘社郡管川の人、水の江の浦島が子、船に乘りて釣りし、遂に大龜を得たり。便ち化して女となる。是に於て、浦島が子、たけりて以て婦となし、相逐ひて海に入りぬ。蓬萊山に到りて、仙衆を歷り觀る云々(原文漢文)

とあるが、萬葉集九卷の長歌と、釋日本紀とに引いてある丹後風土記の大意は、

仙女と共に蓬萊に赴き、そを妻として歡樂をつくしゝこと三歲に及びしが、故鄕を懷ふ念の頻なるにより、本俗に還りて、今一度兩親の顏を拜まばやうと願ひぬ。別るゝ時にのぞみ、仙女一つの玉手匣を與へて、再び逢ふまで開くことなかれと戒しむ。かくて別れて故鄕に還れば、人物風俗、全く遷り易りて、更に由る所あらず。古老の相傳ふる所の話を聞きて、身は既に三百餘歲を經ぬることを知りしかば、仙女を慕ふのあまりに、かねての禁言を忘れて、其匣を開けば、忽ち老ひて仙たる身を失ひ、跼蹐して歌を詠じ、仙女は遙かに芳音を飛ばして、之に和したり云々

と見えて居る。この浦島子のことを、歌に詠じ、詩に吟じ、また文につくつたものも少なくは無いが、群書類從卷百三十五に見えてゐる浦島子傳、續浦島子傳といふ二つの文章は、頗面白く書かれたものである。續の方

は長過ぎるが、浦島子傳の方は次の通りだ。
雄略天皇の二十二年に當りて、丹後の國、水の江の浦島が子、獨り船に乗りて靈龜を釣る。島子屢々浪の上に浮び、頻りに船の中に眠りぬ。その間、靈龜變じて仙女と爲り、玉鈿海の上に映じ、花貌船の中に燿く。廻雪の袂の上、迅雲の鬢の間、容貌美麗にして魂を失はしめ、芳顔薫躰克く調ひ、楊妃西施に異ならず。眉は初月の峨眉山を出づるが如く、靨は落星の天漢に流るゝに似り。浦島が子、神女に問うて曰く、何の因縁を以て、吾扁舟の中に來れるや。又た、汝何れの所にか棲めると。神女答へて曰く、妾はこれ蓬山の女、金闕の主なり。不死の金庭、長生の玉殿、妾が居るところ、父母兄弟は彼の仙房にあり。妾世に在る時、夫婦の儀を結び、しかも、われは天仙と成つて蓬萊の宮の中に樂めるに、子は地仙となつて澄の江の浪の上に遊ぶ。今宿昔の因に感じ、俗境の緣に隨ふ、子宜しく蓬萊の宮に向ふべし、將に曩時の志願を遂げ、羽客の上仙とならしめむとすと。島子唯諾し、仙女の語に隨ひ、須臾にして蓬山に向ふ。ことに於て、神女島子と携へて蓬萊の仙宮に到り、島子を門外に立たしめ、先づ金闕に入つて父母に告げ、しかる後共に仙宮に入りぬ。神女の並べること秋星の天に連るが如し。衣香の馥々たるは、春風の百花の香を送るに似て、珮聲の鏘々たるは、秋調の萬籟の響を韻かするが如し（中略）金精玉英、丹墀の内に敷き、瑤珠珊瑚、玄圃の表に滿ち、清池の波心、芙蓉居を開いて榮を發し、玄泉の涯頭、蘭菊咲を含みて稠からず。島子神女と玉房に入れば、薰風寶衣を吹いて、羅帳香を添へ、紅嵐翡翠を卷いて、容帷玉を鳴らし、金



窓素月を斜にして幌を射れば、珠簾松風を動して琴を調ぶ。神女語つて曰く、朝には金丹石髓を服して、暮には玉酒瓊漿を飲む、千莖の芝蘭は老を駐むるの方にして、百節の菖蒲は齢を延ぶるの術なり。妾漸く島子の容顏を見るに、年を累ねて枯槁し、日を逐うて骨立す。定めて知る、外には仙宮の遊宴を爲すと雖も、内に故郷の戀慕を催すを。宜しく舊里に還りて、本境を尋ね訪ふべしと。島子答へて曰く、暫らく仙洞の霞筵に侍りて、常に靈藥の露液を甞むるは、これ我が幸にあらずや。久しく蓬壺の蘭臺に遊びて、恣まゝに羽客の玉盃に甘むずるは、これ我が樂にあらずや。進退左右にあり、豈に旨に逆ふことあらむや。然りと雖も、夢常に結ばず、眠久しうして覺めむことを欲し、魂常に故郷に浮びて、涙新房を浸す。願はくば、吾暫らく舊里に歸り、やがて又仙室に來らむと欲すと。神女然るべしとし、玉匣を送り、嚢むに五綵を以てし、緘るに萬端の金玉を以てす。島子を誡めて曰く、若し再逢の期を見むと欲せば、玉匣の緘を開く莫れと、言了りて約成り、手を分つて辭し去る。島子船に乘りて、眠るが如く自から歸り、忽ちにして故郷澄江の浦に至りぬ。尋ねて七世の孫に値はず、只萬歳の松の茂れるを見るのみ。島子齢時に二八ばかりなりき、堪へざるに至り、玉匣を披いて底を見れば、紫煙天に昇りて其賜なく、忽然天山の雪を頂き、合浦の霜を乘せぬ矣(原文漢文)

以上は、たゞ古老の口碑に語り傳へてゐた昔話の、その事が恰度歴史に關係してゐるといふのか、日本紀などに採つて記錄してあるのみで、未だ、一篇の物語本となつて傳へられて居たのではなかつた。

《未完》

米國女氣質（其二）

在米スタンフホード大學 飯島立峰

二 女子の教育

是は一の大問題でありまして、女子教育の盛否を見れば、直に其國文明の程度を知ることを得、從ふて一國一

社會の興廢隆頽にも關する、と謂てよろしい米國今日の盛大は、實に女子教育の旺なるに淵源して居ると考へます。唯り米國のみならず文明と謂はるゝ歐州諸國を見れば、實に女子教育の普及し居る事が明かであります。故に森文部大臣が在世の當時に於て、熱心に女子教育の必要を稱へられたる事は、大臣の卓見として、吾人の肝を銘じ、共に其實行に力めたきものとおもひます斯る重要問題たる女子教育に付き、當米國は如何なる主義方法を採りつゝあるかを見るは、極めて有益な事と信じます。けれども寡聞淺學の私には、到底充分に立ち入つて、觀察することは出來ませぬ。

設備　之は男子に對すると同等に、十分の設備でありまして、修學上に出來るだけの便利を與へ、注意を加へつゝあります。而して公立學校は、概して無月謝であります



學校系統　之は日本に於ては、昨年來教育界の大問題となりて居りますが、當米國に於ても、同様の論がありまして、既に本年より修學年限等を改めたる學校もあります、其系統を述ぶれは、左の如くてあります。

◎グラムマースクール

直譯すれば文法學校となりますが、即ち日本の小學校であります。修學年限は八年で、卒業に優等と尋常との二種の區別を附けます。優等卒業生は無試驗、尋常は或課目の試驗を經て、中學校に入るのであります。修學中欠席遲刻は非常に嚴しく致しまして、必ず監督者の證明を要します。校長が直接に生徒に向て呵責咎問する有樣は、日本の小學校長が御役人風を氣取り、高く止りて直接に

生徒に關係せぬとは、大に異りて居ります。又教室への出入は必ず引卒官の號令を以てし、決して自由勝手に着席退席を許さぬといふ事と、躰操は必修課目の中に入れて居らぬ事とが、日本と異つた點であります。併し躰操が皆無といふのではありませぬ。隨時に必修せしむるのであります。又然でなくも運動好の米國人でありますから、恰も瑞西國人が一般に射撃を能くすると同樣に、必ず夫々の運動を爲すことも、又日本の生徒が成るべく躰操を避くるの風あると、大に異つて居ります。

◉ハイスクール

直譯すれば高等學校であります。即ち日本の尋常中學校でありまして、年限は三ヶ年でありますが、大學に入りて後に、學力の不足を感ずるとのことにて、四ヶ年にしたのがある。此學校にても規則は嚴しく行ひます。茲では躰操は普通のと兵式のとゝもに之を課し、其他ベースボール、フートボール等の野外遊戲は、各自之を行ひます。又此時代の中にダンシング（舞踏）及びミチシッグの如き、交際的遊戲ともいふべきものを、一通り修むる事となつて居ります。夫れですから、青年男女にして、少くとも此二つを能くせざるものは、殆んどありませぬ。唯取除けは何處も同じ貧者の子弟であります。

學校によりては、陸軍の豫備學校となり居るハイスクール（高等學校）があります。兵式躰操に比較的重きを置くの違があるのみで、其他にも何も變りはありませぬ。躰操の教官は概して豫備後備若くは現役の將校であります。

又學校は信用程度を異にして居りまして、甲のハイスクル卒業生は、無試驗でカレージ（專問學校）又は、ユニベーシテ（大學）に入れますが乙のはさう行きません日本から來てハイスクールに入り、後に大學に進まんとする人は、最も注意すべき點であります。又一つ注意すべき事は、物理、化學、動植物等の科學は、書籍上の理論よりも、實驗に重きを置く事であります。之が爲めか、米國人は概して學理應用の仕事が發達して居る樣

であります。

◎ユニバーシテー

大學であります。米國で大學といへば、なか〳〵澤山ありまして、一州には必ず一個以上の州立大學があり、其他に私立大學がありまして、千八百八十九年の統計の大要を上ぐれば、左の如くであります

ユニバーシテ及びカレーヂ(卒業生に相當の學位を授くるもの)合計四百十五校

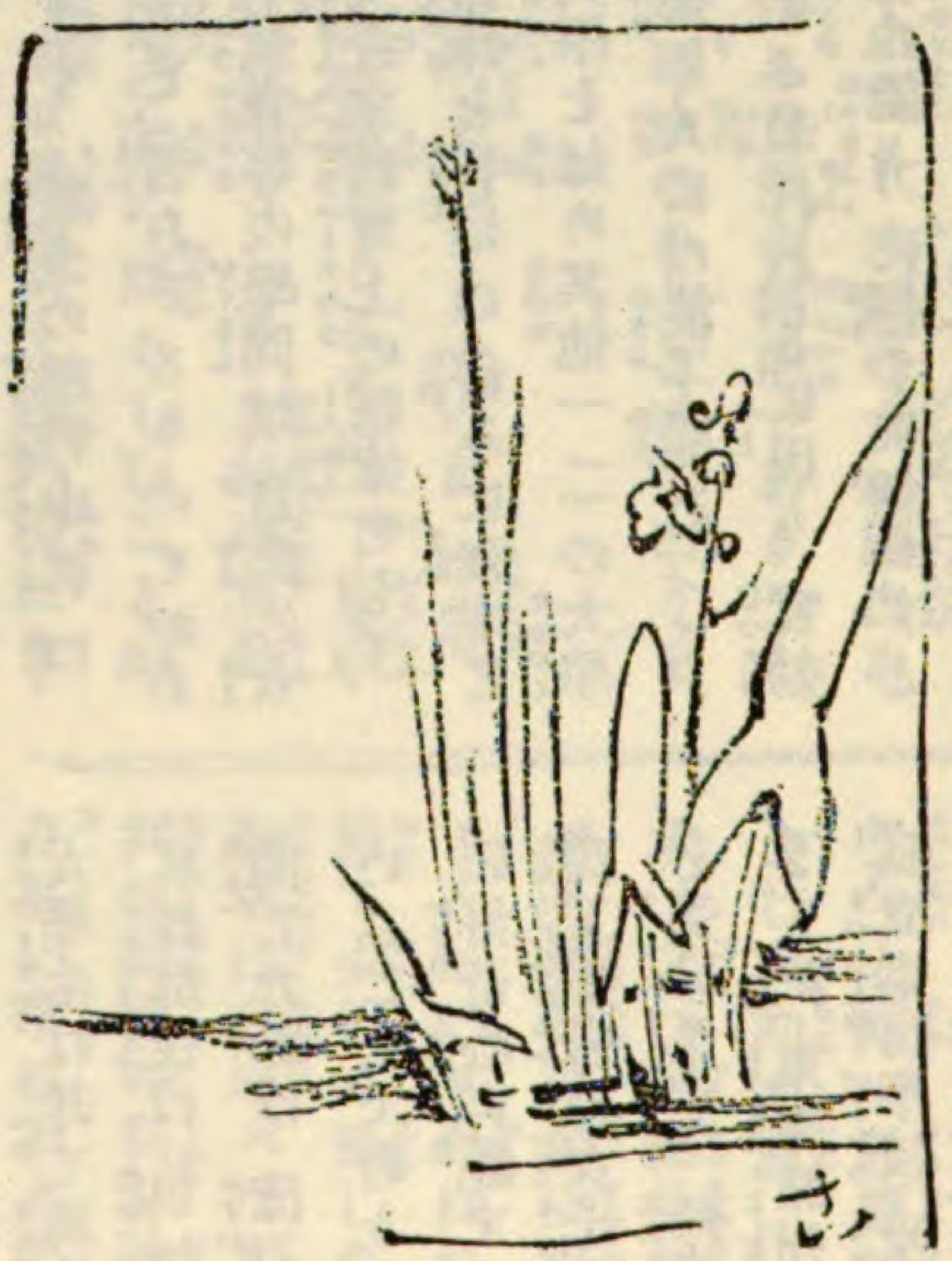
敎授及講師合計八千九百十一人

(內女子千八十三名)

學生合計拾一萬八千五百八十一人

{男生 八萬六千六十六人}
{女生 三萬二千五百十五人}

科學及古文學の學位を有するもの合計九千十七人(男女の別は不明なり)



法學醫學神學の學位を有するもの合計三千二百九十六人

名譽學位を有するもの(合計七百二十七人)

(內D.D.を有するもの二百七十四人)

前表の如く大學及び同等のカレーヂ(專門學校)を合して、總計四百有餘の多數、其間には數等の階級がありまして、「エール」、「ハーバード」等の如く首位を占むるものは十餘校あります。又西方諸州に於ては、「スタンフォード」大學及び「カルフオルニヤ」大學、其他一二に過ぎませぬ。茲に着目すべき現象は、此第一位を占むるものは、多くは州立(公立)にあらずして、私立に屬するものであります。

◎敎育主義

當米國は一般に男女混淆敎育の制度を採りつゝあるとで、下は小學校より、上は諸種の專門學校、大學、及び同

等の學校に至る迄、同一の方針に依つて居ります。前掲の學校は、獨り女子に向ての學校を示したのみならず、即ち一般の學校を述べたものであります。單に棟を同うするのみならず、男生と女生と同一教場に於て、同一の講義を聞くのであります。數多の學科中には、自然に女子に相當らしきものと、否らざるものとがありまして、文學、美術、醫學、教育等の學問は、自然に女子に相當してゐます、併し又近來教育上の新案として、專攻主義と稱へて、學科の選擇を各自の好みに任すといふ主義を、スタンホード大學を始め其他一二の大學は採つて居りますが、是は全く人には能不能あつて、一を能くするも他を能くせざる恐れあるに因り、實効ある教育を授けんには、各自の能力に任すに如かずといふ理論より案排せられたもので、目下餘程勢力のある說です。此專攻主義に付て、面白き實話があります。その事は一面には當米國女子が、餘りに極端に走るの欠點あるを例證して居ります。即ち一女學生が、法律の學科を撰擇して、該教場に出席して居りましたが、偶々刑法中の强姦の問題に入らんとするや、擔任教授は早くも右の女學生に眼を着け、一言の注意を與へて、「當分出席せざるが可ならむ」と言ひました。翌日該問題に入らんとするや、教授の忠告に拘はらず、右の女學生は却て興味ある如くに出席し居るを見た。其故に該教授は、第一に右の女生に向て、强姦罪の定義を質問したれば、流石に耻入つたものか、早々退席したりといふことであります。余は之を聞て米國女子が、餘りに好奇心に馳するの弊を深く感じました。

商工業家の女子の大多數は、公立の豫備學校にて教育を受けます。此事は西方諸州に於て、格別の樣でありますが、東方諸州に於ては、女子に向つて特別に數多の私立寄宿學校、又は晝間學校を設けあるとの事であります。右の學校を終り、尙進んで高等の教育を受くる女生の數は、却て男生の數より多數を占めて居ります。其所以は男子は出で丶實際に就き、以て生活の法を立つる必要があるからでせう。又之に反して女子は一方に於ては精神上の快樂を滿たさんため、又他方に於て

は餘暇があるからですそして此時期に於ける女子の年齡は、平均十七八歳です。(米國では年齡を數ふるには滿月を以てしますから、日本の數へ方によれば十九二十歳です)御承知でありませうが、米國では二十歳以下で結婚する女子は、比較的少數でありまして、二十三四以上甚しきは三十位以上迄も、未婚の女が澤山あります。是は社會の進歩に伴ふ自然の傾向でありまして、之を詳論すれば、なかなか理由のあることであります。

亞米利加の敎育の缺點といふ所を聞きますのに、中等、高等の敎育を無報酬にて、自由に授くることは、下層社會の女子に身分不相應の欲望を起さしめ、其結果自分の運命の果敢なきを嘆じ、失望の淵に陷らしむことが多いといふ點であります。一寸は眞理ある論の樣にきこえますが、其反對に若しく可憐の女子に、向ッて一定の敎育の外には、決して之を受けしめてはならぬといふのと其利害得失は如何であるかは、大に研究すべき點であると考へます。偖て東方諸州(紐育方面)に於ては、女子に施す大學敎育は、特に彼等の便利に向つて建設せられたる、多くのカレーヂに於て與ふる樣になつて居りますが、西方諸州(桑港方面)に於ては、州立大學に於て、男子と同一管理の下に各科共無報酬にて敎育して居ります。又私設の專門學校も澤山ありまして、男生と同一敎場に於て敎授しまするることは、前に述べました如く當「スタンフォード」も混淆敎育であります。之は現總長が特別の考慮に出でたわけです、けれども總長は多少混淆敎育の弊害あることを認めて居らるゝかとも思はれます。其弊害云々に付いては別項に於て少しく論じませう。

敎場は右述べたる通り、男女生同一でありまして工科幷に同樣の科を除く外は、何れの敎場に到るも、女生を見ない事はありませぬ。其中でも語學或は文學に近き科目には、澤山居ります。併しながら敎場を除いての外は、寄宿舍、居室、食堂、躰操場等は、全く別にして居ります。而して男子は其等とは全く離してあります。縱令朋友の間と雖も、各自の居室へ招き入るゝといふ

事は、決して許しませぬ。必ずパーラー（應接間、日本の本座敷に相當するもの）に招きて、互ひに語り合ふのであります。日本の女學校へ行つて見ますと、斯る事までも一々嚴則として筆太く書き立てゝある樣であります。文明といはるゝ米國では、斯る事を規則に書き立てゝはなく、社會自然の制裁に任してありまして、一旦之を冒すものあれば、成文律を破りたるより、一層嚴しく社會の制裁を受けて、其人は男女共に社會以外に放逐せられますのでありますから、誰も之を冒すものはありませぬ。實に進んだものであります。斯の如き男女席を同ふせざる如き場合は、恰かも支那流儀の男女間に、鐵壁を設けたると同一の感じが起ります。

結婚叢話

淺田空花

◉夫の品性

◎女子が其夫を求むるに當つて、充分夫たるべき者の素行、品性を確かむべきは無論の事である、が、是等は世の所謂道德家、宗教家、教育家なる人々より斷えず警戒されて居る事たるのみならず、多少教育ある女子は百も二百も承知して居る所であるから、今更ら仰々しく繰返すの必要もない。

◎故に玆には單に衞生上の問題として、醫師的の忠告として他の方面より、今尚ほ世間に行はれて居る偏僻、無法の思想に對して、一二の辯解を爲すに止めやう。

◎偏僻無法の思想とは外でもない、若い內に多少の道樂をした者でなければ、とは日本の社會に殆ど眞理の如く反響する所の聲である、歐米の社會に於ても同じ意味で、改心した道樂者こそ最も善き花婿なれ、といふ聲が屢々繰返されて居る、誤れるの甚だしきものである。

◎抑も道樂者とは何か、處女の純潔を瀆し、婦人の德性を誘惑し、賣女の汚に染むだ者ではないか、宗教と科學の力に依つて辛じて組立た人倫の大本——結婚の幸福を毒すべく常に身を持ち崩して居る者ではないか。

◎彼等の非行、汚穢を最も能く知る所のものは醫師で、假令外に發せざる迄も彼等の十中八九までは皆恐るべき病根を醸して居る、其病毒は忽ち妻に及び、子女に及び、永久絶滅すべからざるに至る。

◎純潔の女子にして一度其腕を採らば、最早運命の盡で、自分の一代に於て之が酬を受けざるものは必ず其子女に酬い、罪なき子女をして恐るべき忌べき病氣の犠牲たらしめずむば止まぬ。

◎貞淑、潔白を以て尊敬を受けて居る貴女も、折々醫師の門を叩て夫とは心付かず臆面なく皮膚病の診察を乞て、其平生を知る醫師をして吃驚せしむる事が屢々ある。

◎日本には是等の例は未だ頗る稀れであるが、歐米諸國では澤山ある、大抵夫と知らば病毒ある男子その交際に依つて接吻に依つて忽ち傳染を受けたのてある。



◎只一回の接吻と雖とも、其病毒を傳へて餘かある。伊太利の歴史、確しか十六世紀頃の伊太利の歴史を見たものは必ず思出すであろう、或る貴族は君命默し難く、餘儀なく其仇敵と媾和せざる可からざる場合となつたので、一計を案出して、君命を奉じ、快よく君主の面前に於て敵と和し、更に二心なきを示すが爲めに敵と相抱き、其上に敵の唇頭に敬やしく接吻を與へた。

◎元來敵と和するに意なかりし貴族はこの一度の接吻に依て、其憤恨の情を遣つたのである、貴族の計謀案の如く、敵は其後間もなく、之より病毒を受けて醜き死を遂けた、貴族は云ふまでもなく黴毒患者であつたのである。

◎今日は十六世紀の昔しと違ひ、醫術の如きは偉大の進歩を爲して、これ等の忌むべき病氣も大抵根治さるヽ事となつたから、其點に付ては大に安心であるが、其

危險の度に至つては昔しも今も更に變りがない。

◎文明的道德の多く唱道せらるゝ丈け夫れ丈け、危險は寧ろ益す〳〵增進して來る傾きがある、其病毒が全然社會に跡を絕つに至らざる間は、到底其危險を免がれ難い。

◎何となれば文明的道德が旺に唱道さるゝ樣になれば自然社會の制裁や嚴重になる、人々は自然に自分の汚行、不面目を蔽ひ隱さうとする、勢ひ熟練なる醫師の手を借るを厭ひ、出來得る丈手療治を以て彌縫し置くといふ風になる、能く〳〵重患者であるか、鐵面皮の者でなけれ容易に醫者にも明さない、折角進步した醫術も斯の如き次第で、手を空うして居るといふが如き有樣である。

◎而も世に道樂者の種は盡きない、盡ないのみならず、較もすると前述の如き誤まりたる思想の爲に歡迎さるゝが如き社會の狀態である、この間に處する女子は餘程注意戒愼してかゝらぬと、忽ち身の破滅を來して取返しの付かぬ不幸に沈淪するとも限らぬ、意地惡き伊太利貴族は臻る所に徘徊して居るのである。

◎如何にして容易にこの病患ある者と否とを辨別し得べきかといふ疑問は、醫師の屢々受くる所であるが、未だ其外部に特徵を發せざる間は、醫師と雖も診察の上に非らざれば分らぬ位であるから、豫言者ならぬ素人には無論分る道理がない。

◎其點に至つては即はち一に其人の品性、素行を詳しくするより外はないのである。

◉人相と人物

◎哲學者屢々語つて曰く、怠惰者の閑談は大氣を通じて永遠無窮に震動して止むことかない、人の感情、思想も亦斯の如し、必ず其躰軀に消し難き痕迹を止め、同じ思想の下に永く支配さるゝ人の外形には自ら其思想の形跡を留めずむば止まずと。

◎骨相學、人相學、看掌術、其他諸種の名目の下に、其外貌によりて人の未來、運氣、事の吉凶善惡を卜するといふことも穴勝道理のない事でもない、歐米にもこの種の卜巫者か隨分居る。

◎日本では未だ却々流行して居る、殊に緣談に對して行はれ居る、平常馬鹿らしき業として嘲つて居る者も、緣談となると急に賣卜者の門を叩たり、九星しらべをしたり、三世相などを珍らしく繰廣けて見るといふが、世の親心である。

◎が、是等は所謂當るも八卦、當らぬも八卦で、東西孰れを問ず、未だ眞に正確の結果を得たものは甚だ稀れで、大體に於ては相違なきを得るも、尠く細目に立入ると妄斷、無稽、容易に適中し難い。

◎或る日耳曼の科學者て、有名なる某氏は、これ等の局部觀でなく、人躰の各部の組織に就て、其外形の差別、異同に就て仔細の研究を爲し、其習慣、感情、氣質、意志の變轉等に照らして、人相と人物、と題する一書を著はした。



◎兎も角、學者の研究といふので、一時旺に歐米に行はれた、一寸面白い節もあるから、これも結婚談、夫撰擇の一便法として、其中の重なる一部分を抄譯して見やう。

◎先づ其形躰の大小に就て謂へば、躰の大きく、骨格逞ましき者は、其精力、筋力に於て頗る勝つて居るが、意志の力、固執の力に乏しく、優美たる情緒に缺げて居る。肥え大つた者には好佃の氣質を供へて居るが、だらしなく、怠惰者か多い、痩たるものは元氣に滿て居るが概して短氣で怒つぽい。

◎人間の頸は最も多くの意味を語る部分で、前後左右より之を見るを得べく、肉體組織の最も主要なる部分である、大氣と食物の關門たるのみならず、心臟と腦髓との連絡を通ずる所で、兼て人體の姿勢を支配して居る部分である。

◎前頸部の充分發達して肥え太つたるものは壯健多血

の質で、忍耐力に强い、婦人にしてこの外觀を備ふるのは、如何なる難産をも多くは切り拔ける事が出來る。
◎後頸部は最も腦髓に接近するものなるを以て、主として心的狀態を語る、後頸部の短かく圓き者は競爭心に富み、競技、勝負事を好むで、自分の本職は多く身に着かぬ者に多い、細く多少彎曲して外見美はしく多くの婦人に見る如き後頸を有するものは、精神に健全なる發育を有して居ることを示す、全體に比して後頸の殊に粗大なるものは槪して神經質である。
◎柔く、量多く薄き毛髮は小兒の如き單純無邪氣の資質を語り、黑く、濃きものは或る頑丈なる氣質を顯す、赤味を帶びたるものは槪して感情に强きもの多きも寧ろ體質の虛弱を現はすといふが適切である、多くは瘰癧症に罹り易い、特更ら毛髮の薄いものは槪して精神の過勞といふことを語る。
◎哲學者ヘルデルは、偉人傑士と稱せらるゝ者は槪して他の模倣すべからざる眼光を有して居るといつた、眼付に依つて其氣質を語る場合は頗る多い、が、多くの僞善者の眼は容易に判別し難い。
◎只最も注意すべきは、自分の目を以つて對手を正視を得ざる者、何事も語らずして單に目付を以て或る意志を發表し得るもの、この兩者である。前者は槪して對手に語るべからざる事を敢てし、後者は對手の聞くを欲せざる事を敢て聞かしむるの意志を有して居る。
◎要するに身體の組織に過不及なく、壯健で、元氣で、容貌美ならざるも、何處かに威高き風采を備へて居るものは、其心狀、其德行とも槪して完全の發達を遂げて居るものと見てよい。
◎男らしき男といふは即ち是れで、人相、骨相、種々の見分方はあるも、要するに玆に歸着するに過ぎないのである。
◎細やかなる點まで注意すれば、髯の工合、靴の耗り方下駄のはき樣、一寸した物の言ひ振りにも自然人格の現はるゝものであるから、可成、多くの人々に就て、仔細の觀察を怠らぬが肝心である。
◎最も能く當る易者は最も多く事物の成行を辨へ、人

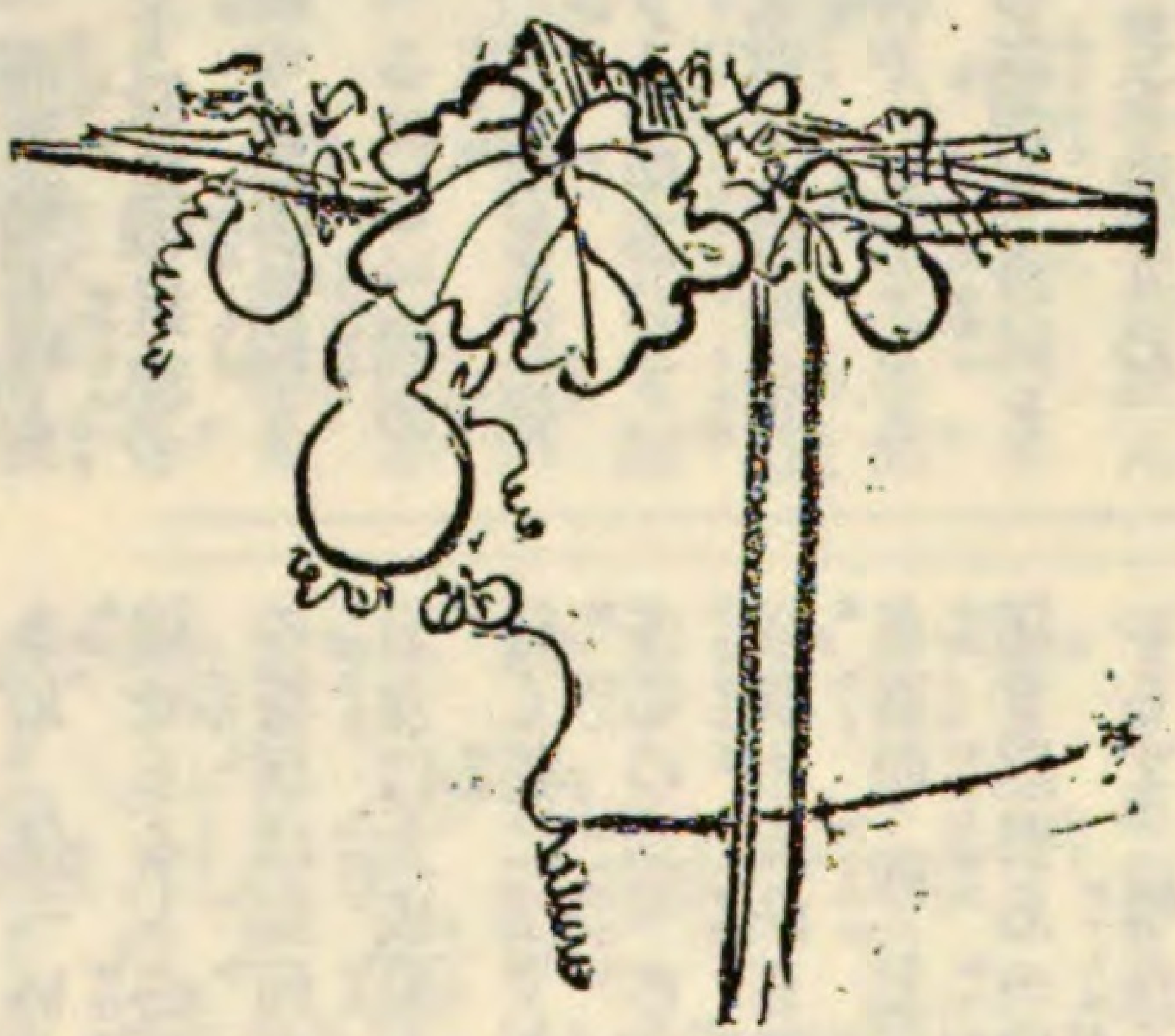
情の機微を知つて居るものである、觀察と注意に怠たらずむば、更めて人相見の門を叩くにも及ばぬのである。

瓜生岩女（三）

文學士　常盤大定

◎矯風

これ岩女が尤も心血を枯らせしものなれば、少しく詳細に亙りて之を記す事とせん。岩女は墮胎の蕃風を矯正せんものとて、かねて心盡し、甲斐もなく、到底之が一洗の途なくして、明治の大御代となり、警察令の發布ありて以後、其周到なる注意によりて稍々面目を革めしも、猶陰かに之を行ふもの盛なりしかば、警察にてはこの惡習を根絶せんには大英斷に出づるの外なしとなし、之を犯すものあれば、容赦なく獄中に捕へぬ。かゝれば暫時の間に三十四人の入獄者を見るに至り、諸般の流言一時に興り人心堵に安んぜざるに至りぬ。是等の犯罪者たる、其罪固より甚だ重しと雖、爾く惡意より出でしにあらず、唯古よりの習はしとて、知らず〳〵の間に犯しゝものも多ければ、



岩女は之を見て同情の念に堪へず、思ふやう、其筋の趣意は實に民を愍むの外なく、一視同仁の法令唯感謝すべきものなれども、既に事の是非をも辨へぬ鄙人の事なれば、彼等を獄中より救ひ出して後、如何にもして其心を戒め正して、大御代の惠みに浴せしめん、われ斷じて其責に任じ、是等犯罪者をして、一視同仁の趣意に感泣せしめ、延て以て良風俗を作すを得んものと。若松縣廳に至りて、當路の人に向ひ、赤心を吐露して、哀訴嘆願せしも許されず。力なく故郷喜多方町に歸れば、彼處には慈母の懷を離れたる子女あり、此處には其女其妻に生別せる老人あ

り、夫あり。これを見、彼を見ては、流石に涙に富める岩女の事とて、しばしとだにも席暖まるに遑あらず、彼を慰め、此を勞はり、更に當路の人に就きて哀訴嘆願する事、縣廳の若松より福島に移りし迄、前後幾十回といふ事を知らず。喜多方町と福島間、三十餘里の道程、涙と共に出で、涙と共に還り、あらん限りの涙を絞りしかば、聞く人ごとに感涙に咽びつれど、されど一國の法は、情によりて枉ぐべきに非ざれば、其度ごとに強顏くも拒まれて、雄々しき志も遂に貫くに由あらず、今は爲すべき手段もつき果てたれば、此上は人力の企て及ぶべきにあらず、唯神佛の加護を仰ぐの外なしとて、河沼郡なる中田の觀音堂に月參りを爲し、丹誠を凝して、獄中のものゝ苦を救ひ賜はんことを祈りぬ。現時なほ毎月十七日の緣日に中り、晝夜共に接待の茶を出し、參詣の人の渴を醫するは、實に岩女の殘しし紀念なりとぞ。

こゝに又會津野澤の山中に一神祠あり、靈驗灼然たりとて、近鄉近在は勿論遠く越路の里よりも參詣するものも多かり、岩女はまたこゝにも月詣でを爲しつゝ數歲の長きに亘りしが、明治十二年の夏の頃例の如くこゝに參籠して、曉近き比、「佛法俗」と鳴く鳥の音をききぬ。傳へいふ、一たび此聲を聞く時は、祈願の素志の達せらるゝ必然なりと。篤信燃ゆるが如き岩女の此時の喜びは如何なりけん、感極りて涙垂れたりとかや。岩女は大に勇みつゝ、山を下り、兎角の思ひを焦しつゝ行く程に、ゆくりなく禪僧某氏に出であひぬ。岩女は多年の志と、又ありし奇異の事どもを語り出でつゝ、矯風の良法を問ふ事切なり。僧いふやう、墮胎の如き鬼畜の行を敢てして、而も自ら愧ぢざるに至れる根深き惡習を一洗せんと、到底一朝にして其効を見るべからず。唯淳々之を導き、先づ根本の精神を治めて、後枝末の行爲に及ぶの外、別に策あるべからず。根本を治せんは、佛家の法によりて授戒會を開くに若くべからず。戒法に數多ある中、先づ入門のものは五戒なり。五戒とは不殺生、不偸盗、不邪婬、不妄語、不飮酒にして、是一として過失を防ぎ、邪心を正し、以て人心を

仁慈の道に向はしむるに非るはなし月を重ね、年を經て、漸く授戒の功績を彰はさば、人心必ずや仁慈に歸しさしもの惡習も根本より一洗するの日あらん、云々。岩女之を聞き、喜ぶ事一方ならず、神明の告げ玉ふ所是なんめりと。家に歸りて、男祐三に告ぐるに此事を以てせしに、祐三も亦大に之を賛し、速に之を實行せんとを勸めしかば、先づ近郷四十餘個寺の同情を乞へりしに、概ねこれを雲烟過眼視するのみにて、又一人の起ちて應ずるものなかりき。岩女頗る奮激し、我が熱心の足らざるを戒め、遍く一寺々々に就き、言を竭して說き廻りければ、其赤心に動かされて、賛成するもの多かりしも、猶岩女の如き身素封にもあらざるものが、此不生産的の企てを爲せる事とて、半信半疑の間に彷徨せり。岩女はたとひ如何なる艱難に迫るとも、斷じて寺院の出金を促さゞるべき事を誓ひ、遂に漸く定會を設くるの基を定めつ。十三年六月を以て第一回を耶麻郡熱鹽村示現寺に開くの運びに至りしも、人の集合する見込少かりしを以ては、岩女頗る遊說に力め、寢食を忘れて東奔西走、茲に多數の集會を見て愈々授戒會を擧行せり。岩女は如何なる事柄も其由來を知らざれば、誠に興味も價値もなきものなり、古々しき茶釜も千の利休が用ゐしものなりといへば貴く、一挺の鋸も西塔の辨慶が七ッ道具の一ッなりといへば非常に愛せらるゝものなりなど。日々寺の緣起及び温泉の事蹟等を說き、巧みに佛法の妙味を加へて、爽かなる辯舌を以て反覆丁寧に敎へ導きしかば、衆深く感に入り、互に誘ひ合ひ、盛んに一七日の授戒會を終りしに、其結果空しからず、幾分か墮胎の惡風を去りき。岩女大に勵み、十六年の春、復も第二回を開き、十七年、十八年、廿一、廿二、廿三年の間に前後七回。其間又絕えず、矯風の遊說を爲しければ、流石の根強き惡習も全く其跡を絕ち、今や全く一人の之を犯すものなく、當時の岩女の苦心は昔語りの種となれるぞ、皆岩女一人の力なる。當時人皆岩女を呼ぶに、佛岩女といひ、又は瓜生菩薩とをいひて、依信一方ならざりしも、理りなりかし。

こゝに墮胎の弊習止むと同時に、數の免れざるは、切々

の生計に追はるゝものが、其子の增すに隨ひ、彌々困窮に陷り、親子共に餓死の悲境に臨むものあるに至れる事なり。されば墮胎の弊の止むに相次ぎて必要なるは、是等瀕死の子弟を養育するにあり。既に會津の悲母として、闇より闇に去る胎兒を救へる岩女は、其生後の鞠育の覺束なきを見て、何ぞ徒爲に之を目視するを得ん。これ岩女が矯風に盡せる後、救育の業に其半生を蕩盡せる所以なり。救育事業の端緒は既に之を記せり。今後の奔走多くは皆之に關せるものなり。

婦人記者

□　東生

社會の文明の進歩すると共に、婦女子にも職業の必要を感ずるに至るものである、從つて婦人の働くべき範圍は廣まり、或は慈善事業、或は敎育事業等種々あるべしと雖ども、新聞雜誌の記者となるが如きも、確かに文明婦人に適當なる職業であらうと思ふ、

元來婦人の本務たるや、家政の主務者たるのみならで、其智能の及ぶ限り、適當の業務に從ひて社會の爲めに貢獻しなければならない、加之社會は男子の力に依賴する多きと共に、婦女子の力にも依賴すべきもの少なくない、即ち女性てふ婦人固有の特性は、男子の能はぬ働きを爲し得るもの、殊に記者としては、男子は社會の表面上の事柄には通曉し得べきも、社會の裏面に於て、世態の眞相を精察し、人情の神秘を透見するは婦人たる者の所謂女性の作用に待つもの多きを以て、記者たるの職業は、男子の手腕を要すると共に、又た婦人の特性的能力を必要とするものであらうと思ふ、

されば、歐米の文明諸國に在つては、盛んに婦人記者は用ゐられ、婦人は記者として極めて必要のものと見做されて居る、從つて頗る好待遇を受け、且つ恐るべき勢力を文壇に振ひつゝあるを見る、見よ歐米各國に於ける婦人記者の狀態を、佛國には婦人記者のみを以て組織せらるゝ新聞社あり、英國にも頗る盛んに婦人記者の活動せるあり、その他の諸文明國にも、多少婦人記者を置かざるはなく、新聞社には「婦人局」を設け、新聞紙

の一面又は一段を婦人界の記事に充つるを見る、されども、婦人記者に付きて語らんとせば、先づ米國を以て其最なるものと云はざるを得ない、米國は婦人記者の最も發達し、且つ成功せる國である、米國は元來男尊女卑の弊なきのみか、女權は非常に擴張せる國で、それは一般に女子の智識の發達せるに由るものだから、米國婦人の勢力たるや、社交上にも、政治上にも、經濟上にも決して輕視さるべきものでない而して此の如く米國の社會に於て、婦人記者を重要視せるは、社會のあらゆる大問題を解釋するには、一方には男子の觀察を要すると同時に、又た一方には婦人の觀察を要するを認めたるに由るであらうか、米國には婦人記者最も多し、新聞社内に居る者の外、特別寄書家なる者もあり、特別寄書家とは、米國婦人の生活に窮せざるものにして、相應の才識を具ふる者は、其家に在りながら、宗教、文學、教育、其他社會上の問題に對して自己の意見を述べたる論文を寄贈するなり、此等の寄稿は新聞社にては、喜んで之れを誌上に掲げ、随分高き報酬を拂ふを吝まず

現今にては、ハーランド女史の料理、ミラー夫人の服制クロリー夫人の流行物、及びニリベリ夫人、ワード夫人等は、其優待せらるゝ寄稿記者たりといふ、而して米國幾多の新聞社は、皆婦人記者を傭用して、其手に成れる記事を掲げ、著しき問題及び事件に付きては、目覺ましく「女性によりて觀察せられたる云々」の標題を掲げて、讀者の歡迎を博せんと企圖するが如くである、此の如く米國の新聞記者は、随分世に持て囃さるゝと共に、また其職責や重大に、其熱心且つ勇健なる盡瘁は實に驚くべきものである、今此に其事例を少しく擧ぐれば、當世女性新聞記者として、雷名を世界に轟かせるニリベリー女史は、嘗て潛水者の服を着して紐育灣の海底を潛り、碧茫たる海底の光景を描きて、天下の耳目を聳動し、又た或る時は、冒險的にも、七十餘日を以て世界を一周したることあり、又たノラ、マークス女は、ユリカラレテー瘋癲病院内の惡弊風を暴露し、天下の正義輿論に訴へんとて、自から扮して狂女と化裝し、白日大道を狂叫して、遂に警官に捕縛せられて同病院に護送

せられ、無數の狂人が受くる無殘なる待遇を目擊し、其後幸くも親友の救助に依りて病院を脱出し、而して瘋癲病院の内情を悉く訐發し、大いに輿論に訴へて打擊を加へたり、又たパスカル女史は、軟弱なる一女子の身を以て、獰惡狂暴なる惡漢の群に入り、其魔窟の罪惡を探訪して、之れを新聞紙上に詳報し、以て一代の社會人心を啓發したることがある、此等は模型的米國女流新聞記者にして、之れに類せる勇ましき冒險的行動を以て、天下の喝采を博せる女流記者少なからず、此の如く米國にては、婦人記者盛んに新聞社に採用せられ、探訪記者として、評論記者として、冒險記者として、最も必要なる種類の記者と見做さるゝのである、

我國に於ては、未だ盛んに婦人記者の世に出づるを見ないけれども、亦た全く無い譯ではない、報知社にては疾くに婦人記者を採用し、且つ之れを養成し來たれるが、今や數名の女記者を有し、いづれも文筆と編輯事務に熟練して、十分に記者としての手腕を揮ひ居るといふ、我國にて始めて、婦人記者を採用するの先例を開らきたるは、報知社であらう、其他新聞雜誌に筆を執る女流記者少からはずして、中には隨分健筆家もある、されば、我國にては漸く婦人記者の出でんとする時なれば、將來盛んなるの日あるべきかと思ふ、吾人の見る所では、新聞雜誌の記者となるは、教育あり、能力あり、且つ一身の自由なる婦人に在りては、最も適當なる文明的職業であらうと思ふ、而して又た婦人の心と手を借りて、所謂「女性によりて觀察せられたる社會」を紹介せられなば、社會及び民人は、如何に莫大の効益を享くべきやを思ふ、故に吾人は、有爲の氣と實力ある婦女子にして、進んで記者となるもの多からんを望むのである、

編輯餘錄

◎高等女子師範の山川二葉子といへば會津古婦人の典型を具したる床しき老婦人である明治十年より今日まで高等師範に勤めて居る人で師範の女生徒で女史の薰陶を受けぬものは一人もないと謂つて善からう

◎花嫁の不遇

史は痛く日本の家庭の不行屆を嘆息

して居つた今日の日本の家庭といふものは新日本と舊日本との衝突である此家庭に行く花嫁は其間に立て挾擊を喰ふのである、

◎新舊二主義　御亭主は兎に角新日本主義であるとしても御亭主さん許りの言ふ通りにも成つて居られない御父さん御母さんは皆舊日本主義である洋書を讀むと生意氣だ束髮に結ふと御轉婆だ女が家を外にして義務年限たからつとて學校に毎日出勤されてはこまる、

◎家庭の草叢　斯くの如くにして光彩あり希望あり敎育ある花嫁も何時の間にやら家庭の草叢の中に埋沒せられ黑板に白墨で書いたものを消すやうに學問も敎育も全く拭ひ去られてしまふ、

◎今日の敎育　を受けたものが御父さんとなり御母さんとなる時代には家庭の有樣は必ず改善せられませうが今日の家庭は何事もハンパで御坐ります家庭の改革といふは女子を救ふには最も必要の事であらう、

◎德川時代　の社會はアレで首尾整然として居つたものですが德川時代の社會は以て今日の社會と爲すに足らず去りとて新社會は未だ全く成らず今日の社會に處するのが一番六ヶ敷いでありませう、

◎或女學校の敎師　の話に、テニスなどをやるのに、婦人を相手の時には輕く打たねばならぬといふ者があるけれど自分は決してそんな遠慮をしない、不肖ながら是れでも先生と言はれるからには、生徒に虛僞を敎へる事は出來ない、矢張り十分に力を入れて打つて見せると言つてゐた、

◎生徒の浴衣　大阪から來た或女敎師が、東京の女學生は浴衣の上に蝦茶の袴をはいて學校に行くと言つて、大へんに不思議がつてゐるから、何故だと聞いて見れば、大阪では、浴衣は夜着るものと極つてゐて、女が晝間に學校に着てゆく事などは決してないさうだ浴衣といへば此頃大ぶん筒袖の浴衣の女學生を見かける、浴衣なら一寸と拵へて見るにも金が餘計に懸らなくて都合がよい、此の夏を機にして盛に流行らせて見たいものだと　或改良服通が言つてゐた、

◎警察醫長山根正次君の家庭衞生談は一寸傾聽すべき處がある、一例を言へば、氏が番町成女學校の家庭衞生會で話された中に、こういふ事がある、

◎肉食論　日本の國は御承知の通り牧畜の盛んになかつたのと神佛に對する迷信のために餘りに肉食を致しませんでしたが私は大いなる肉食論者です茶漬に香々ちさつぱなますを食うて居ては立派な國民になれません、征清軍の當時に徵して見ても日本人に握飯に梅干で充分堪えて行かれると云ひますが肉食したなら一層立派な者になれる（學理からの話はお解りにくいと困るから平易に致しませう）

◎野菜の必要　肉食に伴ふては最も野菜が必要です早い話が肉ばかり食べて居ると便秘する野菜を併せ用ゐると此憂がないのです穀類の産物の中で豆腐は最も滋養に富んで居る殆んと牛肉に代へられる位だが消化がよくないから少々氣をつけねばならん

◎牛乳を用ゐよ　牛乳を用ゐる人は近來中々多うなつたが中には牛乳など臭くつて嫌だといふ人もある殊に御婦人方に見受ける樣ですが牛乳は成るべく多く用ゐて貰ひたい日に一合や五勺では効能が薄いです家庭で追々澤山に牛乳を用ゐる事になると自から乳が安くつて良いものを供給される獨逸などは牛乳の消毒、灑す事などが非常な大仕掛で行はれて居る少し大きな店になりますと一日一軒の乳搾員四千五百石それを廿五萬人の花主に配布する中には菓子にもなりバタに造らるでせうか平均して見ると獨逸人は一日一人一升八合の牛乳を用ゐるです、

◎鍋の注意　氏は多くの鍋を示して「此赤い釜これは鉛が出ますから有害です市に賣つてあるものは皆破わさして仕舞ひましたそれから此早鍋と云ふやつこれも惡い中に白いものを塗つてある牛鍋も普通のものは矢張いけない」その他種々、

◎勿躰ない　勿躰ないと云ふ事是は是非やめて貰ひたい少し臭はするが格別はないだらう勿躰ないからと云ふて夏分など宵越のものを食べますと夫こそ藥代や診察料が勿躰ない譯になる若左程迄に至らんでも此樣な

事で少しでも腸胃を害して置くと疫病の黴菌がぢき取つき易いです、充分腸胃が健康でありますると入つて來た黴菌も生育する譯にいかんのです、

◎過食の害　また私の知つて居る所で奥さんが女中供に宵越のものを食べてはいけないと云ひつけて置きましたら或時晩のおかずの茄子の味噌和が澤山殘つたスルトおさん先生わしたになると棄てにァならんから今夜の中に食べて仕舞ふと云ふ譯で一人で平らげて仕舞つたからサァ堪らない夜中にはきくだしを始めまして私は二時頃に呼ばれた事があります置いて置くと惡くからと云ふて一時に食べるのもまた險呑です女中などにはよく氣をつけておやんなさい、

◎食器のこと　食器も白いものが宜いですが洗ひ方はまた餘程氣をつけねばならん脂の付いた者などは他のと區別してその都度丁寧にお洗ひなさい食器の薄汚いのは唯に見えの惡いばかりでなく衛生上有害でありますから茶椀の裏底に至る迄奇麗にして頂きたい是茶椀は古物ですなんどゝ茶渋のかゝつた者なども珍重するのは下らぬ事です奇麗であつても古物は古物と目のある人には見ゆるので……

◎布巾のこと　それから食器を拭く布巾ですねえ隨分方々の臺所に鼠色のが懸けてある是は是非改良しませんけりやならん即地の薄い麻などで幾つか造つて番號をつけて置いて始終眞白に洗濯するのです、

◎食卓のこと　食卓は高い方が宜しい背を屈めずに食べられるからです脚のない低い膳などは最も惡い宴會などで第一にお給仕の婦人の裾がばた／＼低い所に并んで居る御馳走が塵だらけだ、

◎酒のこと　私も一しきりは浴びる程やつた方ですが此節は悉皆やめて居る、やめたから云ふのではないが一躰アルコールは或病症に向て藥劑として用ゐる必要はあるけれど普通飲料としては絶對的有害のものである家庭に於ては出來る丈の工夫を以て飲酒を避けんければなりません御亭主様なり御父様なり御良人なりが飲酒をなさるゝならおやめになる様にお勸めなさるが當然です、

社交

交際のしをり

琹齋生

◉他人に訪問せられし時の心得

近來我國の貴婦人中には、間々歐洲の風に倣らて、面會日とて、他人に面會する日を定め、大抵其日にのみ、來賓を接待せらるゝ人もあれど、這は上流社會の一部分に止り、一般に行はるべくもあらねば、先每日不時に訪問の客あるものと思ひて、每朝、茶、煙草、煙草盆、又火鉢等を備へて、其用意をなし置くべし。且菓子等も、夫々下婢に命じ置きて、客の前にて彼是と指圖すべからず。

取次　來客の容子の如何にかゝはらず、叮寧に應接せしむべし。始め橫柄にして、客の姓名を聞き、俄に待遇を異にするが如きは、誠に片腹痛き事なり。若し不在或は病氣等にて、面會なし難き事情あるときは、殊によく其來訪を謝し、慇懃に斷りを言はしむべし。總て召仕人の不愛想なるは、其主婦さへ心づきなく推測らるゝものなり。さりとて又、餘りに差出たるも見にくければ、常々よく敎訓し置くべきことなり。

客の座敷へ通りたる後は、直ぐに其履物をなほし、正しく揃へ置かしむべし。若し否ずして、其歸るときに、履物の取亂れ、或は小兒などの踏あらすが如き事なれば、大に客の感情を損ふものなり。

客と對話するときは、常に意を用ひて、客に不快の念を起さしむべからず。又話の途切て、手持無沙汰となる事あらぬ樣にすべし。さりとて多忙なる人を、會釋もなく物言ひかけて、無理に引止むるは惡し。又客と對話中には、他の用事を辨ずるが爲に、客のみを席に殘して別室に赴き、或は時々席を離れて、しみ〲落付かざるが如きは無禮の限りなり。又談話中屢々時計を眺め、或は早日も暮れなんとすなど言ひて、其歸りを促すが如きは、最も甚しき無禮なり。

客に湯茶を侑むるには、よく其程を見はからひて、浸りに強うべからず。飲み干す傍らより、間斷なくつぐことは、却つて大に客に迷惑を感ぜしむることあり。

不時訪問の客に、酒食を侑むるときは、長く引とめて、立派なる料理を調へんよりは、寧ろ手輕にして、速なるを宜しとす。

客の來りし時、若くは去らんとする時に、聲高く笑ひ、或は耳語き、或は指ざしなどすべからず。縱令他の事にても、客は己の事と思ひなして、甚だ氣色を損ずることあり。又客の容貌、髮形、服裝等の品評をなすべからず。此事常々よく家内の者に注意して苟にも斯る行ひなき樣にすべし。

又客の來りし時は、自ら出て之を迎へ入れ、其歸り去らんとする時は、必ず玄關まで見送りて、其門を出るまで内に入らぬを禮となす。但し甚く自分の違ひたる下輩の者ならば、自ら送迎するに及ばざるべし。



良人と共に客に應接するときの心得

良人とともに、其同僚、朋友等と談話するときには、常によく良人の心を酌了て、よきほどにもてなし、さし過ぎず、將た足らぬことなき樣にすべし。若し客の我に物言ひかたらんときには、詞寡に誇りかならぬ樣にて應答し、決して良人をさしおきて、我先口を開き、出過ぎたる舉動あるべからず。女の我賢げにさし出て、良人を蔑ろに振舞ひたるは、眞に惡く、爪彈きせらるゝものなり。

所天に代りて客に應接する心得

所天に代りて賓客に應接するときには、其來意を審かに問ひ置きて、所天歸宅せば、漏れなく之を傳達すべし。又若し所天より言ひ置かれたる

ことあらば、誤りなき樣其意を先方に通ずべし。濫りに己の意志を混入すべからず。且主人の不在を叮嚀に謝して、客の歡心を失はざる樣注意すべし。されど男客に對するには、殊に温和なるが中に、嚴然たる威儀を具へて、苟且にも侮り輕しめられざる樣にすべし。さりとて所天の富貴を笠に着て、倨傲の振舞をなすべからず。

學友に對する心得　學友など舊き好みある友に訪はれたるときは、よく往昔の友情を温めて、隔てなく待遇すべし。假令彼は沈淪し、我は富貴の家に嫁ぎたりとも、苟且にも驕り高ぶりて、之を輕蔑すべからず。

◉他を訪問するときの心得

他を訪問するには、近親々友の外は、公用若くはさり難き急用を除きて、早朝或は夜間にすべからず。且食事の時刻をも避くべし。其談話の時間は、一時間くらゐより長からざる樣にすべし。殊に多忙なる人を訪問したるときは、其用件のみ語りて、速に歸るべし。是といふ用事も無きに、長々と語り續くる氣樂の客人にも、隨分迷惑するものなれば、己も亦用無きに長居して、人の妨げをなすべからず。されど、特別に親しき間柄にて、眞心にて引留むるを、强面く立歸らんも餘りに情なかるべし。此等は宜しく便宜に從ふべきなり。又取次人、奴婢などにも、叮嚀に挨拶して、横柄なる言辭を用うべからず。

案内　他人の家に案内なく戶を開きて入るは無禮なり。必ず取次を乞ふて、其案内に從ふべし。不意に戶を開きて、室内の取亂れしところなどに入込むは、我も人も迷惑することなれば、よく〳〵注意すべし。尤も近親々友等は、一々取次を待つにも及ばざるべし。

着席　席に着くには、成るべく遜りて、下席に着くを禮とすれども、亦主人の勸めに從はずして、無理に片隅にゐるも無禮なれば、程よく其言に從ふべし。殊に己より身分卑き人々と同席せしときなど、餘り下席に着けば、他の人々着席すること能はず、大に困却すべし。又人の出入通行すべき處、或は障子、襖などを開閉する場所には、座すべからず。

稱呼　談話中他人の姓名を呼ぶべからず。貴人には其官位を呼ぶべし。例へば某大臣の家に伺候したるときは、唯大臣とのみいふが如し。

食物　主人よりすゝめられたる食物は、成るべく少しにても食ふを可しとす。取りて與へられたる菓子などの食ひ難きときは、紙に包みて持ち歸るべし。

先方に取込事ありし時の心得　家内に病人其他取込事あるか、或は何か心配の樣子あるときは　縱令我用件は辨ぜずとも、速に退き去るべし。

他の饗宴のところへ知らずして行きたる時　此場合には、重ねて來るべき由を取次人に言ひおきて、速に辭し去るべし。若し時日を延ばし難き火急の要事あらば主人主婦の接待の問合を待ち用件のみを簡短に述べ、深く其妨げを謝して歸るべし。主人若し强ひて引き留むるも、大抵は辭し歸るを宜しとす。

親戚朋友の他に嫁したる時　此場合には、先方の家風折合などのよく知れぬほどは、屢々往きて餘り狎々しく振舞ふは惡し。特に其良人舅姑などの不在の折は、よく〳〵注意すべし。

流行のしをり

◉海水浴の用品

焦熱の都會を後に、忘れ扇の避暑巡遊、磯馴松間の汐風に、御顏の色もくろ〳〵と波打際の徒歩裸足物珍らしく日を暮さるゝの愛儀かとなりたれば左に御携帶あるべき品を三ッ四ッ紹介參らせんに

海水浴用帽子は嘗て本誌第七號に掲載なしたりしが（同號差畫參照）御覽なき方にもと掲ぐることゝなせり

男子用は毛織地へ護謨を引きたる大黑形にして波に打たるゝも落ちぬ樣顱の周曲に大護謨を入れあり

婦人用は山岡頭巾に似たる護謨引の更紗地にして男子用と共に頭髮に藻屑の懸らぬ便利なる帽子なり

海水浴用肌着　男女とも同じ形なるが半袖半ズボン仕立のシャーツにて婦人物には色入の段々縞など好かるべし

海水浴用靴　岩角貝殼などにて怪我せぬ用心には至極重寶ならん麻縄の編底護謨引白ズックの半甲にて輕目の拵へなり

タチール　大中小好みの列あり白の無地が普通なれども鳶色地又は花模樣など織出したる婦人用のものもあり代價左のごとし

男子用帽子	九拾錢
婦人用帽子	壹圓拾錢
肌着小兒用綿メリヤス	四拾錢より
同大人用綿メリヤス	壹圓零拾五錢より

同毛メリヤス　貳圓四拾五錢より
小兒用靴　四拾五錢より
大人用靴　五拾五錢より
タチール(小判)　貳拾五錢より
同　(中判)　五拾錢より
同　(大判)　壹圓より

◉帽子の日避袋

昨年迄は一般に淺形の日避袋なりしが本年は中學生など何れも深形にて徽章を附ける處まで帽子全部を覆ひ隱し白布の上より徽章とバンドを附けるが流行の樣見受けたり

◉東形の枕

此種の枕は是迄も色々ありたれども下臺に力木なき爲め持惡しかしが此東形は臺に刮飾をなし其上に力を添へ草花の盛繪したる優しき品なれば中々需用ありと云ふ、代價は唐天の小枕　附五拾錢より　絹天又は毛繻子の小枕附　六拾五錢より

◉夏季の座布團

普通上等の塲所にて使用するは重に革布團なるが此の布團の流行出しには支那より仕立上りにて輸入したると且つは物の珍らしき爲め一枚五七圓の高價なりしが近年は布團の地革だけを同地より取寄せ本邦にて焦茶色の丸形に製出すやうなりたれば價格も以前の三分一位となれり尙ほけんどん製も可なりの流行なるが近江麻を精製し光澤地合とも絹製に變りなき絹麻の座布團(古代模樣の織出し)は本年の新製とて頗る好評あり其他麻織御座布團布製護謨引管網代の圓座など相變らずの流行と知るべし今其代價を擧ぐれば左のごとし

革布團(普通品一枚に付)　壹圓六拾錢より
同　(上等一枚に付)　貳圓貳拾錢位
けんどん(出來上より一枚)　壹圓貳拾五錢



絹麻製(模樣物出來上り一枚)　壹圓五拾錢
麻　織(出來上り一枚)　六拾錢より
御　座(模樣物一枚)　五拾錢より
同　(縞物一枚)　參拾錢より
同　(無地物一枚)　拾八錢より
布製護謨引(一枚)　參拾錢より
管製圓座(同)　貳拾五錢

◉新製下駄の鼻緒

鎖織七子の鼻緒　鼠地の七子へ藤花などを白にて鎖風に織り出したるもの是れからの季節に向物なり男女とも好みの柄合あり代價九拾錢

牡丹地　繻珍の大匹田模樣と白木天の抱合二石十七八歲の令孃に似合の品なり　代價五拾錢

淸涼織鼻緒　琥珀地に草花を絽の地に織出したるもの色合は御納戸鏽勝鐵色など婦人に相應はし代價九拾錢

◉杯植の髮搔

お盃形と云ふは名の如ぐふつくりしたる眞に品よき極なりしが餘り長く流行の擬きしため少し厭かれ氣味にして近頃は髮搔と云へば海老形(三

日月形）に限るやうなり若き婦人には中齒製へ菊牡丹など彩色の盛繪したるが喜ばるれど爰一般の流行は海邊の景色など尤も凉しさうに黑漆にて描畫したる荒齒製なり代價は蒔畫中齒櫛　四拾錢より五拾錢　蒔畫荒齒櫛　拾九錢より參拾錢

◉團扇形の簪

象牙製に淡泊と蒔繪したる團扇形の簪は時節柄頗る好評にして又安價物なれとも月や雁を切抜きたる竹紙へ薄絹を張り秋の草花を描きたる團扇形は模樣の透見ゆるか珍らしく實行ありと云ふ、代價は竹紙製　五錢より　象牙製（大形）　貳拾五錢　仝　小形　拾五錢

◉東京の婦人と髮の風

流行は繰返・三年目に新陳代謝して六十一年目に昔へ復るのが例ださうだから婦人の髮の風なども去年と今年とは多少異つてゐる今いさゝか其流行を記せば

第一が「丸髷」此髷の形は目下美人形といふのが最も流行を極めてゐる二十歳から二十五六歳の妻君は圖なし一番を用ひ三十歳位から二番を用ひてゐるが此形は一見至極高尚に出來てゐる續いて勢力のあるのは柏形だこれは兩耳が少し下つゐて頗る溫しひ專ら商家の內儀などに喜ばれてゐるやうだ

第二は「島田髷」これにはお初、つぶし、いたこ、文金いろ〳〵好みもあるが令孃風にはやはり文金の高島田か一番勢力がある尤も普通の島田は昨今髷の薄い大きくない形が流行つてゐる而して髷には必ず紺土佐の張紙を眞に入れたものだが目下眞なしものが歡迎される就中藝妓のは大概眞なしになつたやうだ

第三は「銀杏髷」この髷は年齡に關しないから島田に結ふ婦人でゝも髷に結ふ婦人でも手輕の髷として結つてゐるが殊更夏向はこつてりした大丸髷や島田を厭つて此髷に結ふ者が多い

第四は「唐人髷」これは相變らず十一二歲から十四五歲まで位の少女の間に流行つてゐるが去年あたりから前の立つて長目のものが流行してゐて髮掛には丈長ちんころ掛などが愛されてゐる

第五は「桃われ」この髷は數年前まで隨分流行つたものだが近年は全く廢れて了つて甚だ稀に見かけるやうになつてた其で從來桃割に結つてゐた少女は頭者髮も髱も取らない引つめた銀杏返しに結ふ

第六は「天神」「達磨返し」「三つ輪」「兵庫」是等は皆下層社會の婦人の結ふた處ろで今では大抵廢れた

第七「オバコ」これは當節でゝも忌中にある婦人の結ふ髮で老人などの平生これに結つてゐるのを往往見かけるやうだ

第八は「稚子髷」これは三四年前から凄じい勢ひで流行して來た以前なら芝居の牛若丸歟開帳の節でなければ見かけなかつたものだが昨今の上流社會は勿論中以下の裏家からも此髷に結つた少女が出て來る然し概して學校通ひの生徒間に流行るのであるから七八歲から十三四歲までさて束髮を除くと昨今東京の婦人の髮の風は以上十一種の他に幾ど無いと斷言しても可い位であるが總じて髮は五日目或は六日當に結ひかへるのである但し夏向は何髷に依らず冬に比べて小振なのを喜んでゐるやうだ

それから番外として「附髷」これも近年の流行昔は附髷などは髮の毛の極めて薄い者歟脫けた者が買つて載せたものであるが近年は然ばかりでもない夏向避暑のために遠隔の地へ旅行したり又は湯治場などへ出掛ける婦人に附髷を買ふ者が多くなつた之れは田舍などには自分の適意の女髮

結が無い然かといつて櫛卷や束髪は嫌だといふのが携帶して行くので丸髷、島田、唐人髷の附髷は多く夏場に賣れるといふ
序たから前髪に就て一言する前髪の取り方は昨今可笑しいほど細くなつて了つて額際の所では前髪が取つて有るやら無のいやら殆んと分らぬ位で奥へ段々と廣くなつてゐるのが流行る尤も學校生徒などは之れと全く正反對であつて銀杏返しでも束髪でも額一杯に前髪を取つてゐる最初は何だか奇妙に見えたが見慣れてみると上品のやうにも有る
束髪は西洋では種々の名稱もあるが目今東京で行はれてゐるのは英吉利卷、揚卷、夜會を始め俗に謂ふイボジリ卷および下げ髪の他には殆んど無い以上諸種の束髪を除くと皆髱を入れて結ふので髱の根には環が附てゐる
英吉利卷は最初流行して來た時分と違つて今では髪を根元からぐる〳〵卷上げて二つに割り左右に輪を作へるもの揚卷は同じやうにて髪を分けないで所謂揚卷にして大きく冠せたるもの夜會も同樣髪を分けずに左右へ輪を作へるイボジリは其名の通り下げ髪は編んで下げたものと二種あつていづれも根元をリボンで飾るこのほかに松葉返し（揚卷と同形）夜會くずしなどいうものあるが夜會くずしは下の方へ低く潰したるもので一見頗る野部であるから今では影もみぬ要するに束髪は夏向に極めて好い髪で女髪結の手を少しも借らないものだが令孃諸君の苦心慘憺の効が現はれて今や日本化した進歩した好もしい風が行はれるやうになつた一時は水油を塗つたり髪を出して出して見たりしたものだが當時は地方へ往つてみても那麼野部な束髪は見ることが能きない又桐を懸けたりイボジリ卷々頓と見うけないやうになつたが此網を澤山仕入れて餅に搗いてゐる小間物商も少なくないさうだ此網懸の束髪の廢れたのは夜會などに比べて品格に乏しいからでもあるが西洋では病人などが多く此網を懸けてゐるといふ噂が傳はつたからでもあるさうな
束髪の飾に就て簡短に記してみる前差は昨今夏向の事とて淡泊した象牙造か何かの頭のところに西洋の花寄せを透し彫にして其上に寶石を入れたやうなのが流行して居る之は一圓五十錢位からある又ルビーやダイヤなどの寶石入りで純金に透し彫をして脚を鼈甲にしたものは三十圓以上もするが銀ならば普通の寶石入で三圓からある是等は十七八歳から三十歳位までの間に用ひられる猶又昨今新着の新形前差は黒護謨一本脚葉形のもので葉の上に寶石を載せた脚の捻れだものがある價は八十錢から一圓五六十錢又アルミニユーム製のものも昨今は流行で價は五十錢から一圓五六十錢
横櫛後差は一時透し彫のものが流行したが近來は透し彫は皆無になつた而して從前より小形になつて寶石を入れるピンは黒の鐵製よりアルミニユーム製が流行で一本の價三錢から十錢内外（東京朝日新聞抄録）

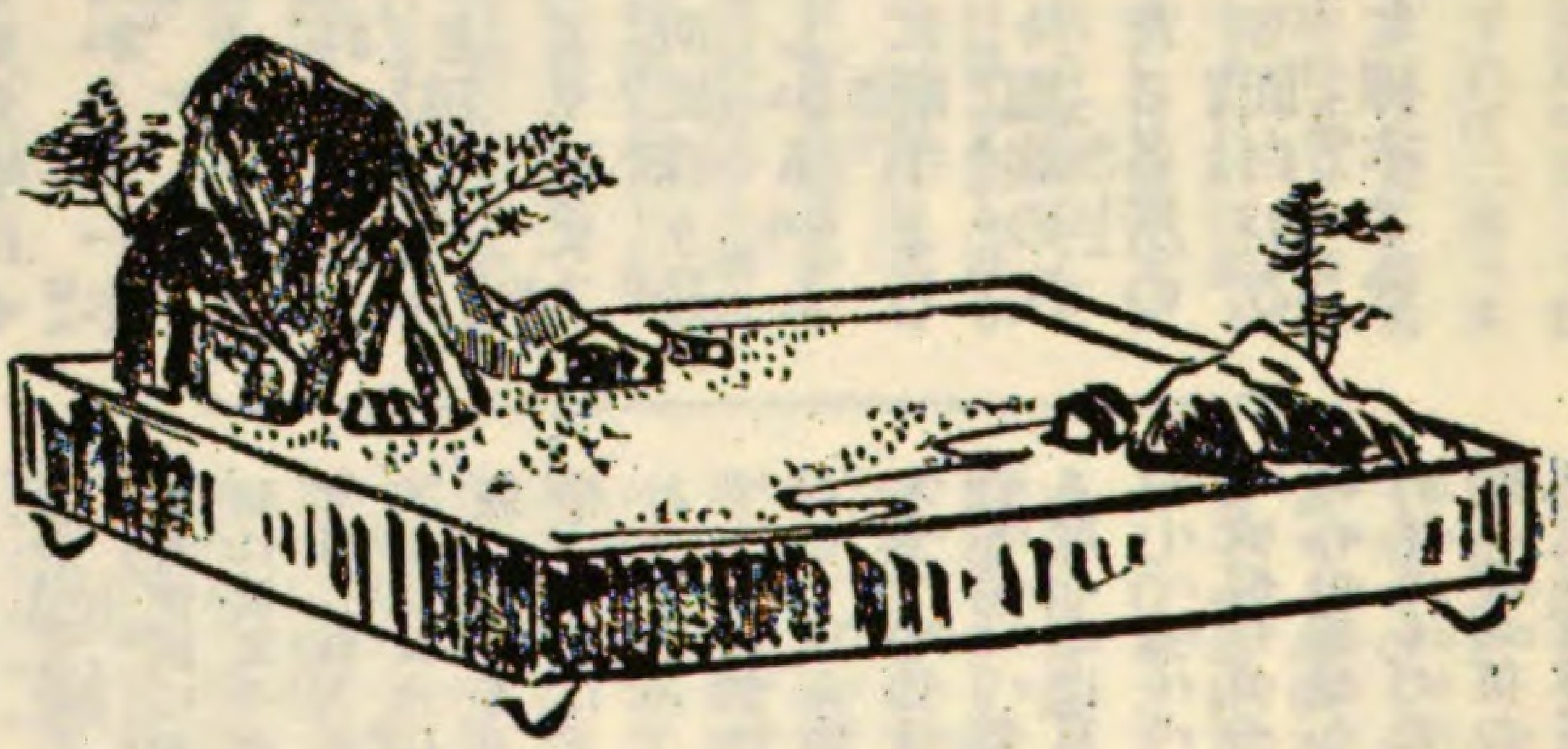
娯樂



避暑のしをり

避暑を兼ねての一日旅行は近頃の流行なれば汽車の便によりて近縣の勝地に遊ぶもの多かるべしまづ家庭的避暑地として紹介すべきは日光を始め箱根の湯本塔の澤、埼玉の大宮公園あたり又海水浴を試ろみんには大

磯平塚茅ヶ崎鵠沼、鎌倉江の島等は云ふに及ばず千葉縣の稻毛幕張等皆一日の好旅程なるべし又府下の清境にて瀧の名所として聞えたるは角筈の十二社、目黒、王子等にて半日の閑を費やして悠遊汗を忘るゝは却つて終日奔走の遊覽に優るの樂しみあり、多摩川の鮎漁は稍や紳士的なれど趣味多し、大森芝浦の海水浴は水清しとにはあらねど風涼しく大師穴守に信心を掛て笻を曳くもおかしかるべし總て是等の場所は自轉車旅行にも恰行の道程なり扨又市内の遊場として未明より爭そふて足を向くるは朝貌の名所入谷なり本年は氣候の不順にも似ず生育宜しきやにて花は一層の勢を增すべく入谷には丸新入十横山入竹入長外十數軒及び朝貌人形等あり尙芝公園の苔香園、麻布の仙華園、廣尾の咲花園、赤阪の西花園及び駒込團子阪の各園等にも朝顔の朝な〳〵とり〳〵の色を競ふべし



盆景のなぐさみ

夏日防暑の工夫に餘念なきものは必ず盆景をも其一として一寸の樹に凌雲の姿を具へ涓滴の水に滔天の勢ひを寓せしめ風鈴の下、靑簾の陰に新たなる涼意を引くなるべし依てこゝに盆景に要する材料の一二を記さんに何よりも先づ必要なるは砂なり京都天神川のを以て最上とすれども之は一升の價三十五錢程にて白米よりも高ければ差當り十八九錢の玉川ものにて便すべし、山の土はケト土とて東京附近にては根岸あたりの田圃を一尺許りも掘れば何處にても得らるれど態々取りに行くもおつくうと思はゞ一貫目に付五十錢にて得らるべし夫れも安からずとせば伊豆の水光石にても可し一尺四方二十錢内外にて手に入るべし是は

槌にて細末に碎き水を和ぜて練り上ぐるなり又山に植うる立木は玉杉、眞〻、唐松など何れも丈け一二寸のものを好とす夜店ものにても事足るべけれど兎角喰はせもの多ければ相當の植木屋にて求むるが可からん一本五錢位にて事足るべし山に添へる石は贅澤を云へば鴨川もの次は鞍馬、龍岩、絲卷などが好ましけれど高價に過ぎて寧ろ馬鹿〻〻しければ先づ玉川ものを用ふべし一個五錢以上なり山に用ふる蒸苔は何處にても手に入るべけれど殊に芝、上野等の公園には到る所に在り分けて昨今は雨あがりのことゝて一層發育宜しかるべし鉢は長目の角にて丈け低きもの格好を造るに勝手よしとぞ扨て之にて準備全く整ひたれば夫れより圖案の工夫肝要なれど此は製作する人の嘗て遊覽したる名所の風致を記憶より呼び起して眼前に造り出すも面白かるべく左なくば書家の手になれる名所畵などを標本とせば半日の工夫亦相應の興わるべし

婦人問題

◎婦人と衣服

近來世間に衣服改良談を催ほして樣々の新工風もあるよし日本婦人の衣服に改良の必要は勿論なれども千年來の習慣を一朝に改むるは容易ならず殊に婦人の衣服改良は男子と異にして種々困難の事情もあるとなれば其改良は大に研究す可き問題ならん扨衣服の事に就て聊か一言せんに衣服に關する人々の嗜好選擇は甚だ微妙なるものにて吾々男子の殆んど想像にも及ばざる邊に心を用ふる其事情は我輩に於ても竊に推察する所なれども顧みて世間の樣子を見れば近來衣服の贅澤は漸く盛にして多々ます〳〵高價のものを好むの風を成し吳服屋の注文の如き價の如何は第二として只品柄の良否を問ふの有樣なれば一襲の衣服、一筋の帶に何百圓を費すの沙汰は驚くに足らず然かも春夏冬の更衣に新を競ひ奇を爭ひ流行を追うて新陳代謝の速なるに隨ひ一年の間に費す所は容易の額に非ざる可し或は富豪大家の輩に於ては如何に贅澤を極むるも物の數に非ざる可しと雖も今や贅澤の風は一般に行はれて社會中流以下の家にても妻兒の衣服に身分不相應の錢を費すもの少なからず或る人の言に家の細君が晴れの衣服を着て盛裝外出するは恰も其一身に家産の全部を携帶して歩行するものなりとの評は固より一場の戲に過ぎざれども自から實際の事實を穿ち得たる者あるが如し美衣美服を好むは婦人の常なるのみならず最愛の娘の子に綺羅を飾るは親たるものゝ至情にして敢て咎む可からずと雖も爰に大に考へざる可からざるものあり凡て榮枯盛衰は人生に免れざるの變化にして有名なる富豪大家も一朝の不運に零落して無一物の素

實貧に陷ることなきに非ず況んや本來財産の蓄もなく纔に主人の働に依り生活したる家にして其主人が偶ま〳〵不治の病に罹るか又は不幸にして死亡することもあらんには後の始末を如何す可きや幾千百圓を費して幾棹の簞笥を充したる絹縮緬綾錦の衣類も之を賣拂はんとすれば二束三文に過ぎず家計の幾分を助くる能はざるは勿論、生活の程度は上進に容易なる其反對に之を引下ぐること甚だ難し殊に婦人の如き昨日までの綺羅を脫して木綿の衣服に換ふるは身を切らるゝよりもつらきことなれば斯る場合にも身構を轉ずること困難にして彼れ是れ躊躇する其中には遂に大に轉落して非常の窮境に陷るの慘狀を見る可し或は實際に斯る不幸なしとするも娘の子の如き後來如何なる家に嫁するや其の運命は豫め知る可らず其子に綺羅を飾りて眼前の美を喜ぶが如き親の情として一應は左ることながら他年成長して人に嫁するの後に至り若しも先方が着實穩當の家風にして贅澤に馴れたる身の百事意の如くならざるときは其折合も面白からずして遂に風波を醸すこともある可し衣服の事、小なるに似たれども無益の贅澤は自から人身を苦しましむるの結果を招くに過ぎず宜しく注意す可き所なり昔しの大名の家にて子の生まるゝときは幾十枚の初着を造りながら實際、肌に觸れずして空しく簞笥の中に藏むるもの多きの常なりしと云ふ斯くの如きの沙汰は只是れ封建時代の昔語ならんと思ひきや今の世の中に恰も之に類するものありとは文明社會の奇談と云はざるを得ず一言聊か警しむる所なり云々(時事新報社說抄錄)

◎女子及び女子教育

女子教育を盛にして、女子の地位を進ましめずば、文明國の仲間入は難からんとの主旨にや、近頃その種の會または學校などの增加せるありさまあるは、まづ悅ばしき事といふべし、如何にも西洋各國の女子は我が國の女子よりも、比較的に學問智識もあるやうなれども、また、所謂溫柔靜謙、能く夫に事へ、能く家を思ひ、我が樂みを犧牲として子女養育の任に當るが如きは、寧ろ我の長所ともいふべし。徒らに我が女子の地位の進まざるを見て、能くその原因を究めず、一足飛に皮想的に彼に倣はんとし、土地も歷史も習慣も人種も、除外として高尙なる學校協會やうのもののみを興したりとて、決して良策とはいふべからず、一二の高尙なる學校をおこして、千中二三の女子を學者たらしめんとするよりも女子小學校及び中學校を大におこして、一般の智識を一般の女子に普及せしむることを務むるが最とも肝要なり

女學校は最も必要の機關なれども、女子は元來獨立心に乏しく、類推力に乏しきものなれば、一たび方針を過つ時は、全校擧げて、お天となり老婆となることその變化電光よりも早く、猫の目よりも速なり

西洋の女子は交際に馴れ、愛嬌に富み、能く談じ能く働き、事總て敏活なるを、到底我が女子の及ぶ所にあらず、然れどもその弊は往々にしていはゆるお天に陷る事無しとせず、幸に宗教ありて、その飛上りの風を抑壓すといへども、智識偏重の學校にては、反つてそのお天を天たらしめ、溫柔の習慣を失はしむるがごとき事なしとせず

この故にや歐大陸の某々國にては、女學生といへばなまいきの異名のごとくに心得、良家の男兒は、之と交はり之を要ることを好まざる風あり。

此を以て近年は高等女學校にはあまり良家の子女をおくらず、多くは實用專門の宗教學校位ゐにて變則にすますこと流行すそれも厭ふ人々は、小學校卒業後は、自宅に相當なる教師を聘して、父母の膝にて教育するもの少からずいかに學問上達しても、良家に嫁するを能はざれば詮方なく、良家に嫁せんと望はゞ、なまいきの異名となれる女學生たる時は、その資格を失ふ

女學生上りの獨身者たるものは、よく小學の教員または幼稚園の保母、

或は專門學校の教員なり。そのわろきは降りにくだりて或ひは田舍めぐりの役者となり甚しきは夕べ〻〻の蝙蝠と共に、影暗き大路小路を徘徊するものとなる。思へば東西古今にわたりて六かしきものは女子教育なるべし

◎當世嫁氣質

當世の嫁御は流石女子教育とやらのお蔭で、匆々に物事を能く知つて、理窟も達者、手紙はスラ〱と走り書き、子供の教育にも理想がある、十圓以下の借家からもコロリシヤンと琴の音が絶え無い、花屋を呼んでも枝風の詮議する心得がある

だつて理窟ばかしで、實地の働きの利か無いのが多いから困るでは無いか、家政學の書物は机の上に廣げてあつても、臺所元は甚だ亂雜、亭主を執へて此處は貴君と私とのホームなんでしやう、私には內助の役目があるのでしやう、貴君に內顧の憂が無いやうに、秘密は凡べて御打明けなさいとの御託宣、雖有いことだが、其實はイツモ亭主から機嫌を取つて貰つて、衣服や頭の物でもテキパキと買つて吳れは、強てダヾを捏れ、コンナにホームが面白く無いなら里へ歸りますよと威かすのだ

下女は給料を取るものだから、ビシ〱と使はれば家政の損だと、朝から晩まで休ませ無い、自分の朝寢は云はずに、飯や汁が冷めてゐるとて下女に當り散らす當世女がある、經濟主義だと云づて亭主と二人で御馳走のツヽキ合、下女には魚の一片も食はすが惜しい、ケチな癖に臺所元で下女に下駄を穿かれるのはチットモ氣が付か無い日曜日にでもなると夫婦手に手を取らんばかりにして、花見遊山に浮かれ、これが理想の夫婦だと鼻は至つて高く、下女は一年にたま〱二度の宿下りでさへ澁い顏して快くは許さ無い

井傍に出ぬが見識と考へ、膚の物さへ下女に洗濯させて氣が濟んでゐる

嫁入の時には係累の無い收入の饒かなのを穿鑿する、舅姑が不平を盜すと、舊弊者が何を云ふ、これは新舊理想の衝突で、今日の家族に免れ無い痛苦だと道理を附けて自分が眞心の足らぬことは云は無い、小舅小姑に對しても主婦の威權を見せ付けて新日本の兄嫁は怖いものと思はせる家附の厄介者は難癖つけて追出すことに拔りは無いが、自分の身寄は呼び集めて來て、私が滿足だから、みんなも滿足だと極め込んでゐる

夫婦は一體でしやう、二人のラブは樂しいホームを造る爲でしやう、それに舅姑が爲に理想が遂げられないでは結婚した甲斐が無いでしやうとて舅姑別局論を擔き出して亭主を困らす、夫婦喧嘩すれば匆々亭主に負けて居無い、ラブで出來た夫婦なら亭主は大抵女房の御威光を拜ませられる、若しも天降り女房だと亭主は浮ぶ瀨が無い、我女房を人の前にもすン付にする

子供を下女や乳母に預けて琴、茶、和歌英語の稽古に出かける、社會の事業に盡力するなど云ひ出しては極力當らべからず、三十の坂を越し三人の子はあつても十代の若作り

これが當世嫁氣質の一標本だと、實に困つたもの、アヽ明治の才女は恐ろしいものドウでも女子教育に落度があるとしか見れ無い云々

（報知新聞）

才媛詞藻

第七回懸賞文披露

和歌

大町桂月 選評

《天》 納涼

河内北河内郡交野村 大矢たね子

こゝろあての堤は遠し柳かげ
こゝもすゞしと立とまりつゝ

《地》 扇

赤坂一ッ木町十三 兒島みね子

折柄の夕顔の花一つのせて
舎人さし出す花あふぎかな

《人》 扇

横濱市翁町三ノ九〇佐方竹 長谷川さく

薄ものゝ帳わつかにそよぎけり
女三の君の扇づかひに

《秀逸》 納涼

友つれて一夜は來ませ川添の月よき所涼しき所

名古屋 市岡たつ子

涼しさは今はやすぎて川風の身にしむ許り夜は更にけり

愛媛 片貝その子

窓のうちにほたるをさへも吹き入れて風わたる夜は夏なかりけり

石川 河崎あや子

川水に月もうかひて夕風のすゞしくかよふきしの高殿

相州 菅井勝子

月もすむいさゝ小川の夕風に夏も流れてゆくこゝち哉

伊豫 菅つゆ子

《秀逸》 扇

この夏はいかゞおはする小扇の君がかな文字なつかしきかな

麹町 中春子

田草とる賤か女いかに高とのに扇ならしてもなほあつき日を

備後 小林すが子

夕風のすゞしくかよふたしゐにもなれてはなたぬさしあふぎかな

相州 菅井勝子

⊙納凉 橫濱 志村まき子

月出でゝ夕涼しくなりにけり曳船歸る神奈川の沖

⊙仝 近江 手塚洲子

脊戸の外流るゝ水の音清くはしぬ涼しき川ぞひのやど

⊙仝 神田 積山きやう

松が枝にかよふ浦風音すみてよる波涼し住吉の濱

⊙仝 和歌山 橘波子

友どちと夏を忘れし世がたりに今夜も更けぬ河波の音

⊙仝 橫濱 玉井るい子

長良川鵜飼の舟も見え初めて橋の上越す風の凉しさ

⊙仝 福島 志賀登志

夕まぐれうゑ木に水をそゝぎつゝ月まつ庭のかぜの凉しさ

⊙仝 岐阜 藤浪紫子

風すゝし月またきよしたしゐしてわれことひかむいざうたへ君

⊙仝 大阪 長野悦子

くれ初むる池のみぎはを行かへり風まちをれば月出にけり

⊙扇 兵庫 中村益子

なすことを忘れはてしにあられともはなすよしなき此扇かな

⊙仝 千葉 小出ひで子

とこしへにまさきくあれと筆そめて扇すゝけてその人あらず

新體詩

夕の磯

和歌山 藤田いさを

海原遠く日は落ちぬ、
水と天とのそのけぢめ、
分けてぞかへる海士の子の、
ふなうたやゝに近くなる。

松の葉がくれたかどのゝ、
おばしま近くたち出でゝ、
ながむれ何處西の空、
紅にほふ君が頰、
淚のあとはそも何。

ながめは廣き紀の海の、
空も遠しや行く雲の、
行方を慕ふ心ならば、
さな歎きそ君よ君、
やさしき星はそこにあり。

今うつりゆく西の空、
消えゆく歡樂のその影に、

別れを惜しむ心ならば、
其のゆくさきを思ふなよ、
またの朝のあるものを。

星の光に希望あり、
心落すな少女子よ、
夕榮色はつくるなく、
君の紅顔あせざるに、
あゝ歌はずや君よ君。

自然の皷波はうち、
梢にかよふ松風は、
天津をとめのさゝやきぞ、
君が妙なる玉琴の、
しらべをそれに合さずや。

蘆の根かたをめぐる波、
むせびは低し風の音、
やゝにくれゆく海の面、
夕づゝの影今しうつらふ。

評 夕日は西に落ちゆくとも、またの朝の東の空に、のぞみの光なはなつべし。逢ふが別れの初めならば、別るゝはまた逢ふの初め、さまで深くなげくべきことかは。うれしくも、さとりたまひしものかな(蝶二)

夕の思ひ

岩代　遠藤雪子

夕おもひにかきくれて
はかなき胸の惱みをば
ひくき調の詩に誦せば
まよひはなかき旗雲の
なかれてあかき夕榮に
消えずも殘るうらみ哉

見よいたましの星一つ
やみにきらめく光にも
つきぬ愁のやどれるを
わかきおもひに煩ひて
なげきか抱く人の子の
狂ふ情に涙ありとは

評『星の光に望みあり、心落すな少女子よ』とうたひたまひし人ある

かと見れば、また君の如く、やみにきらめく星の光にも、つきぬ愁はやどれりと歌いたまふ方もあり。げに人さま〴〵の心なるかな（蝶二）

小女

鳥取　尾崎なみ子

あはれ暮れ行く夕空に
　かゞやき出でし新星の
　　さゝやく色に生れたる
　　　谷間がくれの百合の花。
そがま白なるほゝゑみは
　やがて明け行く大空の
　　朝ひやゝかにうすれつゝ
　　　きえ行く星の色なりき。
かのキュピットの盤前に
　血汐燃ゆらん少女子の
　　春暖き眞玉手に
　　　戀の花輪を得たる時。
そは罪多き人の子の
　胸の煩悶に色褪せし
　　戀の花輪を抱きつゝ
　　　絶望にしづむ心時なりき。

評　後の半ばは、意味おぼろげなり。あらはなるも趣なけれど、深からむことをもとめて、却て曲れる道に入るは、詩の本義にあらず、心すべし（蝶二）

横濱　實相寺　のぶ子

土もさくてふ水無月の、あつき日脚もかけろへは、
さと一しきり夕だちの、雨にぬれゆく青葉より、
こぼろゝ露のおもひして。

雨雲とほくはれゆけは、夕虹たかきかの丘に、
あきつおふ子の影たえて、入日影さす木立より、
なくひぐらしの聲涼し。

程よくぬれし庭の前の、ちりなしつめし履しさは、
もたえにもだえ苦しみし、火宅の宿をのがれいてゝ、
うたゝ蘇生のおもひあり。

ゆあみも終へぬいさゝらは、琴とりいでゝ奏でむか、
いふせからすや蚊やり火に、こもろはいとゞつらくして、
あまりに風のきよければ。

あくがれましを廣からぬ、吾庭ながらこゝ地よく、
忍ひに秋のかよへ來る、夕の風のすゞしさは、
包めど袖にあまりあり。

松の木かげにすゞみ臺、すえて來ませと打招く、
吾姉君よゆるせかし、あまり涼しき夜半なるを、

うたひあかさむもろともに。

姉

夕風通ふ木の間より、　葉すゑの露のこぼれては、
うごきいでたる我おもひ、　風流心をもたぬ身は、
歌もいでこすなりにけり。

妹

さはれやさしきしら露に、　さゝやき給ふ言の葉の、
あまりにいとゞ幽けきよ、　やさしき胸のひめ歌を、
ひそかにもらし給はすや。

姉

あまり涼しきゆふぐれの、　神の情のふかくして、
青葉をもるゝつきかげの、　霜よりもげにさやけきに、
袖も露けくなりにけり。

妹

をかしからすやみ空なる、　月もあつさやしのくらむ、
庭の清水にやどりては、　うつれる影をくだきつゝ、
しづかに流す銀の波。

姉

いぶせきものと罵りて、　うき人さわぐ蚊やり火も、
ちひふてをふる畫工の、　筆のしつくにかゝりては、
またいぶせきと言はざりき。

妹

人のこゝろは紫陽花の、　あまりに色のうつろへは、
昨日の味方今日の仇、　うはらの花の色濃きも、
かくれし刺のれたみあり。

姉

今宵は空の海はれて、　浮雲の跡もたえてなし、
星の林をへめぐりて、　月の舟こくかつら男の、
明けゆく空や泊りかも。

妹

あまりみぢかき夜半なれば、　月のみ船にさほさして、
空の海原ゆかまほし、　しつくに袖はぬるゝとも、
桂ときくもうれしきに。

（完）

文章

涼み臺

さきに、本題をかゝげて、懸賞文を募集するや、之れに應ずるもの頗る多く、投稿山積、その數無量三百餘に上ぼる、されども、比較的に佳文秀作の少かりしは、記者の甚だ遺憾とする所也、いま中に就きて優等のものを採錄すれば、左の如し、選者は文學士中内蝶二氏

（乙賞）

大和國山邊郡福住村福住　巽　いま

夕立の暑さあらひ流したる大空に、星影三つ二つ輝きそめし夕暮時、蚊やりの煙いぶせき柴の伏屋をのがれいでゝ、程遠からぬうしろの山陰に、落ちたぎつ瀧の

あたりとめくれば、夏をも忘るゝ思ぞする。

浴衣ぬぎすて、そと瀧壺のあたりにおりたち、塵にけがれし身を、思ふまゝに洗ひ清めつ。久しく馴れむつべる巖の涼臺にうづくまり居れば、あやしう氣も心もすみに澄みわたるかな。

やみにもしるき瀧の白糸くりかへし、老木の幹にまつはりおつるもをかしきに、露すはんとにや螢の三つよつ、岩間の苔の間に靑うきらめくなどえもいはずゆかし。かゝる折かゝる景に接しては、拙き心の緒琴も流石ひびき初めて、口なれし歌など一ふし二ふし歌ひいづれば、はやすが如き天の樂、さては今宵のけしきに催されて、仙人もこゝに舞ひ下り給ひにけん。あなゝつかしの聲や奏や、あなしたはしの姿や形や。黑きまく引張りたるかなた、神々の樂みうかれおはすらん所こそ、こよならうこひしかりけれ。今はそゞろに身をも世をも打忘れて、我しらず天つ國生ひたちいらんとしては、あやなくも思ひでらるゝわが兄君。あはれ雲井のよそにさかります兄君の、今はたいかにおはしますらむ。

げにや我がいつくしみ深き兄上、戈とりもちて外つ國に渡り給ひにし兄上、今はたいかに渡らせ給ふらん。さいつ頃、天津よりはる〴〵寄せ給はりし御玉章によれば、目もくれ魂も消ゆる此頃のおん身の有樣、あはれ、佩き給ふ太刀の柄のまも、心安め給ふまもなく、になひ給ふ筒の玉ゆらも、氣をゆるめ給ふ時もあらばこそ、今か敵彈とび來らんず、今もや醜賊おしよせんずとて、夜の目もえあはさせ給ふまじ。國人の思もおよばぬ、氣候の激熱と良水の缺乏とは、やがて百のいたづきの媒となりて、あたら異域の鬼となるもの、數へもつくすべからずとかや。また幸にこれに打勝ちて、よしや命をたもつを得たるものといへども、はてだに見えぬ、熱沙の上、やきつくが如き日の光に射られつつ、氣息奄々、雜事をとり行ふなど、それいかにぞや。僅にふくは屍をわたる腥き風、やう〳〵にむすぶを得るは、黃色に濁れる白河の惡水、元よりかはやの設もなければ、糞は路傍に塚をなし、尿は往來に川をなが

す。之をしたひて飛び舞ふ蝿、之より化してとび狂ふ蚊、晝夜をわかたず、群をつくり隊をくみ、陣立堂々と勇ましく襲ひくるなど、なか〳〵に死ぬにもましたる苦みの、自らまつはれりとかや。さらばよ、兄君の文たまふごとに、何はさておき、先とひ給ふはこの瀧の安否、この涼臺のありさま。こを戀ひしたひて、遙によみ送り給ひしおり、机の上に埋き迄なりにけり。あはれ、戈を枕のはかなきうたゝねにも、この臺に腰をすえ、滔々たる瀧の響に心をすまし給ひにし昔を、必ずや夢み給ふらん、淸冽又なきこの水をむすびつゝ、妾が掻き琴の調に胸をひらき給ひし古を、必ずや夢み給ふらん。あはれ、水はもとのまゝなり。臺も昔のまゝなり、すゞ風も瀧の響も、ありしまゝに變らぬものを、人やいかに、そをめでにし人は、今は



雲のかなたにおはすなり。集散離合の世のことわりにもれぬは、この山里もまた浮世の中なればなるべし。あはれ、再この臺の上につどひて、今日のうき思を共に語りあかさんは、そもや何時のことにやあらむ。

神よ、願はくは我が兄君の身を守らせ給ひてよ。

十六夜の月は、いつしか端山の峡をはなれけむ、靑白き光は、楢の葉越に涼しく物思ふ額をてらし初めて、なる瀧の岩にくだくる玉ごとに、美はしく月魂のやどるなり。折柄彼方の庭のあたりより、ふしをかしき詩の口ずさみの、かすかに響きくめり。さては弟のはや書にあきて、月下に劍を弄ぶにやあるらん。勇まし猛しと立上れば、肌さむき山風さとふきたちて、葉末のつゆ散ること頻なり。

評　筆と心と並び調はれど、異郷の空に苦しめる兄の身を思ふなさけのやさしきところ取るべし（蝶二）

米澤市　馬場春子

(丙賞)

軒のしのぶ、夕立の名殘の露をやどしてすが〳〵しき夕、かしこの景はいかにとすゞみがてらにいでたちぬ。花の鏡とよまれし小川も、夏草のしげみに見えわかれど、涼しき水おとさやかに聞えて、いとをかし。しばしさすらふほど、何人のものし給ひけむ、あやしの涼臺二つあり。先づうれしくてやすむほど、夕風さとふき、かたへの丘の若竹さやぎて、緑の露、浴後の面にかゝりたる、いひしらずうれし。やがて淙々たる水おとかしましき夏虫の音と共に、暮色の中につゝまれて、涼しさ月雲を破りていでぬ。さるほどに人のけはひして、一人の翁歩をこなたにすゝめ給ひつ、かたへの臺にものし給ふ。其樣あとなく奥ゆかしう、あてに見るほど、おもしろの月の夜や、又見し事も命なりけりとしめやかにすさみ給ふもみやびかなり。月はいよ〳〵清く、水音いよ〳〵すみて靜けく、心なき身にもあはれをぞ覺えける。此樣三十一文字にこめばやと、しばし團扇をすてゝ月に對へど、えさ歌だにいでこず。嗚呼とばかりとむする折しも、涼しさ月を動すばかり、いみじき笛の音をかしう聞ゆ。折からにや、寒さほどしみわたりて清々し。あはれいかなる人のすさびにやと顧れば、かの翁の君、いつしか丘にたちてうそぶき給ふなりけり。心にくき君にもある哉と、ざえなき身のひたぶるに恥しく、止りがたき心地して、名殘をしくも家路に急ぎぬ。なほ笛の音遙に聞ゆ、いとをかし。さるにても、詠みえざりし口をしと、文机引きよするに、徒にふけて夏の夜のまだ宵ながら明けぬめり。これにぞ雲のいづこに月やどるらんと、したりがほに打ち誦して、心やりける自らもをかしく覺ゆるを、まいて人はいかにやおもはむ。

評　筆もこゝろもまだ幼なけれど、集りたる文の　おほかたは男らしきにひきかへて、この一篇のみは女らしきところあり(蝶二)



(丙賞)　　鳥取　尾崎なみ子

今しがた蝙蝠がつゞけさまに二三疋のき下から飛びだして、その邊をとびまはつて居たが、急に納屋のうしろの方に這入つてしまつた。丁度その邊からかけて一面に椽前までは南瓜畑であるが、其葉の大きなのが暗にもしろく見える。右の方は垣もなくずーと隣と畑つゞきになつてゐる。左の方の低い垣に沿うて檜の木のやゝ大きいのが二三本植わつてあるが、風の吹くたびにざは〳〵と小さい音をたてゝ動いて居る。日が暮からも大分になるが農家は今頃夕飯のすんだ頃であらう。人聲一つもしない、犬の聲、それもしない。南瓜畑が半分迄明るくなつた。と見るとお月さまはもや檜の葉ごしに出てゐて、地にうつつて居る檜の葉影がしきりに動いて居る。里の子が二三人「あつちの水は苦いぞこつちの水は甘いぞ螢こーいこーい」と云ひながら籬の

きれたのや何やらもつて川向ふの方に飛んで行つた。間もなく一人の媼が椽前に出て來た。それは此南瓜畑の主人公の家のである。

「爺さん何ちゆーまーえい御月さまだらち、こゝにきて涼んだらどうだえ」

と云ふながらそこにある草履を引かけて庭前に出て來た。そして月を眺めて居たが、やがて引かえして半分破れた木臼をころばして庭の中程にすえ、一枚の雨戸をはづして、片方は椽にもたせ、また片方は臼の上にのせた。これが此家の唯一のすゞみ臺である。間もなく又奥の方から鍋のこわれたのにのれてある蚊遣をもちだしてすゞみ臺の上におゐて、そして腰をかけて月を眺めて居る。するとそこに裏口の方から爺が出て來た。夕飯の濁酒の御かげか大分顔の色のいゝやうだ。

「あーえい御月さまだー」

と云ひながら婆の反對のがわの方のすゞみ臺に腰を下した。やがて其上にあぐらをかいて蚊遣の火で煙草をくゆらして居る。婆は時々澁團扇でばた〳〵と足の方をたゝいて居た。月は丁度森の上に鏡をかけたように光つて居る。すると向ひの方でかすかに手か叩く音やうたを歌ふ聲がしだしたので、爺は少時頭をかたげて居たが

「婆さんまた若い者が踊の稽古をしてゐるぜ」

と云つた。婆もそつちの方をむいて耳をかたむけた。

「あれは雛にちがいないぜ、あんなえい聲をするものは此の村にはないだー」

「おらも古しはあの聲で村の乙女子等をさはがしたものだつたがのー婆さん」

と爺は沈黙をやぶつた。そして「ハヽヽヽヽ」と笑つた。

「何を云つてゐるだー」

と婆も笑つてゐる。

「あの時は汝も村中の一番の縹致よしであつた………をゝあのそれ鎮守の森で汝と二人が踊を踊つたおりに若ひ奴等がみんなうらやましがつて居たがのーハヽヽヽヽヽ」

と、爺はしきりに自分の若い時の事を追想してゐるのである。

「あゝそれ〳〵あの時踊が上手であつた金さんは如何しただらうなー」

と、婆も話しにつり込されて云つた。

「金か、金もあんな惡ひ事をしてから今はどこかの工夫とかになつとるちゆうーがなー」

と、爺が云つた。月はます〳〵かゞやいでゐる。夜も大分更けたやうで寒い程涼しい風が吹いてくる。爺は早やすゞみ臺のうへでこくり〳〵と睡りをやつて居る。一しきり梢の葉がさは〳〵と鳴つて、一陣の風が吹いて來たので、蚊遣の烟がずーと低くなつて、寢てゐる爺の上をしづかに這ふて行つた。

評　平和なる夏の夜の涼み臺、爺と婆とが昔語は、都の人の得知らぬ樂なり(蝶二)

秀逸四篇

麹町　山内すゞ子

たなばた紙の色も移らふひまなくて來る于蘭盆は、わが弟がこよなき遊戯の祭日、元日よりも喜ばしく小跳りして嬉しがりけるを、今年のみはうちかはり、過ぎし七夕の祭にも、如何にものうく思はれけむ、秋風に夜の更けゆけば天の川、と漸く筆とりし事の悲しさも、去年のくれ浮世にうつろ川瀬さかなみに、母上の空しくならせ給ひし故ならめ、着裳ふ

袂を誘びて、遊びに行かずやと友のなさけも却て恨めしく、ひとり涙を含む哀れさ、思へば、幼き心にも亡き母の跡を偲ぶにかと、慰めやるべきわれさへ、いとゞ胸の潰るゝばかりなり。

夕のほどは庭の景色も一きはならむと、弟の手をとり出でゝすゞみ臺に腰かけぬ、十三夜の月は磨き上げたる古鏡の如く輝きて、光すゞしくわか懐をたづれ、葉末をはなるゝ螢火は、露の舞ふかとあやしまれ、夜風ははら／＼梢にひゞくは、月の桂の散りかゝるにやと思はれて、かろき浴衣の袖ちかく、誰に學びし節なうむいとゞ哀れに蟋蟀鳴く。

干蘭盆には返りゆくといふなる、御魂の迷はぬためにと焚く火に、なほも松の細割りを添へつゝ、ふと中座敷を見れば、佛壇の前に廻り／＼て、うつゝ世を啣ち顔なる燈籠の寂しくも哀れに、返す／＼も流轉のさまを惱む火影ほのぐらきに、風の含みくる里の笛さへ、母上の呼び給ふ聲かと思ばれぬ、あはれ、月は窓前に常住の燈を挑げず、花は梢頭に不斷の香を吐かずして、浮世の仇浪に脆くとられ給ひし母上は今や何處にか在する。尋ねゐむとて行き行けど、遂に墓頭の露に止まらざるを得ず、尙も行くべき路は何れなるらむ、埋骨の地しづかにて御魂の在しまさぬは、月の宮五雲閣のほとりか、地獄の底奈落の果てか、あはれはかなの夢の世や、そもや何處に逝かれ給ひし。

弟はます／＼打沈めば、是非に慰めんと思へども、われまづ騒ぎては叶はじと、家にかけ入り花火とりいでゝ、半ばを弟にとらしめ、迎火の火を移すに、たちまち飛び狂ふ花火は目覺むるほど、流石に弟の心に叶ひしにや、今は何事もうち忘れて笑ひさゞめく故、われも心強くなり、常に弟の好む物語せばやと、宮本武藏がある夏浴衣一枚なれば腰物もなくて、涼臺の上、團扇片手に夕月をめづる折しも、その弟子の力を試みんさて、師に近寄る隙もなく、後より武藏に一太刀浴びせかけんものとて、颯と涼臺に飛び上りしに武藏はひらりと身を引き退くひまと共に、涼臺に敷きける莚の片端そと引きければ、弟子は足を渡はれ、仰向け樣にどつと地上に倒れしを、武藏は自若として見向きもやらず、何するぞと云はれし武勇の事ども、すゞみ臺の左右に手眞似して說きければ、弟は如何に面白しとや感じけむ、姉上尙も話してよ牛若丸や阿新丸の事どもと、云はるゝまゝに一層心も勇み立ち、些細の事まで面白げにうち語り終りしが、弟は頓に萎れて庭の葉越しに燈籠の影見つめしかば、われは何事ぞと訝かるに、思ひきやはら／＼と涙流して、牛若丸の功名も母樣を喜ばしめむため、阿新丸の仇討ちも母樣を喜ばしめむ心根なるものを、と眼をしばたゝき唇振はするけはひなるに、われは氣もくだけ心も消えゆく思ひにて、すゞみ臺の上にうちふし泣きぬ。

年長けし男子さへ母親をば一きは慕ふ世のならはし、まして心弱きわる身には云ふはかりなく悲しきを、いまだ母上なくてはならぬ幼き弟、いたづら盛りなる身を、今やもの言ふ唇堅く閉ぢ、消然としてうち萎るゝ風情、あゝ話さゞりせばよかりしものをと悔めど甲斐なく、然ればとて今は慰めむ術も忘られて、むらむらと胸にうつりくる懐舊の念とゞめえず、心も空にふり行きて、ゆきし母上のわが傍に在すと思ふうち、そよ／＼吹く風の涼しさに、母上のあふがせ給ふかと首をあげれば、笛の音すでに絶えて四山みな眠につき、中天の月空しくすゞみ臺の二人を照しぬ。

横濱　實相寺　のぶ子

浴もすみ、夕げもすみましたから、妾ば團扇を手に持ちながら、庭へ出ました、夕ぐれの風は、心地よく肌に吹いて、さつと降つた夕立の名殘に、青葉の梢に殘して置いた露か、はら／＼とこほれる音かして、忍／＼に秋か通ふかと思はるゝほと、涼しい晩てす、不意に妾を呼ふ聲か

しましたから、其方へ振向きますと、松の木の下に、涼み臺を据えて、其上に六つになる妹の季子が、母様の膝に抱かれながら、姉さん〳〵と妾を呼ふのてす、妾は其傍へまゐりまして、阿母様涼しい晩てすこと、季さむおとなしくして入らしやいよ、と言ひましたら、母様は、ほんとに善い風たこと、と御ほめなすつて、そして信さんこゝへ御かけ、と言つて下されたからおや（？）憚り様と言つて、御傍へ腰をかけると、季さんは、妾一人殖えたから大喜ひて、姉さん妾青葉茂れるの歌知つてゝよ、と櫻井の里のあたりの夕まくれなとゝ、片言まぢりに、でも面白想に、歌つて居ります、ほんとに季さんは御上手れ、と妾かほめると、姉さむこたても妾やつと覺えたは、妾青葉しけれる覺えたから、姉さん何か御褒美頂戴なさ、罪のない可愛らしい口つきをして言ひますから、あゝあげますとも、と妾かいふと、それでは姉様の持つて居らつしやる御手玉を頂戴よ、と言ふものですから、母様もにつこりと遊はして、もう季さんの御れだりですか、あんまり早い事れ、と御笑ひなさつてる、と季さんは、母さんあらお月様かと言ふ聲に驚いて見ますと、雨上りの木の間を洩れて匂ひ出てた月影の、一しほうるはしく、きら〳〵として、青葉の露ことに照りそへてるのは、まるて連珠の光れる様におもはれ、池水の影を砕いて、しろ銀の波をいくへにも流して居る様は、畫にかいても見たく思はれるやうて、まつたく、霜より白い月かけに、涼しさが一しほまさるやうにも思はれて、しは〳〵月の美にうたれて居ると、

涼しさのあまれる宿やこゝならむ

と歌ひながら、妾逹の居る方へ來る人影か見えたので、季さんが、あれ阿父さんが入らしつて、と叫ふと黒い影はだん〳〵近寄つて來て、なほ前の歌をうたひながら、下の句を案して居るやうな風てすから、妾はおもはす、

霜よりしろき月のさしきて

と言ふと、誰だと言ひながら、涼み臺の側に、入らしつたのは、父君て、信さんがおもしろい下の句た、もう一度言つて御らん、と言つて涼み臺に八つになる妾の弟英さん、季さんからは兄になるとふ男の子を連れて、御腰をかけられた、妾は何とも言はす、阿父様妾のは腰折、さし出かましう御坐いますから、御免下さい、と言ふと、阿父様の前て遠慮は入らない、と仰言つたから、そこて妾は、霜より白き月もさしきて、と言ひました、

あゝ霜より白き月かけ、この涼しきゆふくれの様、忘れやうとして、恐らくは忘れる事の出來ないものゝ、一てはないか、とおもふのてあります、

東京　吉村あさ

いみじき暑き日の夕べ雲立さはぎて一しきり夕立しけるあとの心地よくあはれなるけしきを若葉の下にすえられたるすゞみ臺にて、一人ながむる事のあたらおしき思のせらるゝに、うの花ちらす風にもあらで、垣根にそひし柴の戸に人のけはひのしてけふのあつさをかへす〳〵もいひつゝけつゝ友の二人三人訪ひ來つるこそ思ひもうふでうれしけれ小簾まき上げたる風鈴のあり名殘の露吹き散りて白玉のみだれ飛ぶかと思はしめさゝなみよする池の汀の廣葉まき葉の中にまじりて香りすゞしく匂ふはちすの汚れにそまぬまこと見えていさぎよくもまたけだかけれあはれ花に及ばぬ我身のうらはずかしうて、やり水のかさいとゞ増して所ならず瀧の白糸かゝれるもいとおかしうなだゝる瀧にもましてうつくしう覺ゆるも心からなれや小岩さゝれ石のあひ間より遠く臺のあし下のあたりへ一筋の瀨川なかれる西の都の涼みもかくやなどさゞめきつゝ打ち興じてあ

りけるに一人の友の四季おしなべて樂しきはとり〳〵なれど春の花霞野邊の若草などの樂しみはあまり心のうき立ちてたゞ小蝶のゆめと戯はむるゝ中にいつか杜鵑のうらみともなりてすゞろ心なく過しつる事のみ多く秋の月こそとめでらるれどむかしのみぞ忍ばれて蟲の音になきあかす夜半、時雨に心づく木葉の心なき風にちるさまなどあはれにうらみのみ多くまたなく心細きものなれ隣間もる北ふく風いとふ埋火の下には狹き一間を樂しき世となふなさけ深く暖きのみなれまかせつ心廣くあくまでみはるかす事のかたき樣に覺ゆるになんひとり夏の夕はかりはさにあらじ蜩の音聞きつる折こそ汗ぬぐひつゝ暑さもかこつめれど湯あみなどして夕涼みふける時こそ筆にも言葉にも及はず樂しき者なれ心はわだつ海の底深くもろ〳〵の潔き事のみ思ひおこされけがれるにほり世をへだてぬろが如へ想は高く久方の大み空をもかけるべしされはこそ樂しきはこの夕に過ぐる者はあらじとみな〳〵げにもと同し想に淸きまぼろし胸にゑがきつとり〳〵にうはさのみして細聲になのりつゝよりくる蚊の二つ三つも知らずかほにてある程に待ちにまちつる月の木の間をはけて椅にさしかゝりつゝ、ふづかにのぼりて、いたらぬ隈もなきさやけき光の淸水にやどりて波にくだくるさま夏知らぬ涼しきながめなりかゝる所せき庭にてだにかゝりましてはてしなき大海原にしろがれをのべたらむやうにかゝやきてそなれ松のあたりより白玉の濱のまさごを照らしたにけしきなどはいかなる月影や見するならんなどそゞろに心動きてながめあかすむら竹にそよぐ風の音はや秋立ちし心地のするにいつしか夜もふけぬらしいつまでもあるも名殘りはつきじ語りあかれどまたあすの宵こそとかたみに契りつゝ夏草ふげき露ふみ分けて友は去りぬあとは月影ます〳〵澄み渡りて淋しき青蟲のすゞみ臺のかげなみちて水の音の絕えつ續きつ

高知　小西雅

今しも夕日は山のかなたに沈みはてゝ入相つぐる鐘の音はものさびしうをちこちにひゞきりぬ、日中の暑さを洗ひ去るは今にこそと湯あみ終へて糊にわきゝ浴衣と着かへうちわ片手にして例のすゞ臺に腰うちかけぬ。さきのほど水うちし後なればうき世のちりを一時にはらひ去りし如き心地して前栽はしたゝるばかり緑ふかく石とうろうよりしづくのしと〳〵とおちくるは見るもすゞし。をりふしかゞやき初め〳〵月かげは木々の葉末におく露を玉とまがはせ、露を玉ぬくさゝがにの糸をつやゝかに照せり。そよ〳〵と吹きくる風は時間にひるのあつさをいづこにか誘ひ出しけむ、今はな〳〵に、うす寒くこそ思へ、ひるの暑さは思はんとしても思ひえねばかりになりぬるは快しと云ふも涼しと云ふも世の常ぞかし。あはれ、日中と夕とかわりたらましかば、常にそよとの風もおとづれぬ學校の我等が室は、師の君たちも快く教へだまひ、生徒等も快く習はんものをなど思ふも涼しさあまりての思なるべし。されど日中の炎暑ありてこそ夕の快樂はあれ、人も數多の艱難をたへしびてこそ後は安すれ。吁げに天の自然の教へは理なるかな。誰か天にそむかるべきと大空をあふぎ見て忘りがちなる己が身をいましめぬ。み空には、ちりに汚れし浮世のもの等を導びきがほに月は雲間より淸き光をはなてり。

はるかになきいでし蛙は雨やこふらむ、かすかにすだくをさなき蟲の音は露の命やうらむ。いづれ哀をそへぬもの無きをにくきは蚊にてわが身をおそひくるに、扇もて追へども〳〵亦來り手のたえまなきぞうたてき。

なす事もなくしづけきより夜に向ひ居ればそゞにろしのばるゝ友の上、なつかしき父母に死わかれ、よるべなぎさもしら波にひとりたゞよふすて小舟のとりつく島もなくなく三河なるをぢ君のもとに身をよせられて

より流れき早き年月のはや三とせばかりすぎぬ。此ごろは如何にやおはします。今宵かの地にて同じ月をながめたまふちむといとなつかし。

待ちにし暑中休暇も近づきぬ。いざや思ふまゝ母上の手つだひをなさばや、又田舎に遊び、岡豐山にのぼりては長曾我部元親の昔をしのび、大津に至りては紀貫之の當事を思ふも亦面白からむ。

泉とわく思のうちにはこし方もうかばむ、はたこむ先もどろらむ。

吁、月に向ひてひとり思ひ、ひとり樂しむ。今ははやみじか夜や更けぬろ、よひのほどたはむれし童ども母にそひねせられて罪なき夢路たどるらむ。あたりは殊にさえかへりて、身にしむ風はみどりの葉にそよぎて月の光をうごかしつ、をりしも、たがふきすさぶ笛の音ぞ、嚠々として風に和し、月に冴えゆくは。

賞外佳作

◉海濱のおもひ

和歌山　藤田いさを

一夕、限りなき靑き海原を前にひかえ、消えゆくゆうぐれの、雲を望み、またゝく新星の影を仰ぎてより、心にかぎりなき幽微の感境を印せられ、潮の音波のこゑ、何となうなつかしき思ひして、淸麗の風景片時も我が心底を去らず、忘れ難きに、今日も亦、紅のばら一枝たづさへつ、たゞ獨り、一路の白沙松間を通りぬけて、いつしか此の岩頭にたゝずみながら、幽邃の海底に向つて、限りなき空想の、白き翼をはせ居るなり。淸明の風、遙けき海原を渡りて、そよ〳〵と我が袖をひろがへし、遠くかすかにむせびかへる波は、我が足下に碎けて、白き潮の花を散らすめり。

紅のもすそ長くひき、紫の雌幌深くたれて、暮れ行く空に、別れを告げたまふ日の女神は、そが光を落して、海面を、紅と、黄金とに染めたまふ。白き羽をひろがへせるかもめ、あちこちに三つ四つ群をなして飛びかひ、遐幸の御車をはやめ給ふ女神が影を、送るにも似たり。

時當に夏、されどゆたかなる景色、のどかなる風は、春の空にも似かよひて、吸ひ飽きし、かすみに醉へる心地して、ひたすらに我れは、海の色をながめ入るのみなり。

君の君、神の神とたゝへられしエホバの御神が、いかばかり壯麗の勇姿にましますかを思へ浮べ、自然の雄々しく、うるはしきに心を奪はれ、感興の琴線にふれて、かなで出づる我がつたなき心の小琴のしらべは、波のさゝやきにも及ばぬを覺えつ。

あゝ此の瞬間、我が心は騷ぎぬ。とこしへに變らぬはあたりの風景、はかり難きは人の運命よ。

なつかしき友と共に、此の處に手を引き、袖をつられて、美景を賞し、互ひの心に、幽麗の想をゑがきしも、今は其の友あらず、我れひとりまたさまよひつゝ、亡き友を偲ばんとは、あゝ、思はざりき。

我が友は、三とせ昔、はかなき戀の運命の手に捕へられて、そがこひしきせこと共に、こゝ、さかまく波に身を投じ、海のかなたに樂しき園樂を求めんとて、天つみそらに、二つの星を新にましつ、或る月なき夜、水烟一擊、塵の浮世を去り給ひしなり。

あはれ、此の波の音、潮のひゞき、君等が淸き戀を、語りたまへるさゝやきにはあらざるか。あはれ、此の松風のこゑ、君がたへなるつま琴を、すさびたまふしらべにはあらざるか。

あゝ、我が友よ、なつかしき友よ、君がせつなき戀は我れ知れり。手向くる此の花、願はくはうけたまひて、君が頭にかざしたまはずや。

明日まで淀かば、浮世の風に散りゆかんを恐れて、手折り來つるなり。

願はくはうけよ。

あゝ、うるはしからずや、此の花、君が戀。花よ、とこしへに紅の色褪せしむることなかれ。君よ、我れは、君が戀のとこしへに終りならんことを祈る。

手にもてる花、いつしか投げ入るれば、夕日にてりはへて、ひら〳〵と飛びゆく色、一入うるはしく、水面に浮びつゝ漂々いづこともなく……………。

さても大なる墳墓、あらず、君等がたのしき家、よろこばしき樂園なり。

君は海のいづくに、此の花を、めで給ふらむ。

されど、されど、君よ、我れは、天地の靈性一時に現はれ、無限のあらし威を逞うし、怒濤天を擱くとき、恐しいかな、爭鬪の音、すさまじい哉、怒號の聲、あはれ其の時も、君等がゐませるかなたは、穩かなる君が情趣となるべき、靜かなる海にてあるか。それのみ心にかゝる事にこそ。

たゞよひ行く花のゆく方をながむれば、あゝ、西へ、西へ、潮につれられ、波のまに〳〵。

情想こゝにさめて、始めて我れにかへれば、日の女神はいつしかあらず、唯なごりの紅のみは、西の空に夢の如くのこりて、はぢらふ少女が面わにも似たり。海の色は綠りにさめかへり、水と天と接したる東の空は、暮煙たれこめて、けぢめ漸くわかずなり、西の空に向つてひろごり來らんとす。幽闇の影、悲愁の色、いづこよりともなく我が身にせまり來て、いとゞさびしく、心細く思はるれど、去るべき心はつゆ起らず。かもめは、何處にゆきけん影あらず。

夏期の休業も終りぬ、明日は、このなつかしき故鄕の地をすてゝ、うたて紅塵の地に入らさるべからず、今宵こそは、此の山水に別れを告げん傍ら、思ひ、思ひて、思ひ拔かん、我がわき出づる情想の泉の、つくるまで。

波の聲やう〳〵高く、吹く風冷やかなり。

花は、去つてあらず。水の上か、海の底か、はた、やさしき君が御手にか、知らず。

沖のいさり火かゞやきそめぬ。一つ、二つ。

思はず天を仰げば、八日の月あはく光りそめたり。

去らんか。

忍びず。

今や我が胸は、何ものかに抱かれつゝあるなり。

◉夏の夕暮

みどり

ひるの暑さに身も溶くるやう思はれて苦しさたへがたかりしがいま過ぎし夕立にうら〳〵人心地つきたる折しも親しき友にしばしそこらながめ給はずやといはれしまゝいざとて立ち出でぬあはれひなに住む身の長閑さよ朝より夕までおとなうものとては稻葉を渡る涼風と門を流るゝ小川のさゝやきとのみわれ等は何となく彼方此方と歩みつゝか遙に西の方を眺むれば夕日はなやかにかたふきてあかれさす夕ばへのうちに富士帶の山々濃き影もてゑがき出だされたらんやうにたち連りたる中々にうつくし田の面には綠なす稻のふく風にゆらめきて置く露を玉とちらし賤の女はあすも來てたがやさんといさみてかへり行く姿こそかしこに見ゆかたへの家より出で來りし二人の童は德利もちて町の方に行きぬ父の好める酒をもとめんとにや軒端より蚊やりの煙しづかにたちのぼりて其がかたは

らに子等のかへり遲しとまちわぶる人々の樣を思はしむ
あゝ自然のけしきの美しさに心も身にそばで唯西に東にあこがれ行き何事も知らざりしが耳もとにて聲ふりたつる馬子の歌に驚かされ心づけばいつの程にかあまたの時を經たりけんあたり小暗く遠方は見えやらず先きの家より火かげのもれくるにいたくもながめ入りたるものかなさぞかし父母の君のまちまさんとて友をうながし家路につきぬ實にたのしかりきは此の夕よ

◉婦人のたしなみ

寺本島梅子

婦人はその性溫和にして優雅の氣質を具ふるものにしあれば、その身を謹みその家ををさめその子女を教育す〆如きはよくその性にかなへるものなり。そのやさしき心情はよく人の心を和かげ、その麗しき言葉つかひ起居擧動はこれに接するものをして圓滑なる交際を結ばしむ。しかはあれど、婦人は物にふれ事にあひつゝ喜怒哀樂の情強きものなれば、感情に制せられて事を誤るが如きこそとなからむよう心すべきことにこそ。さればよく普通の學に渉りてその智識をそなへ高尚なる感情を以つて道理に從ひば必ずや、一家を保つに難からざるべし。

婦人の性質は前にいへる如ければ、そのなすべき業のいと多かる中にも裁ちぬひ料理のことより家政の道はなべておもき務にぞありける。歌よみ文かき絲竹のしらべ挿花茶湯などこれまた女子のたしなみなれど、こそ細かに見れば、歌よみ文かく人は大方女子の天性を忘るゝもの、如く、あるは裁ちぬふこを知らぬが多かめり。裁ちぬひに巧みなるものは學文に疎く、挿花茶湯音樂などのみやび、を好むものは烹厨のことなど賤しきものの數として顧みざるが常なり。かゝるたぐひのとり〳〵、其の業の奥儀を具へたるものは古へも今もいと稀なり。まして歌よみ文かくことにのみ巧みにして、朝夕に缺くべからぬ飯を炊ぐ業すら知らず、四季をり〳〵に移るべききぬのたちぬひまで、他人にあとらへるを以て、いと高ぶるものあり、そもそは如何なるひが心ぞや。獨立自活して男子に習はんにはよからむも女子の本性に戻るものにあらずや。あはれ世の女子たるものはよくこの理をさとりて、一定の見識を備へよみ書く業も一通り覺えたらんには、さて裁ちぬひ烹厨の事にも心をかけ、他日一家の主婦となりては、衣食のことより老者病者の取り扱ひ、小兒の教養に至るまで、かつは交際訪問の禮を全うし所謂良妻賢母の聞へ高く、一旦不慮の禍に際してもためらはぬやうひたすら精神を修養し其の操節守り家名を保ち、親夫をして恥辱なからしめは、はじめて其の天賦の職掌を盡しはてしゝものとこそいふべからめ。

◉涼臺

越後　長田謙子

きふは甚たしき暑さにて、賤が伏屋は、ほと〳〵釜の中に入りたらんが如き心地せられて、その苦しきことといはん方なし、流れ出つる汗も、終には拭はんとする勇氣も失せて、早く日の暮れなんことをこそ待ちたりける。

かくて夕つ方に至り、電の光閃くよと見えしまに、おどろおどろと雷うちとどろき、一むらの黒雲、みんなみの山の端に起りけるが、忽ち大空を蔽ひ、いと大きやかなる雨はら〳〵と降り來り、はては盆を覆すほとに降りしきり、王剪の軍七十萬、一時に礫を拋ちたりとて、よも之には過ぎじと思はれつ、しばらくありて、雷鳴りをしづめ、さしもの大雨も名殘なうはれ、空は隅なくすみわたり、また一ひらの雲さへ見えず、一

痕の涼月にこやかに山の上に躍り出で、晝の暑さは、敗兵の如く、何處へか退きけんそのしるしだになく、涼しき風さや／＼と竹の簾を透して、身も心もすが／＼しうなりけるまゝに、夕餉を終ふるや否や、妹を引きつれ、庭石傳へに輕く歩を移して、梧桐の下芭蕉の傍に、いつもの如く涼臺の上へと腰をおろてぬ、

さても、妾は新潟なる學びの宿りより歸りて、僅に三日ばかり經たるのみなれば、さきの日など話し殘し聞き盡くさぬふしなど、互に語りつ語られつ、やがて母上より賜はりし菓子など取り出で、その味の美なるをほめそやし、樂しきこといはん方なし、されど樂極れば哀至るのためしにもれず、忽ち憶ふ去年の夏休みには、姉上兄上も同じくこの庭のこの涼臺の上に夜な／＼うちつどへて、茶よ菓子よとさゞめきながら、四十あまり五日を、いとゞ樂しく暮したりけるが、浮世は實に夢なりけるよ、その後妾は、舟江の里の常磐ヶ岡なる學舍に歸り、兄上は遙く鯨濤を破りて、臺灣に官遊し給ひ、姉上は妹と共に家にありて父母を慰めまつりしが、今年五月の末つ方、萬紅桁を辭し、流るゝ水に從ひ、靑山綠肥えてほとゝぎす血に啼くころ、これまで一度も病の床に親み給へしことなき姉上は、一日徂く春の風に誘はれ給へ、醫藥そのしるしなく、「ア子キトクハヤクカヘレ」てふ一片の飛電に接し、氣も魂も身にそはで、取り物も取り敢へず、馳けつけ、漸く門に入れば、あら情なや一聲ひゞく鐘の聲、蘭折れ蕙摧け、三寸息巳に絕えて、幽明忽ち處を異にす、あゝその時妾の悲は如何なりしよ、落つる淚もとゞめかれて、枕邊に泣きくづれたりき、あゝ妾は姉上と長へにまたこの庭のこの涼臺の上に、去年の夏の如く樂しく暮すことを得ざるに至りぬ、實に果敢なきは浮世なるかな。

猶も思ひ出てられて、淚の種となるものは、兄上の身にこそあれ、彼の臺灣島は、我が版圖に入りて、未た年月を多く經ぬものから、王化にまつろはぬやからあり、時々暴徒を嘯集して亂を興し、剩へ無辜の民草を殺戮したること知らず幾度ぞ、近頃はかゝる事も漸く跡を絕ちたる樣なれど、知慧乏しく義理を辨へぬ蠻族どもの事にしあれば、何時起り來て仇を爲さんも測りつべからず、おそろしきことの限りにこそ、まして彼の土は本土とは異なり、蠻煙瘴霧の地とて、溽暑酒の如く、金をとうかすといはんも、未だこの暑さを形容するに足らざるべし、この頃新聞紙は報していひらく、北米の紐育府にて、酷熱のために死したる者、一日二百餘人に及べりと、紐育府の如き米洲文明の中心たるところに於てすら、猶ほ且つ暑さを凌ぐよすがなく、死したる者彼の如く多きに、萬事便あしき臺灣島に於ては、その凌ぎがたきことそもいかばかりぞ、實に心もとなきことなるよ、獨りこれのみにはあらず、彼の土は聞くだにもおそろしき「ペスト」病や「コレラ」病は、年內常に絕ゆることなしとかや、あゝ我が親愛なる兄上は、かゝる病に犯され給ふことはなかるへきか、きふこの頃は、さきくましくて、綠山なす芭蕉樹の蔭に、去年の夏この庭のこの涼臺の上の樂しかりしまとゐを思ひ出で給ふらんか、屍を馬の革につゝみ、白沙靑草の中に横ふは、もとより兄上の期し給へるところなれは、死したりとて聊憾なかるべきも、父上母上の悲はいかばかりなるべき、まして惡疫の爲めに斃れ給はんには、死して四方に聞ゆることなからん、と、妹とともに二つの袂をしぼりぬ、實に戀へしく懷かしく思ひ煩はるゝは、兄上の身なるかな、

かく語りつゞけけるうちに、夜も漸くふけわたり、彼の山の端に升りし月は、今やかゝりて庭上の梧桐にありて、靑き光を涼臺の上におとし、露は衣を濕して氣秋よりもさはやかなり、あはれ我が小庭を照す今宵の月、我が涼臺を照す今宵の月、我が梧桐を照す今宵の月よ、またおなし

く天涯萬里綠山なす芭蕉樹の陰の兄上を照せかし、

◉すゞみ臺

攝津　石田豐子

夕日入りはてぬる山際に、ひかりなほ留りて赤う見ゆるに、黄ばみたる雲の棚引きたるいと暑かはしくあるを、蜩蟬の聲の梢にかしましう、蚊遣ふすぶる烟の茂く立ち騰るは、見る目もいといぶせく覺ゆ。あはれうの花くだしもがなと、浴などして立ち出づる折しも、日頃いとも親しき花子ぬしのもとより使のとふらひきて、今宵すゞみにきてよといふに、さらばとて出でゝ行く。ゆふされの空薄くもり、行く手の賤が家の人どもも、涼みに出づる頃ほひ、漸く友どちのにいきつく。此家ひとぎは小高き地にたちて、後は山をおひ前はひらけ、同じき村の家々より庭を廻るいさゝ川にいたるまで手にとるやうにて、いつもの眺よきは村人の譽むるところになん。あはれこよひ其よき場所に迎へられてきぬ。なれすゞみ臺よ、はた妾に何をか話さんとする。

花子の弟『よつちゃん』は『れーちやんきた……きた』といふて行く。

やがて妾はひかるゝまゝに從ひ行く。みわたす夕景色、薄くらくてまことに一幅の墨畫の如く、めての方に老ひたつ糸柳、涼しき風に身を送られ面白く動きて、かたへの燈籠なんどを撫でかゝる。すがりもあへぬ螢の、玉と亂れて飛び去り飛び來り、芦邊のそれは浮草に散り、水に影うつせる、げによしや籠にせるこの螢もはなちたくぞ覺ゆると花子の語り給ひぬ。もゆる思ひは見えながら、いと涼しきものにこそ。したしき友の心にかゝることもなく何くれとなくうち語ふうち、いつしか東の方の紅にほのめくに、あれよと見る内、山端を出づる月の澄みまさりたる、常よりも妾等をとぶらふ心地ぞしける。今はきら〳〵と綠り染め出でし千草の葉末に凝る白露も、玉をや貫きとめたらんが如く、はてはいづくと見えぬまで遙々廣き野べの、稻葉に置き渡すなる露の光は……。あはれこの景色。時々訪づるゝ風に、あるは全くあるはくだけづ、ほろ〳〵とまろびゆく、ひろひて釵のたまにもしたげなり。あゝさても夏山の木の下に吹くべき物が秋の夕風になんといへば、まことによ、これぞ雲に迷ひて秋やきぬらんなりかしと語りたまひぬ。

かくあかず眺めに他事なかりしに、二聲三聲うしろの山に、山時鳥の月になのりたるに、ふりかへりみる折しもあれ、花子ぬしの母上も出で來たられき。『よつちやん』をつれて。妾は今宵こゝにまれかれたるを、いたくうれしく思ふといへば、母のきみ常にまさり喜びたまひき。こゝにみる目を他にうつして、『よつちやん、よく目があいてますこと』いひも了らんに『おとーちやん、いないから……』あどなきそぶり、たれかくいふ、小兒は生ける神なりと、さることになん。しばし無言なりしに、ふと『よつちやん』のことから胸にうかび出されけるは、去年の秋、世をさり給ひし眷子のことなりと口走れば、母のきみも、さなりとのたまひぬ。花子もつぎに。

忘れずよ、去歲の今夜、月は隈なくさやかに澄み渡り居れりき。同じ望の月、今日はしも空しくかたみの松にありし一世の豪華の影をとゞめ、奥津城邊の葉末の露はみだれて、そよ吹く風ばかり身にしむ。思へば今宵の月いかにつれなく寂しき影をこのすゞみの臺にうつす哉よ。取りかへられたれど去歲もこゝにすゞみ臺はありき。ともに來て月の影を眺めたりし時、木々の木すゑ、いさゝ川の流、草むらの玉の光など御歌ぶくろの料としてよみ給ひぬるを　……。さても末の露もとの雫後れ先だつ例しにはもれぬ人の身の上とはいへ、あまりつれなしあるよ、一月あまり病の室にたれこみて後、九原道も遠き處に…旅立ち…たまひし

とは。しかも花のをとめ子の一人。

それにあえてかあらぬか、空ふく風のたえつ、つゞきつ、つゞきつたえつ、さながら歔欷くゐが如くに、草葉をゆるゝ折こそあれ、夜半の鐘聲かすかにひゞき渡りて、哀情とゞめんとして止めがたきに、さゝ川のほとりになく蛙一つ、あはれに聞ゆるに、覺えずも目には露のみつ。あはれ、かよわき胸はをどりぬ。熱き涙はしとゞに袖をぬらしぬ。見るにつけきくにつけいづれか腸を斷ち袖をぬらすの種ならぬかは。まことに物おもひなき人の世の中。

暫し憂にしづみいとぞ胸くるしくのみありしか『おとうさん、もどつた……』と『よつちやん』のいふのに心づきて、歸らんと言ふに、時よ〱妾が家のはしためのむかひ來たれりしかば、暇をつげて立ちかへる。今はしも空さへ俄にかき曇りて山端ならで月もかくれ、いみじう暗うなりて、短か夜の更けやすく、身にしむばかりの夜風あら〱しく吹き出でけり。

たのみ人は土となり。わが世空しく過ぎ去りなんとす。あゝ世は只春の夢と思ひきはめながらも、なほ物心細きかぎりに、涙なきを得ざらめやも。

《完》

◉すゝみ臺

大村 吉田みれ子

我家は都のちりを離れたる遠き田舍にあり。すゝみ臺は其の裏に小高く造りかけたり。我は常に弟と妹とを連れてすゝみ臺に登るが例なりけり。されど今夜は二人共程遠からぬ伯母の許に行きたれば我は登ることもせで室にとぢこもりて文よみ居たるにむさくるしき家の事とて晝間の暑さ未だ消えやらず蚊さへしきりに制せばこらへかれ獨りして登りつ伏して遙の谷間を見ればかなたの小暗き森の中より燈火のかげの三つ四つもれて螢かとあやしまれやみに飛交ふやせほたる二つ三つ燈火のかげかと思はる。仰いで靜けき夏の夜の大空を眺むれば底の底まで澄み渡りて海かとも見ゆるに流るゝ星のいくつともなく柔かにあなたこなた音もせで飛び行くいとあはれなり。涼しくそよ〱と吹く風の音は神のかなづる玉琴に觸れてぞひゞくなる天の樂かと思はれて自と神清み魂も氷るが如き心地し物とはなしに仙境に入る思ひせり。

しばらくありて神秘の夜を破りて照らす二十日あまりの月は奧の山の端を出でゝ一時に田毎の面をのぞきこめは水をたゝへし青田は月影を涵し草葉に結ぶ露は輝きて幾千萬の玉をまきたるが如し。靜かに座せし我は氣あがりて下界をのぞむ仙女の思をなし思はず立上りて臺をあるき廻りぬ。

されどまたいつのまにかざしけんらんかんによりそいて遠き蛙の歌をきけば無聲にまさるさびしさ心しづかに流るゝ石川の水の音は眠を誘ふ心地し月高く昇りては青白き光もて我が顔を照らし夜は再び神秘の幕を垂れんとせし折しも表の方に弟等の歸り來りしけはひせしかば我はすゝみ臺を下りぬ。

◉すゞみ臺

熊本 坂口巳代

晩餐のあと、妾はすゞみ臺の上にたつた、唯一人なのだ。何處から飛むで來たか、蝙蝠がスート見へすなりたるところに、一つ星が淡く輝き初めた、上内山の峽を横つて、一直線に流れ行く白銀川の水の面に、けしきばかりの夕靄がほんのりと浮びでゝ、そこにお百姓の草笛が聞へる、仕事返りの男女が樂しそうに語り連れて通り行く、杜鵑が屋敷の裏の孟宗

竹の叢に來て鳴く、ぱた〳〵とたゝく扇の音がしたので、吃驚して振り返ると、後ろには姉さまが立つて居らるゝ。

『吃驚してよ、誰かと思つたら姉樣だつた、何時のまに來なすつたの。』

姉樣は四五日前都から歸られた、あちらで流行の改良服とかを着けられてあつた。

『こんな衣服が流行つてるわ、ゑゝのかれ、お前さんどう思ふの。』

と姉さまがお尋ねになつたから、妾はいゝのれとお返答申上げたけど、餘りに晴れ〴〵しい心地はせなかつた。

元より賤しさ女のことであるから、衣服の善惡に就ての智識をもつて居よう筈はない、けれども妾だとしたところで、今日着用してゐる衣服を以て、此上もないいゝものだとは、どうしても考ふることが出來ない。夫れは諸先生方が、改良々々と八ヶ釜しく唱えなさるに、聽きはじまつたとでないが、破壞して更に建設するには、最も稠密な研究が伴ふべきは、何物に限らず必然の結果として來るべき要素であるのに、諸先生には、さしたる深き考へもなく、改良を遂けたさの一圖に凝固つて、一夜づくりの考案を公にさるゝのみか、突飛にも監督の下にある婦女子の膚に、ふれさして見らるゝ如き傾きがあるのには、餘りに大早計だと思はれる。で改良の方法がまち〳〵になつて、あるは實用に偏し、あるは攝生に偏し、あるは美術に偏して、統一を失つて居る計でなく、更に道德上の缺點が追從するらしい。元より創業の初期に屬するのであるから、深くは咎めぬが、どふか是等を綜合して、無傷なのを案出することは出來まいか、其上で着用をするにしても、決して遲くはなからうと思はれる。

こんな缺點多き衣服を強いて、婦人の着用を促すならば、是迄の衣服は運動を制限して、自然的に衞生上の害になるからと云つて、強ちに捨つべきものでない。なぜかと云へば、國風上から歷史的に發達し來れる今日の衣服は、改良すべき點が多きとは云へ、自づと禮式作法の道德がわにまで深き因緣を形造り、日本婦人の淑德が一種の高尙を保てるも、少からぬ關係を衣服の襞の上に有して居るのは、風俗史を觀察したるものゝ等しく感じるところである。然かるに婦人服の改良を唱導さるゝ人々の中で、道德と衣服の關係に就ての研究を試みられた先生は、今のところ無いやうである、是は實に杞憂すべき問題であるまいか。今日では男たちの一般に行はるゝことだが、殊に滑稽に見ゆるのは、洋服をつけた紳士が、疊の上に兩手をひいて、恭しく日本流の禮式を催さるゝとき、蛙の平這ふたやうな、孑孑の頭を振るやうな、圖にはづれた調子が、如何にも不調和で、莊重典雅のみへは藥にする計りもなく、輕兆で、浮薄で、眞率を缺いて居るやうに思はれるのは、洋服を着たからと云つて、決して、輕兆浮薄になつたからでなく、全く日本流の禮式には、洋服が調和しないので、從て羽衣襟の、高尙に優美なるに劣つて見へるのである。是れは維新の際に、洋服を採用するに就て、日本の禮式をかえりみなかつた、粗忽から伴ふたる弊害である。殷鑑遠からず、若しも是れに相似したる現象が、優美淑德を尊重すべき婦人社會に於て顯はれたならば、いかであらう、夫れこそ由々敷大事である。男達とちがつて、婦女子は重もに家庭內に於ける任務を具有するから、直接影響の及ぶべきは小供教育である、尤も進步すべき今後の家庭教育は、今までありふれたる亂雜なる仕方では、到底物の役にたゝないから、もつと秩序を立てた上、嚴肅と和氣の融和を求め、是に美的教育の幾分かを注入せねばならぬが、そうなつてみると、婦女子の責任は愈大である。其重大なる責任を負へるものに、少しにても惡の分子に感染し易き、輕兆や、浮薄の外觀があつたならば、次に來る國民成立の上から、悲しむべき惡兆候を發顯する

に相違ないので、妾は常々考ふるのだ、今日の婦人服は何とか改良せればならぬに係らず、密接の禮式の關係があるから、改良を企圖せらるゝ諸先生は、いやが上にも此點に注意を荷ばれて、更に禮式の新規定を制定するか、若しくは是迄の禮式に關して、少しも悶着を生ぜぬ度合に於て、改良を求め、實用にも偏せず、美術にも偏せず、衞生にも偏せず、渾然として完備せる衣服を得るべく願ふのである。今日の如く、御自分でさへ如何かはしきやふな、改良服を、試驗的に妙齡の令孃達に着さするは、改良を主張せらるゝ人々の思慮として、餘りに殘酷であるまいか。………

折りから母樣の聲かして、頻りと呼び玉ふので姉樣ともにすゞみ臺から、庭の芝生の飛石づたひに、室の内に急いだ。星が梨地のやうに數へまさつて、夕顏の花の白きには、今しも東の山の木立をもれたる、つやッぽい月の光りが、あざやかにさして居る。

（完）

◉すゞみ臺

佐賀　ひで子

山家住ひのことゝて屋根の上などあるはやり水涼しき庭の面に美しうしつくろいたる臺もなし。

たゞわざとならぬ庭石多き草生ひしげる自からの庭に竹などあまたうゑ並べてそを被ひひろげたる帶の上に涼しき月をあびながら晝の暑さもわすれつゝ納涼みするこそこよなふ樂しけれ。

暑き晝まを洗ひ去りし夕立の名殘の雫まだ若葉青葉より散りはてぬにやう〳〵たそがれ初めて軒端の松の葉保すゞしくさわ〳〵と吹くゆふ風に十日あまり四日の月のさてもさやかにさし昇りて遠近の藁屋あるは杉の木立などま黑く見へて眺めをもしろきにまいて乾きもはてぬ草木の若葉にきらめくかげのあまりに美しうすが〳〵しければ筆とるひまも惜しさきゝ口惜もてやにはに妹はしらかせ日頃敷島の道の友なる何子の君呼びたりしにあいにく隣里なる叔母のがり行き給ひしことゝてさも心地惡るげに歸りければ本意なくもたゞ獨り團扇かた手にうち出でゝ蓮のにころびつゝしばしあちこちの景色見渡すに青田すゞしき水雞の聲蛙のさけびさえいよゝなかしさ增さりければつたなき巳が筆なれどひとり眺めたゝえんはあまり甲斐なしさては今宵の心やりにもと硯紙などもち出だしてさやりき空のひかりに歌にもあらぬ三十一文字二つ三つ書いつけ終えしは月かげ西にやゝかたむきて時々さけぶ水雞の聲も今は肌寒う思ゆる頃なりき。

◉日曜日

牛込　林　喜代子

凡そ日曜さしいへは上は官に仕ふる人より、下は小學に通ふ兒童に至るまて、この日をよろこびむかへぬものはあるまし、一日にありてら夜そ靜に體を休むる時なれ、一週にありては此樂しき日曜そかし、されは日曜さしいへは、其土地〳〵の名ある處々には、おびたゝしき人多にてなか〳〵ににきあふ、げに日曜は一週の苦をなぐさむる日にして、樂しく暮すに日曜たる日の本意なれ、よく一週の苦をなぐさめ忘れて、以て又來む一週を一すちにつとめむ爲にしそ、この日曜さいふ休日は定められたるなめり、さるを我國の人は、いまた日曜さしいふも常の如、業務をなす人の多さ、西洋にては此日曜を見るさ我國の人さ異なり、日曜さいへは業を休み、身を樂しましむるものそさの感念ふかく心に走るさるれば、日曜さしいへは、高きも卑しきも、業を休みてあるは郊外に、散歩し、あるは公園を遊歩す、よくつとめよくあそひてこそ、いよ〳〵其業務を進むなれ、されが日曜はかみな樂しく愉快に暮して、以て來る日曜まてひたすらに樂しく、業務につとめむ事を許るべきなり。

◎大橋乙羽氏の逝去を悼む

對馬　志田照子

あはれ文壇の一奇才として、世に知られたる大橋乙羽氏は、明治二年羽前の國米澤の里に誕生あり、其十九歳の時、始て東都に遊ぶ、而して尾崎紅葉石橋思案氏等に就きて文壇に出で、始めて小說露小袖を著し、次で東陽堂風俗畫報中央新聞等に筆を執りてより、其名漸く世に現れ、後ち博文館主大橋佐平氏の女婿となり、專ら同館の編輯事務に從ひ、益々文筆をはげみ、著したる所の書極て多く、則ち乙羽十種、累卵の東洋、若菜かご、千山萬水、花鳥集の如き是なり、其筆力の遒健なるは、讀む人驚かざるなし、特に寫眞の技に長じ、名山勝川を撮影したる紀行文積んで冊をなす、千山萬水、歐山米水の如き是なり、歐山米水は昨春遠く歐米漫遊の擧を與し、歸朝後の著作に係るものなり、是れぞ氏の遺書として永く世にのこすものなりしなり、悲哉本春チプス病に罹り本郷第一醫院に於て療養怠りなしと聞きしが、天無情なる哉、人々の心づくしも其甲斐無く、六月一日朝此一才人を地球より奪ひ去らんとは享年僅に三十有三、嗚呼悼哉。

評、氏の死を悼むの情、紙表の間に橫溢するを見る、（記者）

◎亡き母を思ひ出だして

廣島　小松ヒデ子

世に慕はし戀しきと、あまたありつれど、其うち殊に、慕はしく戀しきは他鄕にありて、父母の事を思ふ程、一切なるはなからんもと妾の家は、貧なりしかば、故鄕をはなれて、遠き都の東京紡績にと入りしは今より五年の昔、妾の十五の歲なりし、家を出で、鄕を離るゝ時は、何一つ思はざりしに、都に着きて紡績會社の、寄宿舍に入りし時にはかに故鄕の事の思はれて、父上如何に、母いかに暮すらんと、情緖は千々にかき亂れ、淚さへもいとゞしげかりし、さるないく度も、思ひかへして、忍べば樂しき時も、來るならんと、朝はとく起き出でゝ、夜は遲くまで、妾の業を勵みつゝ、一と年あまりも過ぎて、忘れもせじ、神無月の中ごろの夜、冴へ出でし月の影は、中空にかゝりて、小夜嵐にはら〳〵と、落つる一ッ二ッの枯葉は、さやけき玉兎の光を、橫切りて、さらと音して寄宿舍なる、妾の障子にと散つ、妾はこれより夜業にと、仕度をなせし時、寄宿舍詰なる人、一ッの電報をたづさへ來り、妾に渡して去られしを、開くも遲しと封を切りて、見るにハヽビヨウキアッシスグカヘレ、とありしかば、あまりの事にいかばかり驚きたりけん、しばしうつとりとして、心さへ身にそはず、何氣なく窓の障子をおし開けば、月は淸らかに冴へて、松の小枝の間を、縫ふが如くに過ぎつ、妾は西の方に向ひて、はるかにすぎさりし、不孝の罪をばわびし、遠くへだゝりたる身の悲しさには、速かに歸りて傍近く侍りて、氣色伺ふ、事だにかなはず、いかゞはせんとためらいし

其夜は業を休みて、歸國せん事ども會社と打ち合せなとなし、翌日は出立なさんと、思ひ居たりしに、彼れ是れと手まどり、三日の後ち會社より歸國の許を得て、そこ〳〵に支度とゝのへ、新橋停車場にと急ぎいで立つ、午後二時あまりといふに、赤き切符を求め下りの列車にと乘りたりき、滊車は出でぬ、窓より伺へば空は高くすみて、くまなく晴れ渡り、四方の野邊の景色は、目のさめつるほど美しけれど、妾は只一日も早やとく、母上に逢ひたさのあまり、一ッとして面白からず、かへりて一としほ風の身にしみて、よさ心地をもせざりし、滊車のうちにて夜も更かし、つら〳〵と妾の身をば考ふるに、海より深く山よりも高き、たゞならぬ御恩を受けながら、老躰の身をいつまでも、わづらはせし罪など、

今更めきて思い出で、一日たりとも早く御姿を見て、御心をやすめまゐらせんと考へつゝ、涙のかはくまもなかりけり

やがて妾の郷なる、廣島驛にと付きければ、滊車と別れたゞちに、人力車を雇ひひたはしりに、走りて家に歸り見れば、伯父上伯母上初めみなの人々うちよりて、何やらかたらせられておはせり、只今歸りました母樣はと、とへば皆の人涙を流され、しばし言葉の出でべうともおぼへず、やゝありて弟のいふよう、姉さん母樣はおとゝいの朝、命數のつき給ひしにや、惡覺の爲めに身をうばゝれ給ひて、きのふ葬ひなどすませしと、言ひ終りて泣きにける

思ひ週らせばなにゆへに、早く歸りて一目たりとも見まゐらせて、一と言なりとも交へつべかりしかと、しばしとめかれたるなんだ、一時に出でし、さぞや母上は、罪多き不孝の妾をうらみさせ、給はんと思ふにつけ、せまき胸のはりさけもせんばかりに、心は千々につどゐ來りつ、あゝいとしの亡き母上は、今ごろはいつくにさまようならん、いかにまゝならぬ浮世とはいへ、など妾に先きだゝれしかと、身もある心地もせざりき、「今もなほ亡き母上の事ども、思ひ浮ばれて、母上戀し墓はしと、一と夜泣き明すこともあり、又暑さ寒さに打ち勝ちて、日々勵む糸つむぎ、時としてはあたゝかき、衾に身をば包まれて、樂しき夢路に遊ばるゝ世の人の、安き眠りに引きかへて、隙もる風に惱みつゝ、眞の夜中に挽む心をふり立てゝ、勵めども何かはせん、共にかたらむ母上はおはさず、あゝはかなき妾の身、あゝ悲しひかな

◎蛙を聽て感を記す

芝　大柳錦子

徒然なるままに文札に向ひてこしかた行末の事など思ひめぐらしつゝいつしか文を枕にまどろめばいさめ顏にもそよふく風の若竹を鳴らす音に夢を破られ窓おしあけてながむればひむがしの空よりにほひ出てたる月のいとえんに麗はしく光こそ秋の空には及ばれど若葉の露に照りそひていとゞゆかしふ覺えければすずろに庭におり立ちかなたこなたをさまよひつふと木立のもとにやらへばはるか泉水の方に蛙の聲きこゆあなうれしやと思はず耳を傾くる折しもはらはらと月うごきてえならぬ花橘のかほりたるなどいとなつかしやうやう更行くまゝにものの音も靜まりはてたち舞う塵もおさまれる程はこの世のことゝも覺えずなむかかるおりには敷島の道に暗き身にもそゞろに一首口ずさまれぬ「池の面に月や宿ると友よひてふけ行く夜半をなく蛙かな」古來幾多の才子佳人をしていかに感激の思ひあらしめたりしことよされば古人も「水に住む蛙の聲をきけばいきとしいけるもののいづれか歌をよまざりける」といはれしも實にことわりぞかしそのひとしほうるはしきゆかしき聲はうたた管絃の思ひあらしむ嗚呼かかる心なの虫すら其の聲は鬼神も泣くべうあめつちを感せしむるならむましてや萬物の靈長たる人と生れ出てゝもろびとの耳傾くる程の事もなさでいたづらに月日を送りたらむにはその甲斐なからむのみかはかのささやかなる蛙にも耻づる所やありなむかくてはいと口をしき事の限りならずや此理を知りてはいかでつかの間もおぼろげにあり得らるべきとおもひつゝ書齋にかへりよみさしゝ古書を繙きけるがあまりに心ゆきければ燈火の絕えなむとするをも覺えず塒の鳥のおちこちに聞ゆる頃いとゞ身に染む事の忘れがたさに思ふまゝをかくなむ

◀投書家に注意す▶

近來投書家の不德義何ぞ甚しきや、本誌每回の投書中、不正行爲によりて懸賞品を得んとするもの少からず、彼等の所爲を見るに、或は他人の文章を其儘に剽窃し、或は少しく其辭句を改竄し所謂燒直したる者を以て、選評者の目を晤らまし、萬一の僥倖を期して、賞品と虛名を得んとするもの屢々見ゆるに至りては、如何に今の世は道義心の微弱なる世なりと雖も焉んぞ慨嘆せざるを得んや、此の如きの行爲は、薄智無學の者とても其責を免かれがたし、然るに、雜誌に投書せんとする者は、兎に角多少の敎育を受けたるものと云ふを得べく、而して斯かる不正行爲に出づるを見ては、實に其面に唾するも尙ほたらざる也、況んや正純の德操を守るべき婦女子に於てをや、然り而して、此の如き不正投書に對しては、選評者に於て可成嚴密の審査を爲すと雖も、如何にせむ、多數の投書にして且つ悉く之れを判知し難き事情あるを、されば、現に本誌懸賞の當選者にして、剽窃燒直等の不正手段に憑るもの少からず、之れを發見せる讀者より。續々として通告書飛び來る『壺すみれ』所載の獨愼といふことゝ題する文(剽窃)其外半剽窃、燒直し等一二にして足らず、されど、此等の不正投書に付きては、他日之れを取纏めて一々其姓名を記し、誌上に於て彈劾筆誅するの機あるべきを以て、今此には詳細に記載せざるも、此の如き不正投書の益々續出するに至りては、記者は決して斯の寬假せず、之れを世上に披露して、大いに其不德義を筆誅し、强硬的攻擊の態度を以て、不正投書家――否一種の詐欺的、窃盜的犯罪者を、道義界より放逐し去らんと欲する也、敢て豫め投書家に告げ置く

（記者言）

女學世界秋季增刊

懸賞文募集

才媛詞藻　『糸すゝき』　秋の卷

投書締切　八・月・廿・日

文種

●小說（限り署名付）（二十四字詰二百行限）短篇各種　文題隨意

●國文（二十四字詰百行限）文題隨意

●普通文（二十四字詰百行限）文題隨意

●書簡文（二十四字詰五十行限）文題隨意

●新體詩（七五調三十句位まで）詩題隨意

●和歌（短歌に限る）初秋山家、蟲

女學世界は、號を累ぬる僅かに十回のみ、之れを人間の年齢に比譬せんか、十歳は未だ兒童の時期たるなり、されば、本誌や將來に發達すべき運命を有し、現在においては、十分に其本色を發揮する能はさるにも拘らず、創刊以來號を追うて益々健全の發達を遂げ、大いに江湖才媛の歡迎を受くるに至りたるは、弊館及記者の讀者に向つて深謝する所也、依て來る九月十五日發行の定期增刊は、書名を『糸すゝき』と題し、之が編輯上の用意は、精緻なる新意匠、有益なる好資料を網羅して、前刊に倍するの光彩を煥發し以て聊か讀者諸君の芳意に酬ゆる所あらんとす、全篇の紙數は例の如く二百頁を超え、其中過半の頁數を懸賞文に充て、剩餘の紙面には、當代名流の手に成れる作物談話を採錄す、寫眞口繪及び挿書等も、その面目を新たにせんとす、乞ふ滿天下の諸孃よ、各々其得意の文筆を揮ひて才媛文壇を飾られんことを

九月十五日發行

賞品

特賞　婦人用時計（代價金十圓位）　壹個

特賞　高等四季袋（代價金五圓位）　壹個

（特賞は小說に限り最優等者一名に與ふ）

甲賞（圖書切符）金參圓　當選者五名

乙賞（圖書切符）金貳圓　當選者六名

丙賞（圖書切符）金壹圓　當選者十二名

秀逸　金五十錢相當の圖書を賞與す　廿名

（注意）和歌は天地人の三名に乙賞以下の賞品を外に秀逸二十首に薄賞を與ふること
投書の封筒に『糸すゝき』と必ず附記すべし
此募集廣告に特定あるものの外に例刊の投稿規程を準用することゝす

懸賞文募集

本誌は初號以來『才媛詞藻』の欄を設け賞を懸けて廣く才媛の詞章を募集し來りしが、今回より改めて毎回必らず文題を設くる事となしぬ。其の選評者は孰れも國文學界の泰斗とも稱すべき名家也、海内の才媛乞ふ其の美感佳想に成れる玉作を投寄されんことを九月分月題左の如し(〆切八月十五日)

秋夜の感想 (廿四字詰五十行)

(秋夜の感想なる下に各自の偶感を記して送られたし文体隨意)

(賞品) 甲 一人 (圖書切符) 金貳圓
乙 二人 (仝) 金壹圓
丙 三人 (仝) 金五十錢

和歌兼題 (〆切八月十五日)

健康

月下蟲聲

(天、地、人、三名選び前揭賞品の乙以下を呈す)

投稿規程

一、本誌は女子の手に成れる投稿を歡迎す
一、投書の種類は文章(文體は國文及普通文に限る)詩歌(新體詩及短歌今樣の類)小說は優美にして卑猥ならざるもの等とす
一、投書の期日は規定なきも懸賞文は所定に依る
一、投書の用紙は半紙二ッ折(和歌は端書に限る一葉一首の事)半面十行一行二十四字詰にて文字は正楷に限る
一、投書は各種類を別紙に認め匿名を欲するものと雖とも必ず其姓名住所を記載するを要す
一、投書の送附は博文館編輯局宛にて封筒の表面に『女學世界原稿』と記載すること
一、投書は採否に拘らず一切返戻せざるものとす

(寄稿募集) 本誌の材料として、家庭及び地方風俗、婦人社界の狀況、孝女節婦の美談佳話、各女學校の狀況、その他有益の資料を寄せられんことを希望す

學校案内

女子學院

女子學院は麴町區上二番町に在り、校長は婦人矯風會の創立者として有名なる矢島楫子刀自なり、本校は元と築地にありし新榮女學校と、麴町中六番町にありし櫻井女學校との合同より成りたるもの即ち基督敎主義の學校にして其の目的は善良なる家族をなすに足るべき智德を具ふる女子を養成し併せて和英普通學敎員たる資格を得せしむるに在り蓋し同校は專ら英語學の習得に重きを置き、卒業後は各地方の女學校敎員として聘せられつゝあり、世には同校を以て傳道師の養成所と見做すものあれども、必ずしも然らず、唯其の關係上より、今日まで同校卒業生の多くが基督敎信者の間に家庭を形作り基督敎主義の學校に從事しつゝあるを以て斯く見做されたるものならん。兎に角同校は本邦に於ける最高等の女子外國語學校ともいふべきものにして、其の高等科一二年級に於ける英文學の程度は頗る高尙なるものなり。其の豫備科より入りて、本科、高等科の三科を通じて前後十年の修業年限は、我が國現在の國狀に照して女子敎育年限の甚だ長きの感を免れず、故に大概は本科修業に畢りて、高等科を修むるものは至つて稀れなるがごとし。目下生徒の數は三百五十餘名にして內若干の寄宿生あり、寄宿舍は構內にありて、「グラハム」舍、櫻井舍の二部に分ち各々一家の如く互に相親み、自から家族團欒の形を作れり。

職員

院長		矢島楫子
和漢文學		高嶋柏齒
國語		島米子
家事		奥山眞砂
習字并讀書		光井桐月
裁縫并禮式		横井珠手
理化并譯文		重見經誠
算術并物理		井深花子
譯讀		井石千代子
英語		三谷民子
生理		高原孝子
音樂		服部雪子
英文學	米人	ミスミリケン
英語	同	ミスタムソン
音樂	同	ミスガーデナ
英學	同	ミスメラ

束脩授業料及寄宿費

束脩　金貳圓　　授業料　金壹圓五拾錢

寄宿費　四圓五拾錢　　同特別　金六圓

冬季ハ薪炭料トシ金壹圓一時納ムヘシ

但シ授業料及寄宿費ハ毎月七日迄ニ納ムベシ且如何ナル事故アリテ缺席スルモ全額ヲ納メシムルモノトス

音樂專修授業料ハ　オルガン　金壹圓　機械損料共　ピヤノ　金貳圓　授業料

夏季休業中壹ケ月即八月ハ總テノ授業料ヲ納ムルヲ要セス

◎學科課程表

學科目	豫科 第一年	豫科 第二年	豫科 第三年	豫科 第四年	本科 第一年	本科 第二年	本科 第三年	本科 第四年	高等科 第一年	高等科 第二年
修身	三 德育善行	三 仝	三 仝	三 仝	三 人倫ノ大道	三 仝	三 仝	三 仝	三 仝	三 仝
國語	讀書 假名交リ文	仝 仝	仝 仝	仝 仝	仝 仝	仝 和文	仝 仝	仝 仝	仝 仝	仝 仝
漢文	四 作文 假名交リ文 日用書類	四 仝 仝 仝	四 仝 仝 仝	四 仝 仝 仝	四 仝 仝 仝	四 漢文 仝 和文 漢文	四 仝 仝 仝 仝	四 仝 仝 仝 仝	四 仝 仝 仝 仝 和歌	四 仝 仝 仝 仝 仝
英學	讀書 四 リードル一 二 會話	仝 五 リードル二 三 仝	仝 五 リードル三 四 會話 作文	仝 五 リードル四 會話 作文	仝 六 リードル五 會話 作文 地理 譯讀	仝 七 抽出讀 文典 譯讀 作文	地文學 九 萬國史 作文	萬國史 八 修辭學 作文	英文和譯 八 歷史 文學 作文	仝 十 心理學 天文學 基督教正證 論
數學	四 四則應用 附珠算	五 分數 四 小數 三 比例	五 四 比例 三	五 四 仝 三	五 開平 四 開立 三 級數	五 級數 四 求積 代數 五 四則	五 代數 四 一次方程式 三 分數	五 四 幾何學 三	五 五 幾何學及 三 ヒ練習	
習字	三 楷書 行書 草書	三 仝	三 仝	三 仝	三 仝	三 仝	三 仝	三 仝		
地理	一 日本地理	一 仝	一 仝		日本地理	仝				
歷史	二 日本歷史	二 仝	二 仝	二 仝	三 日本歷史	三 仝	支那歷史	仝		
理科	二 小學理科	二 仝	二 仝	二 仝	一 人身生理 植物學	一 仝 仝	物理	一 物理	三 化學	
家政學					一 家事經濟 禮法	一 仝 禮法	一 禮法	一 西洋料理 禮法	和洋料理	仝
圖畫	二 自在畫 用器畫	二 仝 仝 毛筆畫	二 仝	二 仝	一 臨畫	一 投影畫法	一 仝	一 仝		
教育學							二 教育總論 智德體育 學校管理	二 仝上及 教授法	二 仝	一 仝
裁縫	三 裁方 縫方	三 仝 仝	三 仝 補綴方	三 仝	二 仝	二 仝	二 仝	二 仝	一 仝	一 仝

雜報

◉迪宮殿下御移轉

迪宮裕仁親王殿下には七月七日午前七時三十分青山御所御正殿に於て御父母殿下に御對顔わり同八時川村御養育主任は夫人幷に御附女官御乳人等を從へ同御所に參候拜謁の後伯爵夫人迪宮殿下を抱き奉り同九時御出門中山東宮太夫、女官監督萬里小路幸子、御用掛橋本綱常侍醫加藤照麿の諸氏供奉同三十分川村伯爵邸に御着相成りたり沿道の兩側には男女老幼堵の如く整列して奉迎し赤阪、麻布、芝三區内は各戸國旗を揭げて奉祝の意を表したり

麻布狸穴なる川村伯爵邸にては門前に『萬歳の字を』裝出せる綠門を造り新調の大國旗を交叉し玄關の入口にも亦同樣の國旗を交叉し御座室内外の裝飾は云ふ迄もなく用意到らざるなし同邸には西鄕侯爵、同夫人大山侯爵、松方伯爵、同夫人樺山愛輔氏同夫人、川村伯親戚なる大久保中將同夫人、長崎御養育掛の諸氏早朝より參候し西鄕侯爵夫人は御着車後殿下を抱き奉りて樓上の御座所に入り續いて各供奉員幷に以上の諸氏は拜謁仰付られたりかくて川村伯は當日參邸せる諸氏と共に別室に於て祝盃を擧げ殿下の萬歳を唱へ奉りたり

川村伯愈よ御養育の主任たる事なれども職責甚だ重大なるを以て西鄕、大山兩元帥、松方、樺山兩伯爵へ皇孫御養育顧問仰付らるゝ旨の御内命ありたりとぞ

同殿下には七月下旬御父母君東宮同妃殿下と均しく日光田母澤の御用邸へ御避暑あらせらるべき筈沼津に於ては御用邸より程遠からぬ處に同伯の別邸あるを以て同殿下の便殿を御增設の筈御乳人小林某は御乳を上る時覆面して差上ぐる程にて萬事に恐懼し奉り居り萬一身躰に異常を生じ乳の缺乏を來たさんことを慮り候補者として他に兩三名も選定ありと云ふ又同伯令息夫妻幷に同伯母堂も既に殿下御移轉の前に於て他に移轉し同伯邸は伯夫妻の外は總て殿下御養育の御方々のみにて御守り申上ぐべしとなり。

◉迪宮の御近狀

去る程に迪宮殿下は去る四月廿九日始めて呱々の聲を揚げさせ玉てより玆に九十有六日御生育一際目立ちて見えさせられ御色つや麗はしく健やかに渡らせらるゝ由にて此頃は過日より參殿奉侍するとなりたる御乳人

小林スゲの乳と外に朝夕二回牛乳百五十瓦宛(入勺三才餘宛)をまゐらせられ其他何くれと御養育に疎かなけれは御躰量の如きも日に〳〵増させられ去月廿日頃の事なりき一週間毎に七十匁を加へて一貫二百五十匁とぞならせられける、おん鼻梁高く眉のあたり匂やかに御目元ぱッちりとして何處と無く威嚴を具へさせたまふは爭はれぬ高貴の御胤なればぞかし特に折々にこやかに笑ませ玉へる可愛盛りに皇太子皇太子妃兩殿下の御鍾愛深くましますも承る因に記す過般御養育主任河村伯邸に御移轉あらせられてよりは醫務の御掛として橋本宮中顧問官は毎金曜日に加藤照麿、木内叔三郎、小原頼之の三氏は毎日交替にて奉伺し居れりと云ふ

◉故乙羽氏追悼會

去月十九日は故乙羽庵主人大橋又太郎君の四十九日に相當するを以て、博文館主大橋氏の催ふしに成りたる追弔會は同日午後一時より濱町日本橋倶樂部に於て開かれたり、今其の模樣を記さんに、まづ同倶樂部階上の床の間には故人の肖像を掲げ、靈前には恭しく香花を供へ、供物として紅紫爛々たる和洋の珍菓數種を飾り、階上階下の壁上には故人の遺愛たる書畫(多くは氏の交友にして當世名流の筆になりたる是もの)數十幅を掲げ、來賓の觀覽に供しぬ、軈て席定まるや、催主大橋新太郎氏は來賓に向ひ一場の挨拶あり、是れより高田法學博士は故乙羽氏の經歷に就て詳細なる演説あり、次て徳富蘇峯君、肝付海軍少將、石黑男爵の諸氏交る〳〵故人平生の性行に就て述べられしが、いづれも同情深く人をして徐ろに故人の生前の追懷せしめぬ。演説の後、靈前にて空也念佛の供養あり、畢つて休憩(此間饌物に添へて故人の遺稿「歐米小觀」を來賓一同に配付すそれより當日の餘興として催されたる園遊會に移る、庭園の彼方此方には、ビール店あり、屋臺鮨あり菓子店あり、蕎麥店あり、居酒屋あり、天麩羅屋あり、吹矢あり來賓はおもひ〳〵に庭上を散策し各々好む處の賣店に立寄りて任意の飲食をなし各歡を盡して散會せしは午後六時なりしが、當日の參會者は無慮三百名に上れり巻頭の筆蹟は坂、中村、佐々木の三君が追弔の爲め詠まれたるものなり。

◉婦人共立育兒會 (口繪參照)

同會は明治廿四年の創設に係り、今年に至り殆んど十

年の星霜を經たり、會の趣旨は醫藥の資なき貧民の病兒を救濟して治療を施すものにして、總裁は有栖川宮妃殿下、會頭は鍋島侯爵夫人幹事以下の役員いづれも貴紳の夫人令嬢なり、同會は役員諸氏の盡力により會務大に進み、附屬病院建設敷地の畧ゝ決定せしを以て遠からず病院建築に着手せんといふ、同會々員の總數は目下五千三百二十人にして基本金三萬五千圓外に病院建設に付ては寄附は既に五萬圓に達し又畏くも皇后陛下よりも御手許金七百圓を御下賜相成し由、卷頭の寫眞は過般同大會の際に參集され役員諸氏の撮影なり

●故雨宮信子夫人

雨宮敬次郎氏の夫人信子は豫て腸癌を患ひ居たりしが、先月十二日療養叶ず空しく黄泉の客となりぬ。同夫人は雨宮、氏が少くして零落を極めたる頃より辛酸を共にせし所謂糟糠の妻にして世に賢婦人の聞えある人なり。信子本姓市村氏、信州上高井郡愛の島村の農家に生る、明治四年敬次郎氏が横濱なる同郷人金子元兵衛の家に寄宿し、洋銀相場にて俄に八百圓程儲けし折柄、緣ありて敬次郎氏に嫁き茲に二人新世帶を持ち相場の方も、トン〱拍子に儲りしより血氣盛の敬次郎氏一輛の馬車を買ひ受け新婦信子と共に横濱中を乘廻し知る人々を驚かせし事もありしと明治六年洋銀相場の變動にて美事失敗し貯へ得たる家屋財產殘りなく人手に渡し又々元の素寒貧となりければ據なく敬次郎氏は蠶紙生糸の宰取をなし信子は下宿屋の主婦となりて小商人巡査などを賄ひつゝ、細くも煙を立たりし事さへありき。斯る憐れの境遇にも堪へて信子は能く内を治め敬次郎氏は屈せず外に金儲けを試み幾何の財產を成すに至りしが明治十五年朝鮮事件の起りし頃又々失敗して二三十萬圓損失し搗てゝ加へて敬次郎氏は肺を患ひ血を吐き言ふべからざる人生の窮境に陷りしが兎角する中朝鮮事件も終を告て洋銀相場俄に下りしを病の床に敬次郎氏好機逸す可からずと思へど肝腎の資本とてはなく如何にせばやと妻に謀れば信子は何れよりか大判二枚取出し來り是れはマサカの用意にと今の今迄藏て置いたもののサア是れでお儲けなさいと差出す妻が健氣の擧動に敬次郎氏は奮ひ立ち病躰ながらも其を差金に一相場を試み運好く莫大の利を占めけるが夫れより日に月に順境に向ひ復た前の如き悲境に沈む事はなかりきといふ其後明治十八年信州輕井澤に開墾地を

企計み追々好成績を得て五千餘戶の一村落を成すに至りしが信子は自ら農民を勞ひ學校の事病院の事何くれとなく懇に世話する程に村民も亦慈母の如く親み懷きしと云ふ忽ち高く忽ち低く波瀾の如くに境遇の變り行く一大相場師を夫に持ち長の年月貞なりし信子の生涯は敬次郎氏の生涯敬次郎氏の生涯は信子の生涯、眞に同身一躰、苦樂を共して、相依り相幇け來し文明社會事業家の夫人として眞に愧かしからぬ人といふべし、惜い哉二豎の犯す處ろとなりて永眠しぬ享年五十六歲。超て三日築地本願寺に葬る。(夫人の肖像は次號へ掲く)

◉喇嘛敎貫主の來朝

先般淸國より我國に來朝したる西藏喇嘛敎貫主阿嘉呼圖克圖尊者は隨員熬色爾甲木索氏外六名本願寺出迎員一行と共に去月十九日午前十時新橋停車場に到着せり停車場內外は此遠來の珍客を迎へんとして集まれる各宗僧侶信徒及東亞同文會々員等を以て滿され車寄前廣場には本願寺敎徒等『歡迎喇嘛貫主猊下』と書せる二旒の幟を立てゝ出迎へたり貫主一行は暫時待合室に休憩三浦梧樓子は東亞佛敎會を代表し中西重太郎氏の通譯にて歡迎の辭を述べ貫主の挨拶ありて直ちに車寄より用意の馬車に乘じ一行は人力車にて銀座日本橋通りを經て淺草橋に出で豫定の如く東本願寺の書院に投宿せり同貫主の年齡は三十二歲體軀肥大容貌魁偉にして海老茶緞子の支那服を着け頭は薙髮にして朝鮮帽に類せる帽子を戴き手に珊瑚の珠數を持てり斯くて貫主一行は翌日午後先づ淺草觀音に參詣し夫より同公園內にある水族館等を見物し其歸途江木寫眞店にて一同撮影し次で其翌日芝增上寺に參詣したり

◉貫主來朝の意 今度貫主の本邦へ來る樣になりしは北淸の亂に北京城外にある同敎の黃寺を土匪が散々に打毀したるに反し日本人は雍和宮(貫主の居所)へは一歩も足を踏入れず最と嚴重に保護したる事非常に貫主の心を動し到底淸國にては滿足に布敎することを能はずと斷念すると同時に日本人の正義心に富めるに感歎し遂に漫遊を思立ちたるものなりといへり、貫主の勢力ある事は今更に云ふ迄もなく一寸外出するにも二百人を引連れるを常とし今度の來遊に就ても最初七十人の從者を申出で次で卅五人に減ぜしも斯く大勢にては困るよしを述べ遂に八名を連れ來りたるなりと又貫主の法衣を纏ふは讀經の時のみに限り其他の場合には決して之を着けず左れば先日本願寺の如來殿へ詣でたる時に

は其法衣を着けたりと

◉貫主の好物　貫主が東京に來りて最も面白く且つ愉快に感じたるは馬車なりとか次に其食物は支那料理と日本料理とを折衷せるものを食し牛肉も北京のものと違ひ肉頗る柔なりとて大に好み其外蕎麥も中々の好物なりといへり

◉喇嘛貫主の勢望地位　貫主は北京に在りて朝廷より親王の待遇を受け非常に敬重せられつゝあり慶親王の如きすら雍和宮に至るや先づ香を焚き禮拜して而して後會談するを常とすといふ以て其の地位の高貴なるを知るに足るべきなり又貫主が西藏の高原より下りて北京に駐錫するは必ずしも誦經拈香の末のみにあらず一方に於ては清國の帝師として宗敎的使命を有すると同時に他方に於て又西藏の遣清使節たるがごとき權限を有せり貫主は西藏五呼圖克圖の一にして司印呼圖克圖と稱するもの是れ即ち貫主なりラッサの敎主は特に貫主に命ずるに北京駐在の大任を以をし委するに内外蒙古二十一王の政治監督權を以てせるのみならず併せて滿洲伊犁内外蒙古天山南北路サムルカンド一帶の宗敎監督權を以てせり貫主は身を僧籍に置んも其の職權は僧俗双方に跨がり居る次第なりと貫主は其地位の然らしむる所自ら清國以外に文明の邦あるを知らず海外の事は茫として關する所なかりしが昨年の變亂を目のあたりに見て翻然悟る所あり佛陀の遺敎燦として光を放つ東方の一淨土に來遊せんとの意を發し決然法衣を拂ふて萬里の波濤を超るに至りしなりといふ

◉貫主の北京を發するに臨み貫主私に以爲らく西藏と中國と近隣境を接すと稱するも而も其間熱風砂を卷く千里の荒原あり盛夏尙白雪皚々たる天山南北路あり駱駝に跨りてラッサを出で櫛風沐雨三ヶ月具さに胡地の艱苦を嘗て漸く燕京に達するを得隣域尙ほ此の如し今去て東方異域に到らんとす其間必ず幾多無人の境を過ぐべく行旅必らず一層の困難あるべしと乃ち私かに從者に命ずるに饅頭を用意すべきを以てす是れ即ち胡地を旅行する西藏僧が食に窮するの時用意に携ふる食料品の一なりとす又以て貫主が清國以外列强星羅の現勢を知らざるの證とすべく又以て貫主が如何なる決心を爲して遊東に志せしかを知るに足るべきなり扨ても一行は天津より汽船に乘じ汽輪浪を蹴つて駛ること矢の如く一週日の後船は早く長崎港内に在り乃ち貫主に告ぐるに今日本に着したるを以てす貫主信ぜずして曰く西藏と中國との間尙三ヶ月を要す況んや日本をや

此地尚ほ中國の一部なるべしと既にして門司を適ぎ内海に入り山蒼水清の美景を見るに及んで始めて身の既に東方蓬萊の郷に在るを知りしといふ

◉喇嘛教　唐の貞觀年中、西藏にト、リ王なる豪傑出で唐の大宗が貢を命ずるを拒み戰ひを起したるが太宗終に敗北してト、リ王の請ふがまゝに文政公主なる一女を娶はしたり、王は又印度を征服し美人バイムサなる一女を聘したるが此二女與に佛教を信じ深く敎理に通じたるより、王は從來の西藏敎と此支那、印度二佛敎を合せ完成せしめたるが即ち喇嘛紅敎なり新敎は元より明の初めに於て紅敎極度に達したるが、明の末世に及んで新敎起る是黃敎なり、爾來黃敎の時代に移り蒙古、滿洲、支那に瀰漫し之が法主なるものは政法二權を握りて今日に及ぶ、文字はト、リ王が使ひを印度に派しサンスクリツトを骨子として從來の西藏文字を參酌したるなるが、サンスクリツトの楷書と今日の西藏文字とは殆んど相同ぢ、西藏語の三藏經とて世界に珍重せらるゝもの是なり

◉阿嘉の勢力　僧正は新黃派に屬し前藏拉薩なる本山主達賴喇嘛の命を奉じ雍和宮に管主たるが、前にも記せし如く元來蒙古出身なれば隨つて勢力全蒙古に及び同國中には今尚三十六王あり皆阿嘉の一擧手一投足の下に服し居れり、以て露國が夙に阿嘉の觀心を求めんとするの眞相を察するに足るべし

◉西藏風俗談

喇嘛貫主一行の來朝によりて、一層西藏の國柄が世の注意を惹くに至れり、元來秘密の雲霧に閉され居る彼國なれば、中々珍奇なる事柄多し、今報知記者の訪問に對し、坪井博士の談話の要點は左の如し、

◎國の割合に人少し　西藏は凡そ六十五萬一千五百方哩の大地域の國であるが、其割合には人民少なく僅かに四五百萬人に過ぎぬ、而して國土としては世界最高の地であつて、北は露領に接し南は印度に隣し、東は支那に接して居る

◎信仰心の堅固　國は是から開けるのではあるが、他の無智蒙昧にして意志薄弱なる蠻民とは同一視するとか出來ぬ、即ち信仰心と云ふものは實に非常に盛んで實に世界に多く類例な見ない位である

◎言辭は單語　此東亞人種の中で日本より朝鮮を經て、滿洲西伯利亞地方へ掛けて、テニチハのある言辭を用ゆれど、支那から安南、暹羅より此西藏方面では單語であつて、即ち東亞人種の言辭遣ひは元來斯く二ツになつて居る

◎政治と權力　此一國は喇嘛教の下に支配されて居るので、政府的役人(支那人)あり又之に使役さゝる滿洲兵あるも、一國の權力は無論喇嘛僧の掌中に收められつゝ來つたが、爾來追々と政權は支那人

手に移り實力も隨つて支那人に歸する傾きとなつたが、人民は心から支那人に信服するのではなく『支那人は卑いもので此國より貴いものはない』てふ自負心は今も容易に脫し去る風も見えぬ次第である

◎氣象骨格　皮膚は一般に黃を帶び、眼は小さくして虹采は黑く、髮は直立して黑色口は大きく鬚少なく頰骨は高し、貴人は概して皮膚白けれど、性質は槪れ快活で親切、且戰爭の時などは死を恐れぬ勇氣滿ちて居る、併し迷信は頗る強く、人に物を見せびらして誇りたるが風がある

◎衣服裝飾　頭髮は總べて辮髮であるが、支那人の樣に頭のポンノクドで結び付けて後へ垂らすのではなく、總體の髮を集め三ツ打ちにして垂らす、又婦人は二條の辮髮で後で括り付けて垂らすのであるが、其婦人の髮飾りは大したもので、金銀、寶石、珊瑚の類を頭に戴き又は金銀製の皿の樣なものを用ゐて、居る貴人は申すに及ばず貧民でも純金の飾りは珍らしくない、それから首環、腕環、耳環に至る迄皆巧みに細工した貴金屬を用ひ、其美麗立派なるは支那人さへ足下へ追ひ付かぬ位なものである、或外人は之を評して『小間物を負つて居る』と言つたも無理ではない

◎其衣服　夏季は毛糸の織物類を用ひ、冬は高地で寒い所丈毛皮で製した衣を着る富む者は支那の緞子類を上に被り下着に毛革を用ゆるが其形は筒袖の長い着物をタグツて懷を大きし帶てをする、男は左の筒袖を脫ぐが通例で、股引は毛皮で緩くダブ〳〵に拵いたものを穿く、寢る折は裸體で毛氈の上に轉び已れが着物を其上に掛けて居る帽子は穢れに毛糸製のものもあるが多くは羊や狐の革で製したもの、殊に奇妙なるは手廻はりの小道具類を糸に綴つて帶にぶらさげて居るのである

◎其食物　米は無いではないが高價であるので食せず、且米を食らふと惡病に罹ると昔時から言ひ傳はりて、重に麥の粥にバタを交へるが、肉類ではヤシクと云ふ圖に示す動物の外羊、牛、鷄の類を食す、幼兒を育するには右ヤックの肉を乾かし碎いて粉にして之に獸血を交へドロ〳〵する汁を飮ましむるが一般で、此ヤックは生きて居る中は運搬上の役を勤め、殺されてからは、食物にもなり着物にもなり又其皮をテント用にもなる至極重寶なものになつて居る、それ故戶每に飼養し普通の家で十五疋より二十疋、貴い家で二千四三千匹も飼つて置くので、西藏國中人間の數よりも多いと云ふとだ、それから酒は米と麥で釀造し之をチユングと名付け、又茶はバタを入れて茶の葉と共に飮了するのである

◎通貨と飮用水　通貨ては銀を用ゐ銀二ツ半で我が壹圓位に當るが、之を使用するには銀を幾個にも切つて遣ふとが出來る、外に銀二分に銅三分の通貨もある、飮用水の井戶は官の設備にかゝるので人民は租稅を拂つて居る

◎產物と製造　寶石玉其他の貴い產物はあれど淳朴なる土人許りであるから、其利は皆支那人に占められドシ〳〵國外へ運び去られて了ふ、土民の仕事は農業よりは牧畜の方で、製造物は毛織物、毛氈の類、土器を造り機も織る、其他金屬細工も中々盛んなものである

◎家の構造　西藏は喇嘛教の本家本元であるから、其寺院の多いとと云つたら實に驚く許りで市街は寺院より成立つと云つてもよい、第一の都會がラッサで海面を拔く一萬四千ヒートの高地で、富貴なる家は煉瓦を疊んで立派な構造であるが、多くは泥土を干し堅めて四壁を構ふか、或は石作りと云ふと結構だが、其實只々石を積み重

れて家とするのもあり、或はテント中で生活するものあり、又木造の二階家なども見る併し一體の空氣の流通と云ふ方には注意せぬので僅かに小穴を明けて窓とする樣な狀態である

◎寺院の壯嚴　普通の民家はコンナ者だが、寺院の建築と來たら實に素晴らしい者で其規模の大なるは云ふ迄もなく用材は多く大理石の樣な寶石やら金銀を鏤ばめた裝飾の美麗なるは燦然又爛然として人目を奪ふ許である、斯くて屈指の一ツの喇嘛寺には三千人以上の教徒が居る、此衆僧に冊付かるゝ住職とも云ふ高僧は、あらゆる人間の心を悟るとの出來得る不老不死の佛樣と崇められつゝ居ると云ふ

◎最高の禮　こゝに最も奇妙な風俗があるそれは禮の仕方で、最敬禮を表する場合には此圖にある樣な不思議なるマ子をする、先づ直立して兩の腕を突つ張りて親指を上げるのであるか、サーそれからが妙でイザ禮と云ふ一刹那ペロリと舌を出し、それでお仕舞ひになる、日本の禮する時ペロリと出したら忽ち擲ぐられ樣に、所變れば品變るで世界中探してもない珍しい敬禮である

◎夫婦制度　次いで奇妙なるが夫婦男女の關係で、一夫一婦もあれば、一夫多妻もある、これは妾を蓄ふにはあらずして一夫が正式に數妻を娶るのである、又一女數夫と云ふ反對の例もある、それは一女あり來つて兄弟ある家に嫁するので、兄弟共通の關係を保ち、多きは一女で四人を夫とするもある、喇嘛は無妻であるが一般土人は此の如くあらゆる夫婦制度を網羅して居る

◎佐々城女史の遠逝

先きには明治の女秀才、中島湘煙女史逝いて、未だ日も立たざるに、又も一才女佐々城豐壽女史の訃を聞かんとは、女史は仙臺の人なり、嘉永六年二月三十日を以て、同市木町無末に生る、家は伊達家の世臣にして、父君を星雄記と云ひ、女史は其第六女なり、幼にして多病、始んと病褥の中に成長したれど、氣性極めて鋭敏、頗る快活の遊戲を好みぬ。夙に學に志し、父君は經書に通じ給ひければ、之れに就きて漢學を修めぬ、時恰も明治維新の改革に際し、外國排斥の頑習漸く薄らぎて、新文明の光輝これより發せんとする時なれば、明治二年の頃より、女史は英學を修め初めぬ、人皆其奇を笑ひ嘲りしも、女史は巍然四圍の迫害と戰ひつゝ、勉學の志氣少しも屈せざりし、已にして同四年女史は十九才を以て、父君に懇請して遂に東都に遊學しぬ、時に未だ東京市内に於て、婦人の就て學ぶべき所なく、只神田一ツ橋外なる開成城同地に官立女學校あるのみなりき、されど此校さへ規模小に、設備不完全なりければ、女史は更らに去て橫濱に赴き、米國人の設立せる某校に入りて、此に始めて其素望を達し修學に餘念もなく頗る得る所あり、同九年橫濱を辭して東京に出でしに、其九月女子師範學校に於て中村敬宇先生等の演說會あるを聞き豐田芙雄子棚橋絢子等と

出で〻一場の演説を試みぬ、當時演説辯論盛んなりしも、男子間に流行するのみにて、婦人は未だ之れを試みたるものなし、さるを古來我國婦人の沈默主義を打破し、婦人の爲めに言論の新活路を開きたるものは、實に佐々城女史與て力ありといふべし同十年女子師範學校に招聘せられて、英學の教授を爲せしも、病魔の爲めに妨げられて其任を盡さず、僅かに半歳餘にして之れを辭しぬ、女史は七年以來四年の歳月に於ては、內に疾病の苦痛あり、外に生活の艱難あり、頗る悲哀なる經過なりしも、同十年佐々城本支氏と結婚して、此に新らしき幸福の生涯は開かれ、同十三年を以て日本橋釘店に居を定め、三男三女を擧げ、此に和樂なる家庭を造りぬ同十七年其長男病んで沒す、女史の悲傷譬ふるに物なく、日に益々鬱々として、暮したるが其頃より、感ずる所あり基督教會に入りて、人生の慰安を受くることを得ぬ、女史が人物上の修練は、基督教に由りて享受したるもの多きが如し、同十九年の春、吳服橋外に一校舍を設け、洋式の裁縫編物を教授しぬ、されど女史の勇健なる志氣は、勃々として抑ゆること能はず、此れより大事業に向つて力を展ぶるに至りぬ、同年の夏、萬國婦人矯風會の世界遊説員リビット夫人の來遊あり禁酒禁煙の必要を熱心に演述せられる影響として、我國にも婦人矯風會の設立を見るに至りたるか、其創立に際しては女史與て力あり、自ら書記の任に當りて、諸般の事務を處理し、又た機關雜誌にも筆を執りたりといふ、同廿三年初めて國會の開かる〻や、請願書を提出し、婦人の屈辱を矯正せんと欲して、一夫一婦の議、及び娼妓廢止の論を爲しぬ、女史の如きは我國の女權擴張に與つて力ありと謂つべし、同廿六年女史は、本支氏を東京に殘し獨り兒女を攜へて北海道に移住し、農事耕耘の間徐ろに其病を養ひぬ、女史は元來農耕を好み、田舍を愛し清閑なる自然の風致に接觸するを樂みとせり、されば人事複雜、風塵熱鬧の都門に心身を勞せんよりは、北海の廣野に鋤鍬を執りつ〻、其健康を保養するの必要ありしならん、されど社會は女史を長く北海の閑地に隱住せしめず、三十三年の十月子女を伴ふて東京に歸り來れり、其間に於て世は著しく進歩し、女史が嘗て唱道したる廢娼問題の如きも、世の是認する所となり頗る好望の形況ありしを以て、今や娼妓救濟の必用切迫したるを感じ、同志と共に醜業婦救濟の爲めに設けたる慈善館の擴張を計り、專ら斡旋して慈善音樂會を開きぬ、音樂會は、今年四月十日を以て上野公園なる音樂學校

に開かれぬ、其前日夫本支氏俄かに病を得て歿したれば、女史は深く哀悼の情に沈みぬ、越えて五月八日女史また激性なる腸胃病にかゝり、病床に就かれしが、病勢日に益々加りて、六月十五日午後四時を以て遂に長逝しぬ、享年四十九

女史は、我國婦人界に於ける先覺者なりき、其鋭敏なる思想と、强健なる志氣は、いかに我國の女權擴張に與つて力ありしぞ、また女子敎育の爲めに効ありしぞ而して社會は女史に待つもの猶ほ多かりしに、今や即ち亡し矣、哀悼せざるを得んや。（女史の肖像は次號に揭ぐ）

◉成女學校割烹講習會

番町成女學校に於ては豫て割烹の講習會を設けて、從來我が女子敎育界に缺ぐところありし斯科の講習をなす由聞き及びしか、此程其の第三回の講習會卒業式を執行せり其の景況を記さんに、當日は西洋料理式を以て來賓はじめ卒業生を招請し、敎場の中央に据へたる卓子の上には、『フルーツケーキ』、『ボイルフイツシユ』『ガランチー』、『チツキンサラダ』、『シユークリーム』、『アイスクリーム』其の他くさ〲の佳肴珍菓山の如くに飾り立て、一見宛がら名匠の彫みし美術品の如くなりし、殊更立食の式なれば『ボイルフイツシユ』の如は鯛と鱸との二皿にて、何れも尺餘のものを用ひ、鯛の方は飾るにさゝまき海老の片肉をもて、宛も魚の鱗の如くにならべ、且つ其の周圍には海潮になぞらへたるサダラを舗き、鱸の方はやはり鯛の如く鱗のかざりを施せしが、『サラダ』の代りに『トマトー』の中をくりぬきて其の内へ賽目に切りし馬鈴薯胡蘿蔔雞卵等種々のものを入れたるつまをつけし等色の配合より云ふも形の調和より見るも如何にもうつくしく食物とは見へざりし其他大理石の彫刻物かと疑はるゝフルーツケーキ、白魚のあつまりしかと見るチキンサラダ、ナイフをつけるも中々に惜しまるゝ心地されたり。やがて料理の敎師池戶鐵次郎氏先づ此の料理品について一々調理法の講義をなし、次で同校長吉村寅太郎、幷に同校講師嘉悅孝子女史立食式の禮法を講義し、移つて各員皆な卓子につきしが、さすがに幾回の練習をつみたる事とて、講習員はいづれも能く熟練の妙を顯はせり、偖て舌に覺たる味も眼に訴へたる美しきに讓らず、多少は費用おかまいなしと云ふ點もあるべきかは知らぬど、普通割烹店にて容易に求とむべからざる香味なりき、因に記す尙同校にては去月廿二日より本月の夏季休業を期してまた〲斯の會を開設せし由、

女學世界第十一號記事要目

每月一回五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）…金二十錢
四冊（三ヶ月分）…前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
內（定刊數……十二冊
　増刊四回…三、六、九、十一月價格同一）

郵稅　一冊　二錢

廣告料

二十四字詰	一行	半頁卅二行	一頁六十四行
特等	四十三錢	十三圓七十六錢	割引三十三圓
一等	三十五錢	十一圓二十錢	割引二十七圓
二等	三十錢	九圓六十錢	割引二十二圓
三等			割引十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
●郵券代用は一割増にて五厘一錢の分に限る。
●總目錄御入用の方は二錢券相添へ申込あれ。

明治卅四年八月五日發行　第一卷第十號

編輯人　松原岩五郎
發行人　大橋新太郎
印刷人　石川金太郎
印刷所　株式會社秀英舍　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番

雜誌創刊廣告

圖書世界

每月壹回十日發行

每號寫眞銅版口繪挿入

本誌發行之趣意

圖書の人智を開き文明を進むる唯一の利器たる、今はた喋々を要せず。我邦近時圖書出版の事業日を追ふて盛に、圖書館の都鄙に開設せらるゝ者、亦歳に多きを加ふ。實に邦家の慶事たり顧ふに未だ專ら圖書世界に關する事項を記述報道する雜誌の出でざるは、一大缺典と謂はざるべからず。是れ圖書世界發刊の已む能はざる所にして、本誌は、論說、内外古今の著作家出版家の傳記、新書の批評、各地圖書館の紹介、出版印刷に關する沿革歷史及叢話、趣味ある短編小說、詩歌俳句より、内外の文界殊に圖書の紹介、圖書出版に關する彙報を掲げ、以て聊か休明の鼓吹に裨補する所あらんとす。

◎

本誌廣告料

五號字廿四字詰	一行	半頁（卅二行）	壹頁（六十四行）
特等	……	……	割引金拾八圓
並等	拾五錢	四圓八拾錢	割引金九圓

●特等は裏表紙 口繪の對向面 本文の前

本誌正價

壹册金三錢郵税五厘 ●六册前金拾六錢● 十二册前金三拾錢外に郵税五厘を要す

發兌元 東京 博文館

（後付の一）

每月二回

太陽

五日發行

第七卷第九號　八月五日發行

口繪

小松宮殿下○新英國女皇陛下○獨逸皇后及和蘭女皇○大觀兵式○出雲大社○德大寺侍從長○渡邊子○長岡子○喇嘛敎貫主及東本願寺接待員○紐育太陽發行編輯員ダナ氏父子○上毛の三山○秋田熊澤硫黃山○紀州和歌浦出島○新博士○歐洲名女優○米國風景○故乙羽君追悼會○全席上名家の書畫○羅馬古彫刻○南阿の奇傑○加奈陀風景○英國テームス河畔

定價

一册金三拾錢○半ヶ年分（增刊共八册）金二圓二拾錢○一ヶ年分（增刊共十六册）金四圓二拾錢○郵稅一册三錢

（博文館發兌）

文藝倶樂部

第七巻第拾壹號

三十四年八月一日發行

▲表紙（精彩石版畫）　山中古洞筆

▲口繪（精彩木版畫）　水野年方筆

小説
- 夢がたり　幸田露伴
- 渡し舟　新田静灣
- 横ぐも　内田魯庵
- 門の扉　太田玉茗
- 玄海灘　二十三階堂

時文
- 放言十五則　中内蝶二

講談
- 大久保彦左衛門　邑井一
- 茶どろ　朝寢坊むらく

譚海
- 西國の花火　菱花生
- 力士雜話　門生

勝地案内
- 中河内の勝地　竹雲
- 土肥温泉　磻溪
- 道後温泉　淡水生
- 外數ヶ所

浮世眼鏡
- 高利貸靄　軒
- 會社の小使　四六々生
- 小待合　草の舍

雜録
- 一目美人揃　幸堂
- 助川の一夜　水哉子
- 雨窓漫語　左泉子

諸國奇左
- 渡邊屋敷　梅郷
- 螢合戰　柏堂
- 井戸の鷄　千賀
- 鐘と鯛　可愛雛鶯

名家墳塋
- 東京墳塋　映川
- 蒲田隼人の墓　露山
- 齋藤拙堂の墓　寒舟
- 袈裟御前の墓外數件
- 其他各欄に依つて材料豐富趣味津々たり

毎月一回一日發行

本文紙數三百二十頁寫眞銅版八丁特別口繪二丁兩面菊判繪表紙

定價

一册金廿五錢
三ヶ月分九拾五錢
半ヶ年分壹圓八拾錢
一ヶ年分（十六册）三圓五拾錢
○郵税一册二錢五厘

發兌元　博文館

（後付の三）

毎月一回一日發行

少年世界

定價　一冊金十錢　四冊前金卅八錢　郵税一冊一錢

明治三十四年八月一日發行　第七卷第拾壹號

口繪

陸軍中將川村景明君○獨逸名畫幼老和樂の圖（アートペーパー）○戸隱裏山探檢隊總員○戸隱神社内段○高等學校生徒水泳○○北海道洞爺湖畔壯瞥の瀑○少年世界特別寄書家○南洋ヲヤヴ少年風俗○○獨逸伯林近郊○露國東洋艦隊旗艦ニコライ第一世號

記事摘要

（博文館發行）

新文藝

編輯主任久保天隨

第壹卷第八號

目次

本誌體裁四六二倍
毎月壹回一日發行
定價●一冊金十二錢●六冊前金六十六錢●十二冊前金一圓二十錢●外に郵稅一冊一錢づゝ

本誌は廣く江湖諸君の投稿を歡迎す
但し投稿は本鄉區追分町六拾番地久保得二方新文藝編輯所へ宛送附の事

(後付の五)

發行所　東京市神田區仲猿樂町　新文藝社
發賣所　東京市神田區表神保町　東京堂

再版出來報告

左記の各書籍は一時品切の爲め高需に背き居候處何れも再版出來仕候間續々御購求被成下度又々品切れに相成候ては遺憾に付此段御報告申上候

版	書名	定價	郵稅
九版	銀行實踐法	全壹冊 金六拾錢	郵稅拾錢
六版	果樹栽培全書（三）	全壹冊 金三拾錢	郵稅六錢
六版	果樹栽培全書（四）	全壹冊 金三拾錢	郵稅六錢
十七版	二宮尊德翁	翁壹冊 金拾貳錢	郵稅四錢
廿版	近江聖人	全壹冊 金拾貳錢	郵稅四錢
十六版	農學入門（合本）	全壹冊 金廿五錢	郵稅八錢
四版	致富要訣	全壹冊 全廿五錢	郵稅六錢
六版	陸軍一班	全壹冊 金廿五錢	郵稅六錢
再版	造家と築庭	全壹冊 金廿五錢	郵稅六錢
再版	世界お伽噺 孫悟空	全壹冊 金七錢	郵稅貳錢
三版	世界お伽噺 豫言書	全壹冊 金七錢	郵稅貳錢
再版	世界お伽噺 狐の裁判（上）	全壹冊 金七錢	郵稅貳錢
十版	家政學（上）	全壹冊 金三拾錢	郵稅六錢

版	書名	定價	郵稅
六版	日本歷史譚 九郎判官	全壹冊 金八錢	郵稅四錢
十七版	日本歷史譚 四十七士	全壹冊 金八錢	郵稅四錢
四版	日本歷史譚 七卿落	全壹冊 金八錢	郵稅四錢
拾版	日本お伽噺 八幡太郎	全壹冊 金六錢	郵稅貳錢
九版	日本お伽噺 川中島	全壹冊 金六錢	郵稅貳錢
六版	日本お伽噺 和唐内	全壹冊 金六錢	郵稅貳錢
十二版	作文資料	全壹冊 金拾五錢	郵稅四錢
十四版	日本婦女用文	全壹冊 金拾八錢	郵稅六錢
五版	天則百話	全壹冊 金三拾錢	郵稅六錢
十三版	日本風景論	全壹冊 金五拾錢	郵稅拾錢
六版	日本名勝地誌（六）	全壹冊 金三拾錢	郵稅八錢
六版	日本名勝地誌（七）	全壹冊 金三拾錢	郵稅八錢
十四版	日本名勝地誌（一）	全壹冊 金三拾錢	郵稅八錢

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

日用百科全書

日用百科全書完く成る、家政、遊藝、學藝、文藝、實業等悉く諸般の事項に通じて在らざるなく、備わらざる所なし、全部五十卷を座右に置かんには何人を問はず、處世日用の務めに於て缺くる所なく、修業開智の道に於て補ふ所大なるものあらん、極めて有益の寶典なり其書目の左如し

全部五拾册　洋裝頗美本
正價一册金貳拾五錢 ●郵税六錢
●六册壹圓四拾錢●十貳册貳圓七拾錢●廿五册五圓五拾錢●五十册拾圓五拾錢●外に郵税を要す

一 家政
- ●家政案內
- ●和洋禮式
- ●日常行爲法則
- ●育兒と衛生
- ●裁縫と編物
- ●衣服と流行
- ●住居と園藝
- ●造家と築庭
- ●實用料理法
- ●西洋料理法

二 遊戲
- ●茶の湯と生花
- ●圍碁と將棋
- ●相撲と芝居
- ●謠と能
- ●聲曲自在
- ●琴曲獨稽古
- ●寫眞及幻燈
- ●易占及骨相法
- ●內外遊戲法
- ●諸藝指南

三 學藝
- ●書法自在
- ●畫法自在
- ●陸軍一班
- ●海軍一班
- ●世界宗教一班
- ●勸學と處世
- ●致富要訣
- ●秘術傳法
- ●就學案內
- ●旅行案內

四 文藝
- ●作文自在
- ●作歌自在
- ●作詩自在
- ●俳諧獨學
- ●通俗書簡文
- ●商家書簡文
- ●農工書簡文
- ●陸海軍人書翰文
- ●記事論說文範
- ●祝辭演說法

五 實業
- ●商業大意
- ●工業大意
- ●農業大意
- ●果樹と蔬菜
- ●養蠶と生絲
- ●狩獵と養鷄
- ●化粧品製造法
- ●會社銀行實務案內
- ●外國貿易案內
- ●改正條約案內

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

(後付の七)

婦女必携寶鑑

華族女學校學監
帝國婦人協會々長 下田歌子女史著

家庭文庫

和裝上製紙數一冊二百五十頁

正價 ●一冊三拾五錢 ●三冊前金壹圓 ●六冊前金壹圓九拾錢 ●十二冊前金三圓六拾錢 ●郵稅一冊金六錢

方今女學に關するの書其數少なからずと雖も能く新舊の常理を折衷して家庭教育の士に適合するもの甚だ些少なるを遺憾とす玆に於て此文庫を出版せり本書は華族女學校學監にして學東西を究め遠く歐米に巡遊して一種超凡の新智識と新卓見とを以て今現に子弟教育の道に從事せらる下田先生の編述に成るものなれば他の空論談の書と異なり上下を通じて一般社會の家庭上に適用するは勿論なり今や全部十二冊完成を告ぐ如何に在來の家庭書と其趣を異にせるかを驗せられよ

全部目次

女子書翰文は卷頭先つ我國女子の書翰法を定め雅に失せず俗に流れず弊を改め正を示す○禮式は古今東西の宜を制し○詠歌の栞は作例書式に付必要なる者を示し○料理は實用と經濟とを主とし其衛生と經濟に注意し○家庭訓は母たる人の衛生と幼兒の發育方を示し○母の守るべき禮儀と責務を述べ○要訣は衣服取扱方及室内清潔

發兌元 東京 博文館

☞ 邦文大世界史編纂出版 ☜

世界史

全貳册洋装
總クロース
金字入美本
上巻紙數
一千餘頁

正價壹圓六拾錢
小包目方四百匁

上下幾千載の興亡は常に世界的統一的趨勢を示し最近に至り凡百の事相殆んど世界的となる、嘗て西人獨あるや、文明を重しとなし、偏に歐米列强を說きしは狹し、亞細亞文明あり敎學あり。昔匈奴、蒙古、土耳古の西せしは今英露其他の東するが如し、東亞の老帝國は近く世界的大競爭場たらん、世界史中東洋豈輕しとせしや、殊に今の時に方りて東洋新興隆の我國民が史的智識に基きて世界的感想を養ふを要するや言を俟たず是を以て古今東西を通叙して聊國民に薦めんとするは既出邦文世界史中に於て稍詳密を得たる、本書編纂の目的なり尚多少讀者の參考となるあらば望外の幸なり、乞ふ史學家は勿論學生一般に御愛讀あらんとを。

發兌元 東京本町 博文館

女學世界
毎月一回五日發行
第壹卷第十號
（明治三十八年四月五日發行）
（明治三十三年十二月廿五日第三種郵便物認可）

（定價金貳拾錢）

（東京株式會社秀英舍印刷）

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界 明治期復刻版⑤
明治34年7月～8月（第1巻第9号、第10号）

2005年12月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
印　刷　ジャパン リアルティ スーパービジョン株式会社
製　本　有限会社青木製本

ISBN4-7601-2839-5　C3321